中ノ池遺跡

丸亀市総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅰ

1998. 12

丸　亀　市

松本考古学研究所

中ノ池遺跡

丸　亀　市

松本考古学研究所

巻頭図版１　第一調査区全景

巻頭図版２　溝Ｎ３ＳＤ－１南側壁

はじめに

中ノ池遺跡は、これまでに香川県教育委員会や丸亀市教育委員会が実施してきた発掘調査によって、県下でも稀な環濠集落であることが明らかになった。しかしその広がりや、集落が形成され、廃絶に至った経緯については、必ずしも解明されたとは言い難いものがあった。この度丸亀市が実施する総合運動公園整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査を受託することとなり、1997年度第一次調査は1,188.5㎡、1997年の第二次調査は583㎡を発掘した。一次二次共に環濠の一部が検出され、それに伴って土器や石器、木製農具などの貴重な資料も多数出土した。

今回の報告は第一次調査の資料編となるものである。報告書では出土品をどのような手順で分類してきたかを明らかにし、さらにこの分類手段を二次調査以降の整理に発展させることをめざしている。

大方のご高評を賜りたい。なお発掘調査及び資料整理に際しては、丸亀市教育委員会及び地元の関係者から寄せられましたご支援に深く感謝いたします。

1998年12月

松本考古学研究所
所長　松本　豊胤

例　言

1　本書は、丸亀市の総合運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財（中ノ池遺跡）の、平成９年度第一次発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　発掘調査は、平成９年５月１日付けで丸亀市長片山圭之と、松本考古学研究所所長松本豊胤との間で締結した「丸亀市運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財（中ノ池遺跡）発掘調査業務委託」の契約によって実施した。

3　資料整理は平成９年10月17日付け、及び平成10年５月１日付けで丸亀市長片山圭之と松本考古学研究所所長松本豊胤との間で締結した「丸亀市運動公園整備工事に伴う埋蔵文化財（中ノ池遺跡）出土品等資料整理業務委託」の契約によって実施した。

4　中ノ池遺跡は丸亀市金倉町道上中ノ池に所在する。

5　中ノ池遺跡は平成９年９月にも二次調査を実施しているので、本報告は検出された遺構の調査状況と出土した遺物の整理の状況を報告し、中ノ池遺跡での遺構の位置付けや、出土品についての歴史的な位置づけは、第二次以降の報告書に合わせて掲載することとする。

6　発掘調査及び資料整理にあたっては、四国学院大学の考古学研究室の学生諸氏の協力をあおいだ。

7　調査主任及び資料整理・報告書作成等は松本豊胤が中心となり、石器については米田克彦が担当し、報告書の編集・校正は青井繁美が担当した。

8　本書挿図中のレベル高はすべて海抜をあらわし、方位は磁北を示す。また挿図の一部に国土地理院発行の25,000分の一の地形図を使用した。

9　発掘調査、資料整理を通じて、丸亀市開発整備課及び丸亀市教育委員会からは適切な助言を頂いた、また丸亀市金倉町地元有志の方々からもご支援を頂いた。

発掘調査及び資料整理参加者

兼近　真由美
森本　真由美
川村　一恵
沖野　八重子
鎌谷　周子
青井　繁美

四国学院大学学生

1998年度卒業	川越　麗子	木原　岳照	
（考古学）	小泉　信二	清水　美幸	
	生南　祐司	得田　慎一郎	
	平島　義孝	豊丹生　道忠	
	米田　克彦	和田　正樹	
４回生	浅野　信	近藤　有紀	
（考古学）	竹下　詩乃	檀上　治樹	
	沼田　宏隆	細谷　美恵	
	吉田　竹彦		
３回生	岡山　和史	斉藤　智嗣	
（考古学）	白神　賢士	高谷　安希	
	中谷　忍	溝淵　盛治	
	桃田　昭芳	森長　亮介	
２回生	小野　博史	鳥飼　完	
（考古学）	平松　広成	藤井　大輔	
	峰松　一馬	山内　宗匡	
	山内　善文	吉田　健一	

調査協力機関

財団法人元興寺文化財研究所
アース開発株式会社
コスモ土木株式会社

目　次

口絵…… 1
はじめに…… 3
例言…… 4
目次…… 5

第Ⅰ章　中ノ池遺跡と周辺の遺跡
第１節　中ノ池遺跡…… 9
第２節　周辺の遺跡…… 10

第Ⅱ章　遺跡の立地と地質構造
第１節　中ノ池周辺の地質構造…… 12
第２節　遺跡の土層序…… 17

第Ⅲ章　調査区の設定と調査の経過
第１節　調査区の設定…… 19
第２節　発掘調査の経過…… 21

第Ⅳ章　遺構
第１節　第一調査区…… 23
1. 土層序／2. 溝・Ｎ１ＳＤ－１・２／3. 溝・Ｎ２ＳＤ－１／4. 溝・Ｎ２ＳＤ－２／5. 溝・Ｎ２ＳＤ－３／
6. 溝・Ｎ２ＳＤ－４／7. 溝・Ｎ３ＳＤ－１／8. 第一調査区・Ｎ４区／9. Ｎ４第３層／10. 集石
第２節　第二調査区…… 33
第３節　第三調査区…… 34

第Ⅴ章　遺物（土器等）
土器分類基準…… 35
第１節　第一調査区…… 36
1. Ｎ１／2. Ｎ２／3. Ｎ２ＳＤ－１／4. Ｎ２ＳＤ－２／5. Ｎ２ＳＤ－３／6. Ｎ２ＳＤ－４／
7. Ｎ３／8. Ｎ３ＳＤ－１／9. Ｎ３集石／10. Ｎ４
第２節　第二調査区…… 65
第３節　第三調査区…… 67

第Ⅵ章　遺物（石器等）
第１節　第一調査区…… 70
1. Ｎ２ＳＤ－２／2. Ｎ２ＳＤ－３／3. Ｎ２ＳＤ－４／4. Ｎ２／5. Ｎ３集石／
6. Ｎ３ＳＤ－１／7. Ｎ４／8. Ｎ４ＳＤ－１／9. 遺構に伴わない遺物（第一調査区）
第２節　第二調査区（Ｎ５）…… 103
第３節　中ノ池遺跡出土の弥生時代前期の石器について…… 104

挿図目次

第１図　丸亀西北部地形図…… 9
第２図　中ノ池遺跡と平池周辺地形図…… 9
第３図　中ノ池遺跡の調査区…… 9
第４図　中ノ池遺跡周辺の遺跡分布図…… 11
第５図　中ノ池遺跡周辺の地質構造…… 12
第６図　第一調査区断面図…… 13
第７図　第二調査区断面図…… 14
第８図　第三調査区断面図…… 15～16
第９図　第一次調査区の設定図…… 19
第10図　調査区ポイント設定図…… 20
第11図　第一調査区Ｎ１ＳＤ－１平・断面図…… 23
第12図　第一調査区平面図…… 24
第13図　第一調査区Ｎ４区第２層平面図…… 24
第14図　Ｎ２ＳＤ－２北側断面図…… 25
第15図　Ｎ２ＳＤ－１北側断面図…… 25
第16図　第一調査区溝断面図…… 26
第17図　第一調査区溝南側断面図…… 26
第18図　第一調査区溝北側断面図…… 26
第19図　Ｎ３ＳＤ－１断面図…… 27
第20図　Ｎ４区第２層平面図…… 28
第21図　Ｎ２区第３層平面図…… 29
第22図　Ｎ３集石位置図…… 29
第23図　Ｎ３集石平面及断面図…… 30
第24図　第二調査区平面図…… 33
第25図　第三調査区Ｗ０Ｓ０～Ｗ５Ｓ０断面図…… 34
第26図　第三調査区平面図…… 34
第27図　Ｗ５ＳＤ－１平・断面図…… 34
■出土遺物＜土器図＞
第28図　Ｎ１調査区出土遺物…… 36
第29図　Ｎ２調査区出土遺物…… 37
第30図　Ｎ２調査区出土遺物…… 38
第31図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物…… 39
第32図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物…… 40
第33図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物…… 41
第34図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物…… 42
第35図　Ｎ２ＳＤ－２溝出土遺物…… 43
第36図　Ｎ２ＳＤ－２溝出土遺物…… 44
第37図　Ｎ２ＳＤ－３溝出土遺物…… 45
第38図　Ｎ２ＳＤ－３溝出土遺物…… 46
第39図　Ｎ２ＳＤ－４溝出土遺物…… 47
第40図　Ｎ３調査区出土遺物…… 48
第41図　Ｎ３調査区出土遺物…… 49
第42図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 50
第43図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 51
第44図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 52
第45図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 53
第46図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 54
第47図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 55
第48図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 56
第49図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 57
第50図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 58
第51図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物…… 59
第52図　Ｎ３集石出土遺物…… 60
第53図　Ｎ３集石出土遺物…… 61
第54図　Ｎ４調査区出土遺物…… 62
第55図　Ｎ４調査区出土遺物…… 63
第56図　Ｎ４調査区第三層出土遺物…… 64
第57図　第二調査区出土遺物…… 65
第58図　第二調査区出土遺物…… 66
第59図　第三調査区出土遺物…… 67
第60図　土製品…… 68
第61図　木製品…… 69
■出土遺物＜石器実測図＞
第62図　ＳＤ－４石器実測図…… 77
第63図　Ｐ12石器実測図…… 77
第64図　Ｐ１石器実測図…… 94
第65図　Ｐ96石器実測図…… 94
第66図　Ｎ４ＳＤ－１石器実測図…… 94
第67図　第二調査区Ｐ４５石器実測図…… 103
第68図　第二調査区ＳＤ－１石器実測図…… 103
第69図　Ｎ５石器実測図…… 103
第70図　Ｎ２ＳＤ－２石器実測図　１…… 71
第71図　Ｎ２ＳＤ－２石器実測図　２…… 72
第72図　Ｎ２ＳＤ－２石器実測図　３…… 73
第73図　Ｎ２ＳＤ－２石器実測図　４…… 74
第74図　Ｎ２ＳＤ－３石器実測図　１…… 75
第75図　Ｎ２ＳＤ－３石器実測図　２…… 76
第76図　Ｎ３集石石器実測図　１…… 78
第77図　Ｎ３集石石器実測図　２…… 79
第78図　Ｎ３集石石器実測図　３…… 80
第79図　Ｎ３集石石器実測図　４…… 81
第80図　Ｎ３集石石器実測図　５…… 82
第81図　Ｎ３集石石器実測図　６…… 83
第82図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　１…… 86
第83図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　２…… 87
第84図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　３…… 88
第85図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　４…… 89
第86図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　５…… 90
第87図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　６…… 91
第88図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　７…… 92
第89図　Ｎ３ＳＤ－１石器実測図　８…… 93
第90図　遺構に伴わない遺物　１…… 96
第91図　遺構に伴わない遺物　２…… 97
第92図　遺構に伴わない遺物　３…… 98
第93図　遺構に伴わない遺物　４…… 99
第94図　遺構に伴わない遺物　５…… 100
第95図　遺構に伴わない遺物　６…… 101
第96図　遺構に伴わない遺物　７…… 102
第97図　石鏃長幅比…… 104

表目次

表１　第一調査区Ｎ４第二層ピット計測値…… 31
表２　第一調査区Ｎ４第三層ピット計測値…… 31
表３　第二調査区ピット計測値…… 32
表４　Ｎ１区出土遺物集計分類表…… 36
表５　Ｎ２区出土遺物集計分類表…… 37
表６　Ｎ２ＳＤ－１出土遺物集計分類表…… 39
表７　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物集計分類表…… 43
表８　Ｎ２ＳＤ－３出土遺物集計分類表…… 45
表９　Ｎ２ＳＤ－４出土遺物集計分類表…… 47
表10　Ｎ３区出土遺物集計分類表…… 48
表11　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物集計分類表…… 50
表12　Ｎ３区集石出土遺物集計分類表…… 61
表13　Ｎ４区出土遺物集計分類表…… 62
表14　Ｎ４区第三層出土遺物集計分類表…… 64
表15　第二調査区出土遺物集計分類表…… 65
表16　第三調査区出土遺物集計分類表…… 67
表17　中ノ池遺跡（第一調査区）出土石器の一覧表… 105
表18　石器一覧表…… 111

図版目次

巻頭図版１　第一調査区全景
巻頭図版２　Ｎ３ＳＤ－１南壁面
図版１　第一調査区溝全景
図版２　第一調査区Ｎ４区
図版３　Ｎ３ＳＤ－１
図版４　Ｎ２ＳＤ－１
図版５　Ｎ２ＳＤ－１
図版６　第一調査区南壁断面
図版７　Ｎ３ＳＤ－１南壁断面
図版８　Ｎ２ＳＤ－１南壁断面
図版９　Ｎ２ＳＤ－２南壁断面
図版10　Ｎ１ＳＤ－１・２
図版11　Ｎ２ＳＤ－３
図版12　Ｎ２ＳＤ－４
図版13　Ｎ４調査区第二層
図版14　Ｎ４調査区第二層
図版15　Ｎ４調査区出土磨石
図版16　Ｎ４調査区第三層
図版17　Ｎ４調査区・Ｎ４ＳＤ－１
図版18　Ｎ４調査区・Ｎ４ＳＤ－１
図版19　Ｎ３区集石
図版20　Ｎ３区集石
図版21　第二調査区全景
図版22　第二調査区南断面
図版23　第三調査区北から
図版24　第三調査区北から
図版25　第三調査区Ｗ５ＳＤ－１
図版26　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版27　Ｎ２ＳＤ－２出土壷
図版28　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版29　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版30　Ｎ４区出土壷
図版31　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版32　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版33　Ｎ２区出土壷
図版34　Ｎ２区出土壷
図版35　Ｎ４区出土壷
図版36　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版37　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版38　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版39　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版40　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版41　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版42　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版43　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版44　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版45　Ｎ３ＳＤ－１出土壷
図版46　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版47　Ｎ２ＳＤ－１出土壷
図版48　Ｎ１区出土壷
図版49　Ｎ２ＳＤ－２出土壷
図版50　Ｎ２ＳＤ－４出土壷
図版51　Ｎ２ＳＤ－３出土壷
図版52　Ｎ２ＳＤ－１出土甕
図版53　Ｎ３ＳＤ－１出土甕
図版54　Ｎ２ＳＤ－１出土甕
図版55　Ｎ２ＳＤ－１出土甕
図版56　Ｎ２ＳＤ－１出土甕
図版57　Ｎ２ＳＤ－１出土甕
図版58　Ｎ２区出土甕
図版59　Ｎ２区出土甕
図版60　Ｎ３ＳＤ－１出土甕
図版61　Ｎ２区出土甕
図版62　Ｎ２区出土甕
図版63　Ｎ３ＳＤ－１出土甕
図版64　Ｎ３ＳＤ－１出土甕
図版65　Ｎ２区出土甕
図版66　Ｎ２ＳＤ－１出土甕
図版67　Ｎ５区出土甕
図版68　Ｎ２ＳＤ－２出土甕
図版69　Ｎ３ＳＳ出土甕
図版70　Ｎ３ＳＤ－１出土甕
図版71　Ｎ３ＳＳ出土甕
図版72　土錘及び紡錘車
図版73　Ｎ３ＳＤ－１出土木製品
図版74　Ｎ３ＳＤ－１出土木製鍬樹種鑑定写真
図版75　Ｎ３ＳＤ－１出土木杭
図版76　Ｎ３ＳＤ－１出土木杭樹種鑑定写真
図版77　Ｎ４区出土サヌカイト剥片　１
図版78　Ｎ４区出土サヌカイト剥片　２
図版79　Ｎ４区出土サヌカイト剥片　３
図版80　Ｎ４区出土サヌカイト剥片　４
図版81　Ｎ４区出土サヌカイト剥片　５
図版82　Ｎ４区出土サヌカイト剥片　６
図版83　石鏃
図版84　石鏃
図版85　石鏃
図版86　石鏃及び石錐
図版87　石錐
図版88　石錐

図版89　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版90　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版91　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版92　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版93　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版94　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版95　Ｎ２ＳＤ－２出土遺物
図版96　Ｎ２ＳＤ－２（47）、Ｎ２ＳＤ－３（85～87）
　　出土遺物
図版97　Ｎ２ＳＤ－３出土遺物
図版98　Ｎ２ＳＤ－３出土遺物
図版99　Ｎ３集石出土遺物
図版100　Ｎ３集石出土遺物
図版101　Ｎ３集石出土遺物
図版102　Ｎ３集石出土遺物
図版103　Ｎ３集石出土遺物
図版104　Ｎ３集石出土遺物
図版105　Ｎ３集石出土遺物
図版106　Ｎ３集石出土遺物（178）、Ｎ３ＳＤ－１
　　出土遺物（200～203）
図版107　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版108　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版109　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版110　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版111　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版112　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版113　Ｎ２ＳＤ－３出土遺物（83・84）、
　　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物（234～236）
図版114　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版115　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版116　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版117　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版118　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版119　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物
図版120　Ｎ３ＳＤ－１出土遺物（249、250）、Ｎ３区
　　出土遺物（380）、Ｎ４区出土遺物（379）
図版121　遺構に伴わない遺物
図版122　遺構に伴わない遺物
図版123　遺構に伴わない遺物
図版124　遺構に伴わない遺物（419）、
　　Ｎ５区出土遺物（423）
図版125　Ｎ５区出土遺物

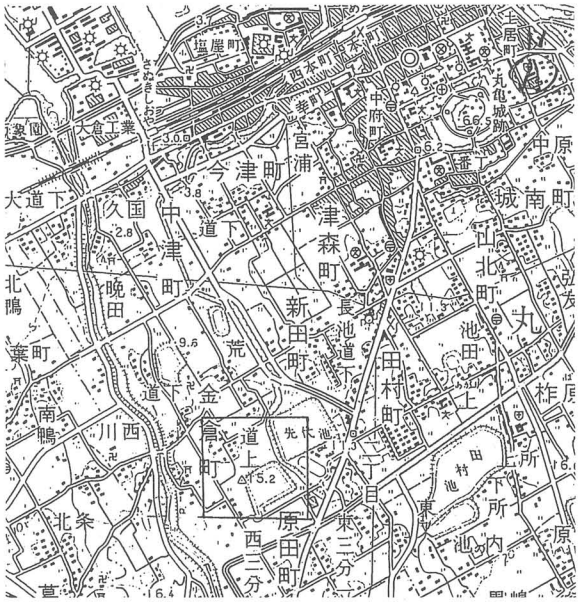
第Ⅰ章　中ノ池遺跡と周辺の遺跡

第１節　中ノ池遺跡

中ノ池一帯から土器や石器が出土することに、最初に気付いたのは、地元の宮武進さんであった。宮武さんはすでに1947年頃、中ノ池971番地の地下げをおこなった際に、多数の土器が出土して関心をもっていた。

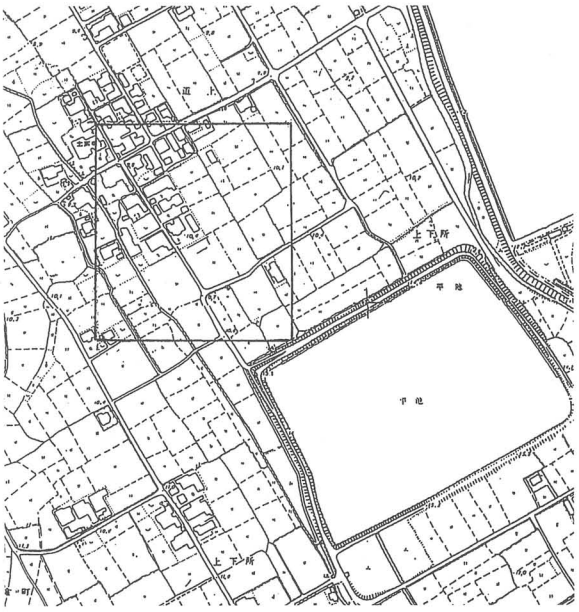
その後1976年、中ノ池の南にある平地の水路改修工事が行われ、土器や石器が出土した。報告を受けた丸亀市教育委員会は周辺でボーリング調査を行い、遺跡の広がりを知った。これが契機となって県教育委員会では、同年９月重要遺跡確認調査の一端として、約90㎡を発掘した。

この調査によって幅３m、深さ約１mの溝状の遺構を検出するとともに、弥生時代前期の土器や石器を採集した。

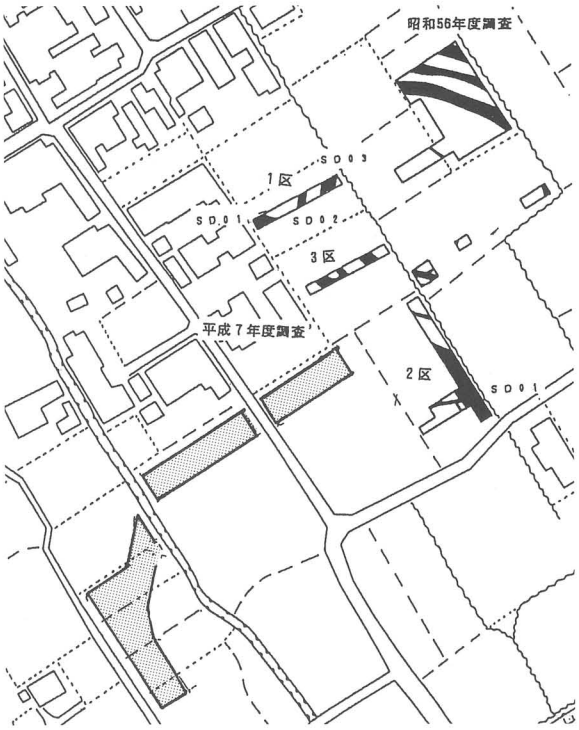


第１図　丸亀西北部地形図

次いで1981年９月丸亀市教育委員会は国・県の補助を受け約700㎡を調査した。この調



第２図　中ノ池遺跡と平池周辺地形図



第３図　中ノ池遺跡の調査区

査では三条の環壕とみられる溝が検出され、中ノ池遺跡は環壕集落である可能性が濃厚になった。

1994年平池の南に県営陸上競技場の建設計画が具体化し、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは約18,360㎡を次年度に4,000㎡発掘調査した。また丸亀市においても平池の周辺に総合運動公園を建設することとなり、市教育委員会では建設に伴う埋蔵文化財の確認調査をおこなってきた。

これら一連の発掘調査を通じて、中ノ池遺跡と、その周辺部の遺跡の広がりが次第に明らかになってきた。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査した平池の南（丸亀市金倉町及び同市原田町）で確認された包蔵地は「平池南遺跡」と名付けられた。

また丸亀市教育委員会が調査した平池の西側一帯の包蔵地には「平池西遺跡」と呼ばれることになった。従って中ノ池遺跡は平池から北の包蔵地ということになる。

さて1995年度に丸亀市教育委員会が実施した中ノ池遺跡の確認調査は、１区（1003番地）、２区（1010番地）、３区（1008番地）の３調査区を設定している。

この調査でも何れの調査区においても環壕と思われる溝状遺構が検出されており、中ノ池遺跡における環壕のありかたが改めて注目されることになった。

第２節　周辺の遺跡

中ノ池遺跡は、金倉川の西岸に形成された氾濫原に立地しており、しばしば金倉川の氾濫に遭遇したと思われるが、弥生時代前期の遺跡としては県下でも屈指の環壕集落を形成した。

その後集落は氾濫に対して比較的安定的な南に展開し、平池南遺跡からは前期だけでなく、中期の土器棺墓や後期の周溝墓状遺構も検出され、平池南遺跡が前期から後期中葉の集落であったことが明らかになった。

金倉川の東側、古代の那珂郡では、善通寺市・五条遺跡と滝川五条遺跡が注目される。両者は共に前期の土器に中期初頭の櫛目文土器が伴出しており、なかでも滝川五条遺跡では円形周溝墓や木棺墓なども検出されるなど、本格的な発掘調査が実施されていない現状では推定の域を脱することは出来ないが、両者は一体の大規模な集落となる可能性もある。それに対して金倉川の西岸、古代の多度郡では、中ノ池遺跡とほぼ同じ頃に形成された遺跡としては多度津町・三井遺跡があげられる、この遺跡は中ノ池遺跡の南西約３㎞に所在するもので、すでに1950年頃からに底部に籾の圧痕のある土器や、前期の土器が検出され注目されていた。

平成４年、多度津町教育委員会が一部発掘調査を行い、溝状の遺構が検出されている。三井遺跡は標高13mあたりに立地することから、氾濫に対しても中ノ池遺跡よりは安定していたものと思われる。三井遺跡の南約１㎞を東西に四国横断自動車道が走っているが、これの建設に伴う発掘調査では、善通寺市・乾遺跡から前期の土器と共に木製農具も検出されている。多度郡内の遺跡として最も注目される遺跡は、前期初頭から後期、さらに古代に至る集落として旧練兵場遺跡があり、丸亀平野における拠点集落としての位置付けがなされる。

参考資料

1982・「中ノ池遺跡発掘調査概要」丸亀市教育委員会

1995・「平池南遺跡」香川県教育委員会㈶香川県埋蔵文化財調査センター

1996・「平成７年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書」丸亀市教育委員会

第４図　中ノ池遺跡と周辺の遺跡分布図

①中ノ池遺跡
②平池西遺跡
③平池南遺跡
④三井遺跡
⑤乾遺跡
⑥中村遺跡
⑦永井遺跡
⑧旧練兵状遺跡
⑨彼ノ宗遺跡
⑩稲木遺跡
⑪下所遺跡
⑫五条遺跡
⑬滝川五条遺跡
⑭南鴨遺跡
⑮田村廃寺遺跡
⑯宝憧寺遺跡
⑰陣山遺跡
⑱我拝師山Ｃ遺跡
⑲我拝師山Ｂ遺跡
⑳我拝師山Ａ遺跡
㉑甲山遺跡

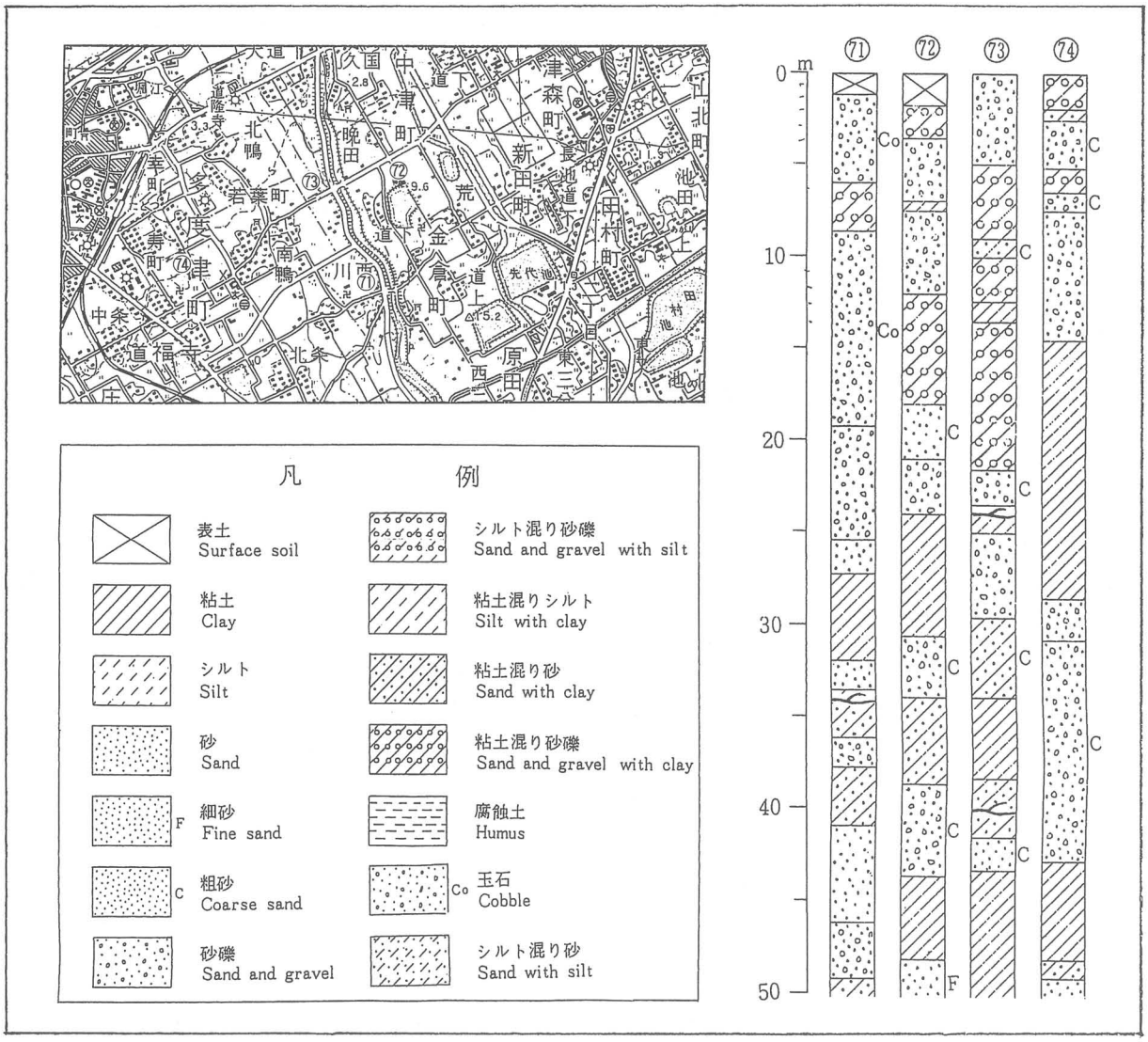
第Ⅱ章　遺跡の立地と地質構造

第１節　中ノ池周辺の地質構造

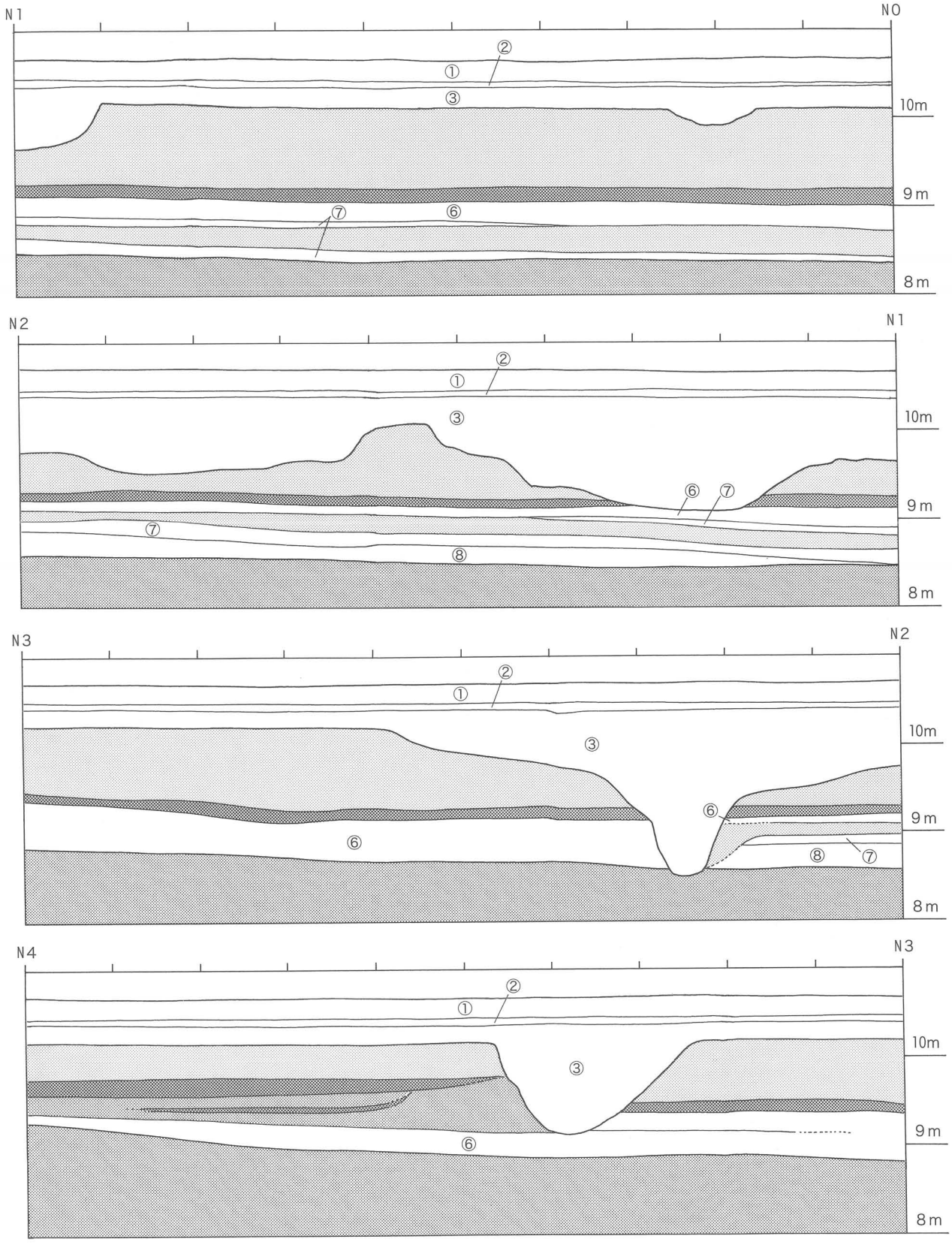
西讃府志によれば、中ノ池は近世には金倉郷、上金倉村、小地名として中之池・池の下・原・荒など10小地名があった。地味は上は八分真土、一分砂交り、一分サコ田、下は五分真土、三分砂礫交じり余りはサコ田、溜め池は千代池周囲15町、溉田100町４段六畝五歩、その他平池等六とある。

平池については正徳３年の「津森組村々明細帳」には堤高1.52m、堤長976mとあって、現在の堤高4.9m、堤長1,100mと比較すると格段に小規模であったことが分かる。

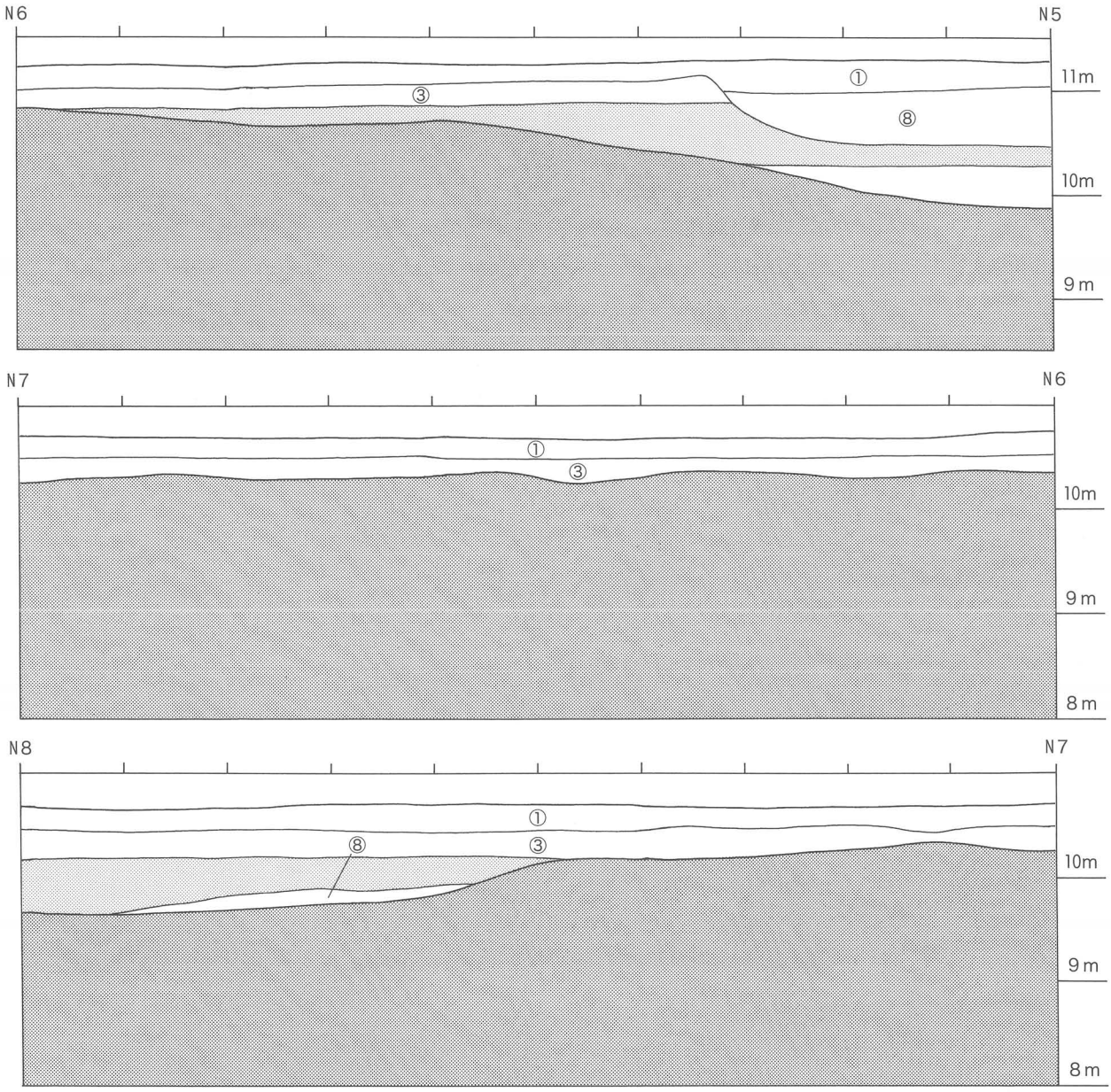
遺跡が所在する中ノ池は平池の北に位置し、集落には先の西讃府志にも記録があるように



第５図　中ノ池遺跡周辺の地質構造（昭和44年経済企画庁発行表層地質図）



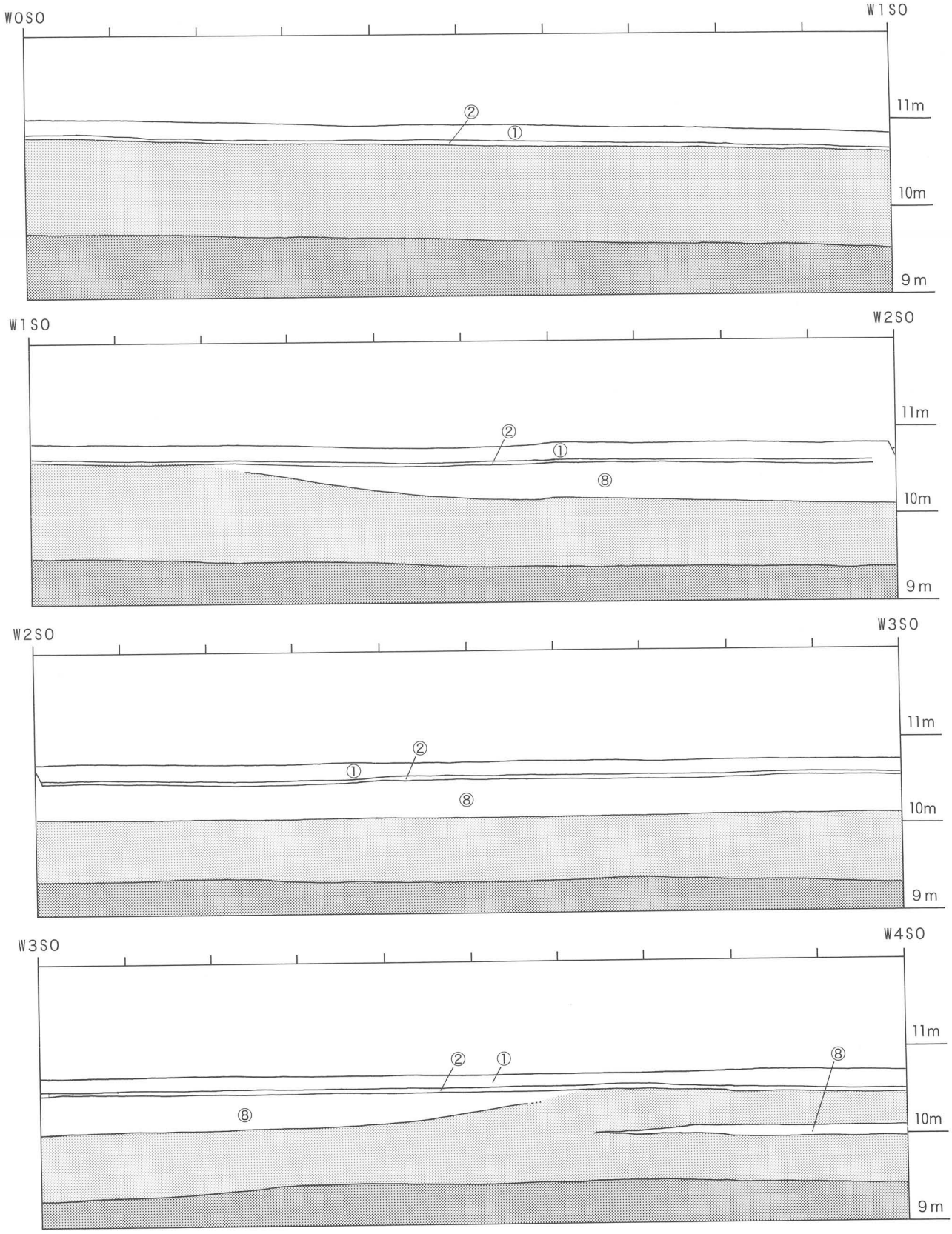
第６図　第一調査区断面図（Ｎ０～Ｎ４）



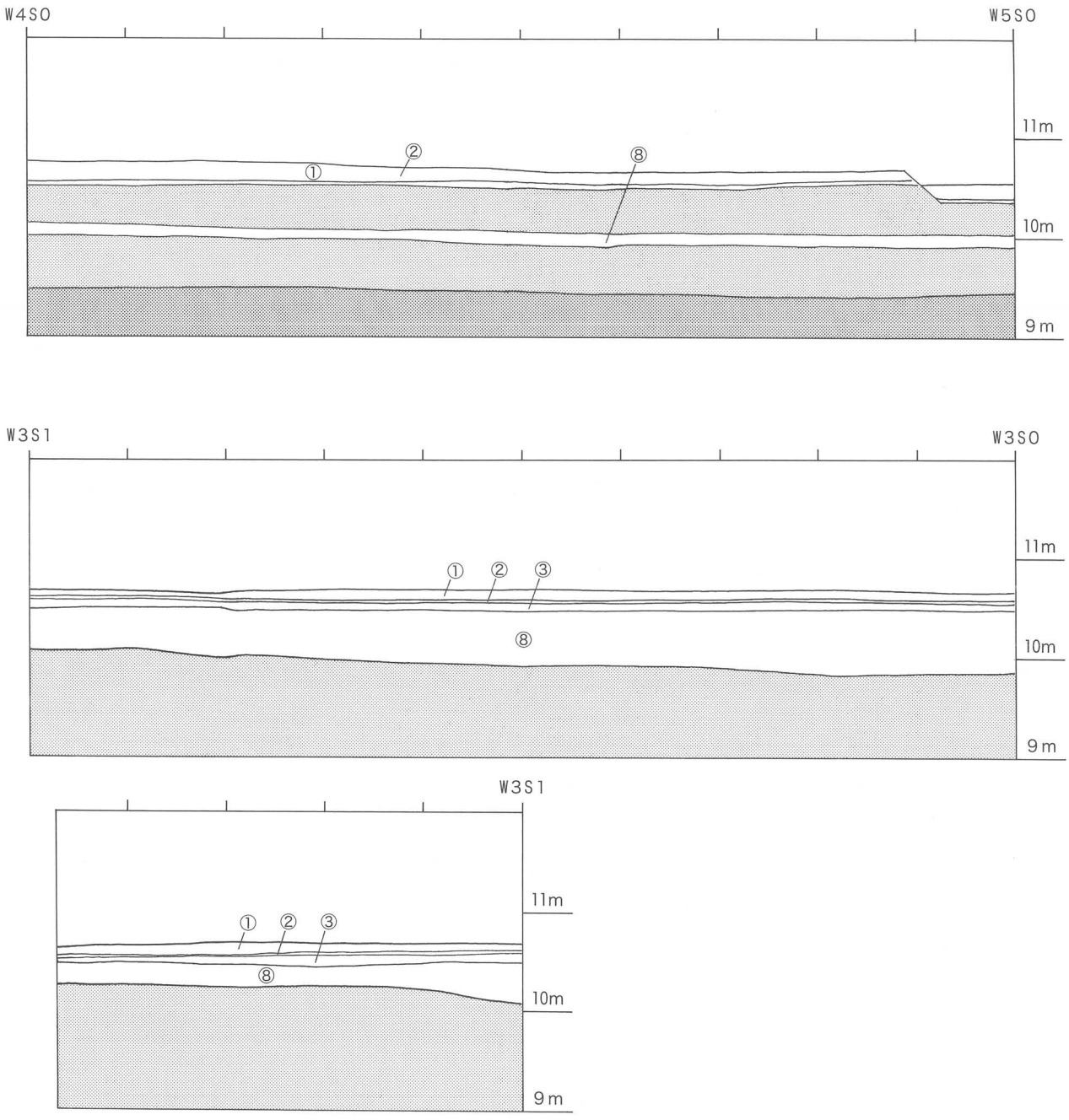
①明灰色土（表土）
②茶褐色土（すき床層）
③暗茶褐色土
④黄褐色土（地山）
⑤茶褐色土
⑥灰褐色砂質土
⑦緑灰色砂質土
⑧黒褐色土
⑨砂礫土

0　1m　2m

第７図　第二調査区断面図（Ｎ５～Ｎ８）



第８図　第三調査区断面図（Ｗ０Ｓ０～Ｗ５Ｓ０）



①明灰色土（表土）
②茶褐色土（すき床層）
③暗茶褐色土
④黄褐色土（地山）
⑤茶褐色土
⑥灰褐色砂質土
⑦緑灰色砂質土
⑧黒褐色土
⑨砂礫土

0　1m　2m

念宗寺、東坊などの寺院があることからすると、地形的に安定し、古くから集落が形成されていたものと思われる。

丸亀市史によれば、平池の西150mをほぼ南北に走る現在の市道は、かつての条里の遺構で、北西に約1㎞程延びている。

集落の西およそ300mには金倉川が流れ平池と先代池の間を流れる小流野田川は丸亀城の北で瀬戸内海に流れ込む。従って地名は中ノ池でありながら、集落の立地は両河川に挟まれた微高地にある。今回発掘した水田の標高は10.71m、であるのに対して、西300mの金倉川の東岸地帯の水田は10.2m、東方野田川の西岸は10.2mで、現在の地形図をみても、遺跡一帯はやや微高地にあることが分かる。

昭和44年経済企画庁発行の表層地質図によると、金倉川周辺は新旧河道による礫及び砂層で中ノ池一帯は、礫・砂及び泥地帯に表示されている。中ノ池の柱状断面図は作成されていないが、遺跡から1㎞程北西にある瓢池の周辺では、約2mの表土、その下約2mが粘土混りの砂礫層になり、以下50mまでは粘土混りの砂礫と粘土、粘土混じりの砂の互層で、深い沖積層が形成されていることが分かる。

第2節　遺跡の土層序

発掘調査によって確認された中ノ池遺跡の土層序は、遺跡の基盤となる地貌をよく物語っている。

第6図によって模式的な土層序を見てみると、以下のようになる。

第1層　耕作土、明灰色土

第2層　すき床層　固い茶褐色の土層

第3層　遺物包含層で、暗褐色土壌

第4層　浅黄褐色粘質土で、この層が遺跡の基盤となる。厚いところでは1m以上になり、間にベルト状に茶褐色や黒褐色の砂質土壌を挟んでいる場合がある。

第5層　砂礫層、ただしN0からN2の区間は、礫層の上に黒褐色の砂質土層が形成される。

つぎに礫層の堆積状況を観察してみると。第6・7図のようになり、第一調査区のN0を起点として5m間隔の礫層までの標高は以下のようになる。

N0	0m	810cm
	5〃	825〃
N1	10〃	845〃
	15〃	854〃
N2	20〃	860〃
	25〃	870〃
N3	30〃	887〃
	35〃	
N4	40〃	932〃
N5	0〃	938〃
	5〃	1014〃
N6	10〃	1038〃
	15〃	1038〃
N7	20〃	1034〃
	25〃	1028〃
N8	0〃	978〃

これによって見ると、砂礫層は、N0地点では標高810cmと最も低くなるが、そこから次第に高くなって、N4地点では932cmとなり、122cm高くなっている。さらに第二調査区のN5・0地点では938cmであるのに対して、N5・10mから20m地点では1038cm前後まで高くなり、N7・25地点あたりから次第に深くなり、N8・30m地点では978cmと、60cm低くなる。

従って今回の調査区で見るかぎり、N3SD－1の環壕からN8・30m地点までの間は、砂礫層が次第に厚くなって、これが現地表面

に微高地を形成する要因となっている。

次に砂礫層の上に堆積している黄褐色の粘質土層を第６・７図によって観察することとする。

この黄褐色粘質土層の堆積状況を観察するとき、参考になるのは茶褐色のベルト状の堆積層である。この茶褐色ベルトと砂礫層の間には細い砂質土層が堆積し、色調は灰色を呈する、さらにこの灰色砂質土層と、砂礫層の間に黒褐色の砂質土層が形成されることもある。

また茶褐色ベルトの上層は黄褐色粘質土層が堆積し、遺構のベースとなる。この層は乾燥するとしまって固くなる。

さて茶褐色ベルトであるが、

Ｎ０地点は930cmの深さにあるのに対して、Ｎ３･33m地点でも930mで、ゆるやかなカーブを描きながらも、ほぼ水平に堆積していることが分かる。それに対してＮ３・５m地点から、Ｎ４・40地点までの茶褐色ベルト層は、982cmの深さで、やや浅くなっている。またＮ２・30mあたりからＮ０地点にかけては、茶褐色ベルト層以下には茶褐色や灰色、黒褐色などの砂質土層が交互に堆積しており、この地点がその時点で水溜り状になっていたことを物語っている。

以上の堆積状況によって、遺跡の基盤となる黄褐色粘質土層は、一気に堆積したものではなく、何回かの段階を経て徐々に堆積していったものと推定される。

第二調査区では、Ｎ６･10m地点から、Ｎ７･25m地点までは、表土から砂礫層までは30cmから50cm程度であって、遺構面は砂礫層にのっているような状態である。

遺物包含層は黄褐色の粘質土で或は相当な削平が行われた可能性もある。

次に第三調査区における土層序の状況をみると、表土から砂礫層までの深さは次のようになる。

Ｗ０	０m	950cm
	５〃	950〃
Ｗ１	10〃	950〃
	15〃	940〃
Ｗ２	20〃	935〃
	25〃	936〃
Ｗ３	30〃	930〃
	35〃	946〃
Ｗ４	40〃	948〃
	45〃	950〃
Ｗ５	50〃	950〃

以上の数値でみると、Ｗ３地点で最も深くなり、南はＷ１地点、北はＷ４地点まで徐々に浅くなり、直径30m程の浅い窪みができていたようである。

この窪みがさらにその上層の土砂の堆積状況にも影響を与え、南はＷ１の12mあたりから、北はＷ３の37mあたりまでの間、黒褐色の粘質土層が堆積しており、最も深いＷ３の30mあたりでは、標高10.1m地点まで堆積している。

一方Ｗ３Ｓ０からＷ３Ｓ２方向に設定した断面図によると、黒褐色土層はＷ３Ｓ－１の11m付近まで浅い落ち込みを形成している。僅かばかりの遺物がこの黒褐色土層から検出されている。

なお第二、三調査区における土層の堆積状態は第７・８図のとおりである。

第Ⅲ章　調査区の設定と調査の経過

第１節　調査区の設定

発掘調査は第一調査区、第二調査区、第三調査区の３区画を設定して実施した。

〈第一調査区〉

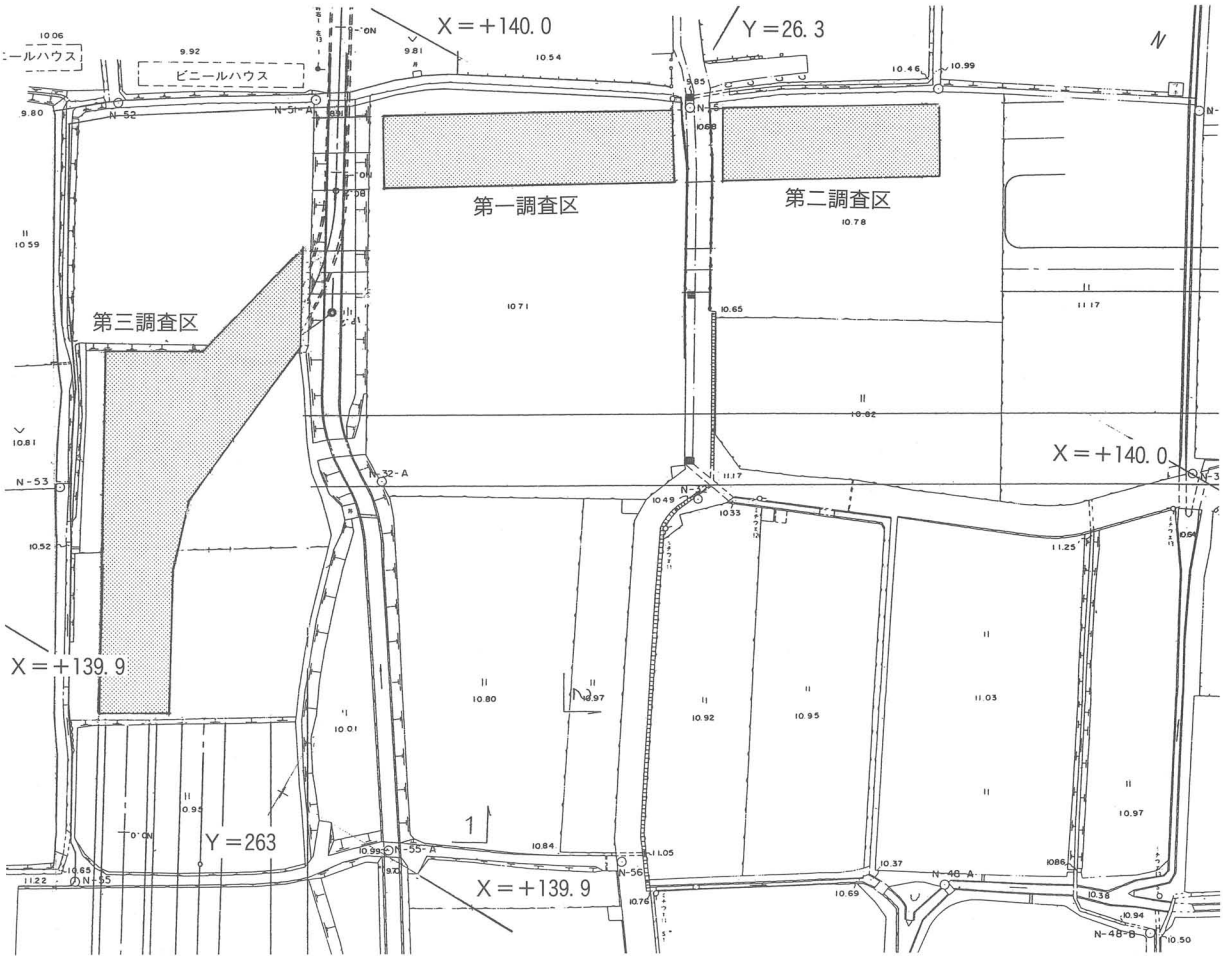
地番1018－１、地表面の標高10.71m、発掘区は幅10m、長さ40m、面積は400㎡で、地目は水田であった。

〈第二調査区〉

地番1009、地表面の標高10.78m、発掘面積は幅10m、延長32m、面積は320㎡で、地目は水田であった。

〈第三調査区〉

地番1030-1、1031、1032で標高は1030-1が10.50m、1031が10.68m、1032が10.89m、調査面積788.5㎡、地目は水田であった。



第９図　第一次調査区の設定図

ポイントの設定

〈第一調査区〉

基準線はＫＢＭ４＋560とし、ＮＯからＮ４までの10m間隔でポイントを設定し、Ｎ１・Ｎ２・Ｎ３・Ｎ４の４調査区とした。

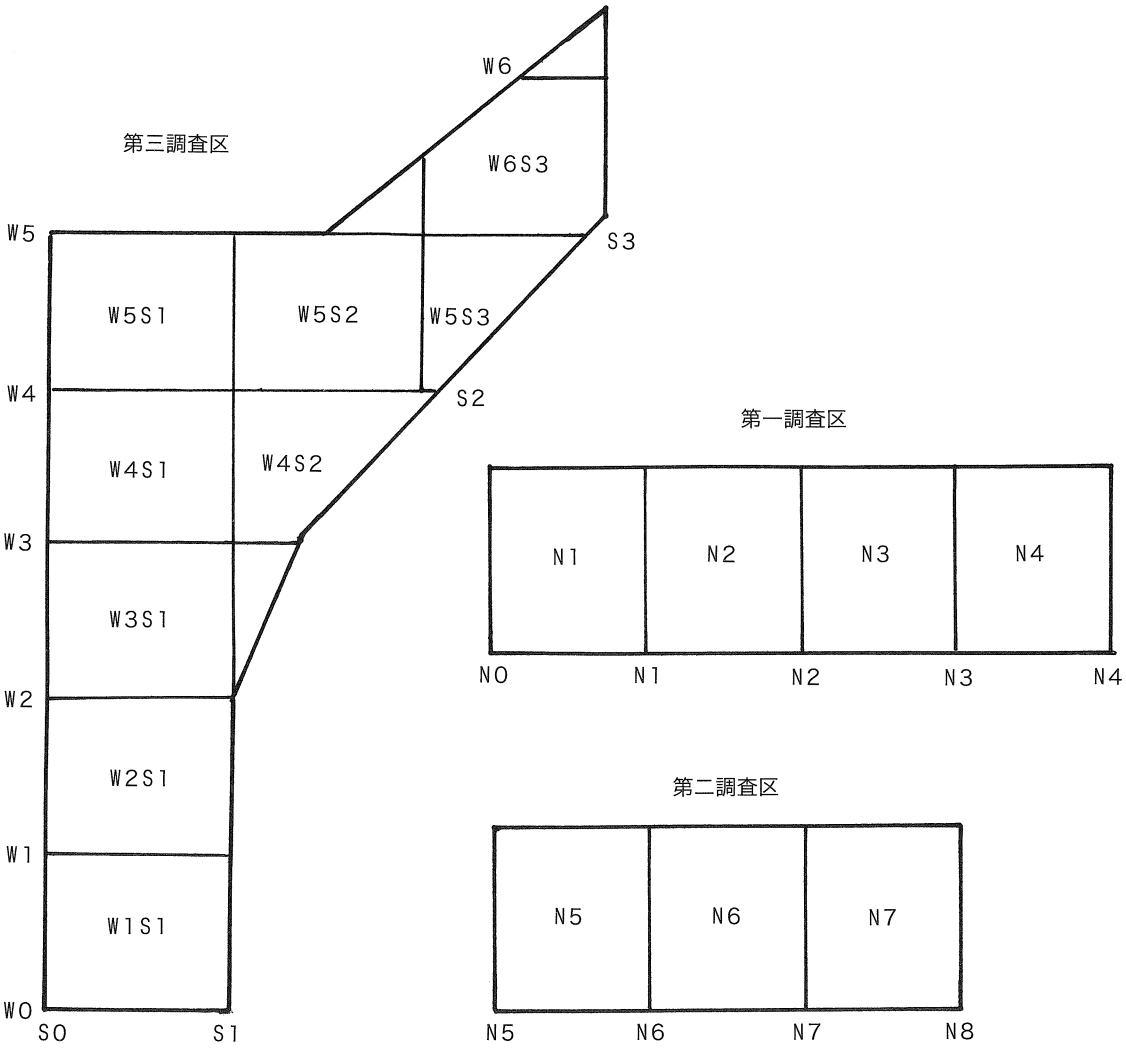
〈第二調査区〉

基準線はＫＢＭ４＋560とし、Ｎ５からＮ８までの10m間隔でポイントを設定し、Ｎ５・Ｎ６・Ｎ７の調査区とした。

〈第三調査区〉

基準線はＫＭＢ４＋200とし、東西にＷＯからＷ５までの10m間隔のポイントを、南北にもＳＯからＳ３までのポイントを設定した。

これによって調査区はＷ１Ｓ－１からＷ５Ｓ－１、Ｗ４Ｓ－２、Ｗ５Ｓ－２、Ｗ５Ｓ－３、Ｗ６Ｓ－３の９調査区を設定した。



第10図　調査区ポイント設定図

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は平成９年５月12日に丸亀市開発整備課及び同市教育委員会の立ち会いのもとに、ベンチマークと発掘区域の確認を行い、15日から杭打ちに着手した。

〈作業日誌抄〉

平成９年	
５月12日	開発整備課、教育委員会の立ち会いでベンチマークの確認
15日	杭打ち、地盤測量
16日	杭打ち、地盤測量
19日	第一調査区表土除去、第一、第二調査区安全柵の杭打ち
20日	第二調査区表土除去、第一、第二調査区沈砂池二基造成
21日	第一調査区床土下層の人力堀削、第三調査区安全柵杭打ち
22日	第三調査区表土除去、第一調査区表土より30cmまで人力掘削
23日	第二調査区床土下層まで掘削
26日	第一調査区Ｎ４遺構検出、第三調査区表土除去
27日	第一調査区Ｎ４遺構検出、実測、第三調査区表土除去
28日	第一調査区Ｎ４実測、Ｎ３区掘削
29日	第一調査区Ｎ３集石遺構検出、Ｎ２区の掘削
30日	Ｎ４区遺物取り上げ、Ｎ２区溝の掘削
６月２日	Ｎ１、２区、第２層掘削
３日	Ｎ２遺物取り上げ、Ｎ３集石遺構写真
４日	Ｎ１、２、３区溝掘削
５日	Ｎ４区遺構掘削、Ｎ１ＳＤ－１掘削、Ｎ３ＳＤ－１掘削
６日	雨天休業
９日	Ｎ４区遺構精査、Ｎ３ＳＤ－１掘削、Ｎ１ＳＤ－１掘削
10日	Ｎ４区写真撮影、Ｎ３区ＳＤ－１掘削、集石遺構実測、Ｎ２区掘削
11日	Ｎ４区第三層掘削、Ｎ３区ＳＤ－１掘削、集石遺構実測、Ｎ２区ＳＤ－１・ＳＤ－２掘削
12日	Ｎ４区遺構精査、Ｎ３ＳＤ－１掘削、Ｎ１・Ｎ２溝掘削
13日	Ｎ４区精査
16日	Ｎ４区精査、Ｎ４ＳＤ－１掘削、Ｎ２－１、２掘削
17日	Ｎ４区測量、実測、Ｎ３ＳＤ－１掘削、Ｎ２溝掘削
18日	Ｎ２ＳＤ－１・２・３掘削、Ｎ３集石遺構実測終了、遺物取り上げ
19日	Ｎ２区掘削
20日	23日まで台風休業
24日	Ｎ２ＳＤ－２、３掘削、第二調査区第２層精査
25日	Ｎ２ＳＤ－１、２、３、４掘削、Ｎ５ピット精査
26日	Ｎ２区の精査、第二調査区遺構検出
27日	Ｎ２ＳＤ－２、３測量
30日	第二調査区遺構精査、Ｎ２調査区の精査
７月１日	第二調査区精査
２日	雨天作業中止、土器洗浄
３日	第三調査区人力掘削着手、第２調査区精査終了、Ｎ２、Ｎ

	３調査区掘削
４日	Ｎ３ＳＤ－１から木器、獣骨出土、第三調査区人力掘削
７日	11日まで天候不良で休業
14日	遺構の排水
15日	Ｎ２調査区精査、Ｎ３調査区一部掘り下げる
16日	Ｎ２調査区精査、Ｎ２ＳＤ－１断面図作成、Ｎ５調査区排水
17日	Ｎ２調査区精査
18日	Ｎ２調査区精査
19日	21日まで雨天休業
22日	Ｎ３ＳＤ－１の精査
23日	Ｎ１からＮ４調査区までの清掃、Ｎ３ＳＤ－１ｋ精査
24日	Ｎ１からＮ４調査区までの写真撮影
25日	Ｎ１からＮ４調査区測量
26日	28日まで台風９号により休業
29日	遺構水浸し、昼から天候不良で作業中止
30日	10時から開発整備課、及び教育委員会に作業状況報告、今後の作業工程の打合せ
31日	第二調査区清掃、第一調査区断面図、第三調査区で溝検出
８月１日	第二調査区写真撮影、四国新聞社取材
４日	第三調査区精査、ＳＤ－１ｋ測量
５日	第二調査区測量、昼から天候不良で休業
６日	天候不良で休業、奈良元興寺文化財研究所へ木器保存処理依頼
７日	第三調査区精査
８日	第三調査区写真撮影
11日	17日まで盆の行事で休業
18日	第一調査区と第二調査区深掘トレンチ掘削
19日	第一調査区深掘トレンチ壁面調整
20日	第二調査区深掘トレンチ壁面調整
21日	第一調査区断面図作成
22日	第二調査区断面図作成
25日	第三調査区断面図作成

第Ⅳ章　遺　　構

第１節　第一調査区

1. 土層序　第一調査区における土壌の堆積状態は、水田面が標高10.71ｍにあり、耕作土は約10cmから15cm、その下に５から７cm程度の堅くて緻密なすき床層がある。

すき床層の下から地山とされる黄褐色の粘質土層までは、およそ20～30cmあり、その間の土層は黄味を帯びた茶色（浅黄色粘質土）と、灰色を帯びた茶色（灰茶色粘質土）の２層に区分されるところもある。

第一調査区の遺構は、Ｎ３区にから検出された溝Ｎ３ＳＤ－１を中心として、その東Ｎ４調査区にはピット群が２層に亙っており、住居地区であった。

それに対して西側Ｎ２調査区からはＮ２ＳＤ－１とＮ２ＳＤ－２の２条の溝がほぼ平行に設置されている。ただしＮ２ＳＤ－２の溝の主軸は南側でＮ３ＳＤ－１の方向に偏っている。

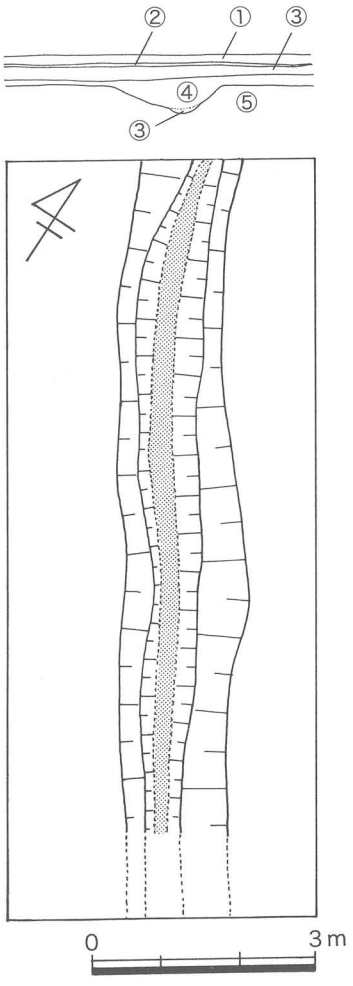
さらにＮ１調査区からも１条の溝が検出され、Ｎ３ＳＤ－１の東側とは対象的な遺構の様相を呈する。

2. 溝・Ｎ１ＳＤ－１・２　溝はＮ１調査区から溝Ｎ１ＳＤ－１と、それに重なった状態でＮ１ＳＤ－２が検出されている。Ｎ１ＳＤ－１の主軸はN35度Wで、最大幅1.6m、最小幅1.25m、底部の高さは9.98m、で表土からの深さは73cm、地山を約30cm程堀込んでいる。溝の中には灰茶褐色の粘質土がつまっており、若干ながら弥生土器が検出されている。

Ｎ１ＳＤ－２は、ＳＤ－１の下層に重なるように検出されたもので、最大幅80cm、最小幅50cm、底部の高さは9.90cmで、表土からの深さ81cmを計測する。内部の土壌はやや砂質の灰茶褐色であった。

3. 溝・Ｎ２ＳＤ－１　主軸は南側で18m、北側は17.45m方位はN36°Wを示す。

溝の底の高さは南側9.68m、北側9.66m、南側では表土からの深さは1.8mとなる。溝の状態を断面図によってみると、南側の断面図では、両肩共に地山が削り取られていることが注目される。Ｎ３ＳＤ－１の東側の肩は10.3mであるのに対して、西側、Ｎ２ＳＤ－１との間は、それより46cmも低くなっている。それに対して北側は両肩共に、ほぼ同じ高さで、10.4mになっている。



第11図
第一調査区
Ｎ１ＳＤ－１
平・断面図

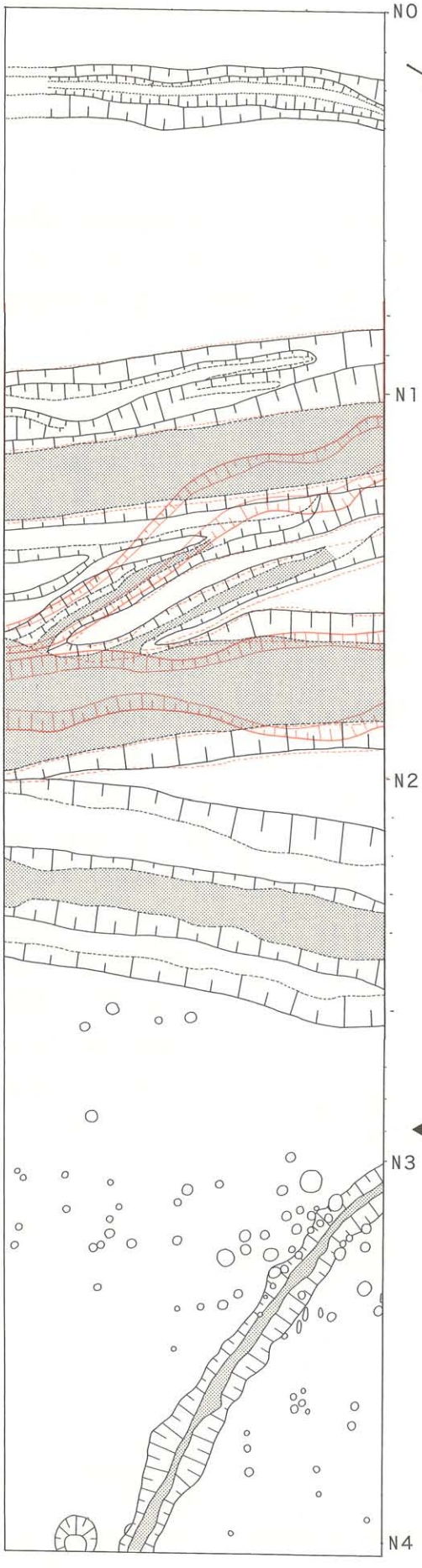
それと同時にＮ２ＳＤ－１とＮ２ＳＤ－２の間も、地山は激しく侵食され、凹凸が刻み込まれている。中でも顕著な侵食の痕跡は、Ｎ２ＳＤ－３とＮ２ＳＤ－４で、溝の下底部の高さは9.6mになっている。土壌の堆積状態や、地山の侵食状態からすると、南からの激しい水流がＮ３ＳＤ－１に流れ込み、西側壁を侵食して氾濫し、Ｎ２ＳＤ－１に流れ込み、さらにＮ２ＳＤ－２との間の地山をも侵食したものと思われる。

4. 溝・Ｎ２ＳＤ－２　主軸は南側では12.5m、北側は11.10m、方位はN37° Wを示す。

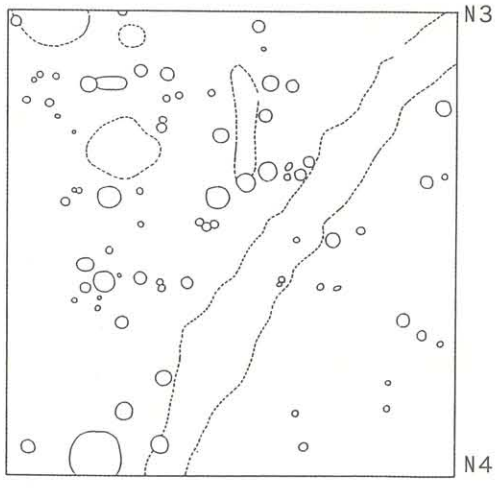
溝の底の高さは北側、南側共に9.22m、表土からの深さは1.56mとなる。

溝の状態を断面図によって観察すると、２段になっていることが分かる。下底部の幅は約2.1mであるが、底から50cmでは幅2.8mとなり、そこから大きく広がって、天幅は5.9mとなる。

5. 溝・Ｎ２ＳＤ－３　Ｎ１ＳＤ－１の溝が埋没後、その上に一条の溝が刻みこまれる。Ｎ２ＳＤ－３である。溝の幅は南側では2.5m、北側はＮ２ＳＤ－１と重なるが、底の高さは北側では10m、表土からの深さ75cm、南側も高さ10mで表土からの深さは75cmを計測する。

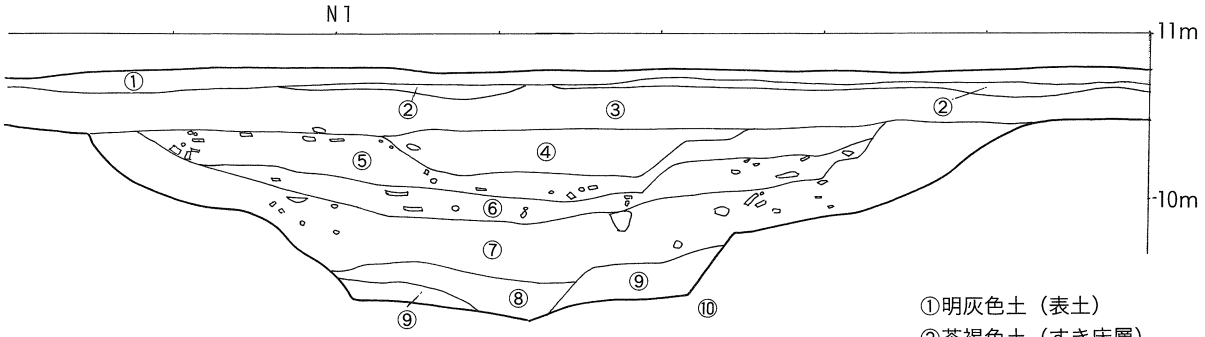


◀第12図
第一調査区平面図

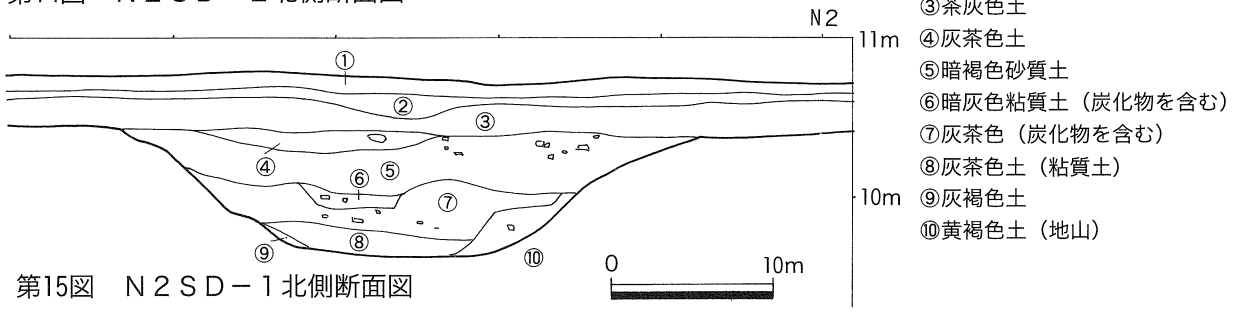


第13図▶
第一調査区Ｎ４区
第２層平面図

0　5m



第14図　Ｎ２ＳＤ－２北側断面図



第15図　Ｎ２ＳＤ－１北側断面図

6.溝・Ｎ２ＳＤ－４　Ｎ２ＳＤ－２の溝が埋没したあとに、刻みこまれた溝で、主軸は南側16m、北側11.45m、方位はほぼNの方向にある。

溝の高さは、北側で10.07m、表土からの深さは64cm、南側では高さ10.15m、表土からの深さは60cmを計測する。

7.溝・Ｎ３ＳＤ－１　主軸は北側では、24m、南側では22.5m、方位はN22°Wを示す。

底部の高さは北で8.87m、表土からの深さは1.95m、南の高さは8.6m、表土からの深さは2.4mを計測する。

断面図によって観察すると、底の幅は北側では45cm、南側は35cmで、天幅は北で4.6m、南では4.5mとなり、天幅が大きく広がっていることが注目される。

まず北側の東壁は底から40cm程のあたりから階段状に広がる。底のセンターから主軸線を引きそれを基準にして見た場合、底では22cm対して、40cm上では42cm、50cm上で55cm、60cm上では77cmと段階的な広がりを見せ、底から110cmでは125cm、底から150cmのところでは、220cmになる。

一方西側の側壁では、底部の幅22cmに対して、東側壁よりはやや大きな広がりを見せつつ、75cmのところでは、85cmであるが、85cmでは、155cmと階段状に広がり、135cmで、235cmと大きく広がる。

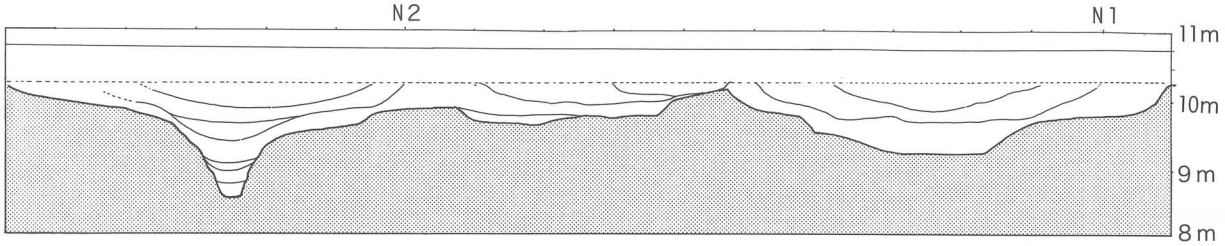
これを北、中央部、南側で比較してみると第19図のようになる。

おそらく最初に掘削された溝の両壁は左右対象にあったと思われるが、このような両側壁の傾斜のアンバランス状態は、激しい水の侵食によって生じたものと考えられる。

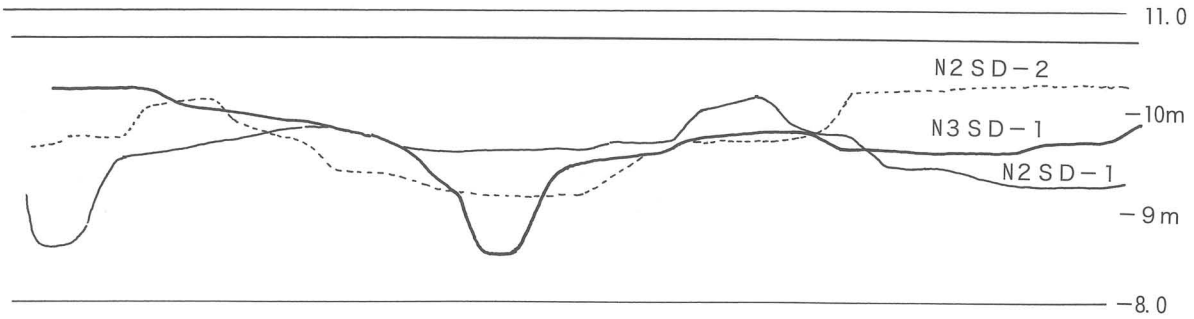
そうした観点からすると、少なくとも３回の侵食作用が想定され、上流からの水の流れに応じて東壁が激しく侵食される場合と、西壁の侵食が激しい場合とがみられる。

次にＮ３ＳＤ－１とＮ２ＳＤ－１・Ｎ２ＳＤ－２の３条の溝を観察してみると、第18図のようになる。

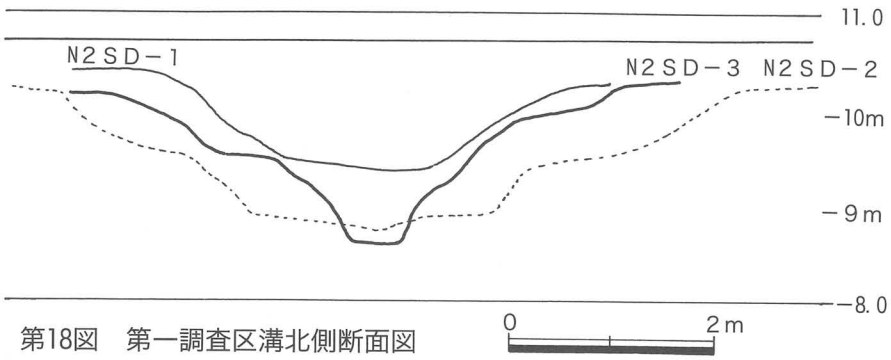
Ｎ３ＳＤ－１が最も深く、その断面はＶ字形を呈する。それに対してＮ２ＳＤ－１とＮ２ＳＤ－２は底が広く且つ浅い。中でもＮ２ＳＤ－１は高さが９、７m程度で、Ｎ２ＳＤ－２の9.2m、Ｎ３ＳＤ－１の8.9mと比較す



第16図　第一調査区溝断面図



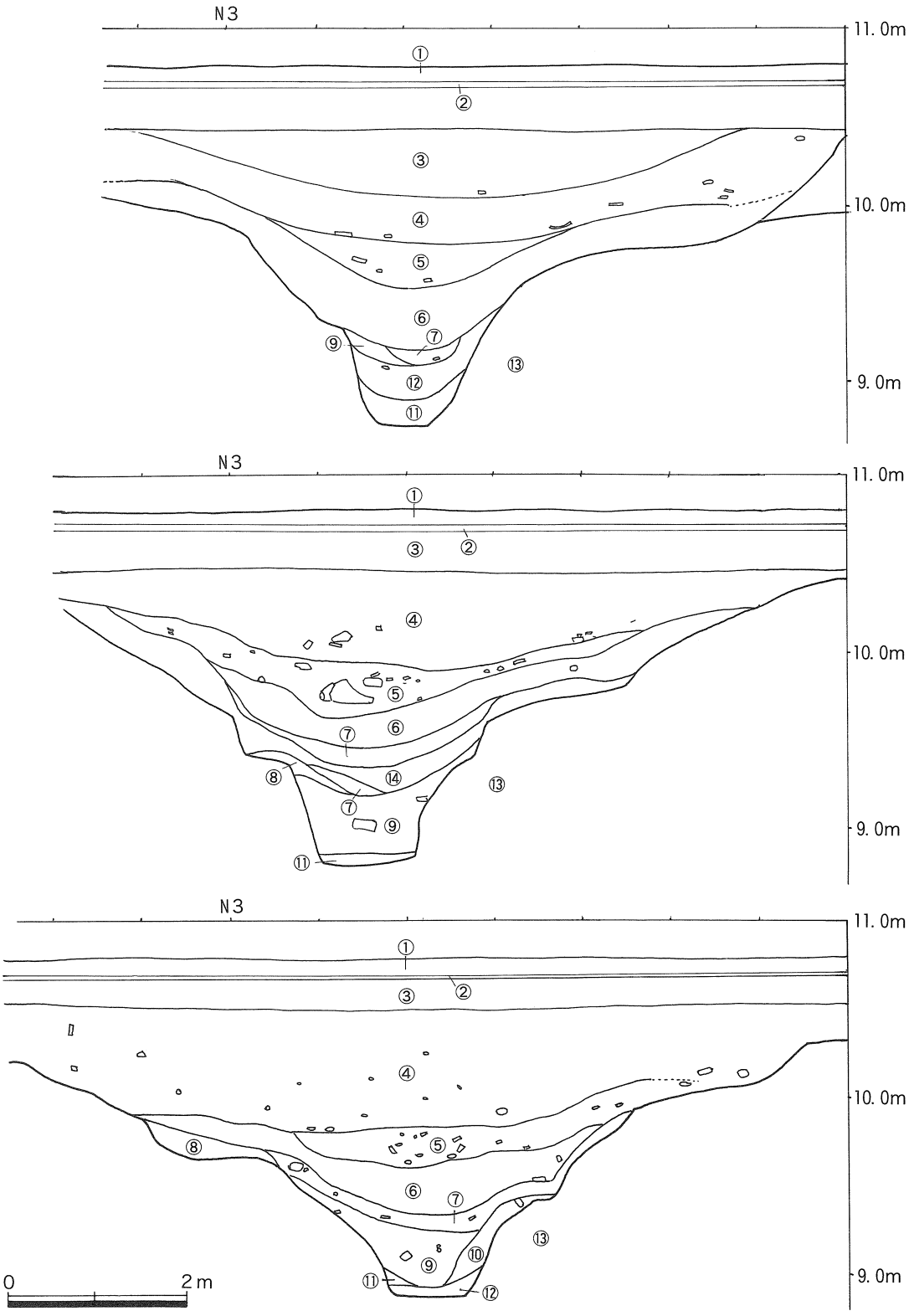
第17図　第一調査区溝南側断面図



第18図　第一調査区溝北側断面図

るといかに浅いものであるかを知ることが出来よう。問題はこの３条の溝が計画的に掘削されたものであるのか、或いは大規模な洪水などによって形成されたものであるのかということであるが、少なくともＮ２ＳＤ－１・２の方位がほぼ平行しているのに対して、Ｎ３ＳＤ－１の方位はむしろ東寄りになっており、すでにＮ３ＳＤ－１とＮ２ＳＤ－２とが調査区の南側で接触する状態になっている。

しかも地山の断面にも顕著に表れているように、Ｎ３ＳＤ－１から溢れた水が、Ｎ２ＳＤ－２の間の地山を削ってＮ２ＳＤ－２に流れ込み、さらにＮ２ＳＤ－１との間の壁は殆ど残らないまでに侵食してしまっている。Ｎ３ＳＤ－１の溢れた水を計画的にＮ２ＳＤ－１・２に流すために流路を設定したものか、或いは激しい水流によって偶然出来上がったものであるのか、今後の課題でもある。ただしＮ３ＳＤ－１の溝と、他の２条の溝は構造がまったく異なっていることには注目しなければならない。

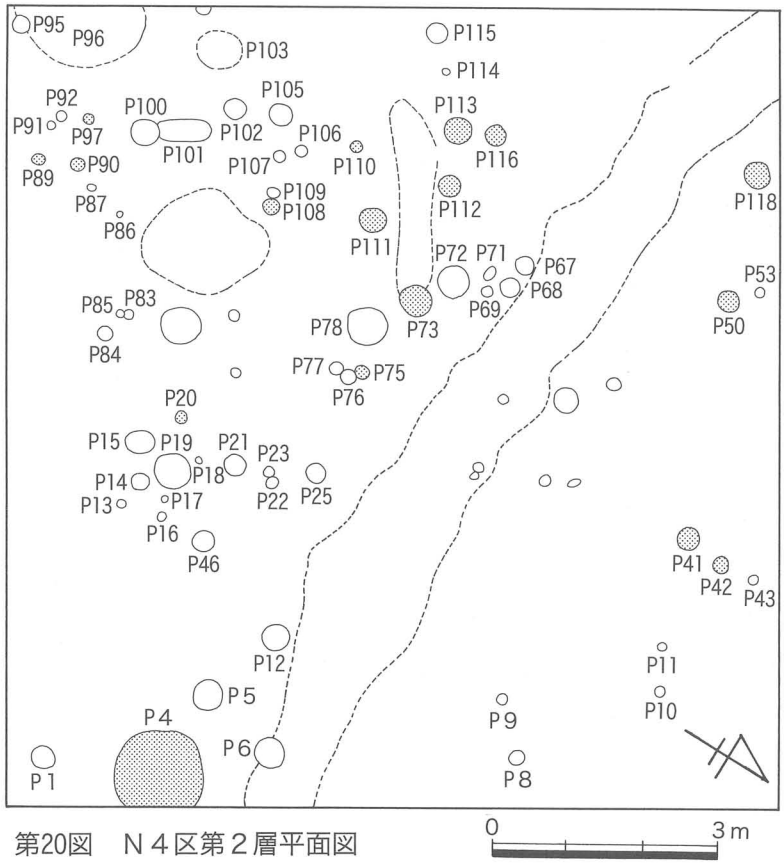


①暗灰色土
②茶褐色土
③茶灰色
④暗茶褐色粘質土
⑤暗褐色粘質土
⑥茶褐色土(固くしまる)
⑦濃茶褐色粘質土
⑧明茶褐色
⑨濃茶褐色粘質土
⑩淡褐色
⑪緑灰色砂質土
⑫灰褐色粘質土
⑬黄褐色土（地山）
⑭濃黄褐色土

第19図　Ｎ３ＳＤ－１断面図

8. 第一調査区・Ｎ４区　Ｎ３ＳＤ－１の東の肩からＮ５ポイントまでの間は、２層に及んでピット群が、さらに下層からは１条の溝Ｎ４ＳＤ－１が検出されている。

第２層は、すき床層の直下から包含層となり、表土から35cmから40cm程のところに遺構面がある。ここからは図に見るように多数のピットと土壌が検出されている。



第20図　Ｎ４区第２層平面図

ポイントＮ３からＮ４の間を４区画に区分して仮にＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区として見たとき、Ａ区のピットには20cmを越える深いものが多く、Ｂ区にはピットが少ない。Ｃ・Ｄ区ではピットは相当検出されているが、浅いものが多く、Ａ・Ｃ区では多数のサヌカイトの剥片を交えて多様な石器も検出されている。

ただし先にも触れたように、この水田はかつてみかん畑になっていた時期があり、遺構面は相当攪乱されていると考えなければならない。

9. Ｎ４第３層　第３層は２層より15cm程下層に認められた包含層で、地山を切り込んだ溝Ｎ４ＳＤ－１と、ピット、土壙などが検出された。

Ｎ４ＳＤ－１は、Ｎ４調査区の北西の隅から南東方向に斜めに走っている。

主軸は北側は30.5mで、幅は１m、東側は南Ｎ４ポイントから北に3.5mにあり、幅は90cmであるが、溝の最大幅は1.6m、最も狭い所で90cmを計測する。

溝の両肩は比較的不整形で、計画的に掘削されたものとは考えられない。しかも北西部では多数のピットを切り込んだ形で溝が走っており、溝がピット掘削後に出来たものであることを物語っている。

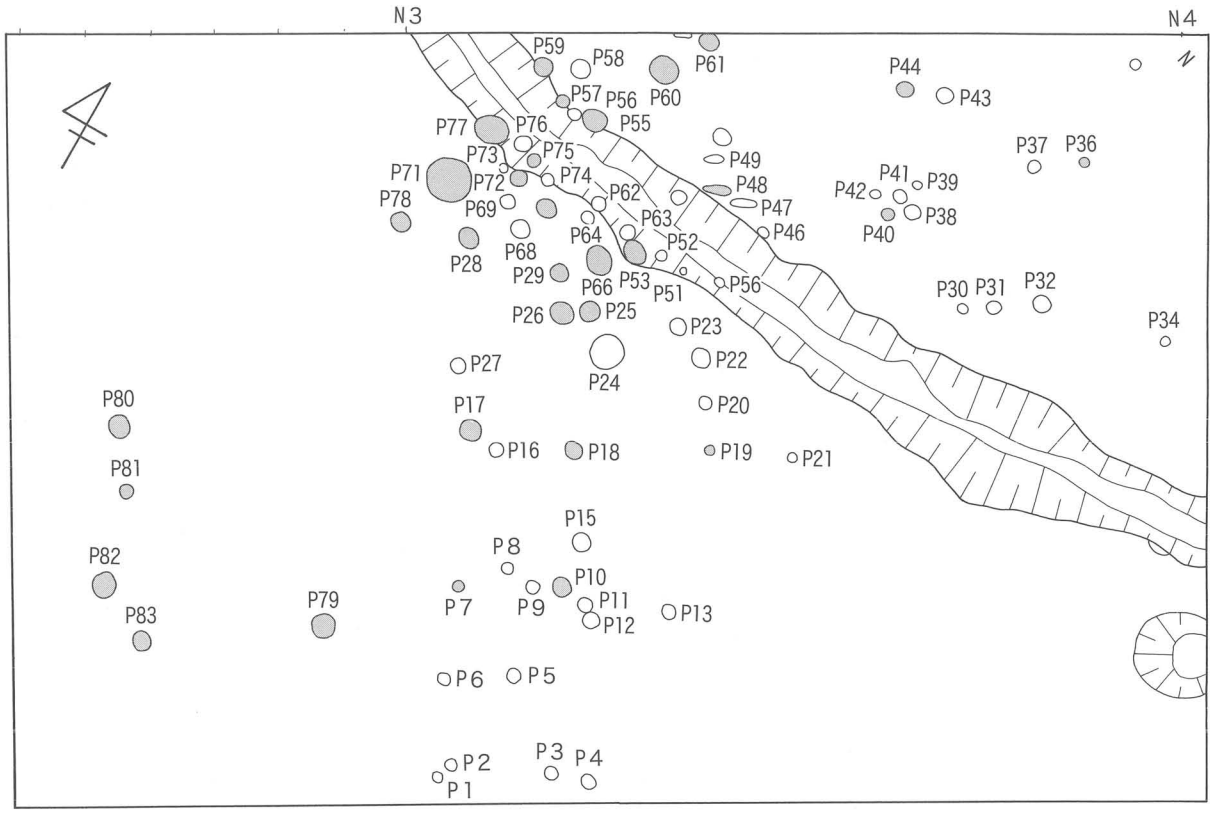
第３層からも多数のピットも検出されているが、主として北西部に多く、南東部には比較的に少ないし、かつ浅いものが多い。

ピットが集中する北西隅に或いは何らかの建造物が構築されていたのかも知れない。

10. 集石　Ｎ３調査区から検出された集石は、長径2.5m、短径約２mの範囲にこぶし大から大きいものは人頭大のものまでの礫を集石したもので、その間に多数の土器が混在していた。集石の天場はほぼ平坦であったが、下場は深いところで約40cmに達している。

全体的に見た場合は、楕円形を呈しているようであるが、周囲は必ずしも規則的でなく、小石が散在する有様であった。

従って集石は、意図的に形造られたものであるとは考えられない。

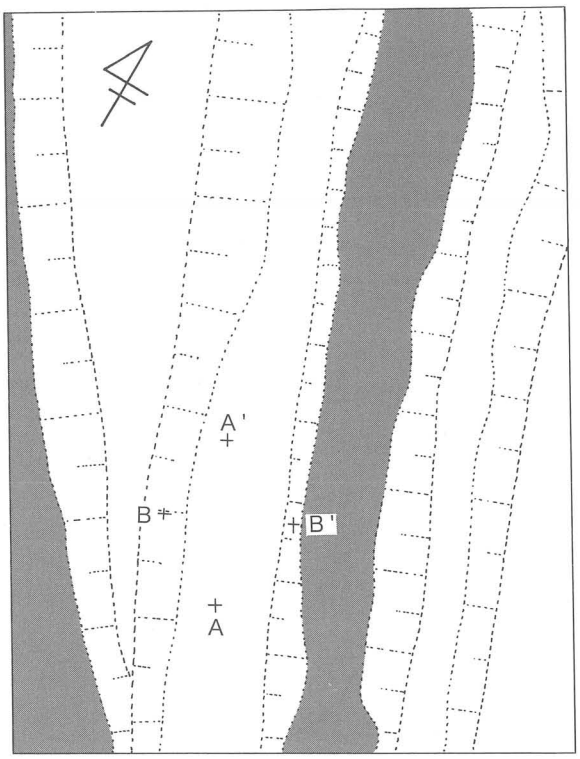


第21図　Ｎ２区第３層平面図

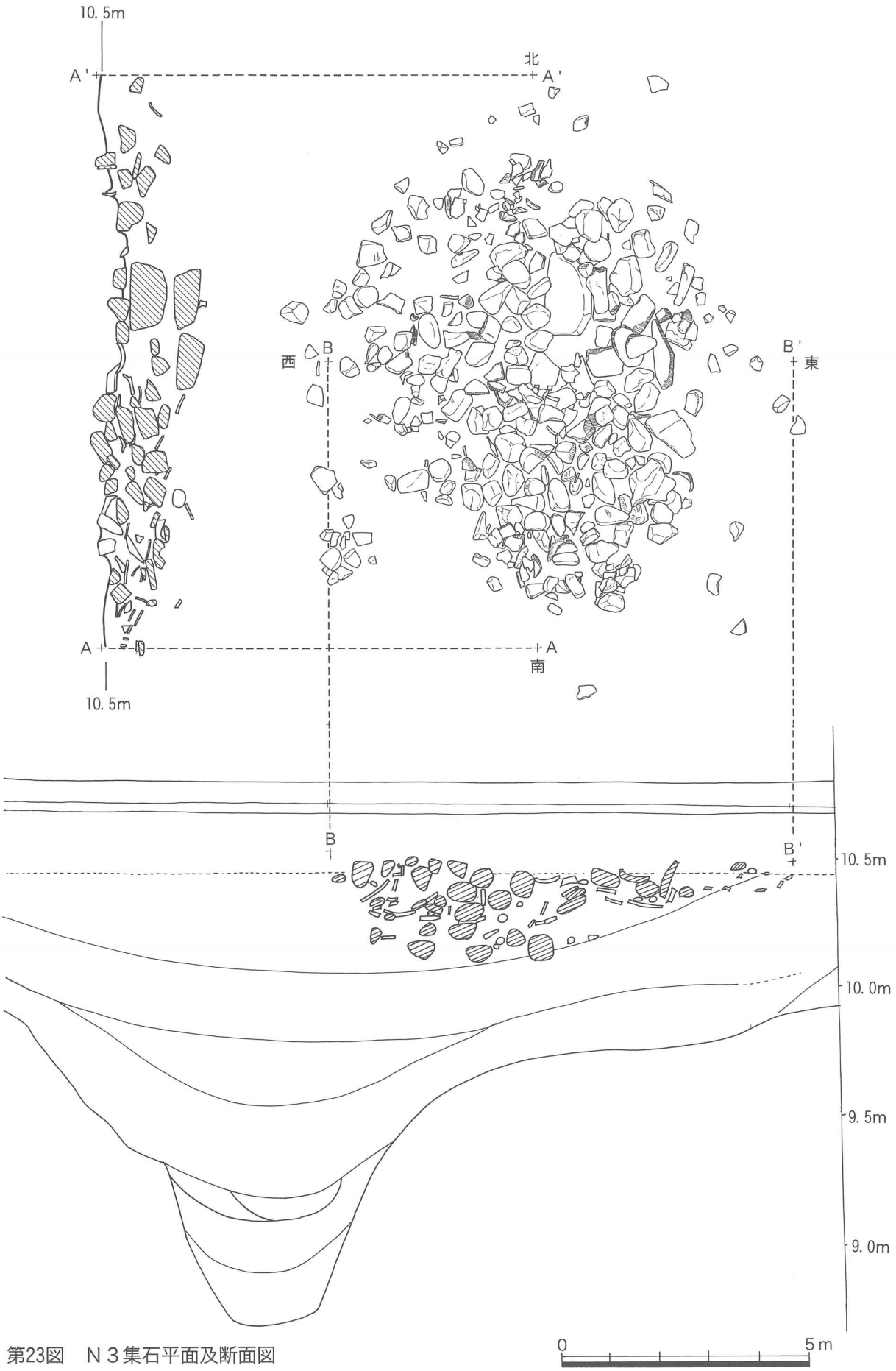
表土から集石の天場までは約30cmで、しかもＮ３ＳＤ－１の溝が埋没した直上に形成されていることにも注目しなければならない。集石下底部には掘方は認められないことなどを勘案すると、集石はおそらく耕作中に鍬先にかかった土器や小石を一か所に集めたものであろうと思われる。

この集石から出土した土器は6291点、石器および剥片は430点を越えている。

土器は殆どが細片で、ちなみに底部475点のうち、直径の計測が不可能なほどの細片が200点近くもあり、４分の１程度の破片が108点、ほぼ完形に近いものは僅か33点に過ぎないことも、これらの土器が耕作等の要因によって砕かれたものであることを物語っている。



第22図　Ｎ３集石位置図



第23図　Ｎ３集石平面及断面図

表１　第一調査区　Ｎ４・第二層ピット計測値（単位cm）

No	直　径	深　さ
1	28.0	4.2
2	22.1	5.9
3	16.0	4.9
4	114.6	30.4
5	40.8	7.2
6	29.8	10.5
7	110.7	48.0
10	19.2	6.2
13	19.4	4.6
14	26.8	3.9
15	39.4	19.1
16	21.2	4.7
17	15.7	2.2
18	46.5	14.1
19	19.0	2.6
20	24.8	22.1
21	28.9	4.7
22	22.0	3.1
23	24.9	4.2
32	25.1	4.7
33	20.1	2.2
34	32.1	21.7
35	24.6	24.5
36		
37	29.4	22.6
38		
39		
40	28.5	18.1

No	直　径	深　さ
41	27.1	20.8
42	33.0	23.2
43	24.5	18.7
50	28.1	27.6
53	35.6	14.1
59	23.0	12.1
61	29.0	21.4
62	152.2×95.0	46.2
67	25.0	18.8
68	24.2	15.2
69	21.6	16.8
70	42.8	16.8
72	42.8	16.8
73	39.0	21.2
74	219.8	72.0
75	21.0	24.2
76	19.1	9.3
77	14.8	7.8
78	54.8	19.7
81	22.5	4.8
82	64.5	11.9
83	22.6	7.9
84	25.2	8.3
85	11.6	14.0
86	17.1	7.3
87	17.9	3.2
88	11.6	4.1
89	19.0	27.3

No	直　径	深　さ
90	25.5	31.7
91	12.2	21.0
92	16.8	6.0
93	18.5	10.0
94	16.3	9.0
95	32.0	10.0
96	259.1	16.6
97	23.1	25.4
99	17.1	14.0
100	34.2	16.1
101	96.9(100含む)×27.4	14.3
102	24.6	14.1
103	63.6	12.0
104	17.6	12.8
105	19.6	8.2
106	14.5	4.6
108	24.2	29.8
109	16.1	2.3
110	22.1	29.2
111	32.5	23.1
112	25.5	25.1
113	32.8	20.4
114	13.8	3.8
115	22.6	11.9
116	30.1	23.4
118	32.2	24.1

表２　第一調査区　Ｎ４・第三層ピット計測値（単位cm）

No	直　径	深　さ
1	17.0	10.8
2	14.0	9.0
3	17.3	27.1
4	15.0	10.9
5	18.2	24.5
6	18.0	10.1
7	17.5	23.0
8	16.0	9.0
9	20.8	7.8
10	24.5	24.5
11	22.6	9.8
12	21.0	8.3
13	24.0	16.5
14	14.0	6.7
15	18.8	13.7
16	13.2	7.2
17	24.5	22.2
18	19.7	30.0
19	13.0	25.0
20	17.0	2.7
21	13.0	6.0
22	30.7	6.7
23	21.8	5.9
24	41.2	17.0
25	21.3	23.0
26	20.5	40.9

No	直　径	深　さ
27	16.2	6.1
28	25.8	36.9
29	18.2	26.0
30	12.2	3.5
31	17.3	5.4
32	22.6	4.5
33	9.0	16.6
34	11.2	7.4
35	11.4	7.2
36	13.9	22.6
37	17.2	9.4
38	16.8	16.7
39	14.3	9.3
40	18.0	24.7
41	21.6	8.0
42	21.7	10.7
43	21.5	7.3
44	21.5	29.0
45	8.5	8.3
46	15.6	9.2
47	27.0	15.4
48-1	18.2	15.7
48-2	19.1	26.8
49	26.2	10.9
50	16.0	——
51	17.0	——

No	直　径	深　さ
52	14.5	——
53	38.0	31.2
54	15.0	——
55	31.5	20.5
56	13.5	——
57	16.8	24.4
58	27.3	12.0
59	——	30.1
60	34.7	22.3
61	20.5	24.4
62	20.2	——
63	20.0	8.4
64	25.0	19.1
65	——	30.8
66	24.2	29.7
67	26.5	12.7
68	24.5	6.0
69	16.8	19.1
70	19.6	35.7
71	——	25.8
72	24.0	25.9
73	22.7	19.9
74	15.5	10.0
75	19.2	31.3
76	18.1	——
77	——	27.0

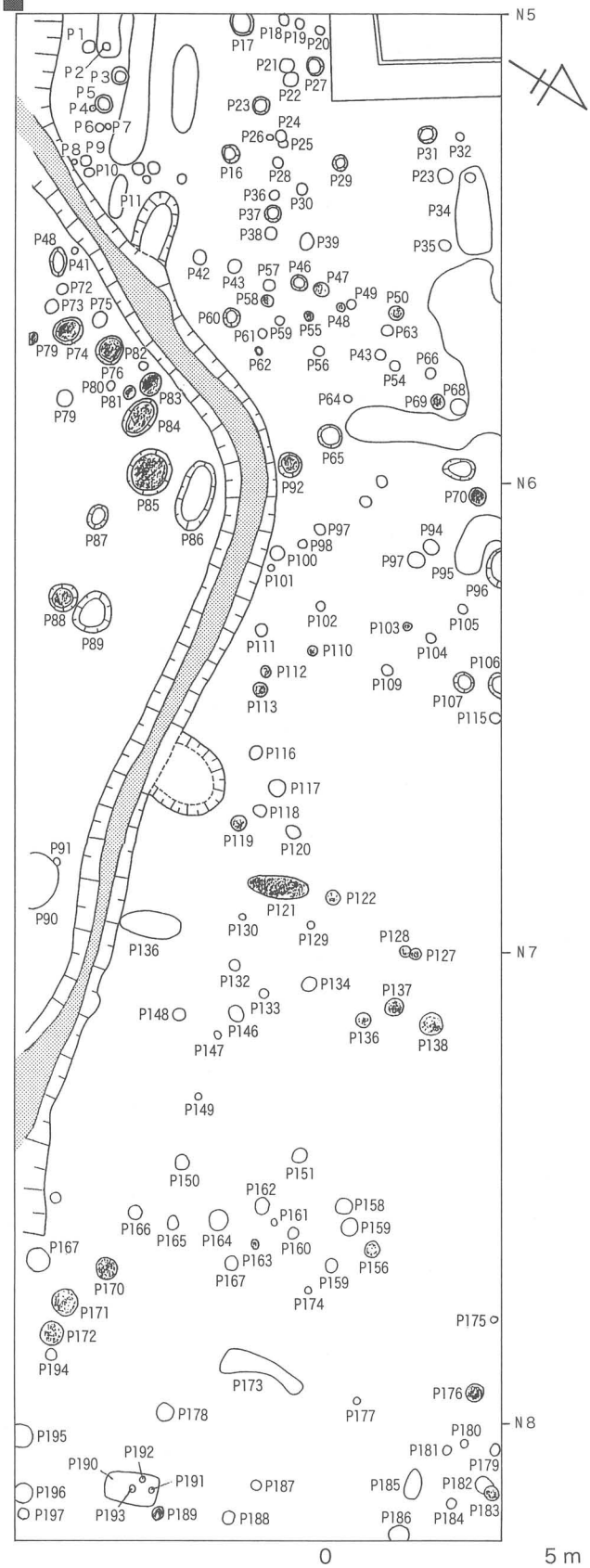
表３　第二調査区　ピット計測値（単位cm）

No	直　径	深　さ
1	22	
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16	42	
43	35	
44	15	
45	18	
46	34	
47	39	
48	26	
49	18	
50	31	
51	16	
52	25	
53	16	
54	18	
55	27	
56	19	
57	31	
58	31	
59	20	
60	42	
61	27	
62	20	
63	14	
64	20	
65	43	
66	25	
67	28	
68	30	
69	70 (17)	
70	59	
71	29	
72	26	
73	22	
74	59	
75	34	
76	59	
77	49	12
78	10	
79	33	
80	17	
81	22	
82	12	
83	70 (55)	23
84	100 (80)	21

No	直　径	深　さ
85	100	
86	175 (94)	17
87	69 (56)	18
88	85 (60)	26
89	94 (71)	17
90	125 (67)	11
91	18	
92	39	
93	23	
94	41	
95	193 (97)	11
96	117 (37)	6
97	27	
98	22	
99	15	
100	31	
101	32 (18)	5
102	26	
103	30	
104	21	
105	22	
106	55 (43)	9
107	41	
108	24	
109	18	
110	31	
111	48	
112	28	
113	43	
114	37	
115	27	
116	37	
117	33	
118	32	
119	41	
120	30 (22)	8
121	138 (60)	37
122	24	
123	33	
124	20	
125	29	
126	120 (28)	17
127	20	
128	18	
129	23	
130	20	
131	140 (60)	16
132	20	
133	27	
134	26 (20)	18
135	32	
136	30	
137	45 (29)	
138	42	
139	160 (68)	20
140	22	
141	25	
142	23	

No	直　径	深　さ
143	15	
144	30 (21)	14
145	25	
146	21	
147	19	
148	27	
149	18	
150	29	
151	26	
152	25	
153	32	
154	97 (51)	10
155	36	
156	23	
157	32	
158	25	
159	27	
160	24	
161	17	
162	39 (26)	6
163	29	
164	30	
165	20	
166	26	
167	31	
168	25	
169	46	
170	64	
171	56	
172	46	
173	175 (46)	11
174	18 (13)	5
175	17	
176	35	
177	19	
178	37	
179	25	
180	19	
181	13	
182	98 (48)	10
183	26	
184	18	
185	64 (40)	11
186	39 (24)	6
187	14	
188	25	
189	15	
190	122 (78)	7
191	7	
192	10	
193	10	
194	31 (26)	9
195	61 (31)	7
196	37	
197	22	

第２節　第二調査区



第24図　第二調査区平面図

第二調査区は、ポイントＮ５からＮ８の30ｍ、幅10ｍの300㎡を発掘した。

調査区は水田であったが、かつてはみかん畑であった時期があり、攪乱は遺構面に達していたものと考えられる。

現水田面の標高は10.78ｍで、耕作土は10㎝程度と比較的浅く、その下に床土がある。床土の下は浅黄色の粘質土で遺物包含層となる。遺構のベースとなる地山は、黄褐色の粘質土であるが、Ｎ６ポイントあたりでは砂礫層が露出している所もある。

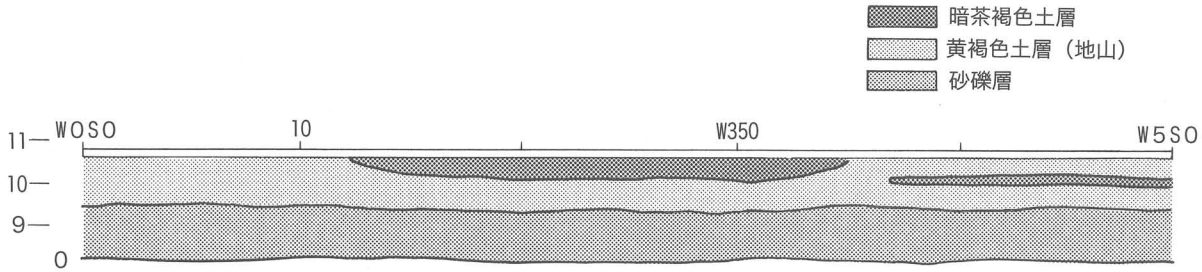
溝Ｎ６ＳＤ－１はＮ６Ａ調査区の南西隅からゆるやかにカーブしてＮ７ポイントの東３ｍに達している。その間Ｎ６ポイントあたりでは４ｍ程北に張り出している。

幅は最大１ｍ前後で、最も狭いところでも80㎝程度で、ほぼ同じ幅であるが、底は砂礫層に達している。

この溝も２箇所でピットを切っているところからすると、周辺に多数残されているピット群の後から出来たものとしなければならない。なおこの溝は、Ｎ４ＳＤ－１に接続するものである。

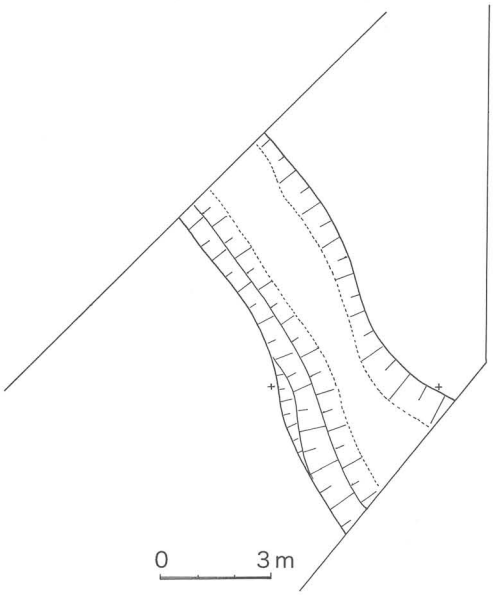
第二調査区から検出されたピットのデーターは表３のとおりで、そのうち溝の南側から検出されたピットはいずれも砂礫層に達しているもので、後世の攪乱による可能性がある。また北西隅の方形の遺構は近代の貯水槽の痕跡である。

第３節　第三調査区



第25図　第三調査区Ｗ０Ｓ０～Ｗ５Ｓ０断面図

第三調査区はＷ１Ｓ－１からＷ５Ｓ１調査区までの５区画、Ｗ４Ｓ－２、Ｗ５Ｓ－３、Ｗ６Ｓ－３の４区画788.5㎡を発掘した。検出された遺構としては、Ｗ６Ｓ－３とＷ５Ｓ－３で溝１条が出土した。



第26図　第三調査区平面図

溝　Ｗ５ＳＤ－１　幅6.5m、深さ90㎝で、溝の底は緩いＵ字形を呈する。黄褐色粘質土の地山を切り込んでおり、調査区の関係で延長20m程度の調査に止めた。

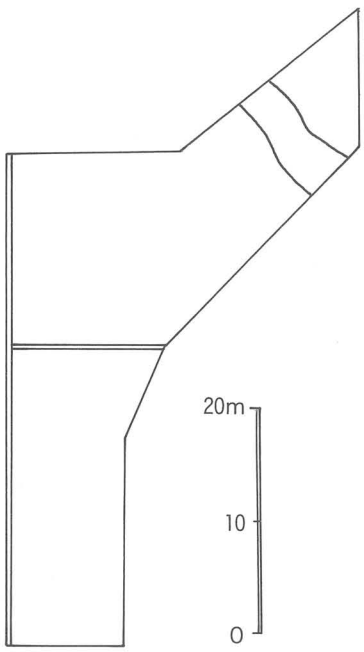
第三調査区における地質の状況については先に報告したところであるが、25図に見るように、暗茶褐色土層の存在である。

この暗茶褐色土層は、Ｗ１Ｓ０から２ｍあたりからすき床土層の下に表れ、次第に深くなり、Ｗ３Ｓ０ではすき床層からの深さ40㎝をかぞえ、次第に浅くなり、Ｗ３Ｓ０から６ｍ付近で消滅する。すなわち延長34mに渉ってレンズ状の堆積層を形成している。

この土層中からは500点を越える土器片が検出されているが、いずれも摩滅が甚だしいものばかりであった。

おそらく当時浅いくぼみがあったその痕跡と思われる。

またほぼ全域にわたってすき床層の下には包含層がなく茶褐色の粘質土層が堆積していたことからすると、相当な地下げが行われた可能性もある。



第27図　Ｗ５ＳＤ－１平・断面図

第Ⅴ章　遺物（土器等）

■土器分類基準

出土品の整理・分類は、以下のような手順で実施した。

1　水洗

2　分類……分類表に従って素分類を行った。

総　数／出土品の総数
土器片／壺、甕、底以外の土器片
口縁部／壺、甕の区分はしないで一括している
底　部／壺、甕を問わず、底部のすべて
体　部／土器の体部で施文があるもの、または器形の復元が可能なもの
その他／蓋形土器、紡錘車等壺、甕以外の器形または不明なもの
石　調／剥片で調整痕のあるもの
石　器／石器またはその一部
その他／礫、凹石等

以上の分類は第一次段階の素分類で、次の段階の分類、整理でこの数値は変化することもある。この段階ではどの程度の出土品があったかその傾向を知るための資料である。

＜甕形土器口縁部形態による細分＞

比較的その特徴がつかみやすい甕形土器の口縁部、および施文によって細分をおこなった。

口縁部の形態を８タイプ（AからG、その他）に分類し、さらに施文の状態によって３タイプ（１から３）に細分した。

１・無文
２・５条までの沈線または、刺突文等のあるもの
３・５条以上の沈線または、刺突文等のあるもの

＜底部の細分＞

土器底部についての細分は、底の保存状態によって３タイプ（A・B・C）に分類した。

A・ほぼ全形を保っているもの
B・２分の１程度のもの
C・４分の１程度のもの

次に平底か上げ底かといった底の状態によって３タイプに分類した。

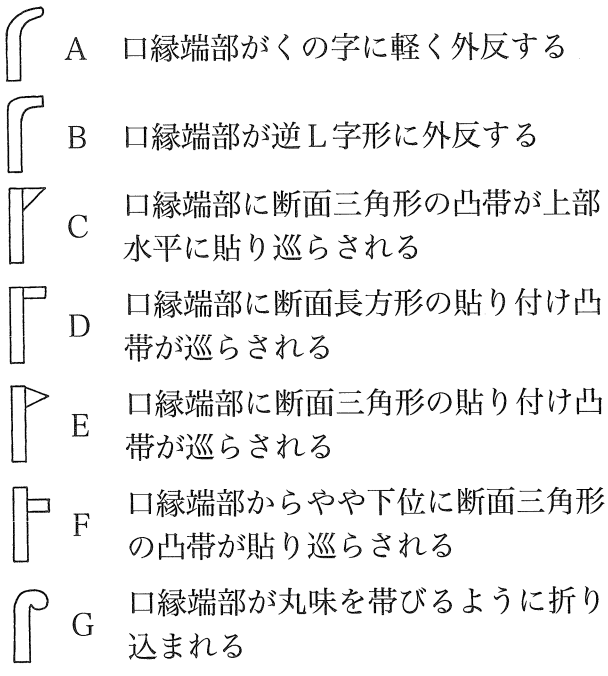
１・平底
２・上げ底
３・穿孔のあるもの

次に直径によって４タイプに細分した。

１・直径５cmまでのもの
２・直径10cmまでのもの
３・直径15cmまでのもの
４・直径15cm以上のもの

壺形土器については、出来るだけ実測し、実測が不可能なものについては、断面を表示している。

甕形土器口縁部分類基準



第１節
第一調査区

第一調査区Ｎ１区出土土器

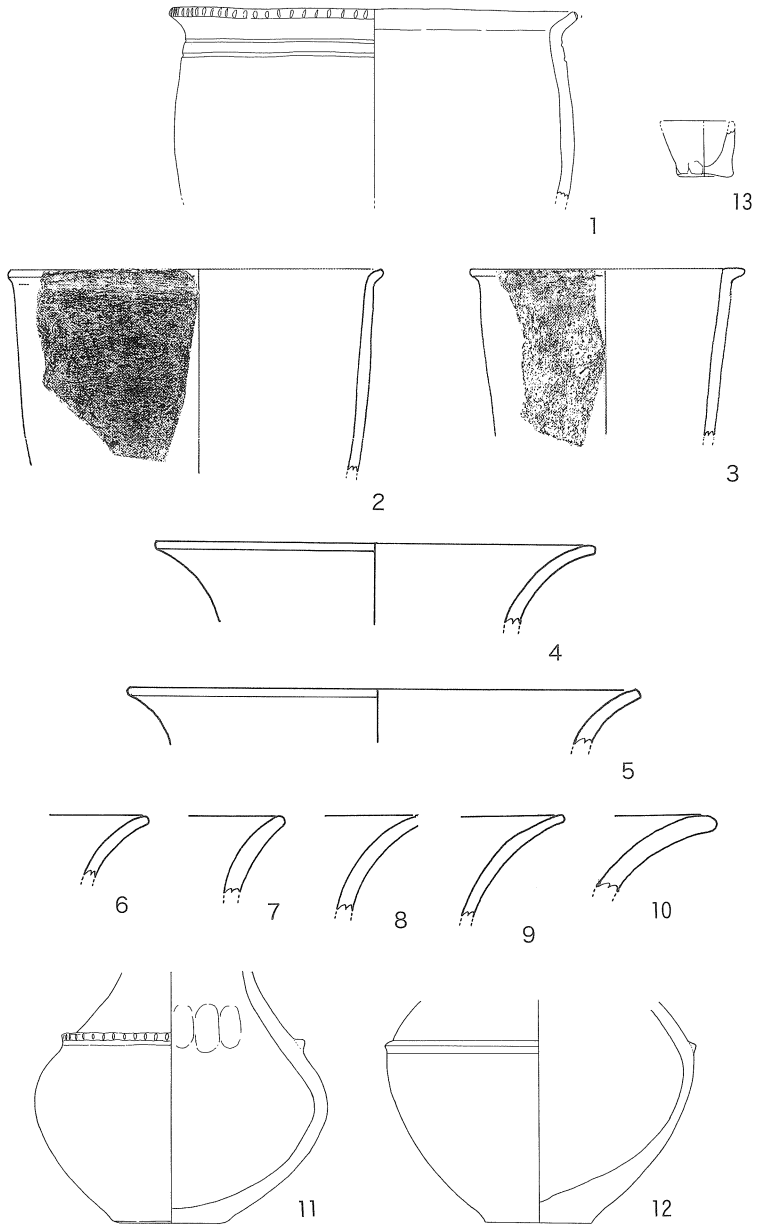
Ｎ１調査区からは総数3945点の土器、石器等が出土している。（表４）

甕形土器

分類基準に従って細分した甕形土器は、第４表の通りであるが、Ａタイプの１、無文土器が最も多く、次にＣの１、次いでＥタイプの無文土器が卓越している。沈線が施文されたものでも、５条以下のものに限られ。それ以上のものは認められない。

壺形土器

口縁端部が朝顔状に大きく開くタイプが第28図の４で、比較的器壁は薄手のものが注目される。口頸部は欠けているが、第28図11・12はいずれも胴部のやや上よりに張り付け凸帯が入っている。



第28図　Ｎ１調査区出土遺物（縮尺１/４）

＜表４＞Ｎ１区出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	3,945	3,238	52	79	12	145	59	360
ＳＤ－１	132	83	12	12		13	7	5

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
14	1		2	1		13	1		1			6	2											41
15			3			14			1			8												41
0.37			0.07			0.34			0.02			0.20												

■底部分類表

A												B												C										
1				2				3				1				2				3				1				2				3			
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
												3	6			1								4	34	1										49
0												10								39																49
0												0.2								0.8																

11は断面三角形の凸帯で、12は凸帯に刻み目が入っているが、施文具は貝を用いている。何れも表面は摩滅が甚だしくて、調整痕を見ることは出来ない状態である。

第一調査区Ｎ２区出土土器

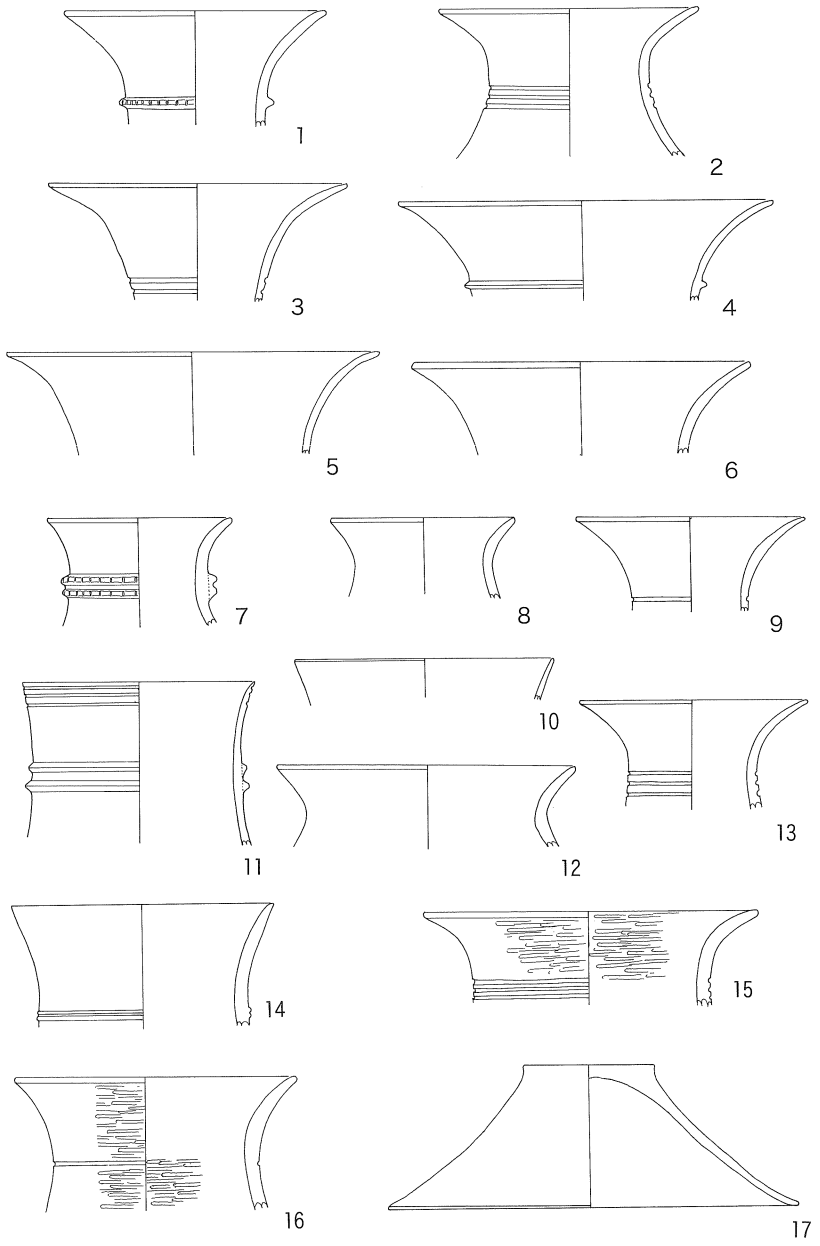
Ｎ２調査区は、ポイント10mから20mの間約100㎡である。

この調査区の遺物は遺構上部を覆っている包含層から出土した遺物と、Ｎ２ＳＤ－１、Ｎ２ＳＤ－２、Ｎ２ＳＤ－３、Ｎ２ＳＤ－４の溝から検出された遺物である。

遺構上部包含層の遺物は、表５の通りで、出土した土器と石器等の遺物の総数は8223点である。

甕形土器

分類表５の通りで、Ａタイプ１の無文土器及び沈線５条以下のものが圧倒的に多く、次いでＥタイプの沈線５条から10条までの土器が多い。



第29図　Ｎ２調査区出土遺物（縮尺１/４）

＜表５＞Ｎ２区出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	8,223	6,360	299	269		415	154	726

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
20	6		1			2						1	2			1		1						34
26			1			2						3			1			1						34
0.76			0.03			0.06						0.09			0.03			0.03						

■底部分類表

A												B												C										
1				2				3				1				2				3				1				2				3			
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
1	10	1						1				5	13			1								7	46	1										86
13												19												54												86
0.15												0.22												0.63												

壺形土器

口縁部でみると、29図１・３に見るように頸部の細いところの倍かそれ以上の広がりを見せる口縁のものを仮にＡタイプとすると、頸部には沈線が３条から５条程度施文されるものと、張り付け凸帯を巡らすものがある。29図１は凸帯に刻み目が施されている、器壁は比較的薄手のものが多い。

同じく口縁部が大きく外反するが、頸部の直径に対して、２倍以下のもので、概して頸部が短く、口縁端部は細くなっている。

頸部の施文は５条以内の沈線か、凸帯文が巡らされる。このタイプは仮にＢタイプとしておきたい。

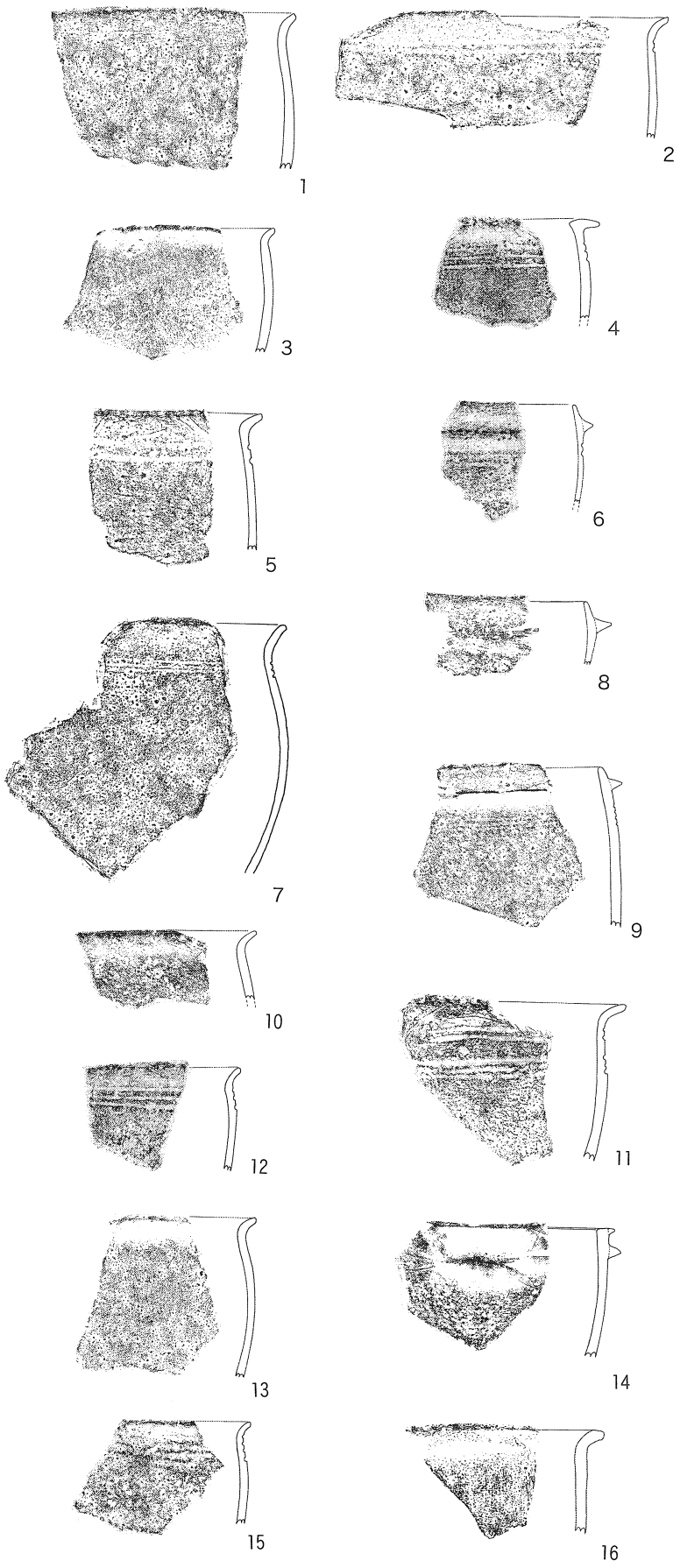
Ｃタイプは口縁部が軽く短く外反するもので、殆ど頸部には文様がみられない。(29図８・12)

Ｄタイプは口頸部がほぼ直線的に直立するもので、29図11は軽く外反する口縁部に３条の沈線が入り、かつ頸部には２条の凸帯が巡らされている、器壁は薄く、胎土にも概して砂粒の混入が少なく、色調は灰白色を呈している。

29図17は蓋形土器で、口径22cm、深さ7.5cmを計る。

底　部

総数86点を計測している。殆どが平底で底部の直径が６cmから10cmまでのものが圧倒的に多くみられる。Ａタイプで13点、Ｂタイプが19点、Ｃタイプが54点となっている。



第30図　Ｎ２調査区出土遺物（縮尺１/４）

Ｎ２ＳＤ－１出土土器

出土した遺物は表６の通りで、総数は7273点に及んでいる。

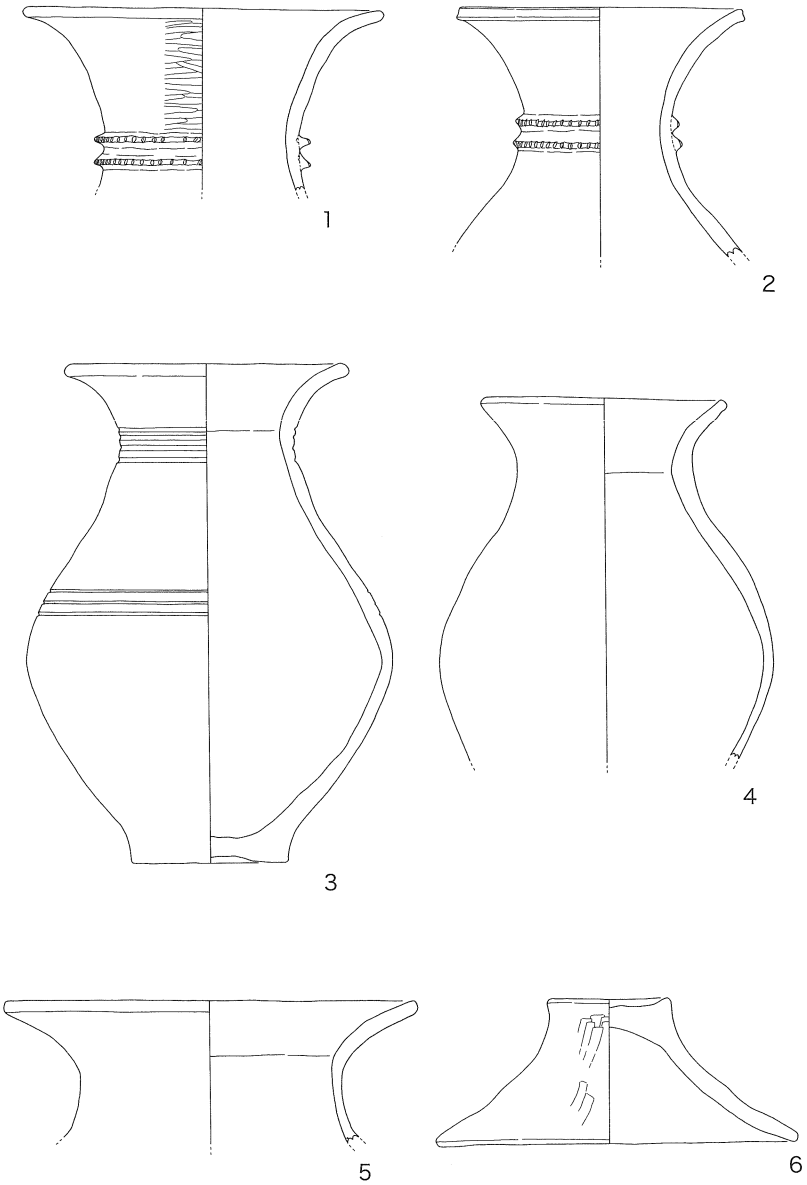
甕形土器

表６に見るように、Ａタイプの１及び２が全体の75％を占めている。

他Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆの各タイプがほぼ10％に満たない割合で出土している。

さらに分析すると、各タイプ共に、施文は平行沈線文が５条以下のものが99％を占め、口縁端部に刻み目文を施すものも多い。

32図３は口縁端部が軽く外反するＡタイプのものであるが、口縁端に刻み目を施すだけでなく、口縁近くに２条の凸帯が巡らされ、それにも刻み目がみられる、しかし凸帯に施される刻み目は口縁部とは趣を異にし、やや粗く、指頭かまたは棒状のものを押し付けたようになっている。



第31図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

＜表６＞Ｎ２ＳＤ－１出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	7,273	6,016	485	373		160	158	81

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
120	62		1	12		6	6	1	6	5		18			1	4	1							243
182			13			13			11			18			6									243
0.75			0.05			0.05			0.05			0.07			0.02									

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
5	22	1			5				3			3	28	3			2							2	186	8			3				3			274
36												36												202												274
0.13												0.13												0.74												

沈線文は８条で、分類基準からするとＡの３に入る。

34図４の甕は、口縁端部にやや傾斜する縁を張り付けたもので、刻み目が施されている。施文11条の平行沈線文が篦状工具によって施文されている。

器面の調整は、拓本によっても見られるように、全体的に摩滅したものが多く、調整痕はつかみ難いが、32図１・４拓本の33図10・12・13に見るように、部分的にはけ目調整の痕跡を見ることが出来る。

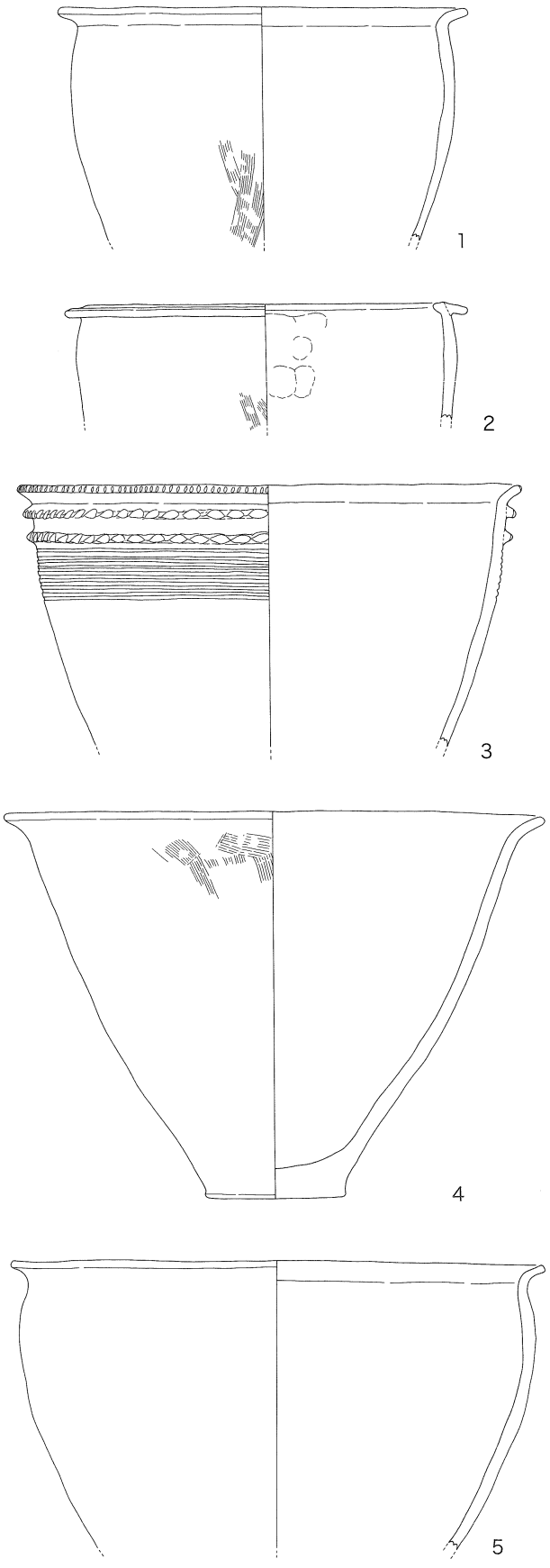
34図５は15.3cm、口径15.4cmの小形土器で、胴部が大きく張り出し、19.2cmを計る。軽く外反する口縁部に３個の小さな孔が明けられている。

32図４は浅鉢形土器である。口径38cmに対して、高さ22.8cmを計る。底部は小さく、8.5cmの平底である。

壺形土器

31図３と４は、先にＢタイプとしたもので、３では頸部の最もしまった部分の直径が９cmに対して口縁部の直径は15cmで、口縁部は軽く外反する。胴部の最もふくらむ位置が中央よりやや下方にあって底部はやや上げ底になっている。

施文は頸部に４条、胴部に３条の平行沈線文が施される。４も同じタイプであるが、施文は認められない。口縁部だけであるが、５も同じタイプと思われる。



第32図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

31図１・２は頸部の直径に対して、口縁部の直径がほぼ倍の広がりをみせており、Ａタイプに属する。

それだけに長い頸部には凸帯が２条巡らされ刻み目文が施される。

２の口縁部はやや角ばっており、広がる傾向にある。

器面の調整は１で見ると、篦磨きされている。

蓋形土器　31図６

口径20cm、深さ7.6cmで、つまみの部分はやや凹んでおり、直径6.8cmを計る。器面は篦磨きによる調整痕がみられる。

小形土器

壺形土器３個と浅鉢形手捏土器１点が出土している。

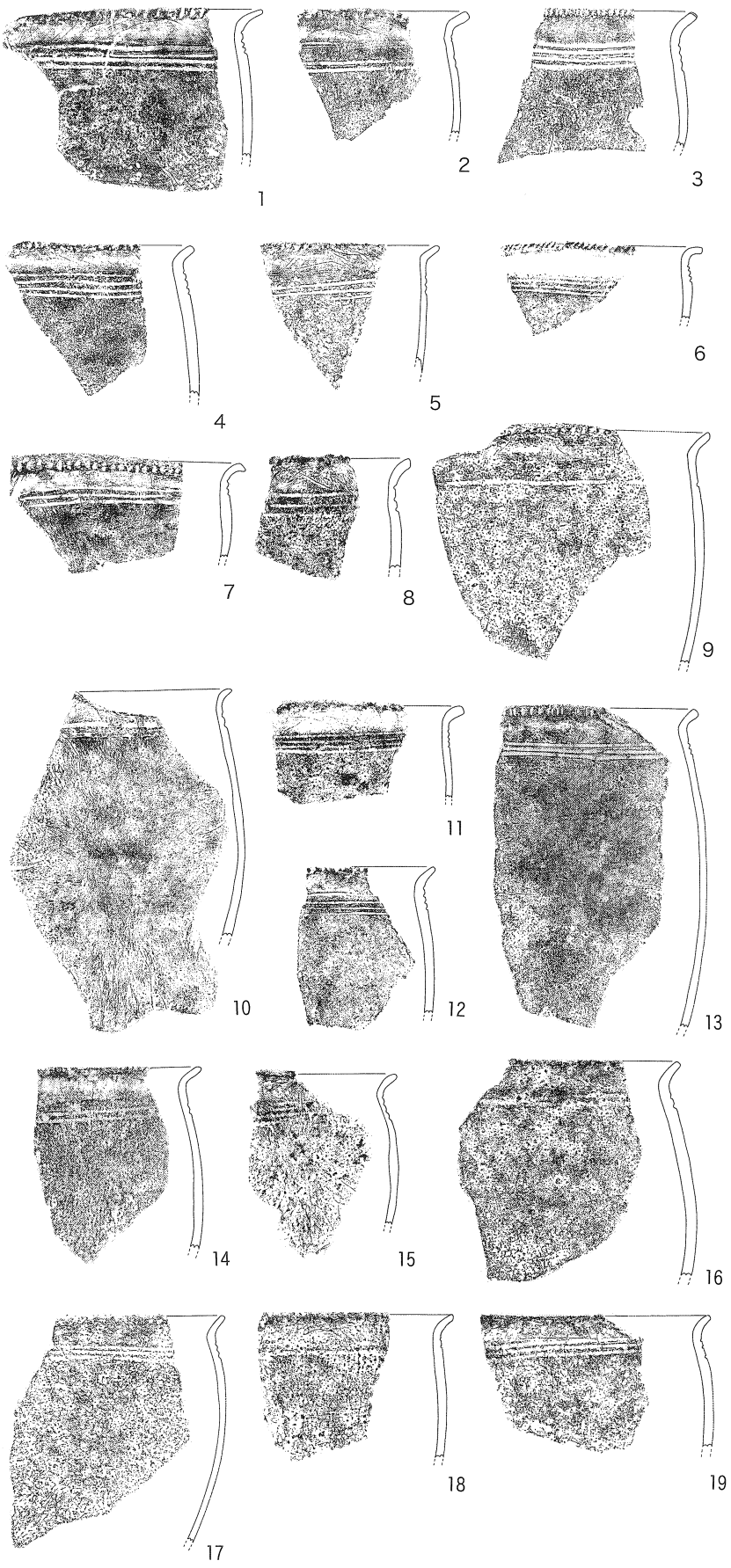
34図７は胴部の張りが強く、高さ7.5cmに対して、胴部の直径は８cmに達している。

強くしまった頸部からく字形に口縁部が張りだし、口径5.2cmを計る。

34図８は、胴部の張りは少なく、胴径６cmに対して高さ９cm、く字形に軽く外反する口縁部の直径は５cmを計測する。器面の調整は粗く、凹凸がみられる。

34図９は高さ６cmで、頸部と胴部下方に指頭痕がある、手捏土器である。

34図10は、高さ３cm、口径５cmのミニチュア土器で、手捏土器である。

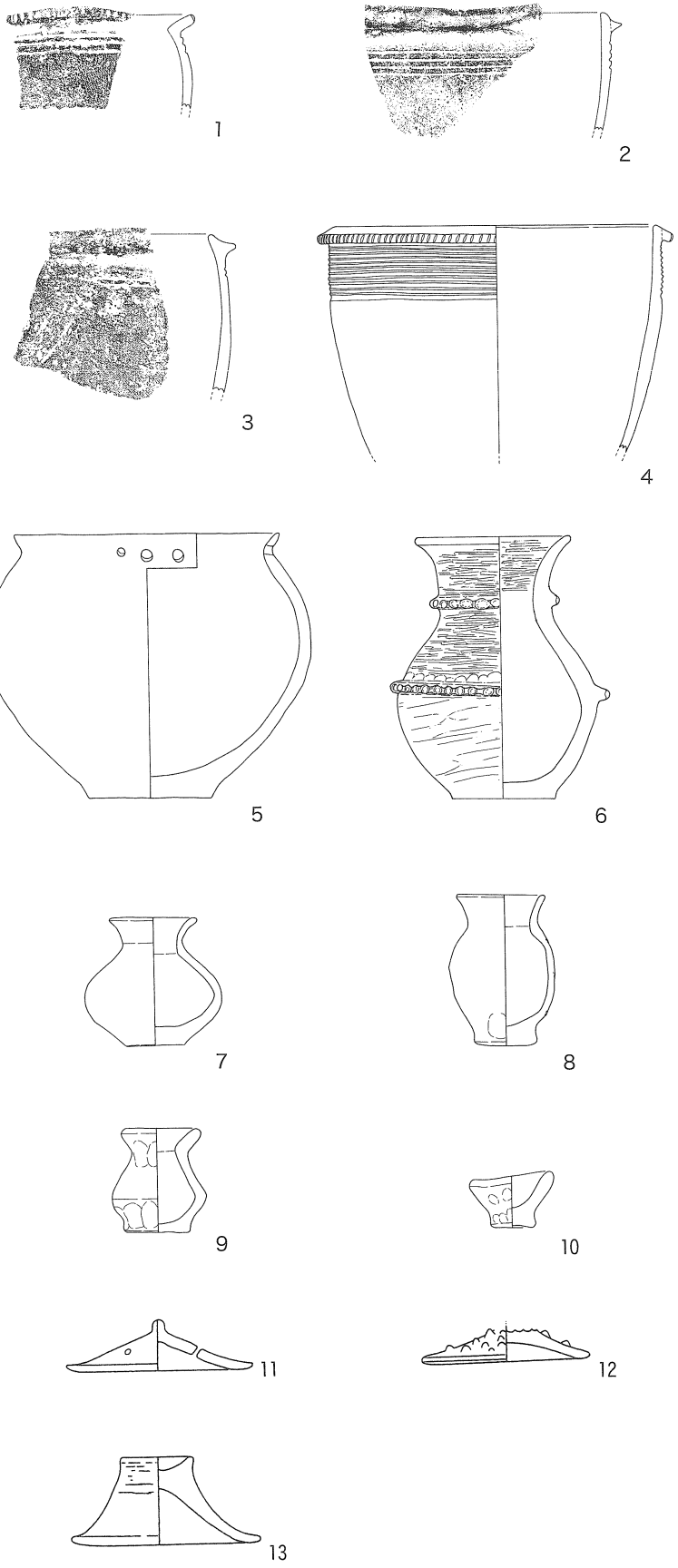


第33図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

底　部

計測した344点の内、平底が328点で圧倒的で、次いで上げ底10点、底部に穿孔のあるもの６点となっている。

平底のうち直径６cmから10cmまでのものが、236点、５cm未満10点、10cm以上が12点で、大部分が10cm未満ということになる。



第34図　Ｎ２ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

Ｎ２ＳＤ－２出土土器

出土した遺物は表７の通りで、総数は3320点である。

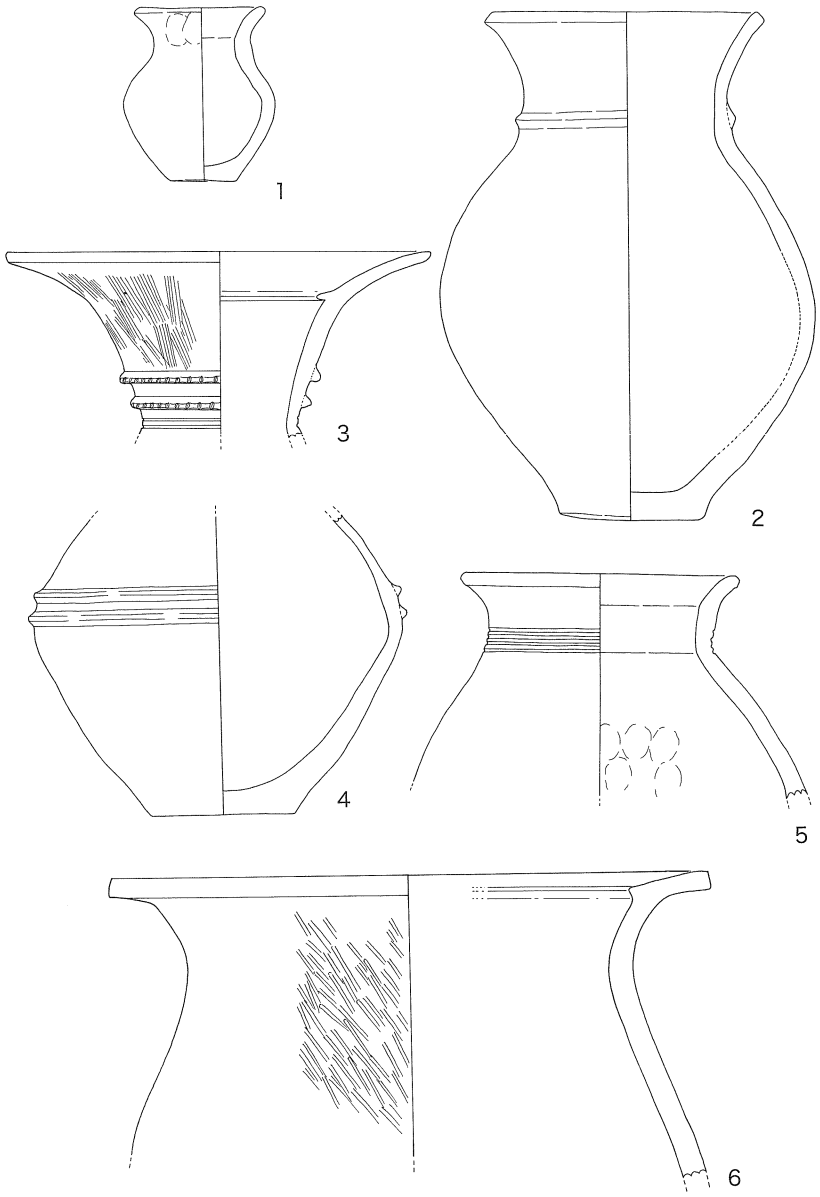
甕形土器

表７に見るように、計測した259点のうち、Ａタイプが115点で、そのうち１の無文土器が72点、平行沈線５条以内のものが39点で、Ａタイプが44％を占めている。次いでＥタイプが75点で、そのうち１・２が67点で90％に達する。次にＣタイプの38点、そのうち１・２が30点で80％を占める。

壺形土器

35図２は、高さ26cm、口径15cm、頸部に断面が三角形の貼り付け凸帯が巡らされている。それに対して、35図５は軽く外反する口縁部から頸部にかけては短く、頸部には平行沈線文４条が巡らされる。

35図４は肩から上部を欠いているが、算盤玉のような胴部に断面三角形の２条の貼り付け凸



第35図　Ｎ２ＳＤ－２溝出土遺物（縮尺１/４）

＜表７＞Ｎ２ＳＤ－２出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	3,320	2,770	173	146	22	21	19	169

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
72	39	4	3	11	1	15	15	8	2	6	5	39	28	8	1	2								259
115			15			38			13			75			3									259
0.44			0.06			0.15			0.05			0.29			0.01									

■底部分類表

A									B									C										
1				2				3					1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
6	44				4				3				39	4			1	6				3			1	210	21			2	2				1			347
57												53												237												347
0.16												0.15												0.68												

帯が巡る。

35図１は小形土器で高さ9.2cm、口径7.2cm、頸部に指頭による調整痕が認められる。胴部は中央よりやや下方で強く張り出している。

35図３の口頸部は頸部の太さに対して口縁部が大きくＡタイプに属する。口縁端は丸味を帯びているが、内部に凸帯が施されている。また頸部の凸帯は２条の貼り付け凸帯で、刻み目が施されている。さらに凸帯の下には平行沈線が巡らされているが、それ以下は欠損しているので、沈線が何条巡らされていたものかは明らかでない。頸部にはけ目による調整痕が認められる。

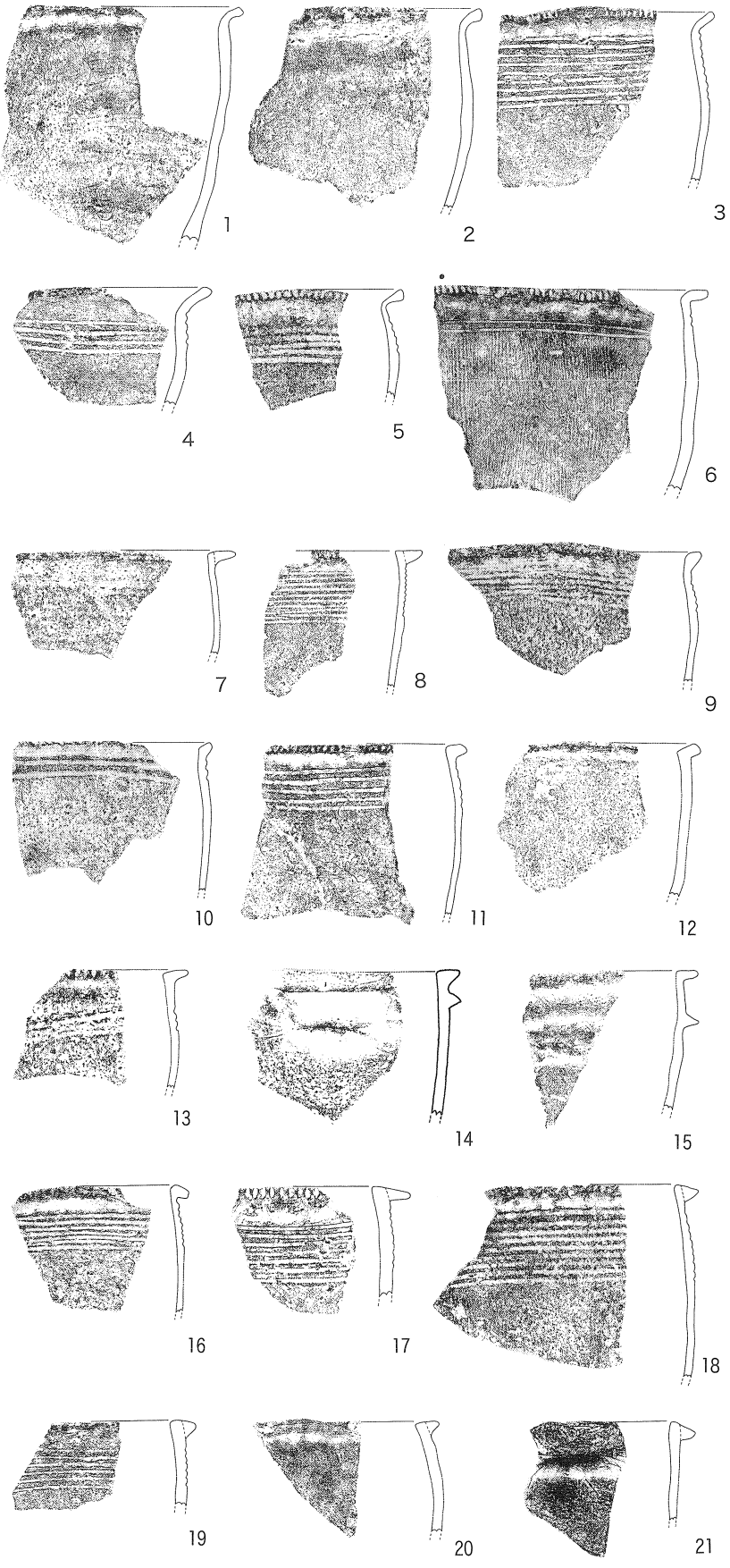
35図５は頸部だけであるが、５条の平行沈線文が施されている。

底　部

347点が計測されている。

そのうち平底が325点で全体の93％を占めている。底径は10cm以内が303点でこれも全体の87％を占める。

上げ底のものは15点、穿孔のあるもの７点で全体的には極めて少ない。



第36図　Ｎ２ＳＤ－２溝出土遺物（縮尺１/４）

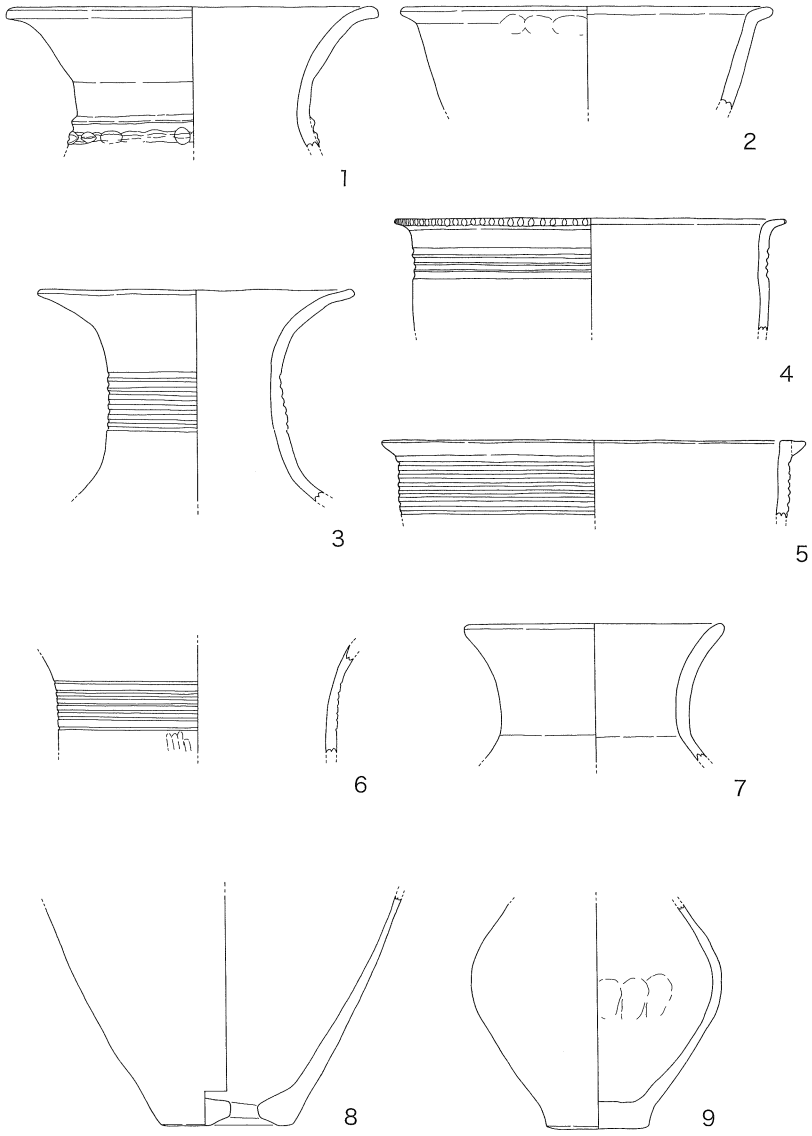
ＮＲＳＤ－３出土土器

ＮＲＳＤ－３の溝からは総数7,035点の土器・石器が出土している。

甕形土器

計測可能なものは94点であったが、そのうち口縁部が軽く外反するＡタイプが64点で、全体の68％を占め、次に口縁部に断面三角形の貼り付け凸帯を持つものが13％を占めている。その他Ｂ、Ｃ、Ｄの各タイプがそれぞれ５％程度で、Ａタイプが圧倒的に多い。また同じＡタイプにおいても、無文のものが50％を越えており、次に沈線５条以内が35％で、無文が優位である。

以上甕形土器においては、ＡからＥタイプまで器形器は多様な様相を見せるもの、無文で口縁部が軽く外反するタイプが全体の68％を占めていることは、この溝の性格の一端を物語るものといえよう。さらにその他のタイプの甕においても、沈線５



第37図　ＮＲＳＤ－３溝出土遺物（縮尺１/４）

＜表８＞ＮＲＳＤ－３出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	7,035	5,730	318	270		82	2	633

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
38	23	3		6		2	2	2	3	1	1	7	4	1								1		94
64			6			6			5			12										1		94
0.68			0.06			0.06			0.05			0.13										0.01		

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
6	10								2				4	1				2			3				79	1	1		2					1		112
18												10												84												112
0.16												0.09												0.75												

条以上のものが殆ど見られないことも、注目される。

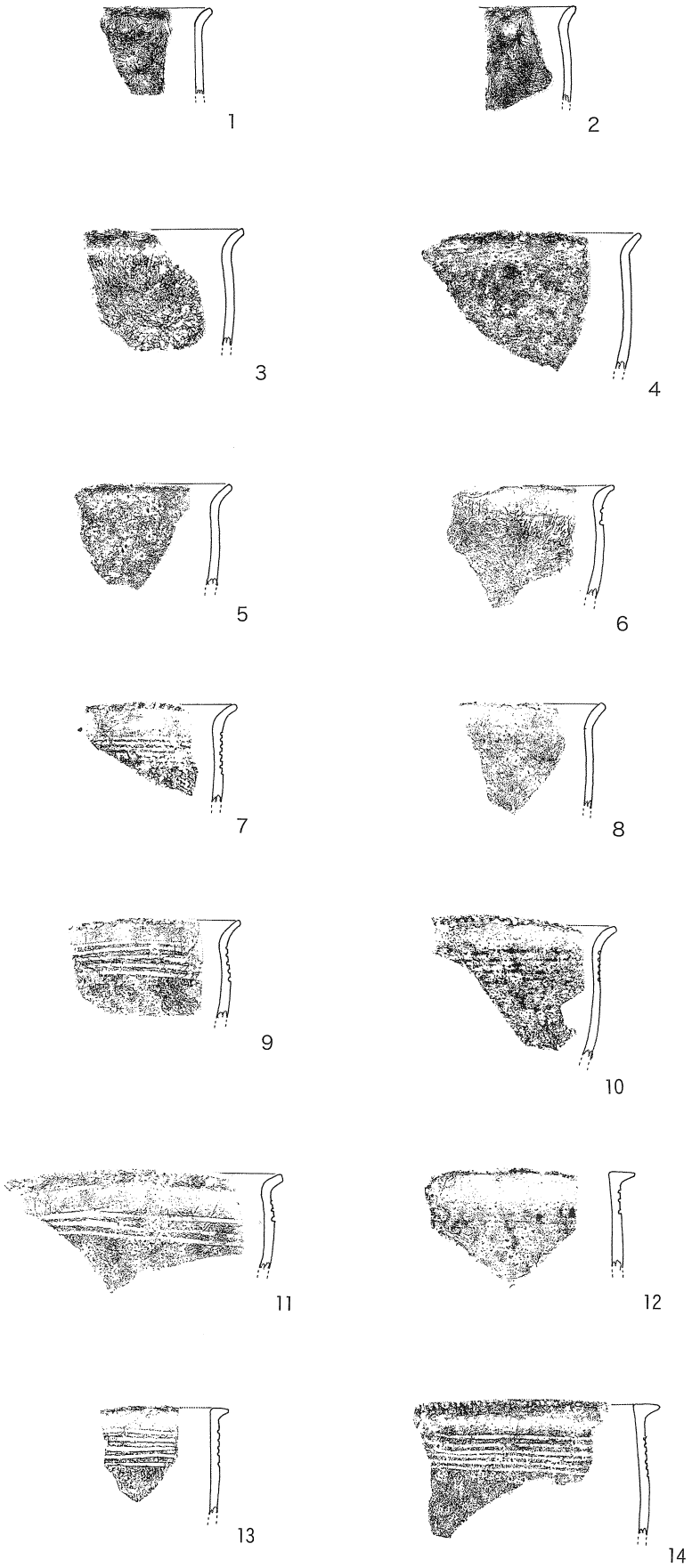
37図２は浅鉢形土器で、無文、口縁部はく字形に軽く外反している。37図４は分類基準でみるとＡ－２のタイプで、口縁部は軽く外反し、５条の平行沈線文が施文されるほか、口縁端部にも刻み目文が施文されている。37図５はＥ－３タイプで口縁端部に断面三角形の凸帯が貼り付けられ、８条の平行沈線文が施文されている。

壺形土器

37図１は頸部に凸帯が２条巡り、下段には刻み目が施される。37図３は１と比較すると頸部が筒形になって長く、７条の沈線文が施文される。口縁部も１と比較すると２が、大きく朝顔状に広がる。37図６の頸部もおそらく２と同じような口縁を持つものと思われる。それに対して37図７の口縁部はく字形に軽く外反し、頸部も短く微かな接合痕を残している。

37図９は壺形土器の胴部であるが、胴部の張りが比較的高くなっていることからすると、37図７のような口縁部をもつものと思われる。

37図８は甕形土器の底部であるが穿孔が施されている。



第38図　Ｎ２ＳＤ－３溝出土遺物（縮尺１/４）

Ｎ２ＳＤ－４出土土器

出土した土器片は1,038点であるが、殆どが細片である。

壺形土器

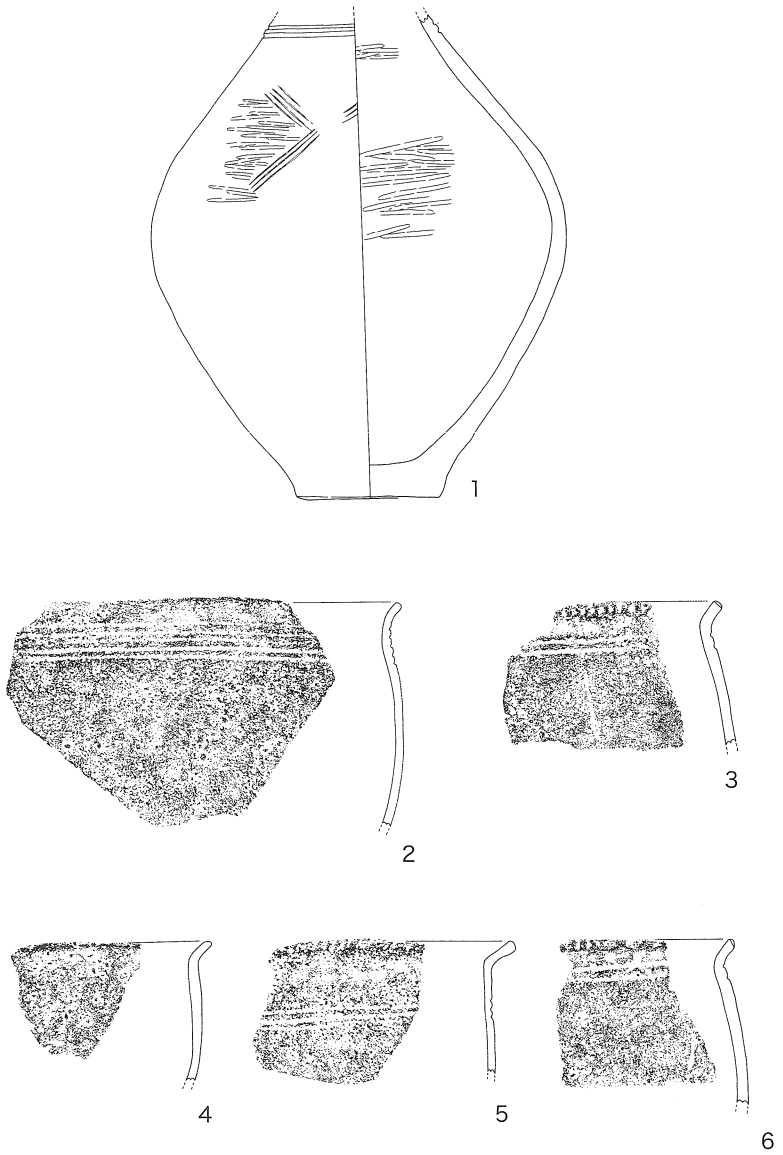
39図は口頸部を欠いているが、現存する高さは26cmで胴部は、ほぼ中央部の張りが強く、直径22cmを計る。

形の頸部近くに２条の沈線文が施されている。器面の調整は部分的ながらヘラ磨きの痕跡が認められる。

甕形土器

口縁部が軽く外反するＡタイプが80％を占めており、そのうち無文と沈線文５条以内が相半ばする。Ａ－２タイプには39図３・６のように口縁端部に刻み目文を施すものもある。

底部は残存率４分の１以下のものが殆どであるが、中でも直径10cm以内のものが圧倒的に多数を占める。



第39図　Ｎ２ＳＤ－４溝出土遺物（縮尺１/４）

＜表９＞Ｎ２ＳＤ－４出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	1,038	934		52		3		49

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
17	15		3	1			1						1		1	1								40
32			4			1						1			2									40
0.8			0.1			0.03						0.03			0.05									

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
	4	1											3												24	1	2									35
5												3												27												35
0.14												0.08												0.77												

Ｎ３調査区出土土器

Ｎ３の遺物は、Ｎ３ＳＤ－１の溝の上部の包含層及び、ピットの周辺から出土したものである。

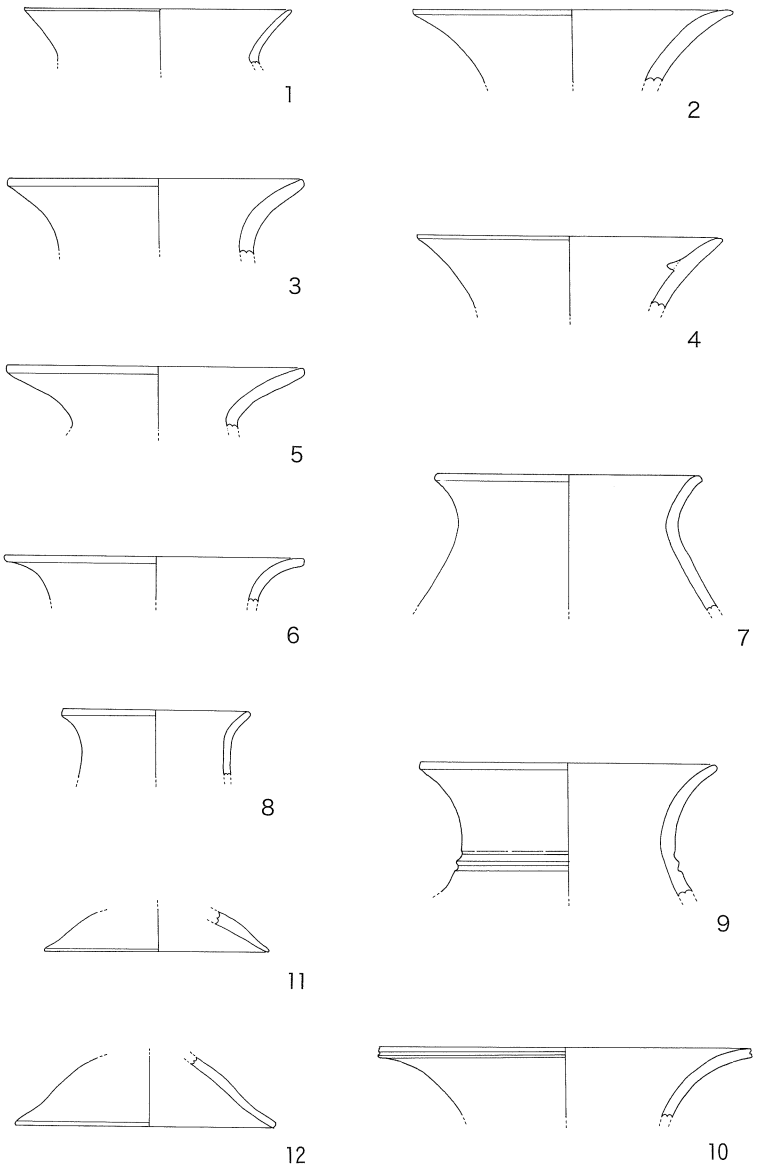
総数7,051点、そのうち石器及びサヌカイトの破片は1500点近くになっている。

壺形土器

40図９は肩から頸部に向かって次第に狭くなり、短い頸部から軽く外反する口縁部を持つ、それに対して40図７も短い頸部から口縁部が軽く外反するものの９と比較するとやや頸部から口縁部までの外反度が緩くかつ緩やかなくの字形になってくる。40図１・３・５などもこのグループに属する。

40図８は口縁部が軽く外反するタイプであるが、頸部が筒形を呈するところに特徴がある。

40図２・４・10は口縁部が朝顔状に大きく広がるタイプで、４には口縁内部に凸帯が施され、



第40図　Ｎ３調査区出土遺物（縮尺１/４）

＜表10＞Ｎ３区出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	7,051	5,085	211	260		448	149	898

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
68	22		7	7		10	5	1	2			18	2		1	2	1							146
90			14			16			2			20			4									146
0.62			0.1			0.1			0.01			0.14			0.03									

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
3	9			2	1				1			13	21				4				6	29	5	2	14	55	5			3							173
16												80												77												173
0.09												0.46												0.45												

10は口縁端部が角ばってそこに沈線が入る。40図12は蓋形土器である。

甕形土器

口縁部が軽く外反するＡタイプが全体の62％を占め、そのうち無文のものが75％、残りが沈線文５条以内のものである。

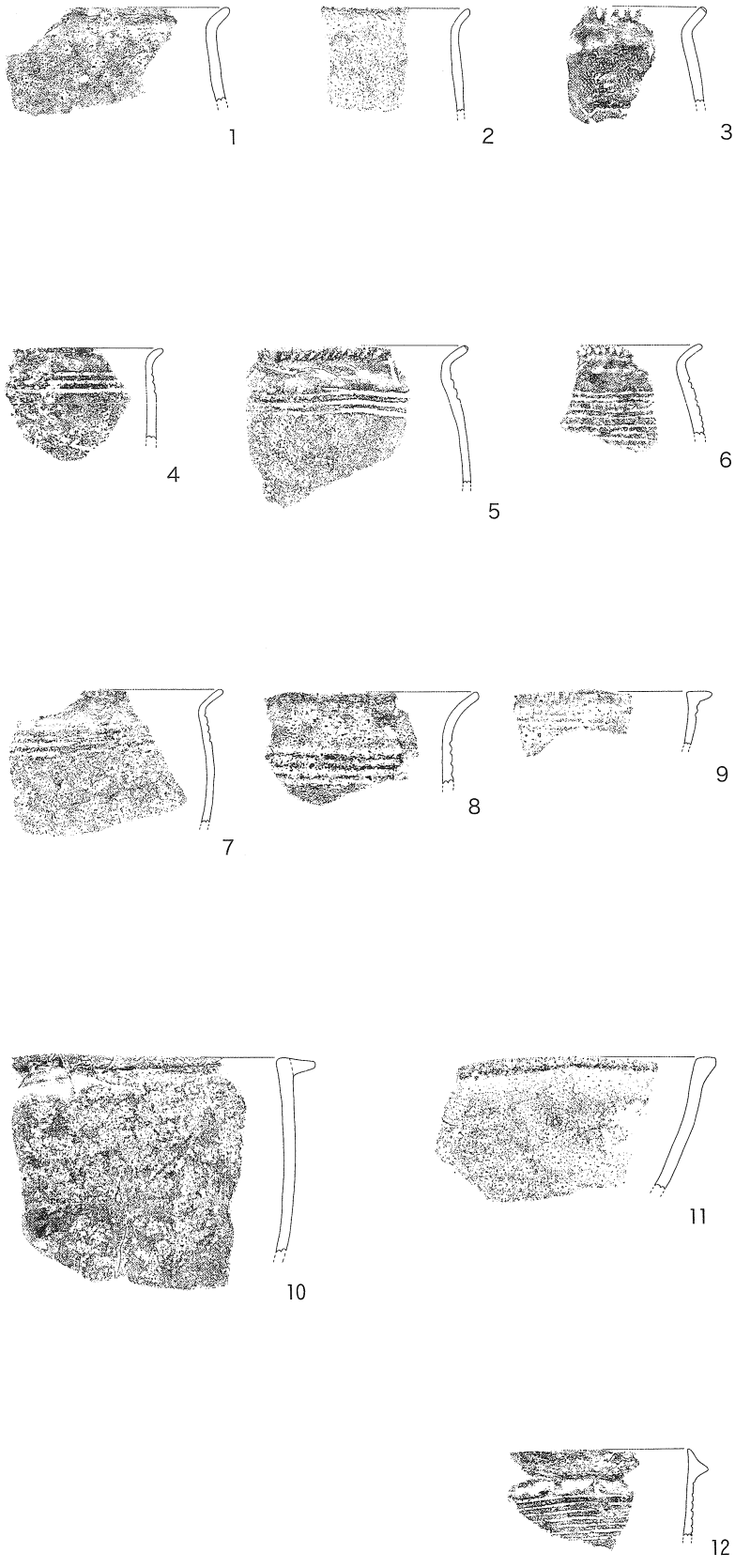
口縁部に断面三角形の貼り付け凸帯を巡らすＥタイプの口縁部を持つ甕形土器は14％であるが、ここでも無文のものが90％を占めている。

口縁端部の貼り付け凸帯が断面三角形を呈し、かつ上面が平坦になるＣタイプ、及び貼り付け凸帯が断面長方形になるＤタイプがそれぞれ10％の割合で出土しているが、それにしても施文は無文か平行沈線文はいずれも５条以内である。

底　部

残存率50％程度のものＢタイプと、４分の１程度のものＣタイプがそれぞれ50％を占めている。特にＢタイプのなかでも底部に穿孔のあるものが50％を占め、そのうち直径６～10cmまでのものが70％に達している。

それに対して残存率25％程度のものには平底のものが96％を占めており、特徴的である。その他Ａ・Ｂ・Ｃタイプそれぞれに点数は僅かながら上げ底のものが認められることは注目すべきである。



第41図　Ｎ３調査区出土遺物（縮尺１/４）

ＮＳＤ－１出土土器

延長僅か10mの溝ＮＳＤ－１から出土した遺物は総数31,940点という膨大な点数であった。そのうち石器及びサヌカイトの剥片等は1,630点に達している。

壺形土器

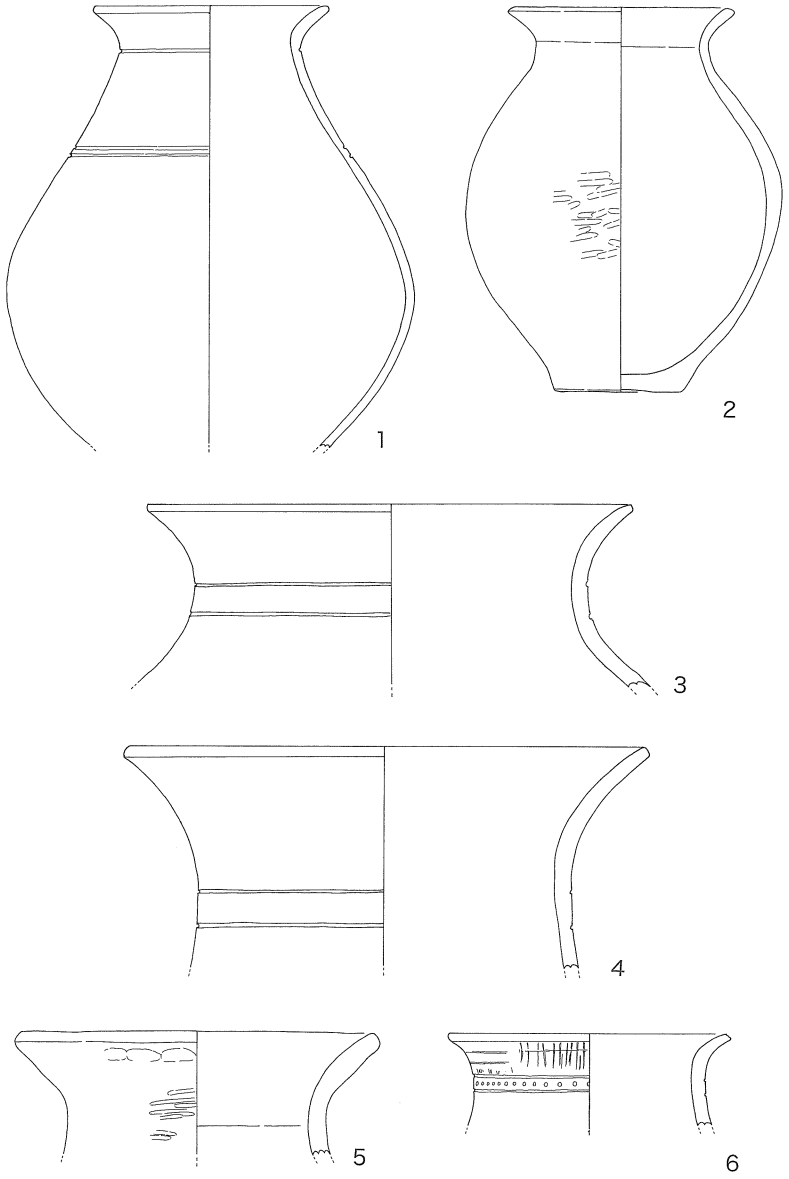
42図１は底部が欠けているが、ほぼそのプロポーションを把握することが出来る。

この土器の特徴は重心が低く胴部の最大幅が中央部より下位にあることである。

さらに短い頸部から鋭く外反する口縁部をもち、頸部と肩に沈線が施文される。

42図２の壺は、短い頸部から鋭く外反する口縁部を持つが、胴部はほぼ中程に強い張りがあり、球形を呈する点で、１の壺とは様相を異にする。

42図３は頸部に沈線が間隔をおいて２条施文される点では、また１・２より進化したもの、



第42図　ＮＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

＜表11＞ＮＳＤ－１出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	31,940	26,789	2,153	1,369		271	62	1,296

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
306	128	11	38	19	4	154	48	36	66	32	16	163	41	19	13	13	3			1	1			1112
445			61			238			114			223			29			1			1			1112
0.40			0.05			0.30			0.10			0.20			0.03			0.001			0.001			

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
6	63	2	2	2	13				7			2	54	3		2	9				1			10	411	37	4	1	17				2			648
95												71												482												648
0.146												0.11												0.74												

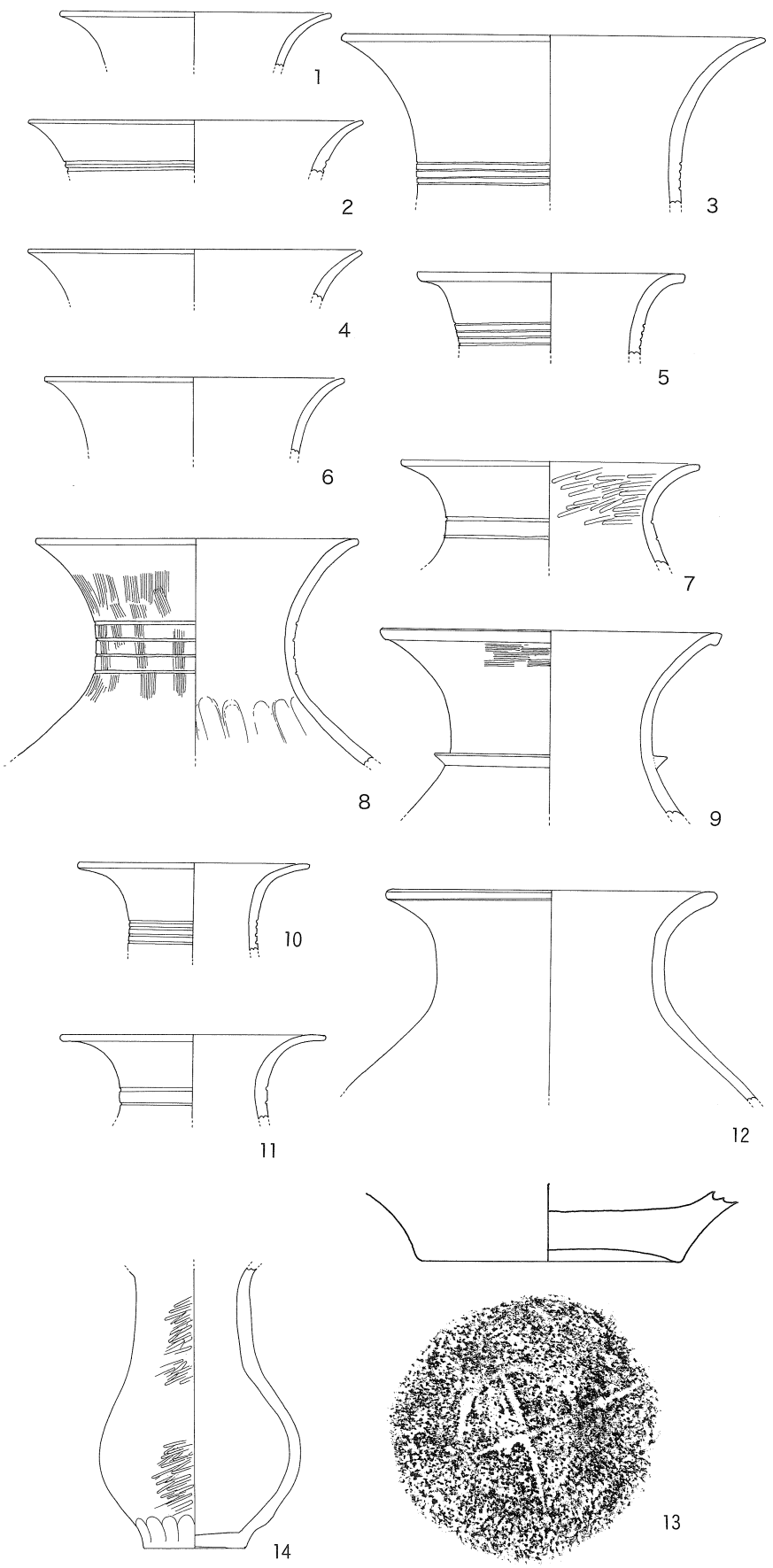
42図４は頸部が筒形を呈する、おなじタイプが43図３・４であるが、43図13は壺形土器の底部であるが、やや上げ底の底部にヘラ描きの沈線で０に十字の文様が描かれている。

43図14は口縁部が欠けているが残存高16.8cmの小形壺であるが重心の低い胴部の幅は12cm、筒形を呈する頸部から口縁は軽く外反するものと思われる。

43図１は頸部からゆったりと大きく外反する口縁部を持ち頸部には凸帯が巡っている。

44図８は間隔を置いた平行沈線文が４条、44図４は８条の沈線文が施文されている。43図９は頸部に断面が三角形の鋭い凸帯が巡り、口縁端部もやや丸みを帯びて肥厚している。さらに43図11は外反した口縁部の端が平坦な縁を形成する。43図７は42図４のタイプに属する。次に44図６～13までの土器は口縁部だけであるが、口縁端部と、口縁の内部に凸帯が貼り付けられた一群である。

44図６～９までは、口縁部が朝顔状に大きく広がる形で、やや角ばった端部に凹線文が引かれ、６と９には刻み目が入れられる。口縁内部には１・２条の凸帯が貼り付けられている、いずれも破片で、凸帯がどのような形であったのかは明らかでない。44図10は締まった頸部からくの字形に口縁部が立ち上がったもので、頸部のくびれ部に２



第43図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

条の刻み目を入れた凸帯がめぐる。口縁内部には３条の凸帯が貼り付けられ、刻み目が入れられている。

44図11は大きく広がった口縁部が水平になって縁を形造っているもの、端部には凹線が入り、刻み目が付けられている。

おそらく頸部は筒形を呈するものと思われる。

44図12は頸部から軽く外反する口縁部の端には刻み目が入り、頸部に沈線文が巡らされる。

44図13はゆったりとした頸部から八字形に外反する口縁部を持ち、口縁端部には凹線文が入り緻密な刻み目が施されている。

頸部の凸帯２条はやや間隔をおいて巡らされ、それぞれに刻み目が入る。

口縁内部の凸帯も刻み目が付けられている。

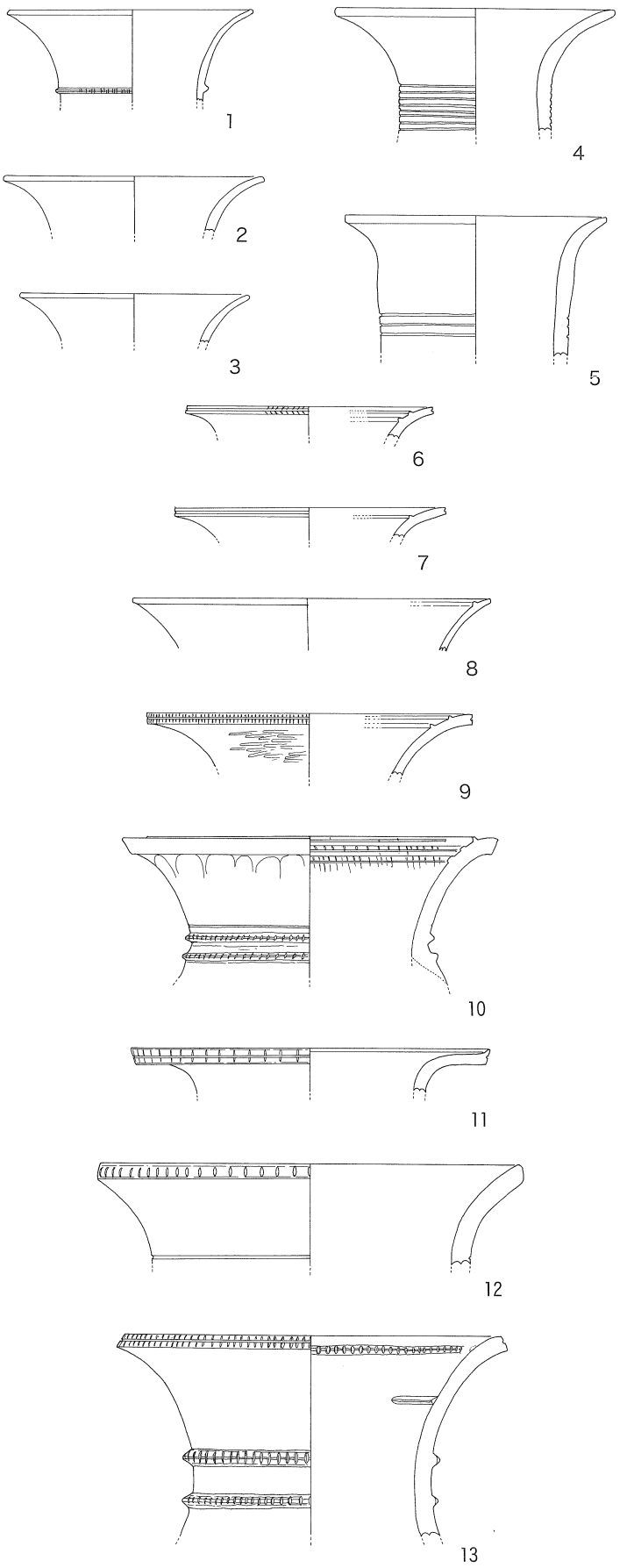
Ｎ３ＳＤ－１

甕形土器

計測可能な甕1,112点を計測した（表11）。

Ａタイプ・口縁部がく字形に軽く外反するもので、全体の40%、そのうち無文土器（１）が68%で最も多く、次いで沈線文５条以内の土器(２)が約30%となっている。

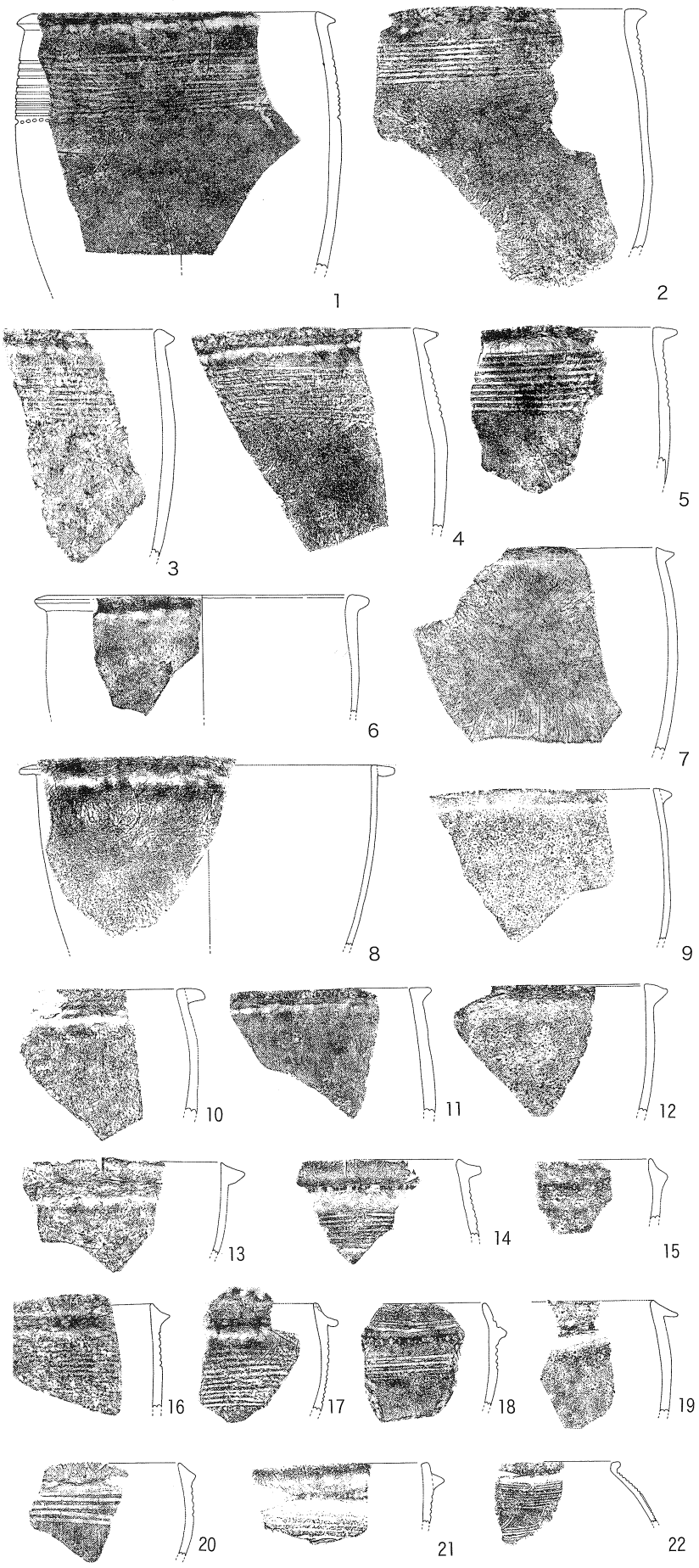
Ａ－１タイプ、49図３は口径21cm、摩滅が甚だしいが部分的にハケ目調整の痕跡が認められる。49図11は浅鉢形土器で底部はやや上げ底になっており、下半分にヘラ磨きの調整痕がみら



第44図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

れる。

Ａ－２タイプ、49図１・２は、いずれも口縁端部に刻み目が入り、平行沈線文が施される。48図３は口径20.8㎝、頸部に３条の平行沈線文が入っている。Ａ－３タイプ、48図６・７で６には５条の沈線文の間に円形の刺凸文が入っている。７は櫛目文土器。



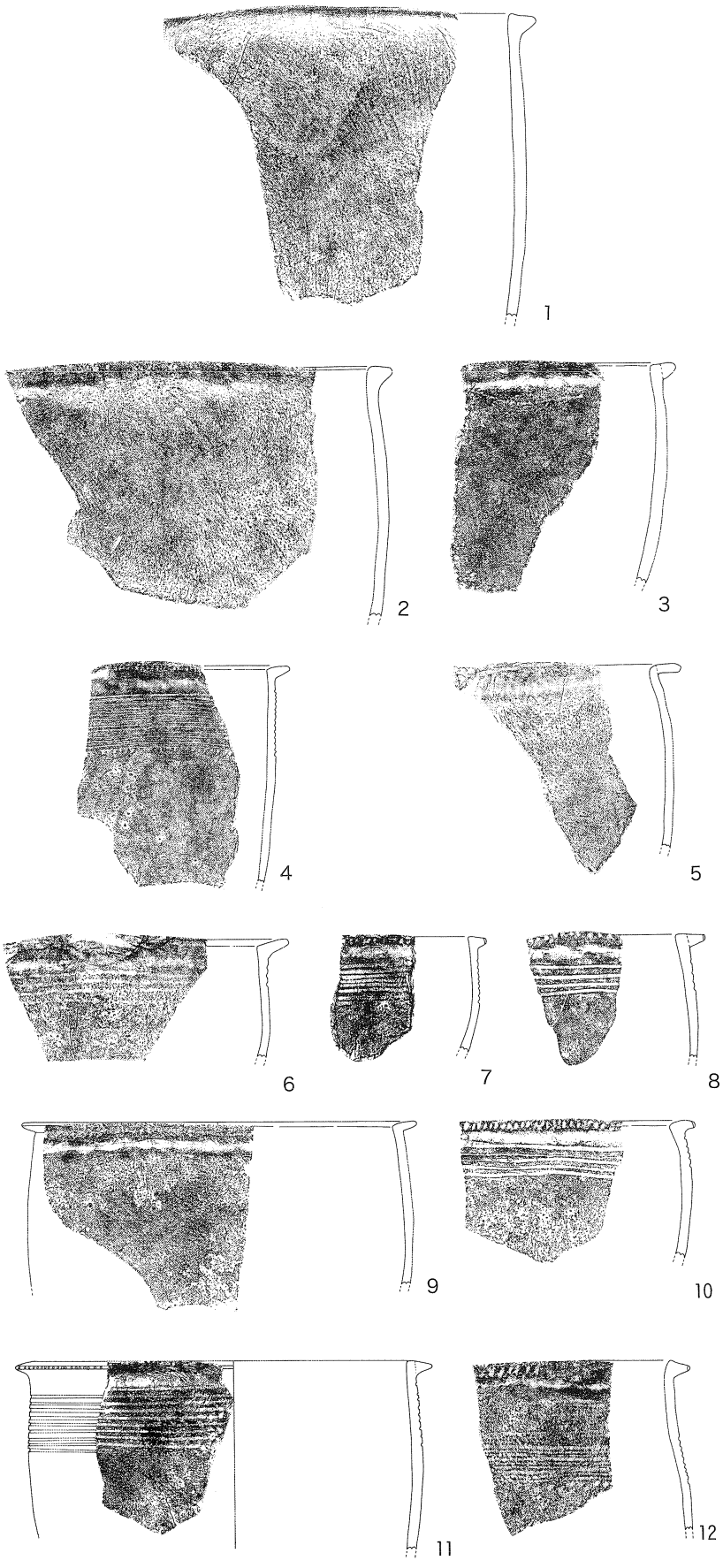
第45図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物
（縮尺１/４）

Ｂタイプ、口縁部が逆Ｌ字状になるもので、全体的には５％程度で、比較的に少ないが、なかでも無文のＢ－１タイプはＢタイプの中では最も多く60％を占めている。

沈線文が５条以下のＢ－２タイプは３％、沈線文が６条を越えるＢ－３タイプは６％とＢ－２．３は極めて少ない。

49図６はＢ－２タイプであるが、底部が欠損している。

頸部に１条の沈線文が施文されている。器面の調整はハケ目調整で、縦方向にハケ目がみられる。48図５は或はＡ－３タイプに入るものであるのかも知れない。48図９・12はＢ－２タイプである。



第46図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

Ｃ－１の無文土器は46図１．２．３がそれであるが、46図１には部分的にハケ目調整痕がみられる。45図13から18このタイプである。

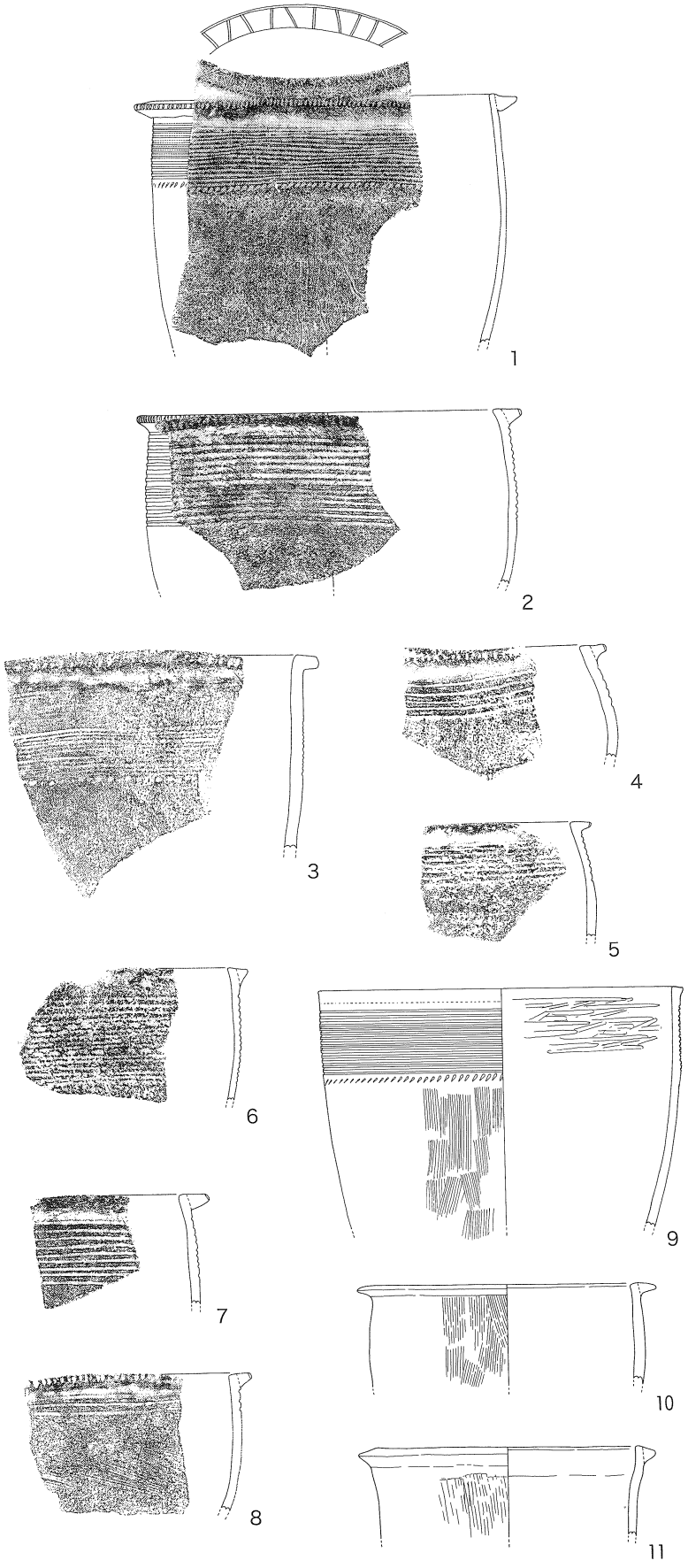
Ｃ－２の平行沈線文５条以下は数少ないが、46図８、47図８には口縁端部に刻み目が入っている。

Ｃ－３は文様に極めて多様な様相を見せる。49図７は口縁端部には刻み目が入り、頸部の沈線文は上段が６条、下段が５条の平行沈線文が施文され、その間に山形の半載竹管文が入っている。

47図１は口縁端部に刻み目文がつけられ、頸部の櫛目文の下に櫛状工具による押圧文が施文される、さらに口縁の上面にこれもハ字形の半載竹管文がある。器面の調整は部分的にハケ目文が認められる。

47図９は口縁部が剥離しているものであるが、櫛目文の上下に目の細かい刺凸文が巡らされている。おそらく47図１と同じ技法であろう。

49図８、47図11もこのタイプである。



第47図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

Dタイプ

口縁端部に断面長方形の貼り付け凸帯を巡らしたもので、Cタイプと区別し難いものもある。甕形土器全体の10%程度で低率である。

49図12はD－1タイプで、口縁部の直径38.3cmの大形の甕であるが、ヘラ磨きの痕跡が認められる。

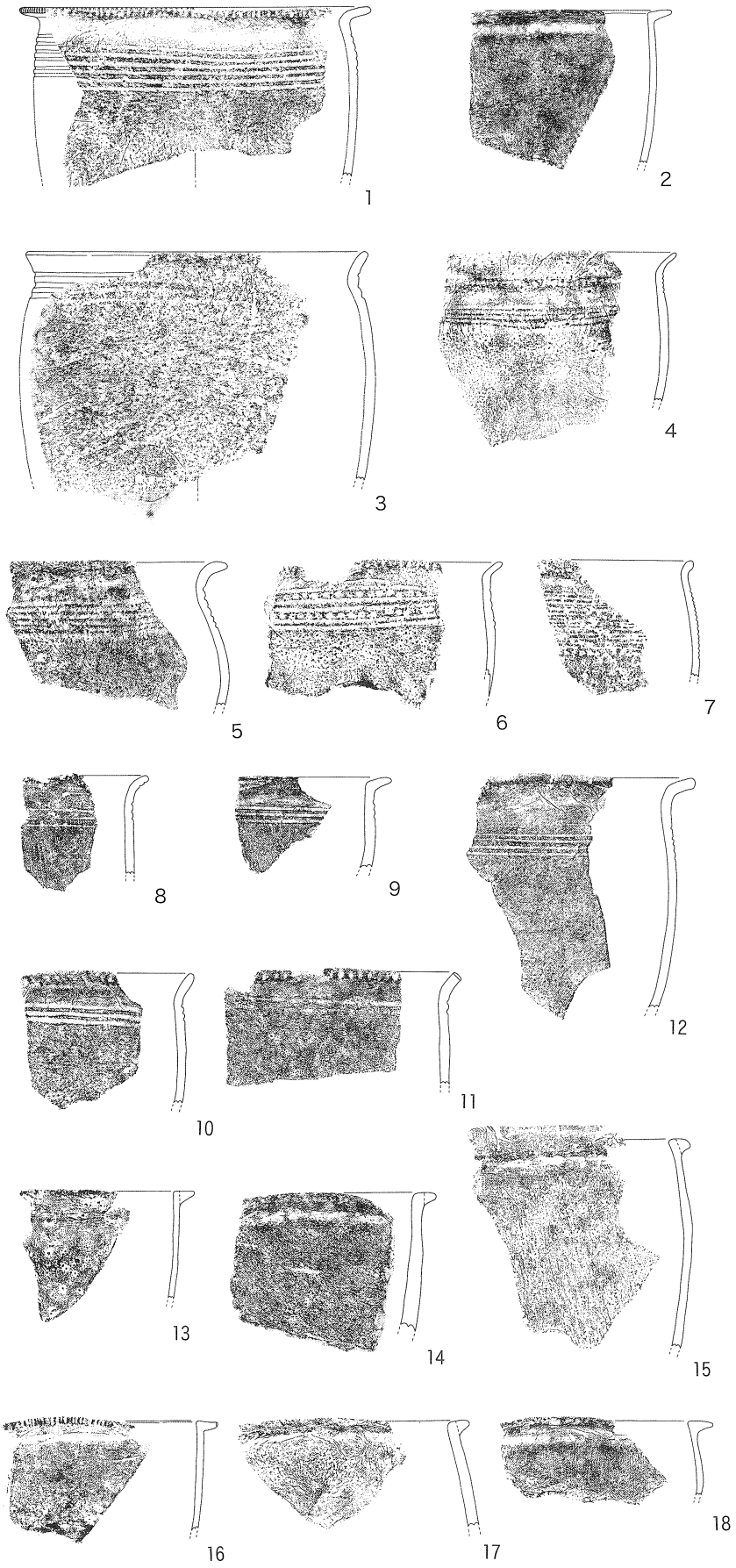
48図8・10などもこのタイプである。

47図3は頸部に櫛目文が施文されたもの、47図7はD－3タイプ。

Eタイプ

口縁端部に断面三角形の貼り付け凸帯を巡らしたもので、しかもその貼り付け凸帯の上面が斜め下に傾斜しているもの。甕形土器全体の20%を占めている。Eタイプの中では無文E－1が73%で圧倒的に多く、E－2が18%、E－3が8%の低率である。

48図15・14・13はE－1タイプで無文土器、47図1・3・4はE－3タイプ、1・3は頸部の平行沈線文の下部に刺凸文が巡らされている。48図5・7は多条化した平行沈線文土器、49図8は櫛目文が施文される。



第48図　N3SD－1溝出土遺物（縮尺1/4）

Ｆタイプ

全体の３％という低率であるが、口縁部に貼り付けられた断面三角形の凸帯が、端部よりやや下位にあるもの。

45図14から21までは、このタイプであるが、45図19は無文土器、45図20は沈線文が５条入っており、Ｆ－２タイプ、45図18は頸部に４条の平行沈線文が施文され、さらに凸帯の上にも２条の沈線が入る。45図16・17は櫛目文土器。17は凸帯が極端に下がっている

Ｇタイプ

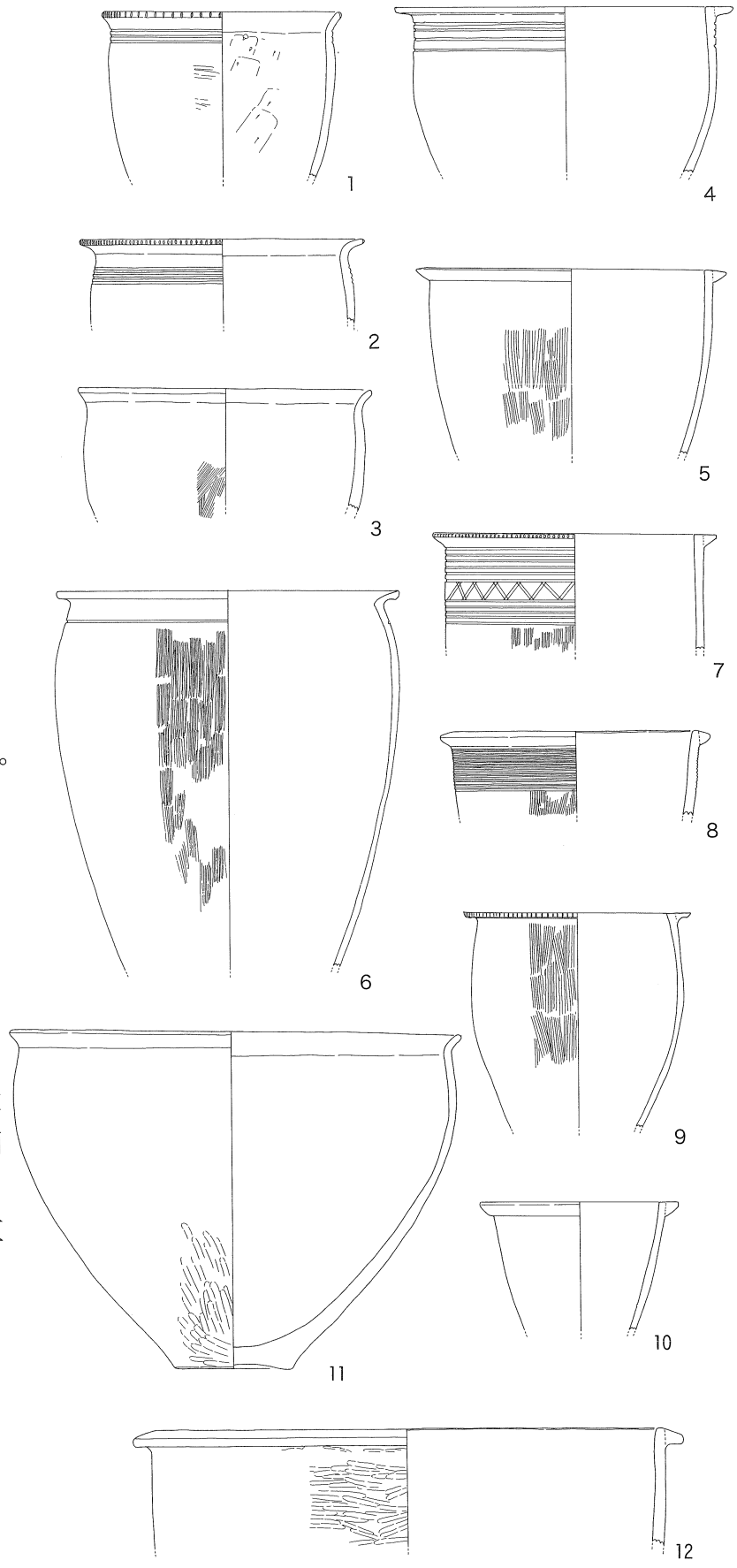
僅か１点であるが、45図22は上下２段の沈線文の間に半載竹管文の山形文が施文されている。

底　部

計測可能な底部のうち残存率25％のものが、74％で圧倒的に多く、次いでほぼ全体の形態を止めるＡタイプが14％になっている。

Ｃタイプのうち直径５cm、以上10cm以内のものが、85％、次いで直径10cm以上が７％と圧倒的に少なくなる。

残存率のいいＡタイプには直径６cm以上10cm以内のものが、60％を占めている。



第49図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

Ｎ３ＳＤ－１（下層）

出土土器

50図１は口縁部だけの破片ながら、その特徴をよく表している、口縁端部の刻み目、内部の凸帯、大きく開いた口縁は、50図２の口縁を更に開かせた感がする。50図６は頸部が筒形に延び、凸帯と沈線文がめぐる。口縁内部の凸帯は１条であるが、破片のために全貌は明らかでない。

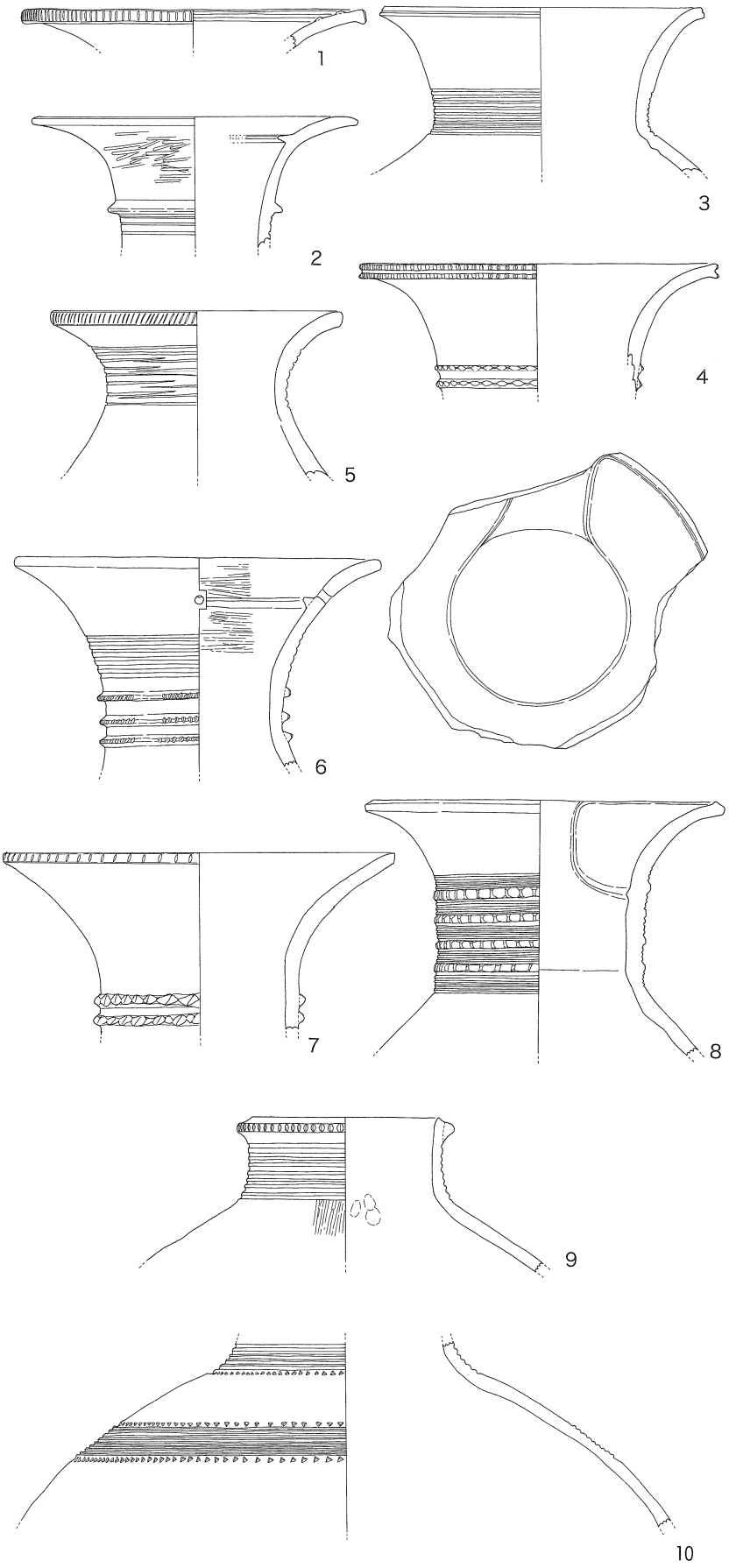
形態的に50図６に近いものが２、４、７であろう。50図６は頸部に３条の刻み目を持つ凸帯文と６条の平行沈線文が見られる。50図４は頸部に刻み目を施した凸帯文２条、と口縁端部刻み目が特徴、50図８は筒形の頸部の凸帯文と口縁内部の注口状の凸帯が注目される、頸部の施文は４条の刻み目を施した凸帯と、その間と、上下に３－４条の平行沈線文が描かれている。

50図５・６の口頸部が肩から頸部、そして口縁部へとゆるやかなカーブを描いて移行するのに対して、50図３、８は肩と頸部の接合部がく字形に区分されている点に特徴がある。

頸部の施文は９条の平行沈線文。50図９は肩から直立する口縁の端部に断面三角形の刻み目を有する凸帯が巡らされる。

50図10は肩から頸部の接点あたりに平行沈線文と、三角形の刺凸文を施文した体部の破片。

形態は50図９が想定される。



第50図　Ｎ３ＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

ＮＳＤ－１（下層）

出土土器

甕形土器

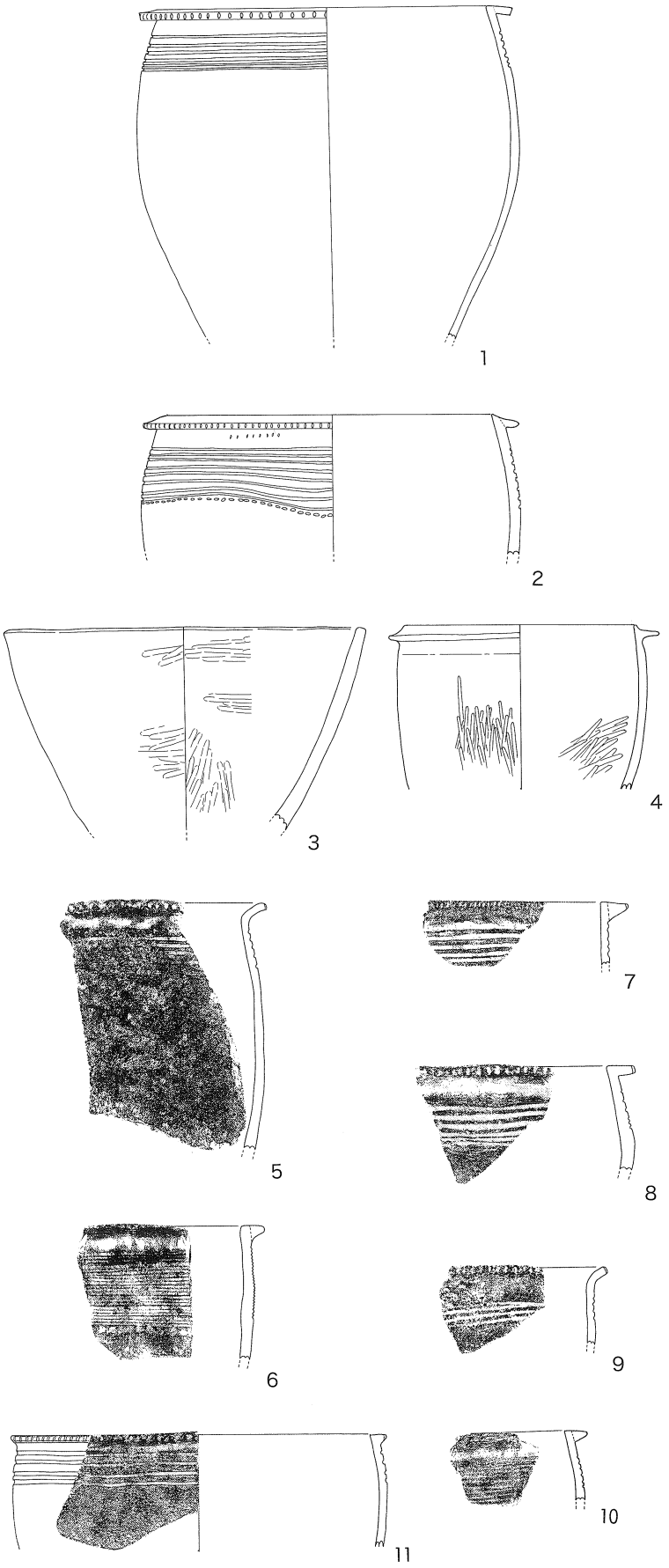
51図９・５はＡ－２タイプで、口縁部が軽く外反し、３条の平行沈線文が施文され、口縁端部に刻み目が施されている。

Ｃタイプの甕形土器・51図１・７、口縁端部の貼り付け凸帯は上面が平坦になる断面三角形を呈する。51図11は４条の平行沈線文と口縁端部の刻み目のあるタイプはＣ－２、51図２・６は櫛目文が施文されているＣ－３タイプである。

51図８はＤ－２タイプで、口縁端部の貼り付け凸帯は角ばった長方形で、刻み目文を施している。51図１は６条の沈線文を持っているもので、Ｄ－３タイプである、口径20cmで口縁端部には刻み目がある。

51図２・４はＥタイプの甕で51図４は無文でＥ－１タイプ、51図２はＥ－３タイプである。口径20cm、貼り付け凸帯には刻み目があり、８条の沈線文は乱れており、その下には刺凸文が巡らされる。

51図３は直立口縁の浅鉢形土器で、無文、摩滅が激しいが、部分的にヘラ磨きの痕跡が見られる。



第51図　ＮＳＤ－１溝出土遺物（縮尺１/４）

Ｎ３集石出土土器

Ｎ３調査区から検出された集石は直径2.5m、短径２m、深さ40cmにすぎないものであるが、多数の土器や石器が出土している。

出土した土器・石器の総数は6,291点、そのうち石器及びサヌカイトの破片は641点に達している。

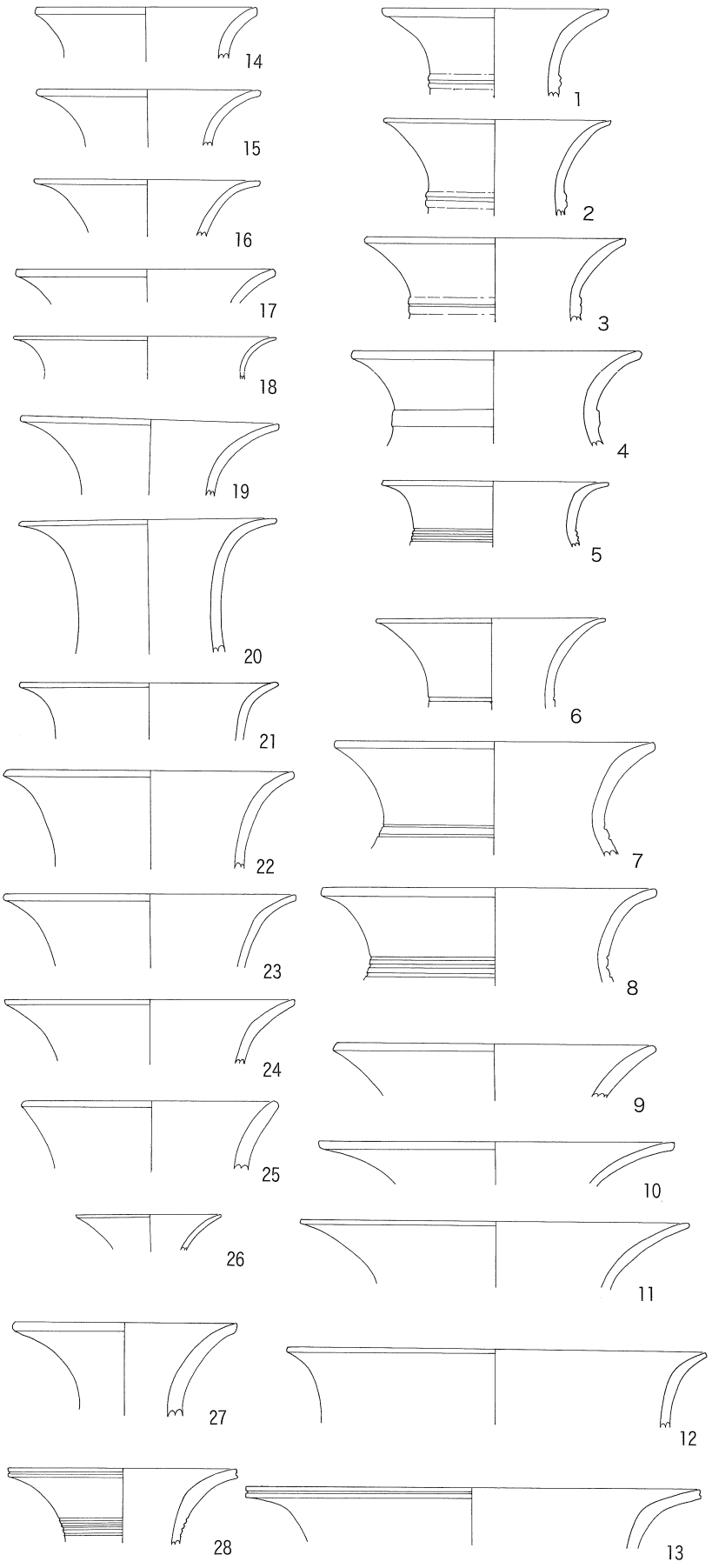
壺形土器

51図１・２・３・４は頸部に削りだし凸帯のあるもの、ややゆったりとした頸部から、ゆるやかなカーブを描きながら広がっていく口縁部をもつ。52図５・６は沈線文のあるもの。52図７・８も頸部に沈線文を描いたものであるが、くびれた頸部からくの字形に口縁部が形造られるタイプ。20は筒形にのびた頸部から口縁部が軽く外反するもの、52図12・22もこのタイプであろう。13は口縁端部が水平なるまでに広がったその端部凹線文が入っている。52図14から17までの口縁部は頸部の状態が明らかでないが、１・２のタイプに属するものであろうか。

図化は出来ていないが、頸部に貼り付け凸帯のあるものが３点、口縁端に凹線文があるものが２点出土している。

甕形土器

口縁部がく字形に外反するＡタイプが58%、断面三角形の凸帯をもつＣタイプが19%、その他Ｅタイプが10%となっている。



第52図　Ｎ３集石出土遺物（縮尺１/４）

53図１・２・３・５・６は無文土器でＡ－１タイプ。

53図４・７・８から13・15はＡ－２タイプで５条以内の沈線文が施される。

53図18・19はＣタイプの無文土器(1)、14は沈線文６条以上のＢ－３タイプである。

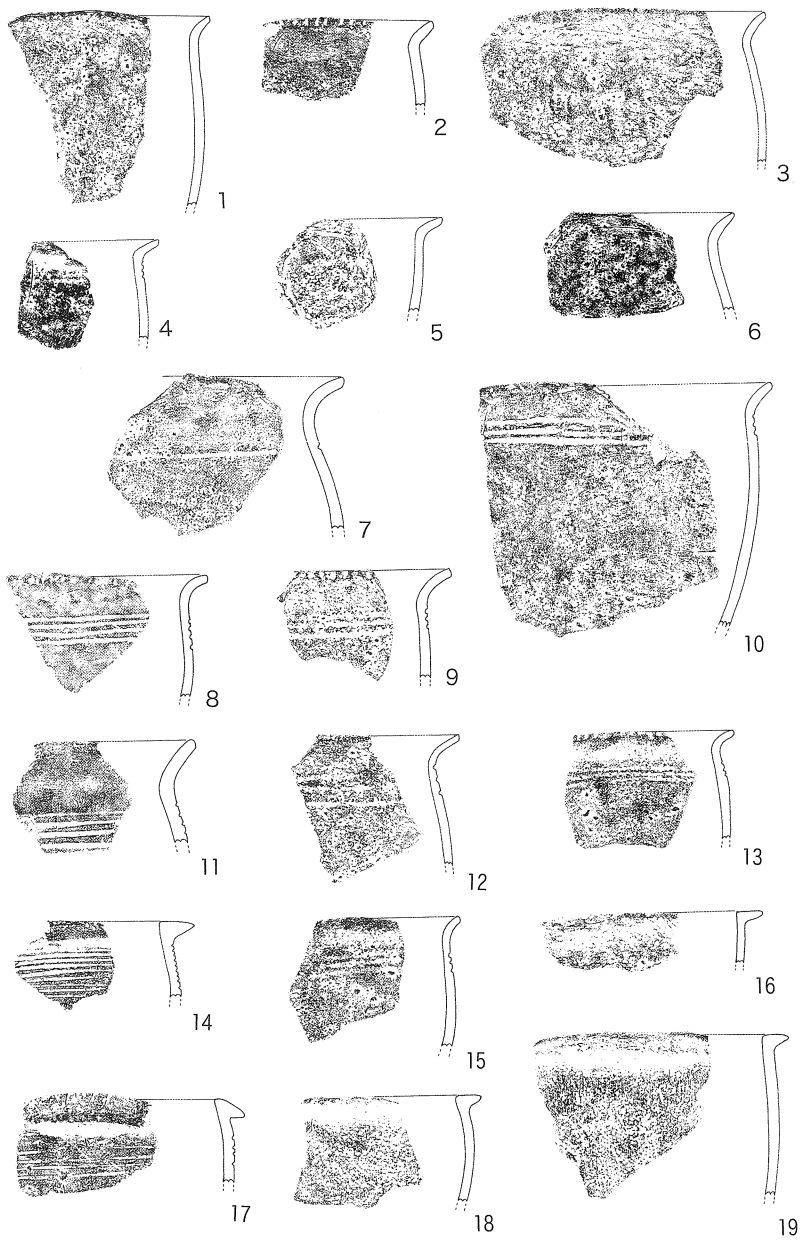
53図17は断面三角形の凸帯が斜め下に傾斜していることからＥ－２タイプ。

底　部

残存率25%程度のものが55%、次いで50%程度のものが28%、ほぼ完全な底部が17%となっている。

残存率25%のＣタイプでは平底のものが91%の大部分を占めている。底部の直径は６から10㎝までの２タイプはＡタイプでは17%のうち66%、Ｂタイプでは28%のうち78%、Ｃタイプでは、55%のうち79%を占めている。

底部分類表



第53図　Ｎ３集石出土遺物（縮尺１/４）

〈表12〉Ｎ３集石出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	6,291	4,844	331	475		265	177	199

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
19	28					15			4	1		2	6	1	5									81
47						15			5			9			5									81
0.58						0.19			0.06			0.11			0.06									

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
3	22	2			5				1				47	3	1		4							1	86	11	1	1	8								196
33												55												108												196
0.17												0.28												0.55												

Ｎ４区第二層出土土器

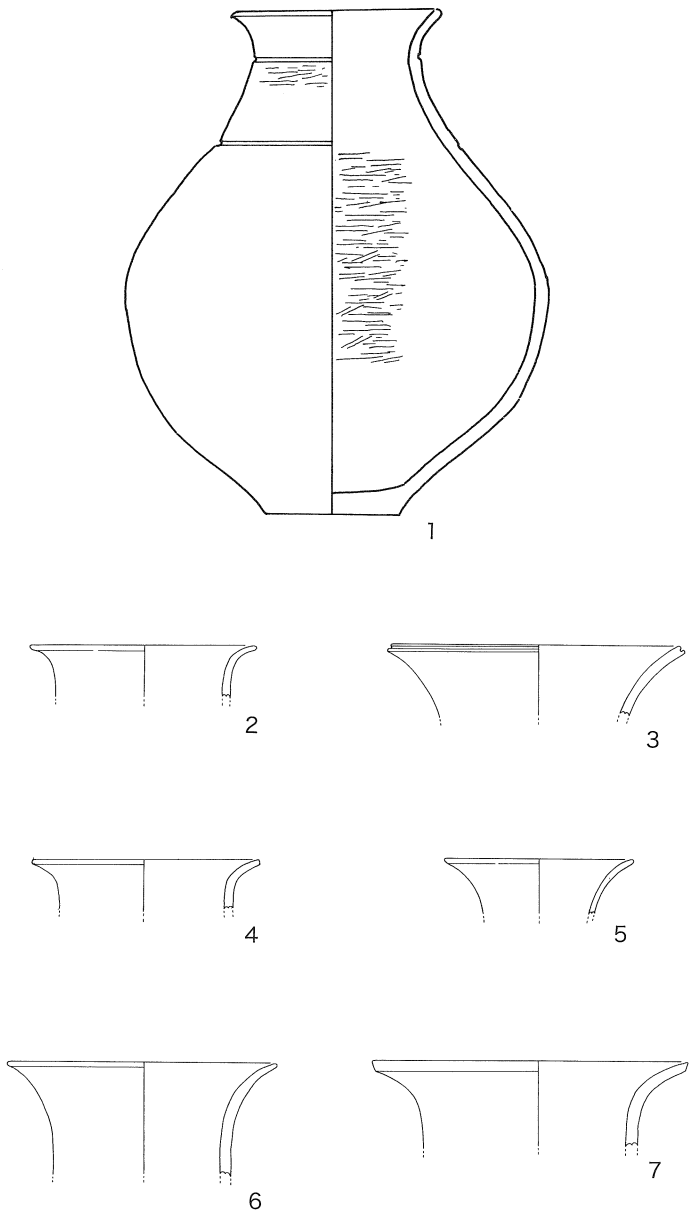
Ｎ４区第２層から出土した遺物は総数3751点であるが、ここからは多数のサヌカイトの剥片や石器が出土している。

壺形土器は54図１が注目される、口縁部は軽く外反し、重心が低くなっている。肩と頸部に沈線が各一条施文されているが、その部分にかすかに接合痕が認められる。

その他の壺形土器はいずれも細片で、器形が判明するものはほとんど認められなかった。

54図の３・５は口縁部が大きく外反するタイプで、１には、口縁端部に沈線が入っている。

その他54図２・４・６・７も口縁部だけの細片であるが、やや筒形を呈する頸部と、軽く外反する口縁に特徴がある。



第54図　Ｎ４調査区第二層出土遺物（縮尺１/４）

〈表13〉Ｎ４区出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	3,751	2,225	126	178	35	108	55	1,024

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
15	10		1	1		2	4						2									1		36
25			2			6						2									1			36
0.69			0.06			0.17						0.06									0.03			

■底部分類表

A												B												C								
1				2				3				1				2				3				1				2				3		
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
2												1		12				1							23	2	1		1							43
2												14												27											43
0.05												0.33												0.63											

甕形土器

口縁部が軽く外反するＡタイプが全体の76％を占めており、そのうち無文のものが30％、沈線文５条以内のＡ－２タイプが約70％を占めている。

55図２・３・４・５・17はＡ－２タイプで、口縁部に２条から３条程度の平行沈線文が入っている。

Ａ－１タイプの無文土器にも、55図12・16のように口縁端部に刻み目文が施文されているものもある。

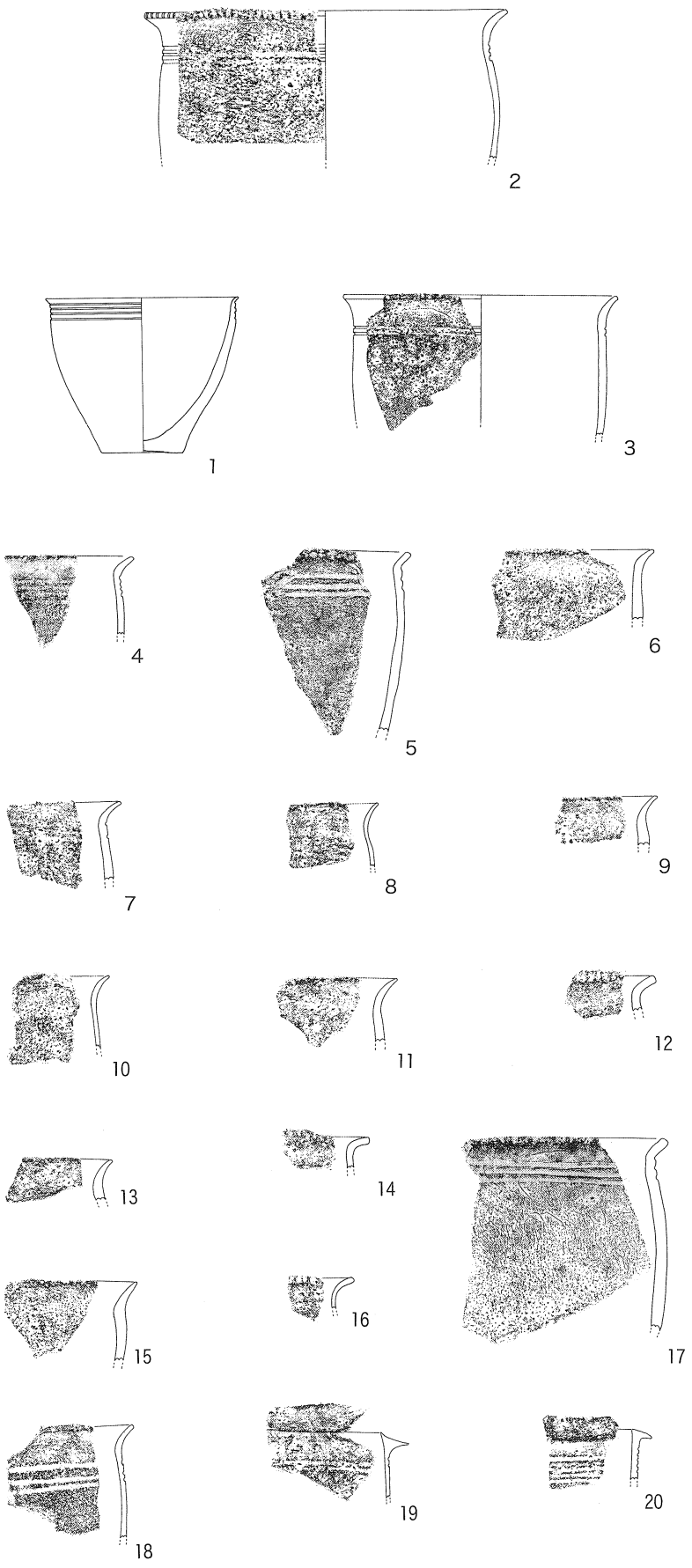
55図14は口縁部が逆Ｌ字形に外反する、Ｂ－２タイプであるが、出土点数は少ない。

55図19・20は口縁端部の貼り付け凸帯が断面三角形で、しかも上部が斜め下に傾斜するＥタイプで、沈線文が５条以内の２タイプということになる。このタイプも全体的には僅か４％にすぎない。

図１の浅鉢形土器は、器高9.2cm、口径11.6の小形で僅かに外反する口縁部と４条の沈線文が施文されている。

底　部

計測可能なものは43点に過ぎなかったが、殆どが25％程度の残存率のもので、62％を占めている。そのうち平底が96％に達している。全体的にみた場合、43点のうち平底が41点を数える。



第55図　Ｎ４調査区第二層出土遺物（縮尺１/４）

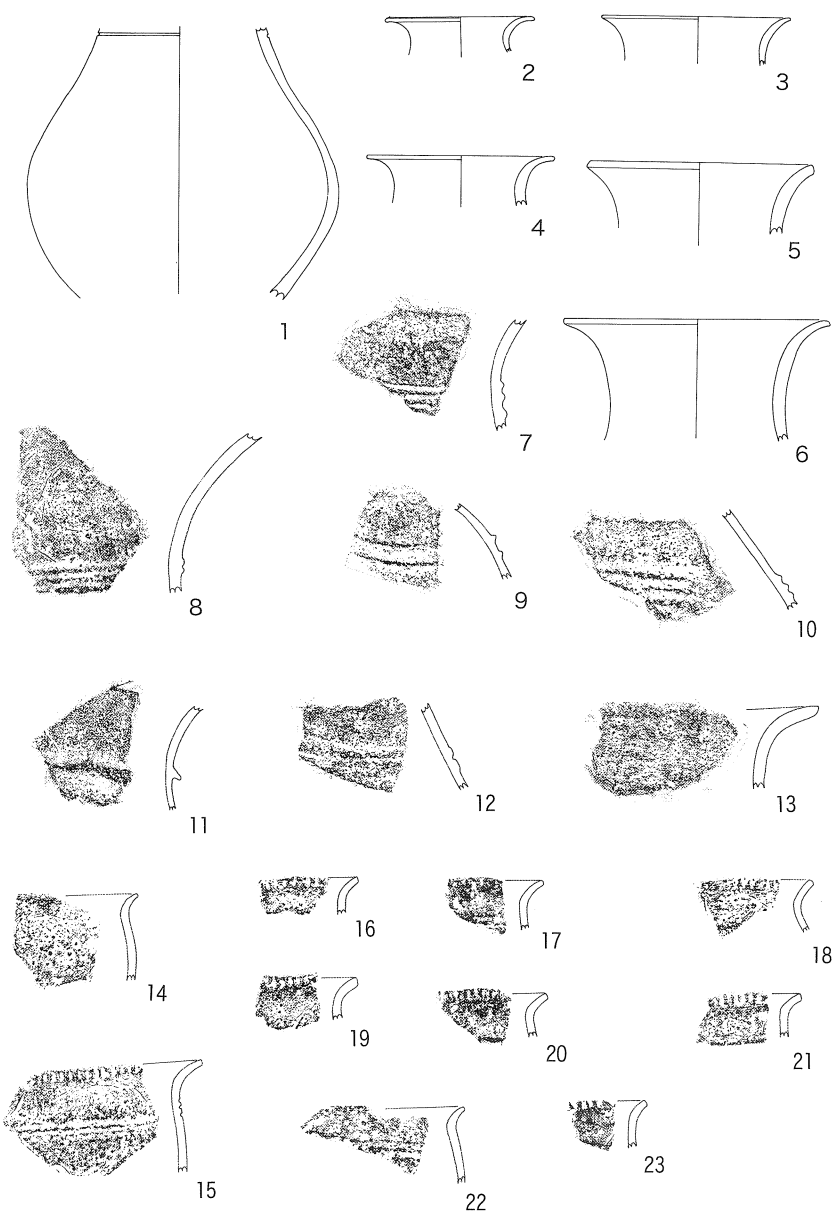
Ｎ４区第三層出土土器

出土した遺物の総数は332点で、相対的に少ないが、第２層と比較すると石器及び剥片の数も７点で少ない。

壺形土器

56図１は口縁部と底の部分が欠落しているが、全体的なプロポーションは54図１の壺に近い。色調は灰褐色で薄手であることも両者相通ずるものがある。56図の２・６いずれも壺形土器の口頸部であるが、頸部は筒形を呈して、口縁が軽く外反する。56図６・７は口縁部が大きく広く外反するタイプで、頸部には削り出し凸帯が巡らされる。それに対して56図の11は貼り付け凸帯になっている。９・10・12は胴部の施文が見られるが、10・12が削り出し凸帯、９は二条の凸帯が巡らされている。

甕形土器はいずれも口縁部が軽く外反するＡタイプで、無文のものに口縁部に刻み目が付けられるものもある。



第56図　Ｎ４調査区第三層出土遺物（縮尺１/４）

〈表14〉Ｎ４第三層出土分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	332	249	22	11	1	6	1	42

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
8	2																							10
10																								10
1																								

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
													1					2											8								11
													3												8											11
													0.27												0.73											

第２節
第二調査区

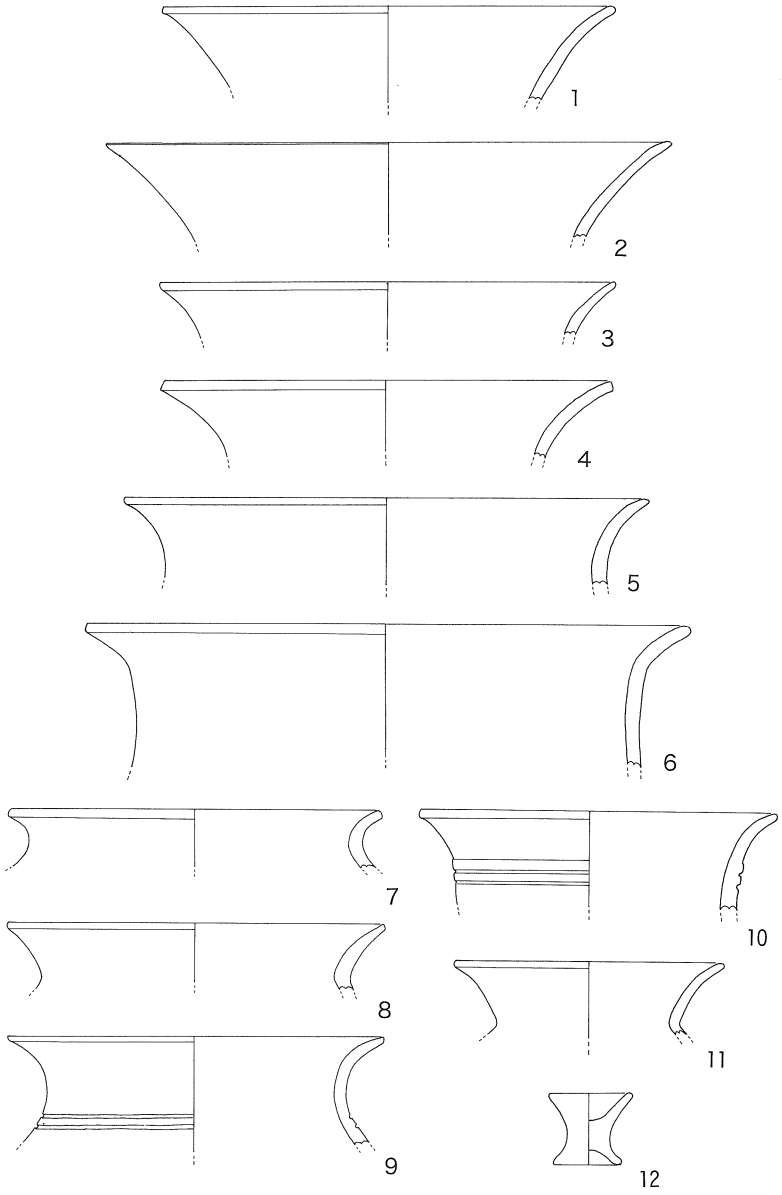
総数741点の遺物が出土している、そのうち石器及びサヌカイトの剥片は152点で、第１調査区のＮ４区と比較すると格段に少ない。

この調査区は、先にも触れたように、遺構の基盤となる地層が部分的に砂礫層になっているために遺物包含層が薄くなっていることにも起因している。

或いはかつてはみかん畑になっていたこともあり、相当深く攪乱が行われたり、地下げが行われたものと思われる。

壺形土器

57図５－４は頸部がく字形に折れ曲がり口縁部が形造られる、このタイプが７・８・９であるが、４のように比較的に大きく広がる口縁部をもつものと、７・８のように短く折れ曲がる口縁部をもつものとの２タイプがあ



第57図　第二調査区出土遺物（縮尺１/４）

〈表15〉第二調査区出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	741	419	109	61		10	11	131

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
10	7		2			5	1	1	2			7	1	2	1					1				40
17			2			7			2			10			1			1						40
0.43			0.05			0.18			0.05			0.25			0.03			0.03						

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
1	1												2				2							2	17				1							26
2												4												20												26
0.08												0.15												0.77												

る。それに対して57図５・６は筒形の頸部から口縁部が軽く折れ曲がるもの。１から４までは４タイプか或いは、頸部からゆるやかに口縁部が広がっていくタイプのものか明らかでない。

57図12は小形土器で、高さ3.8cm、口径4.4cmを計る。

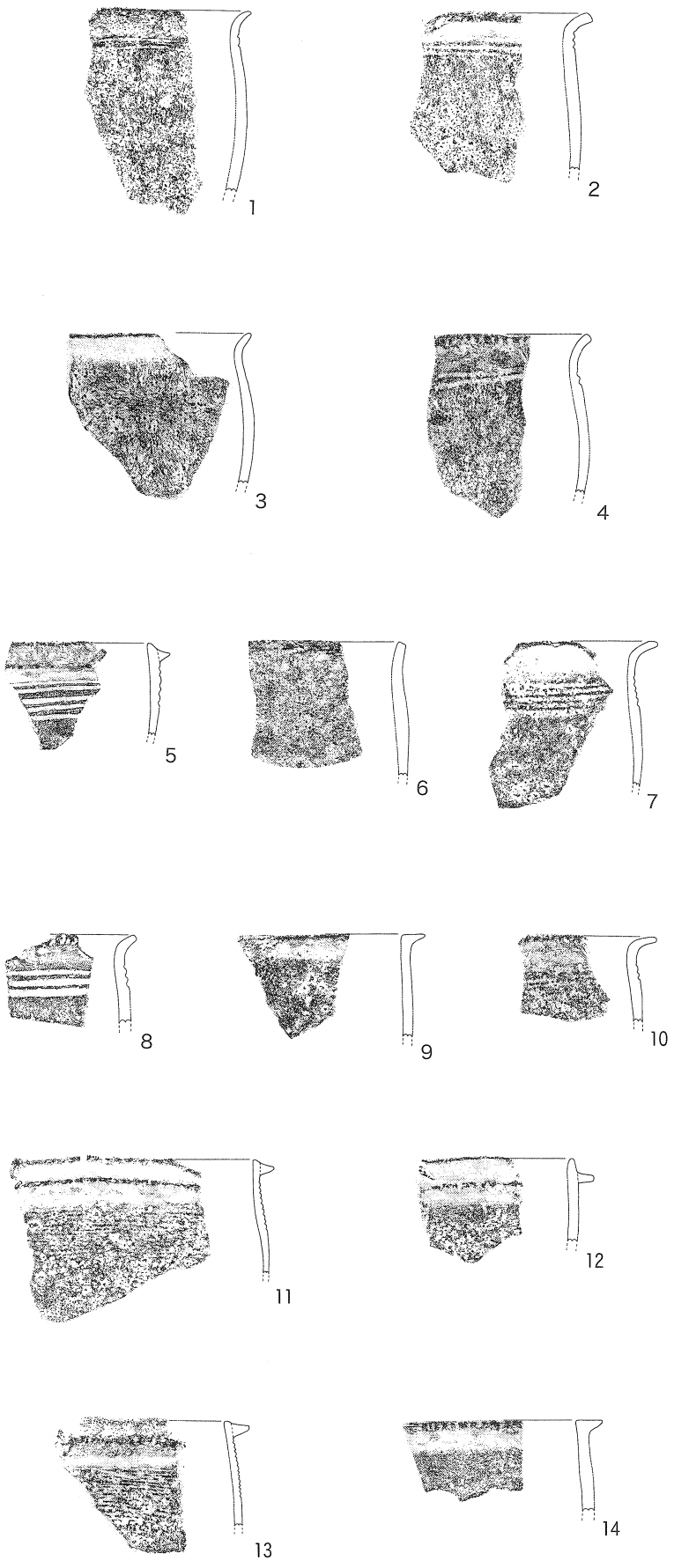
甕形土器

口縁部がくの字形に折れ曲がるＡタイプが43%、断面三角形の凸帯を持つＥタイプが25%、Ｃタイプの断面をもつものが18%となっている。Ａタイプの中でも58図３・６のように無文のものが58%、58図１・２・４のように沈線が５条以内のものが41%で、この両者で43%を占めている。次に58図９・14のようにＣタイプ、58図11・13のようなＥタイプの土器が18%であるが、58図13は櫛目文が施文されている。また12のようなＦタイプの土器も若干検出されている。

底　部

残存率25%程度のＣタイプのものが77%を占めて、ここでも土器の細片が多いことを物語っている。

Ｃタイプのうち、平底で直径６cmから10cmまでのものが85%を占め、底の完形品は僅か８%に過ぎない。



第58図　第二調査区出土遺物（縮尺１/４）

第３節
第三調査区

第三調査区からは総数494点、Ｗ５ＳＤ－１からは916点の遺物が出土している。そのうち石器及びサヌカイト片は52点であった。

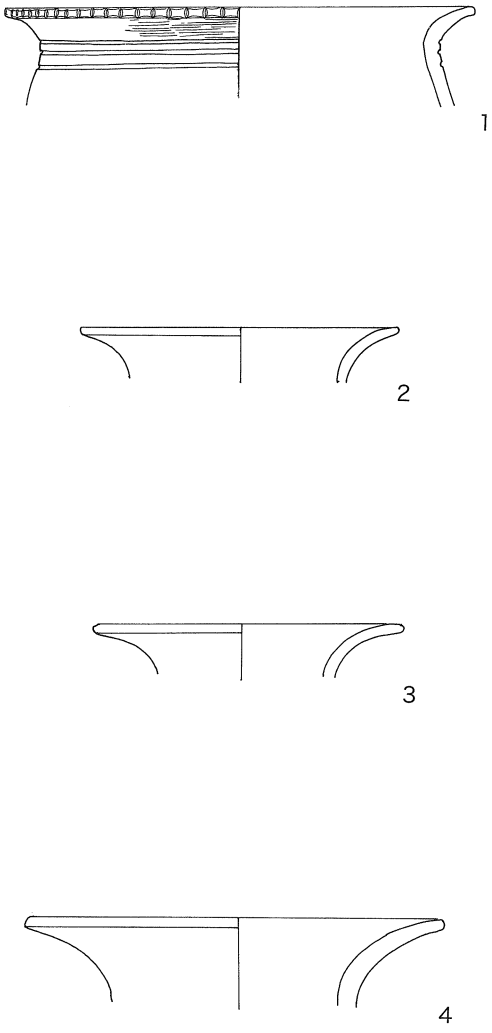
壺形土器

59図２・３・４はいずれも口縁部だけのものであるが、頸部から軽く外反する口縁部の感触がある。

甕形土器

計測観察できたものは僅かに10点に過ぎないが、いずれも口縁がくの字形に軽く外反するＡタイプで、９点が無文、１点が口縁部に刻み目を持ち３条の沈線文が施文されている。

他の無文土器には口縁端部に刻み目を持つもの４点、施文の全く無いもの５点である。



第59図　第三調査区出土遺物（縮尺１/４）

〈表16〉第三調査区出土遺物分類表

調査区	総数	土器片	口縁部	底部	その他	石調	石器	その他
	916	772	25	62	5	19	18	15

■甕形土器分類表

A			B			C			D			E			F			G			他			
1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
9	1																							10
10																								10
1																								

■底部分類表

A												B												C												
1				2				3				1				2				3				1				2				3				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
																																				2
																																				2

土製品

紡錘車

１・Ｎ２ＳＤ－１出土、

直径5.2cm、厚さ1.8cm片面は平面であるが、他の面はやや丸味を帯びている。孔径0.8cm。

２・７、Ｎ２ＳＤ－２出土

２は直径5.3cm、厚さ1.2cm、両面共にやや丸味を帯びている。孔径0.6cm。

７、直径3.8cm、厚さ２cm算盤玉のように中央部が厚くなっている。孔径1.3cm、焼成良好である。

３・４、Ｎ３ＳＤ－１出土

３は土器片を転用したもので直径4.4cm、厚さ0.8cm、

４、直径4.2cm、厚さ0.6cm、孔径0.4cmでややカーブしている。

円　盤

５・６、Ｎ３ＳＤ－１出土、

５、直径3.8cm、厚さ片面1.6cm、薄いところで1.2cm、土器片を転用している。

６、直径4.6cm、厚さ1.4cm、土器片を転用したもの。

土　錘

８、Ｎ２ＳＤ－１出土

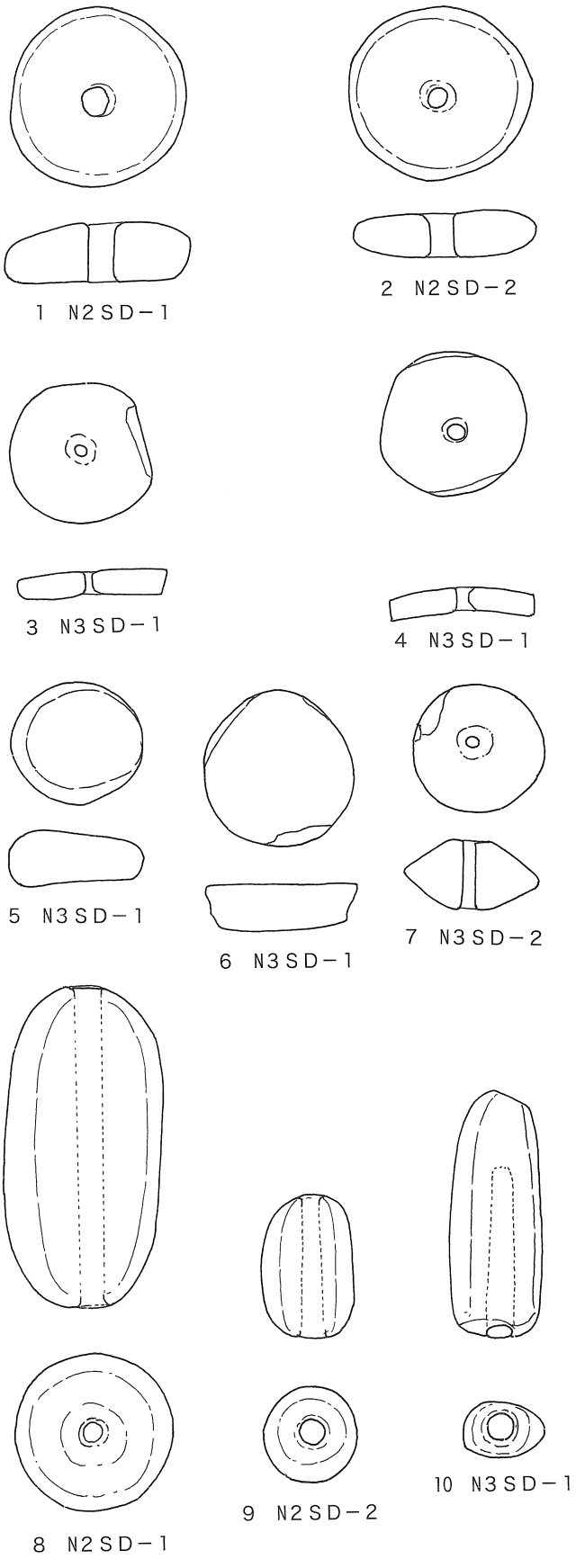
長さ9.5cm、幅4.6cm断面は円形で、長軸に穿孔がある。孔径0.6cmを計る

９、Ｎ２ＳＤ－２出土

長さ4.3cm、幅2.8cm、断面は円形を呈する、長軸に穿孔があり、孔径0.6cmを計る

10、Ｎ３ＳＤ－１出土

長さ7.4cm、幅2.7cm、断面は楕円形、片面からの穿孔は、途中５cmで止まっている。



第60図　土製品（縮尺１/２）

土錘であるが或いは他の用途があるのかは明らかでないが、手法は土錘の手法である。

木製品

61図１はＮ３ＳＤ－１の溝の最下層から出土したもので、全長25.9cm、歯部の幅14.5cm、やや厚くなっている基部では現存12.3cmを計る。

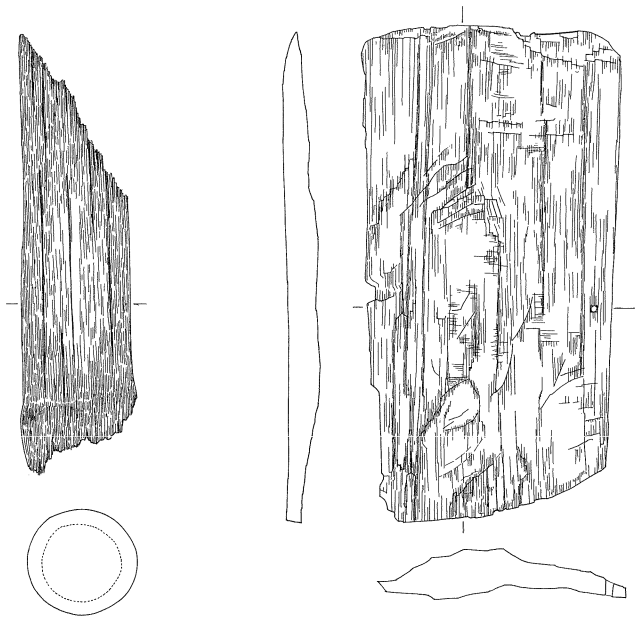
主軸の中央部よりやや基部寄りに厚さ2.4cmの舟形を呈するふくらみがある。このふくらみの部分は横断面で見た場合やや一方に偏っており、これを基準に幅を復元すると全長およそ16cmになる。片面は平面であるが、ふくらみがある面は粗い調整痕があり、部分的に幅２cmほどのノミ跡と思われる痕跡が認められる。樹種はコナラ節、コナラに属するカシワ、ミズナラ、コナラと分析されている。

61図２

全長25.5cm、基部の最も太い所で７cmを計る。先端部が斜めに切り取られており、杭の先端部と思われる。基部に近いところに節があってその部分がやや太くなっている。中は空洞になっているのは腐食のためと思われる。

樹種はヒノキ科でヒノキ科に属するヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコのいずれかと鑑定されている。

Ｎ３ＳＤ－１の溝の最下層から鍬の未製品と共に出土した。



2

●遺物名／杭
●樹種名／ヒノキ科
※備考：ヒノキ科に属する樹種、ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ

1

●遺物名／鍬未製品
●樹種名／コナラ節
※備考：コナラ節に属する樹種、カシワ、ミズナラ、コナラ等

第61図　木製品（縮尺１/４）

第Ⅵ章　遺物（石器等）

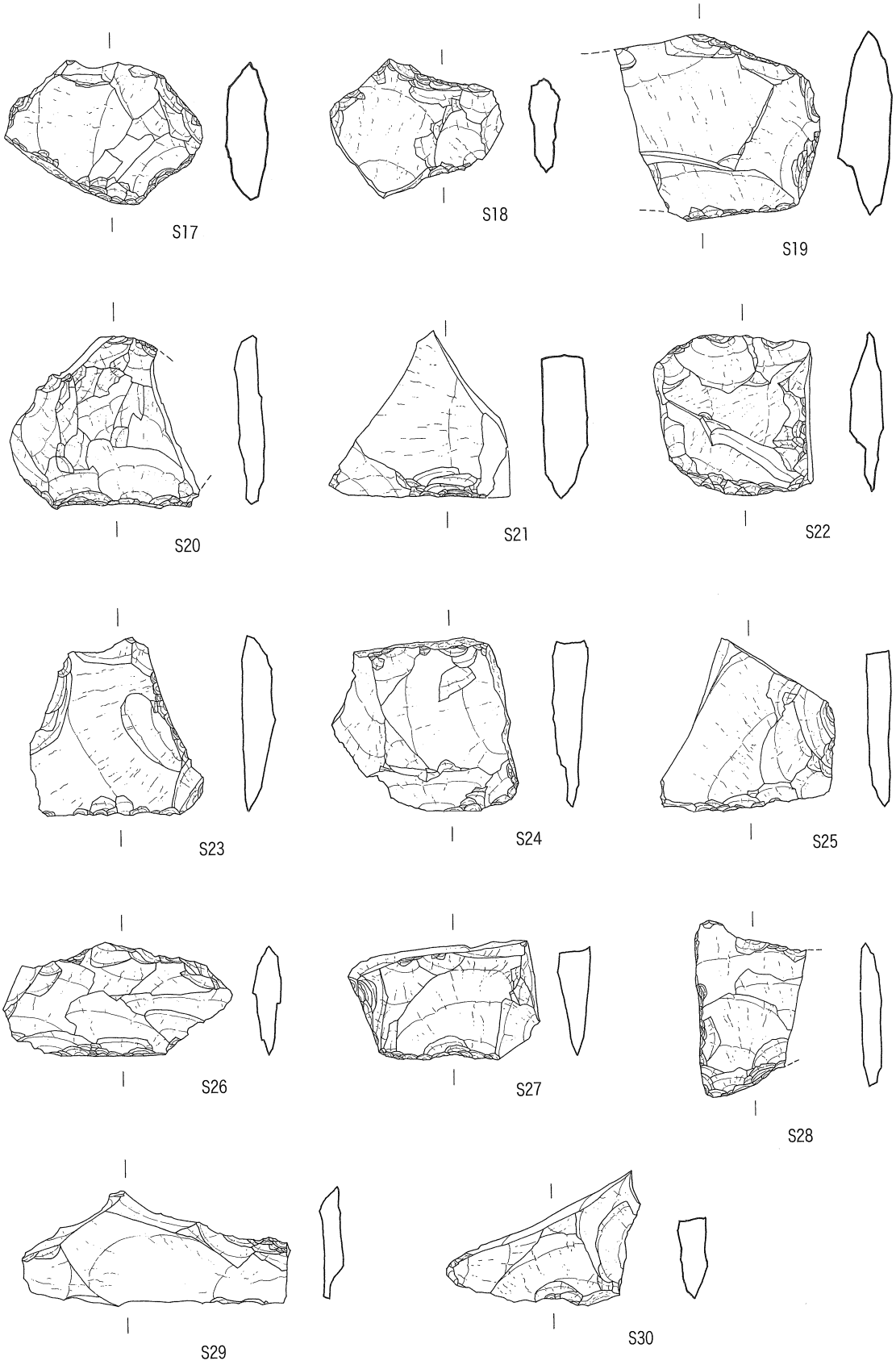
第１節　第一調査区

Ｎ２区　ＳＤ－２出土石器（第70図～73図）

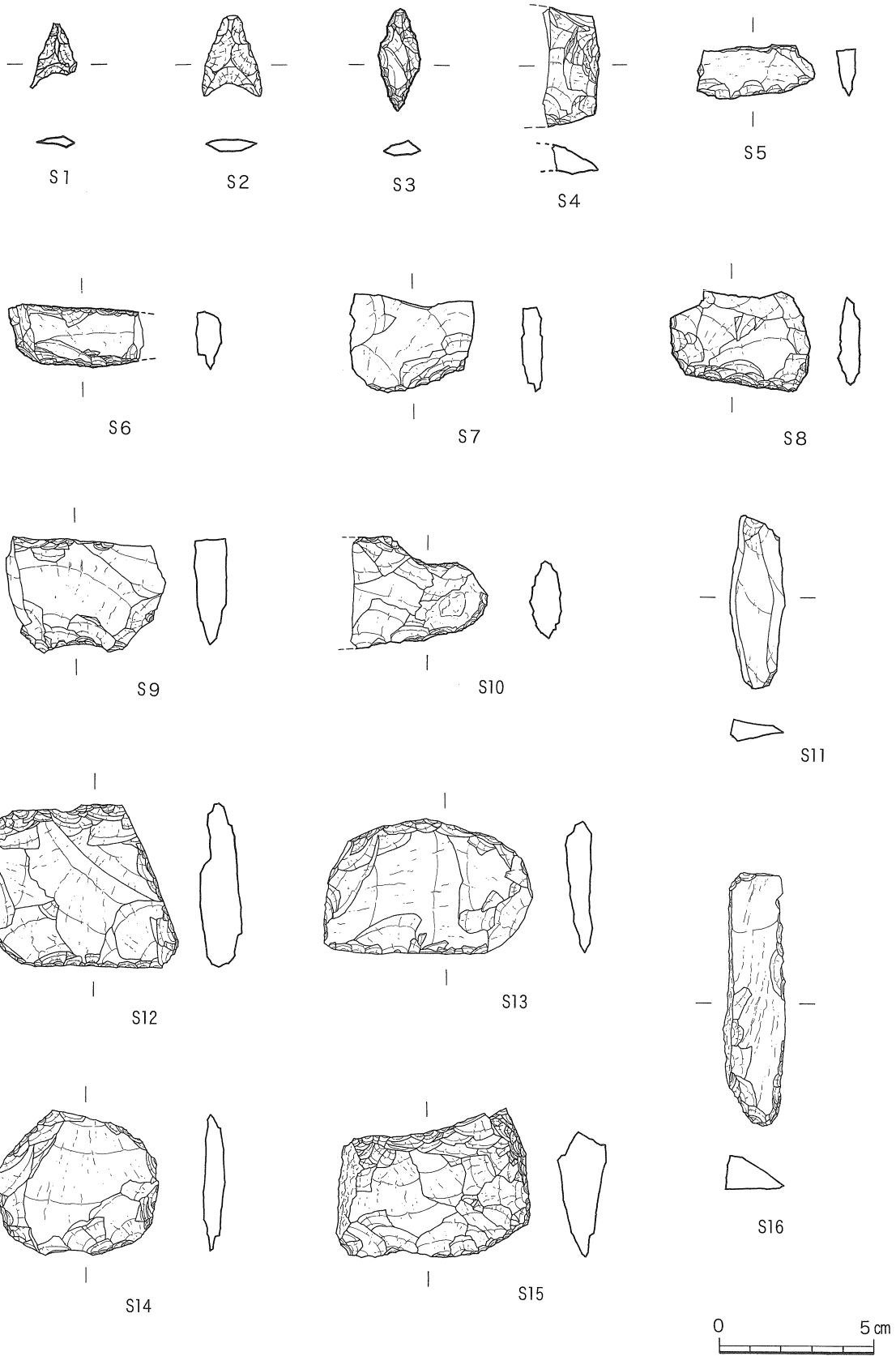
この溝からは石鏃、石錐、楔形石器、石包丁、スクレイパー、柱状片刃石斧などの石器とともに多量のサヌカイト片が出土した。Ｓ1～44･48いずれもサヌカイト製である。Ｓ６･８は楔形石器で、平行するように対応する２辺に細部調整が行われている。Ｓ11は二次加工がほとんど行われていない。石錐の素材剥片であろうか。Ｓ11～15・17・20・22～23・26・27・39はスクレイパーである。剥片の形状は不定であり、長方形、方形、円形などさまざまである。今回は剥片の周縁に細部調整が十分に行われており、刃部が作出されているものをスクレイパーとして扱ったが、調整剥片のなかにスクレイパーとすべきもの多くが含まれていることを断っておく。Ｓ31は二次加工のある剥片で、刃部はまだ形成されていない。ただ上端面に細部調整を集中して行うことで、抉りを作出している。Ｓ32は打製石包丁を楔形石器として転用したものと思われる。Ｓ33は下端の刃部に光沢痕が認められる。Ｓ41は石鍬と考えられ、下端面は鋭角を呈し、丁寧に調整されていることから刃部であると思われる。Ｓ37・40・42・43は打製石包丁で、このうちＳ40・42・43には抉りがある。またＳ42・43の一部には光沢痕が認められる。Ｓ44には二次加工がわずかに施されているが、素材剥片の形状を保っている。大きさや形状を考えると、このような剥片を打製石包丁の素材として剥離したのではないかと思われる。Ｓ45は泥岩製？、Ｓ46は頁岩製の磨製石包丁で、いずれも両面穿孔である。Ｓ45は研磨によって体部と刃面との間に稜線が明確に残っている。Ｓ47は緑色片岩製の柱状片刃石斧であり、前面ともに丁寧に研磨が施されている。Ｓ48は大形剥片であり、周縁部のみ二次加工を施している。なお裏面は自然面に覆われている。

Ｎ２区　ＳＤ－３出土石器（第74図から75図）

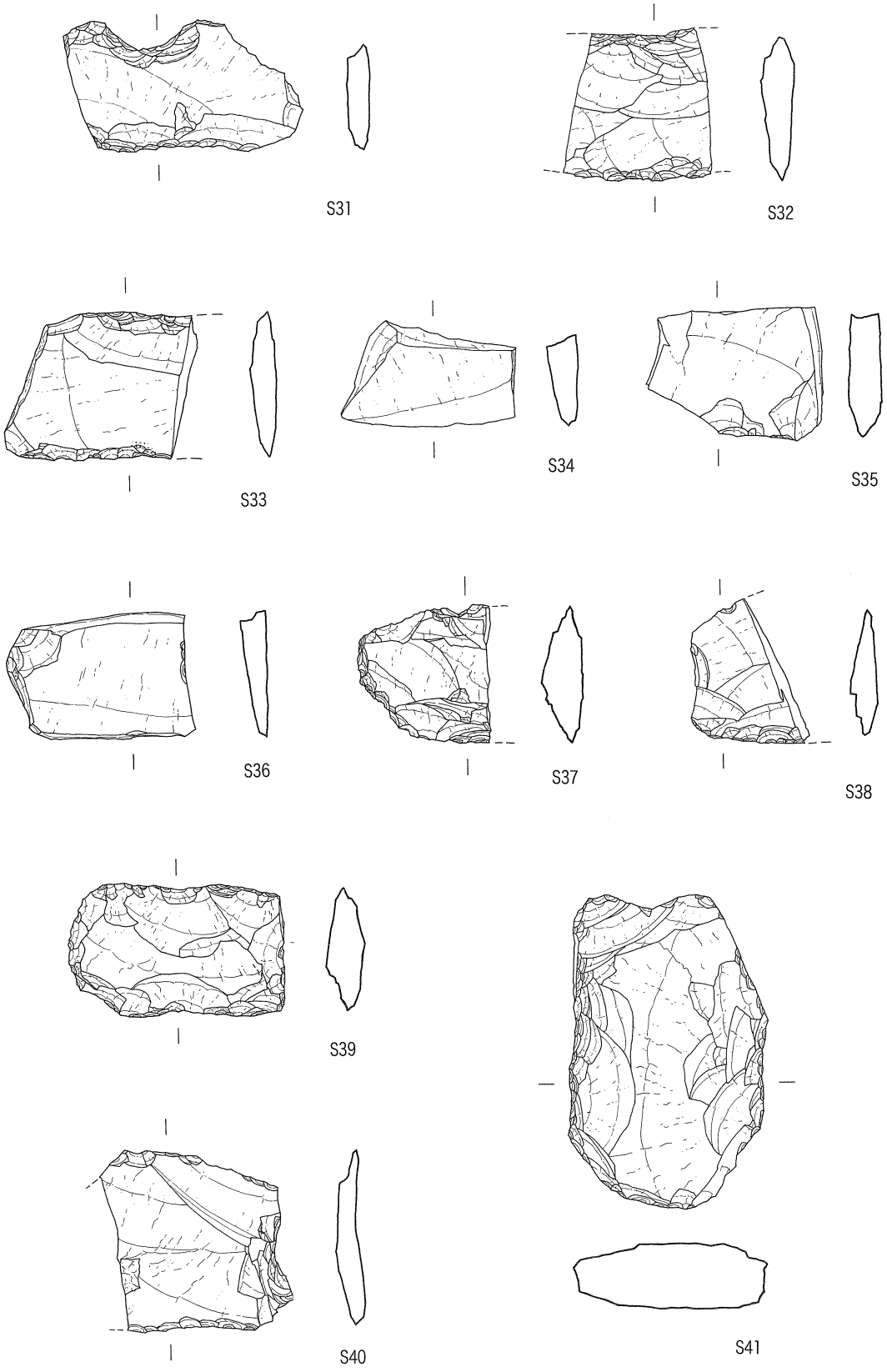
この溝からは石鏃、石錐、楔形石器、スクレイパー、石包丁、扁平片刃石斧などとともにサヌカイト片が少なからず出土した。Ｓ49～85はすべてサヌカイト製である。Ｓ49～52は凹基式の石鏃である。Ｓ53は平基式の石鏃で、縁辺のみ細部調整を施している。Ｓ54は長さが長く、細部調整も刃部を形成するというよりも剥片自体を細長く整えるように行われていることから、石錐の未成品であると考えられる。Ｓ55～58は石錐である。Ｓ55は頭部と錐部との境が明瞭であり、錐部の一部を欠くが、おそらく錐部が細長いものであったと思われる。Ｓ56は細長い素材剥片の一側面に細部調整を行い、細長い棒状を呈し、一定の幅・厚さを保っている。Ｓ57の裏面は主要剥離面であり、幅の狭い部分に細部調整を集中して行うことで錐部を作出している。Ｓ50は頭部と錐部とが区別されているが、錐部が短い。Ｓ59・60は欠損しているが、端部に抉りがつく打製石包丁である。Ｓ72・74・82はスクレイパーである。剥片の形状は66～69・



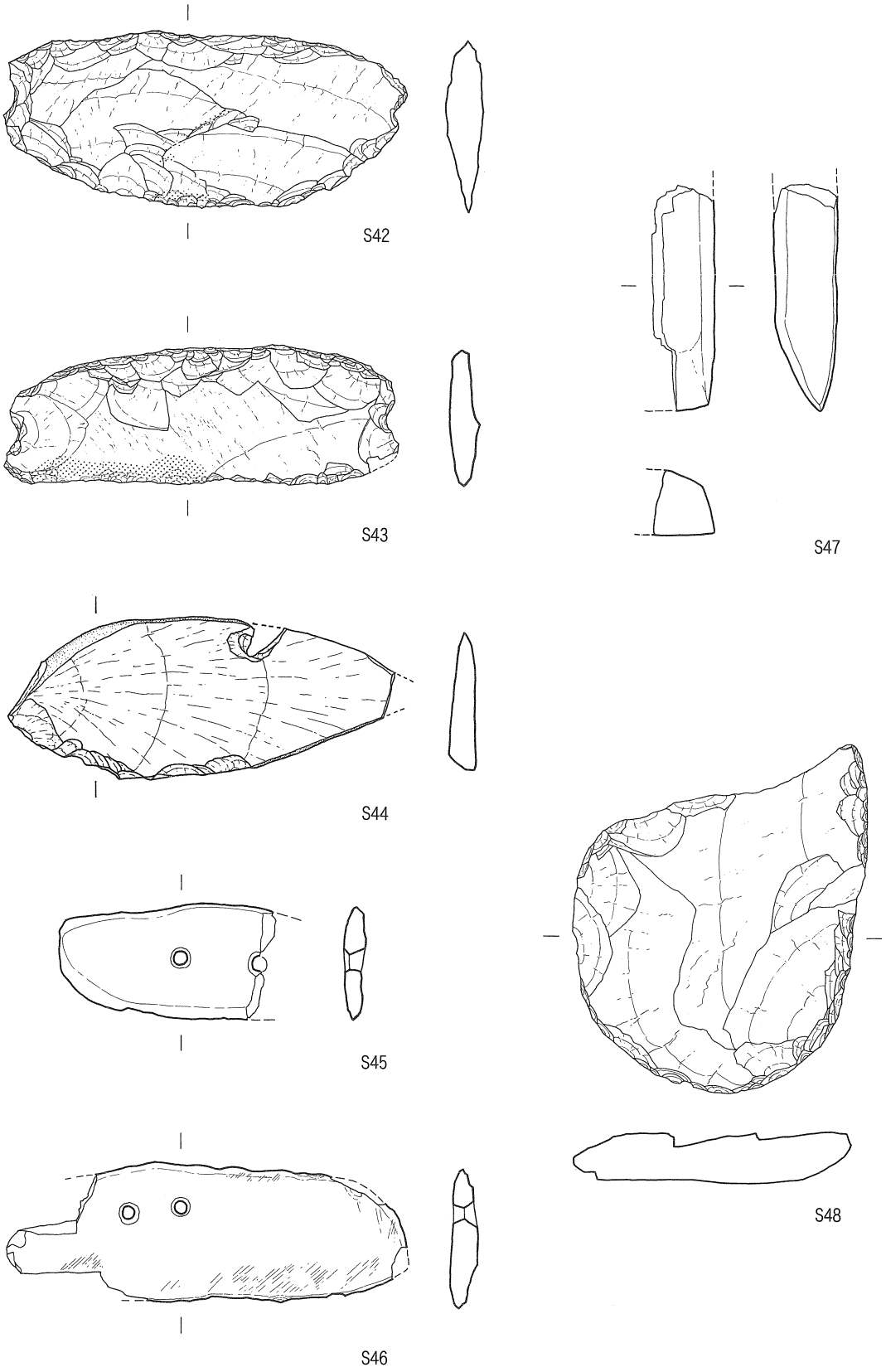
第70図　Ｎ２ＳＤ－２出土石器（１）（縮尺１/２）



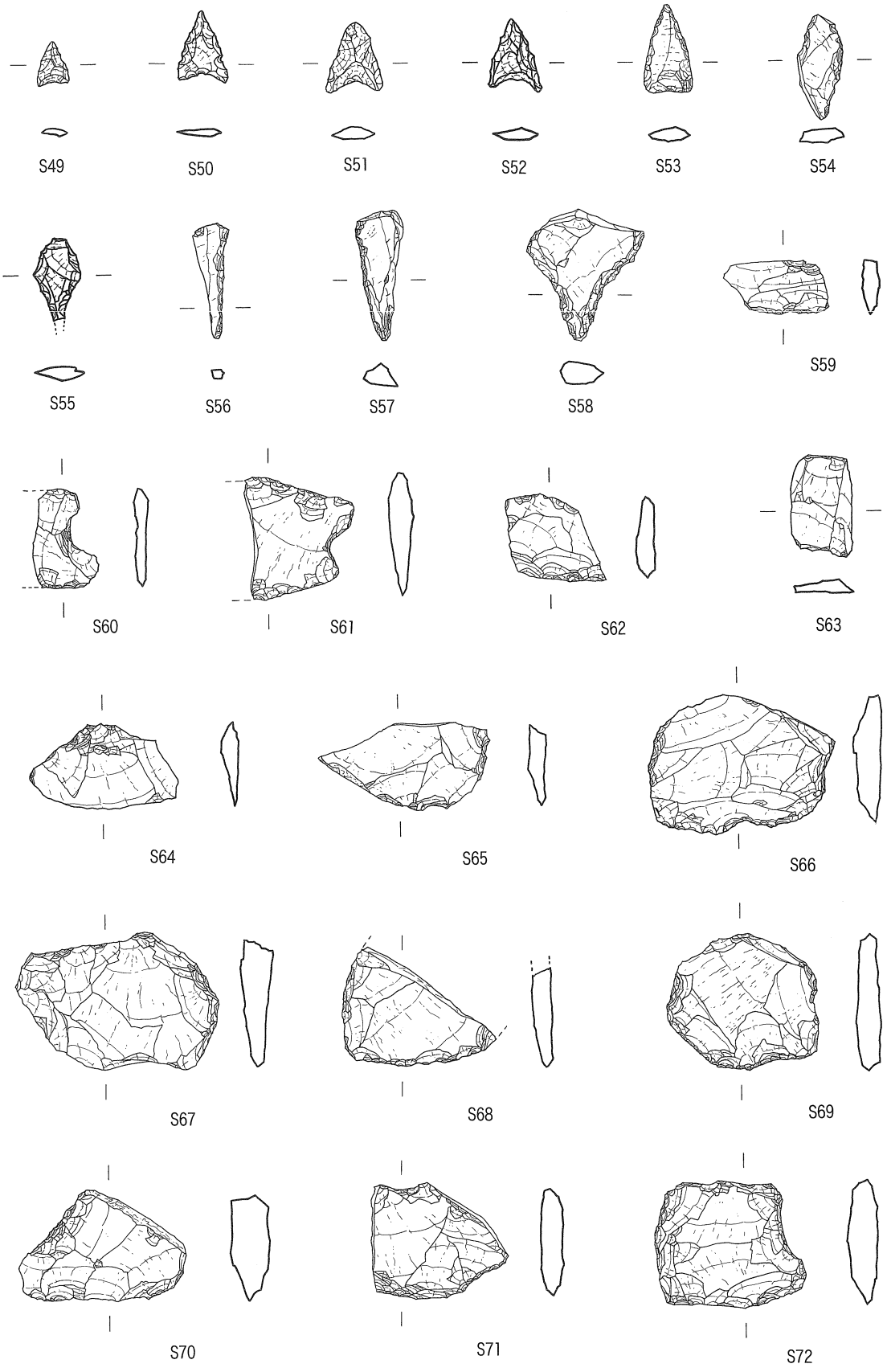
第71図　Ｎ２ＳＤ－２出土石器（２）（縮尺１/２）



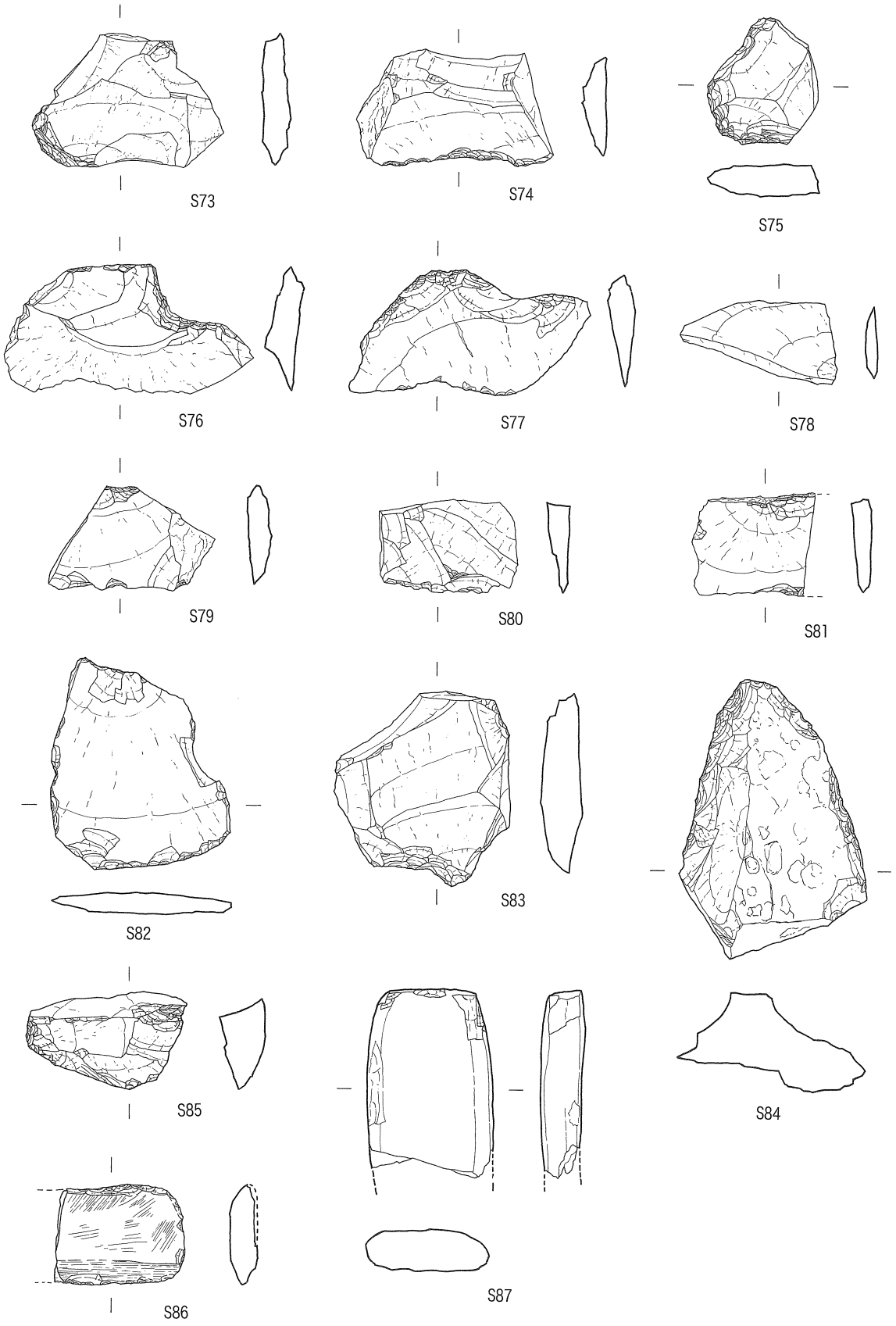
第72図　Ｎ２ＳＤ－２出土石器（３）（縮尺１/２）



第73図　Ｎ２ＳＤ－２出土石器（４）（縮尺１/２）



第74図　Ｎ２ＳＤ－３出土石器（１）（縮尺１/２）

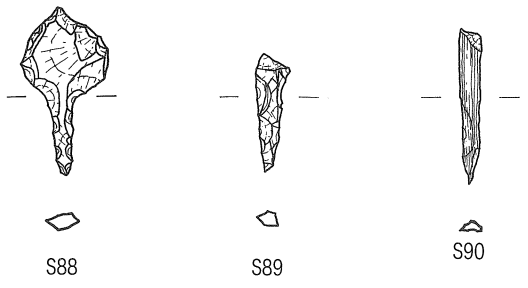


第75図　Ｎ２ＳＤ－３出土石器（２）（縮尺１/２）

71・長方形・方形・円形・台形などさまざまである。S68・69・72は縁辺に細部調整を連続的に施している。S72の右側面には細部調整を集中的に行い、抉りのようなものを形成している。S74・82は主要剥離面を残し、一辺のみ連続した細部調整を行い、刃部を作出している。S76は刃部の調整が行われていないが、右上端部に細部調整を集中的に行うことで抉りを形成している。S84は裏面に主要剥離面の一部を、表面には自然面を多く残しており、縁辺のみ細部調整を行っている。S86は頁岩製の磨製石包丁であり、体部は研磨が丁寧に施されており、刃部との境には研磨による稜線が明瞭に残っている。また全体的に幅が狭く、刃部と背部に調整剥離が行われていることから、再利用しようとしたものではないかと思われる。S87は緑色片岩製の扁平片刃石斧であると考えられる。前面に研磨が施されているが、丁寧ではない。

N2区　SD－4出土石器（第62図）

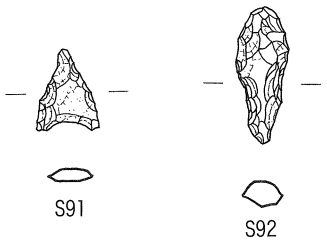
この溝からは石器や多くのサヌカイト片が出土したが、器種が判断できたものは意外と少なかった。今回掲載したものは全て石錐である。S88は頭部と錐部が区別されており、錐部は細長い。S89は棒状を呈し、錐部と頭部の区別がない。S90は緑色片岩製であり、何らかの欠損部分を石錐として転用したものではなかろうか。上半部の調整は行われていないが、下半部は調整剥離によって幅と厚さを一定に保つように整形しているように見受けられる。



第62図　SD－4石器実測図（縮尺1/2）

N2区　P12出土石器（第63図）

S91はサヌカイト製の石鏃で、凹基式である。S92はサヌカイト製の石錐で、錐部は短く、錐先の一部には使用痕が認められる。

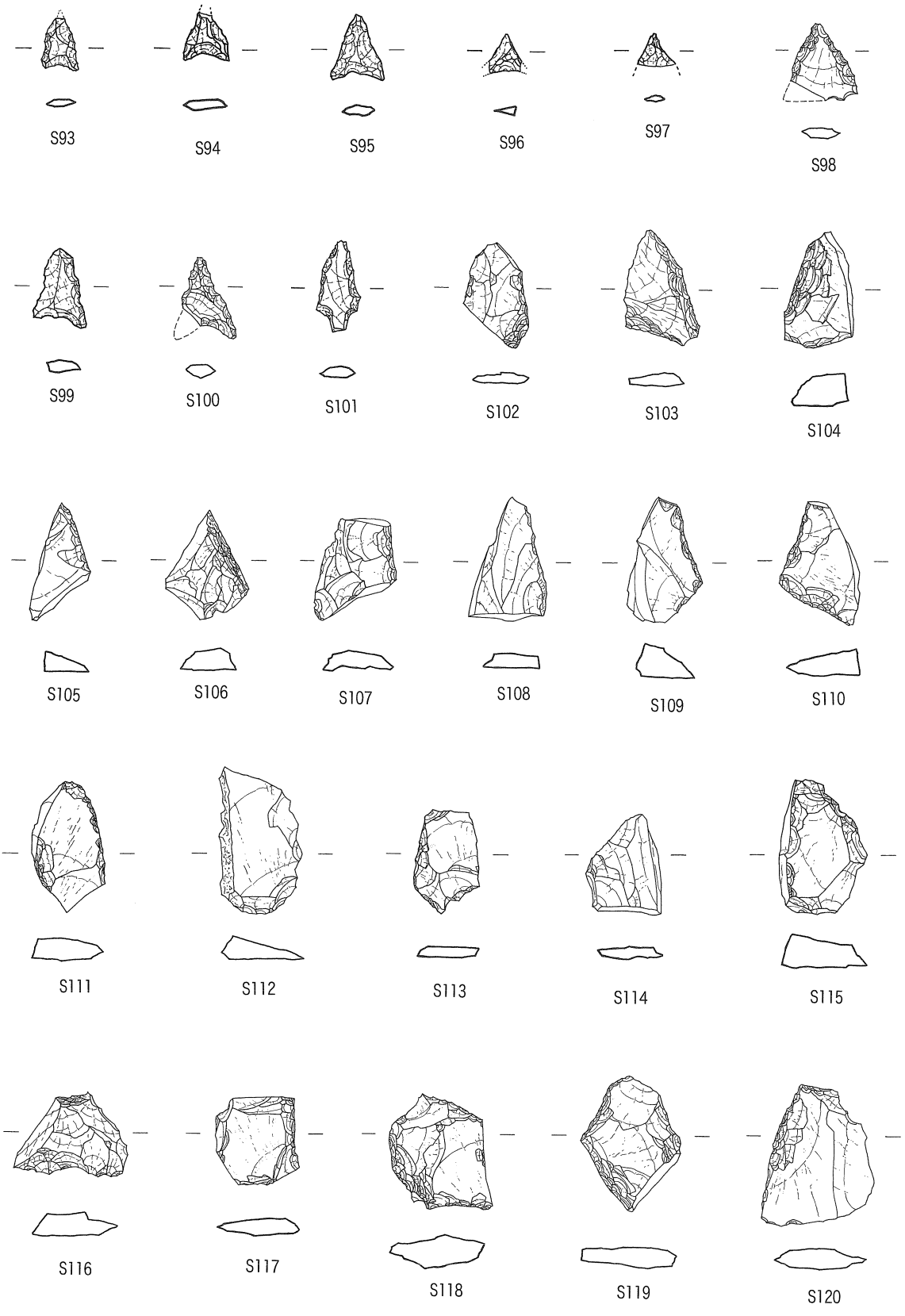


第63図　P12石器実測図（縮尺1/2）

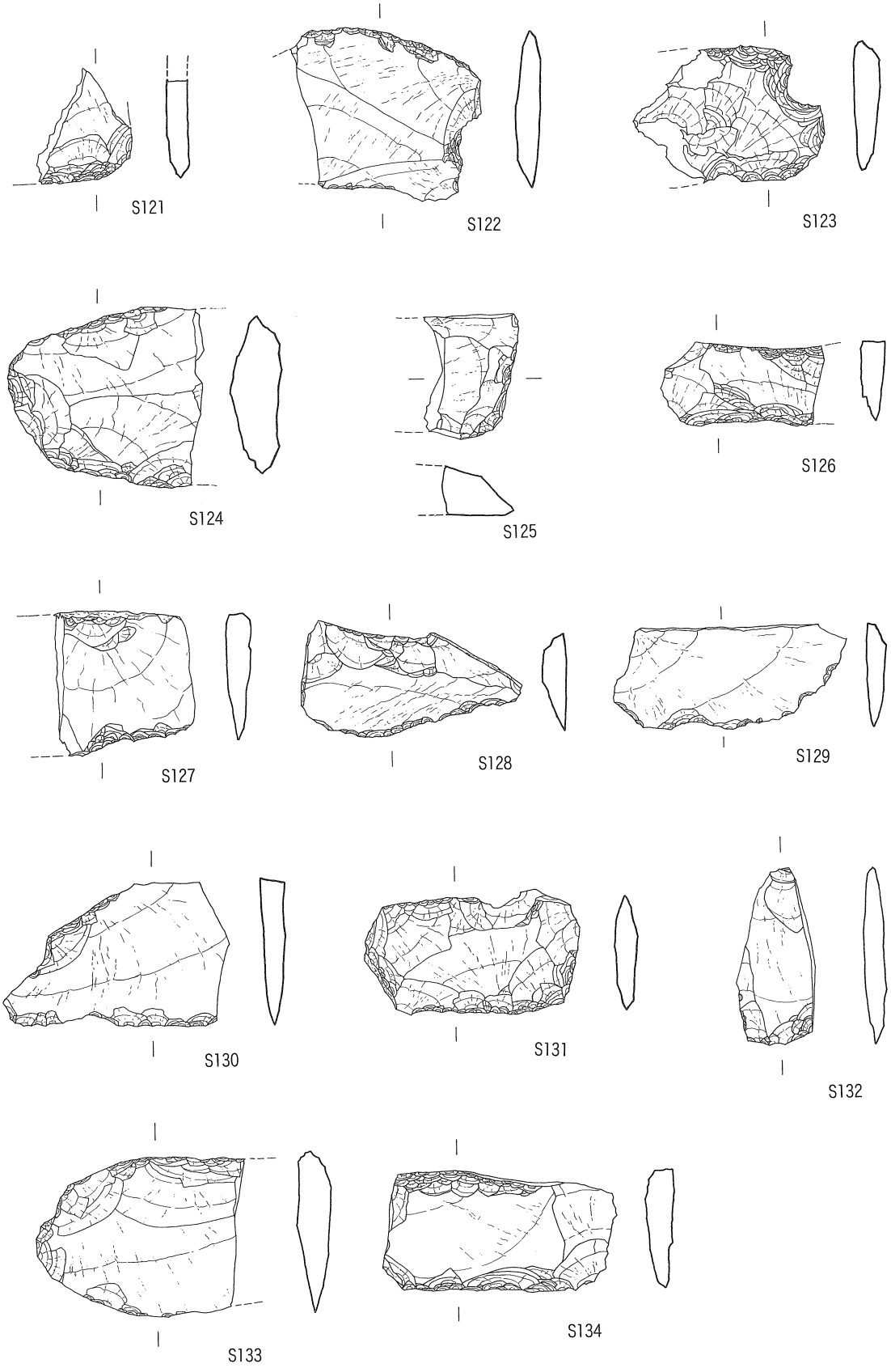
N3区　集石遺構出土石器（第77図～82図）

この集石遺構はN3区SD－1の北側にあり、SD－1が完全に埋没してから、その上に築かれている。遺構の確認面は耕土直下である。集石遺構はこぶし大の砂岩が約2mの範囲に集中してみられ、遺物も石とともに集中して出土した。また遺構に掘り方は認められなかった。集石は明らかに人為的なものであるが、石の配置に規則性は認められず、意図的に「集石」を構築したとは言い難い。後世に石とともに遺物が人為的に集められた可能性が示唆されるが、遺物の出土量は多く、そのほとんどが弥生時代前期に比定されるものである。よって層位的には不明な点が多いが、土器の様式や石器の組成を充実させるのには十分であると思われる。

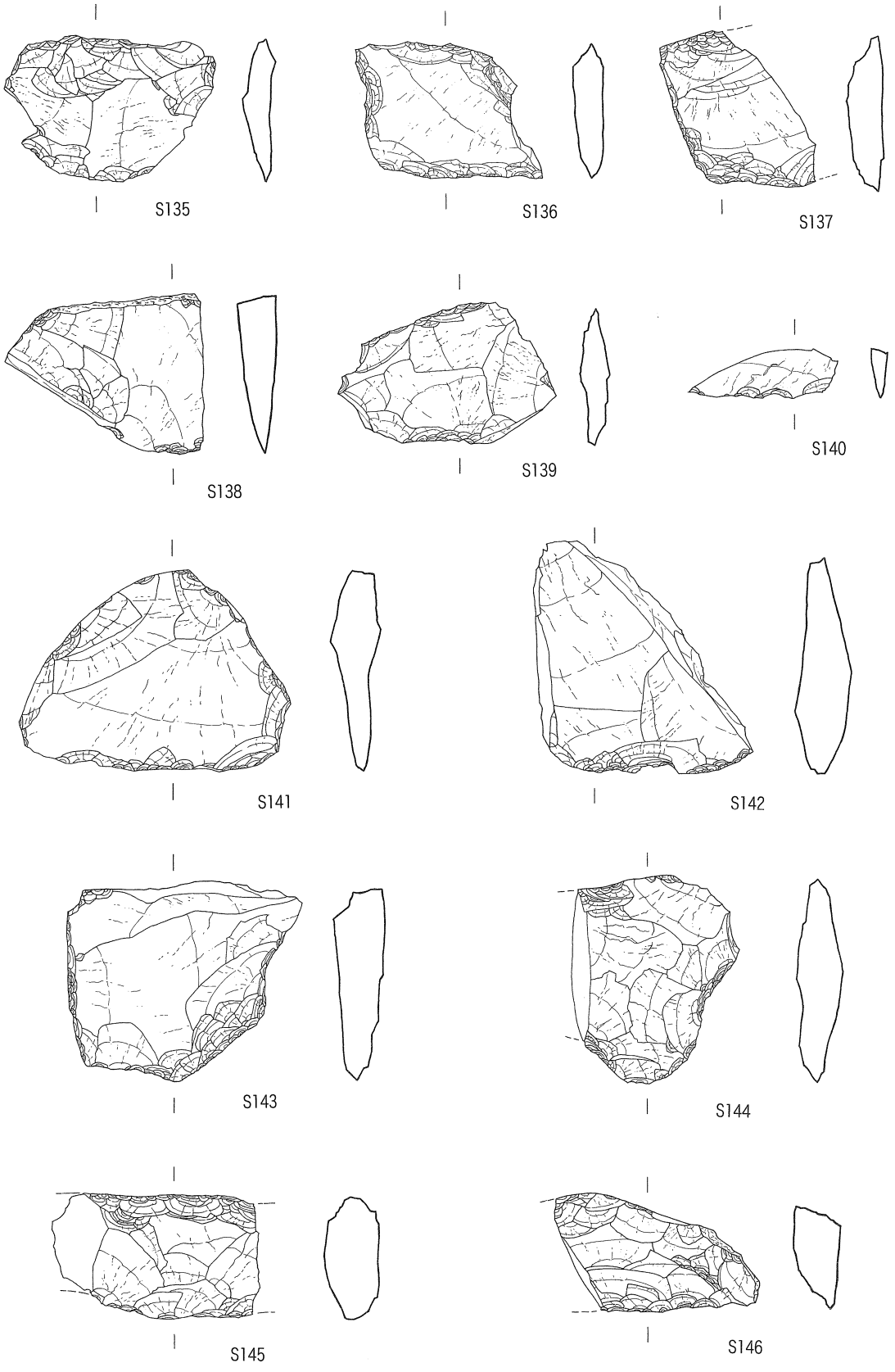
S93～172はサヌカイト製である。S93～95・99・100は凹基式の石鏃である。S96・97は石鏃であるが、一部を欠いている。S98は石鏃の未成品であり、先端部・側辺の細部調整は行われているが、基部の調整は行われていない。S101は有茎式の石鏃で、縁辺のみ細部調整を行っており、主要剥離面の一部を残す。S102～107・109・111は石鏃未成品であ



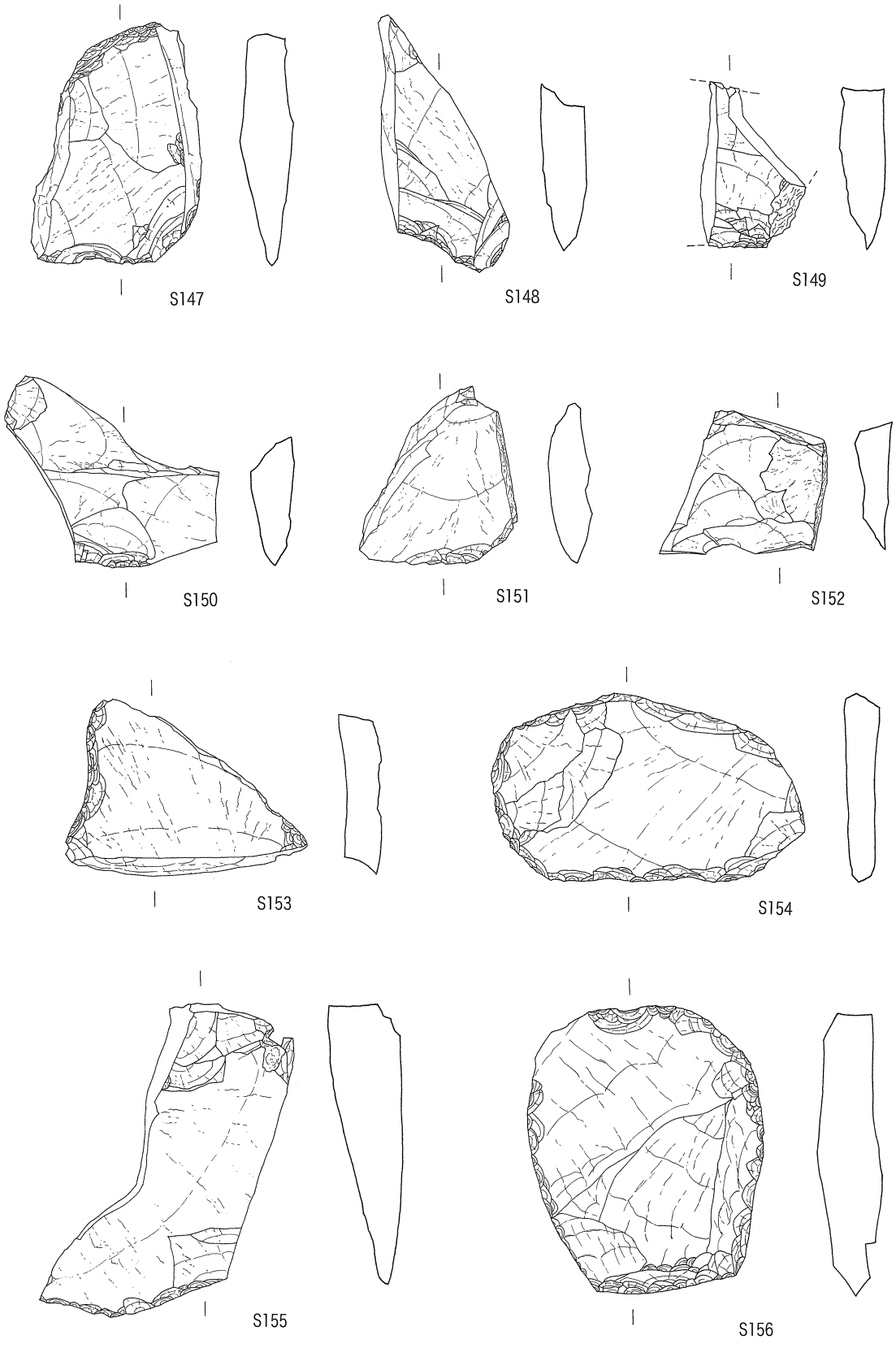
第76図　Ｎ３集石遺構出土石器（１）（縮尺１/２）



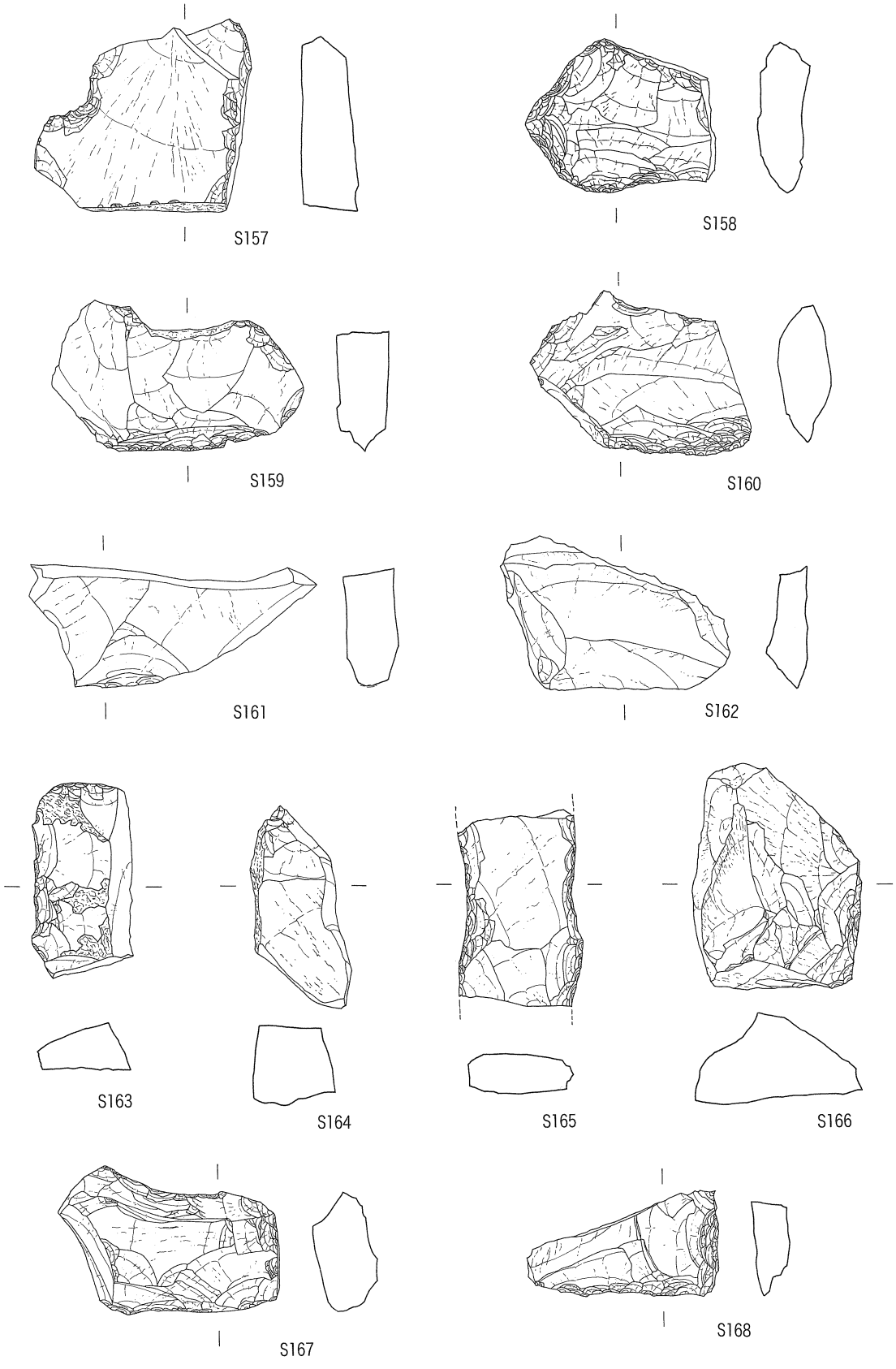
第77図　Ｎ３集石遺構出土石器（２）（縮尺１/２）



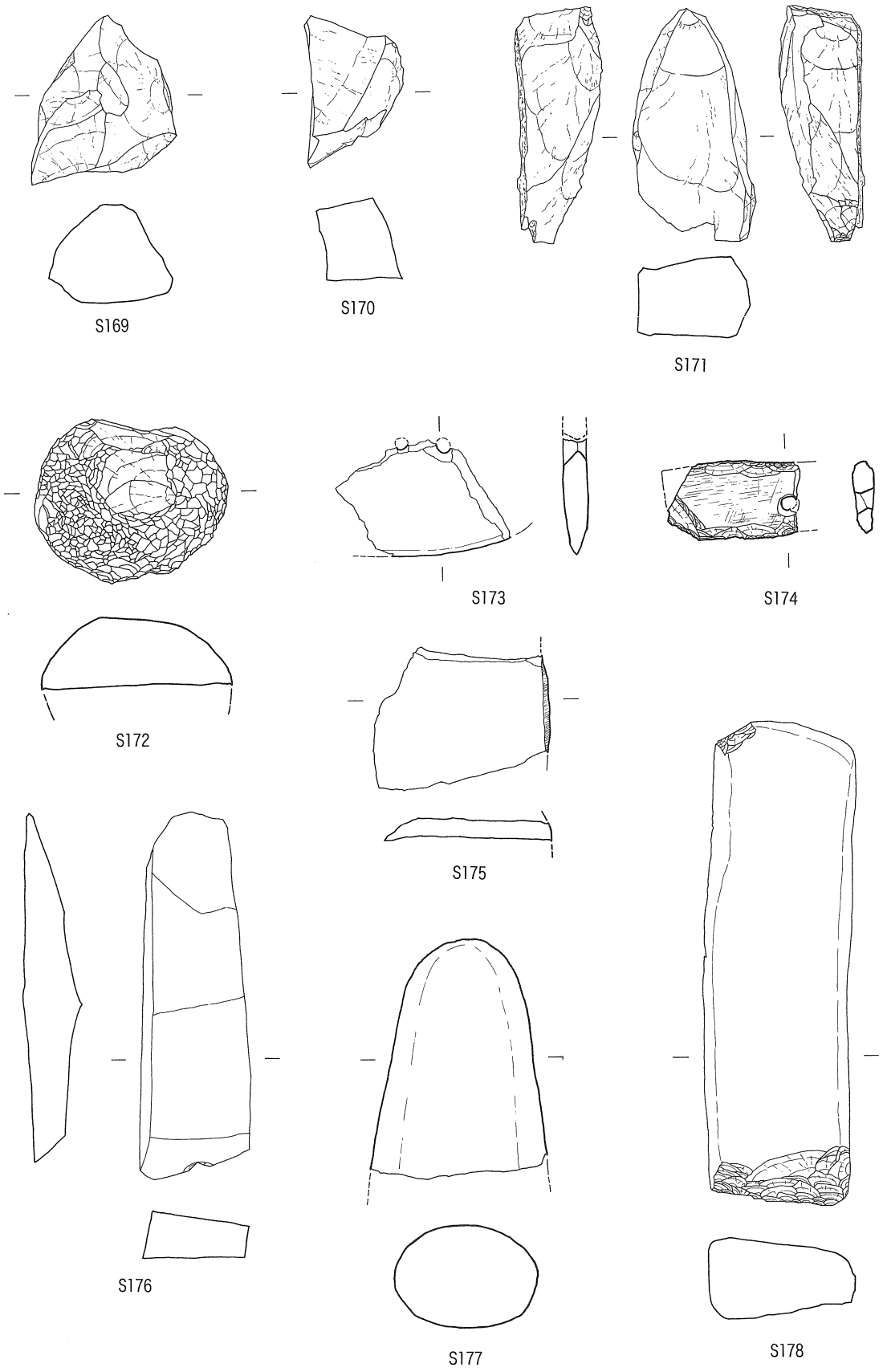
第78図　Ｎ３集石遺構出土石器（３）（縮尺１/２）



第79図　Ｎ３集石遺構出土石器（４）（縮尺１/２）



第80図　Ｎ３集石遺構出土石器（５）（縮尺１/２）



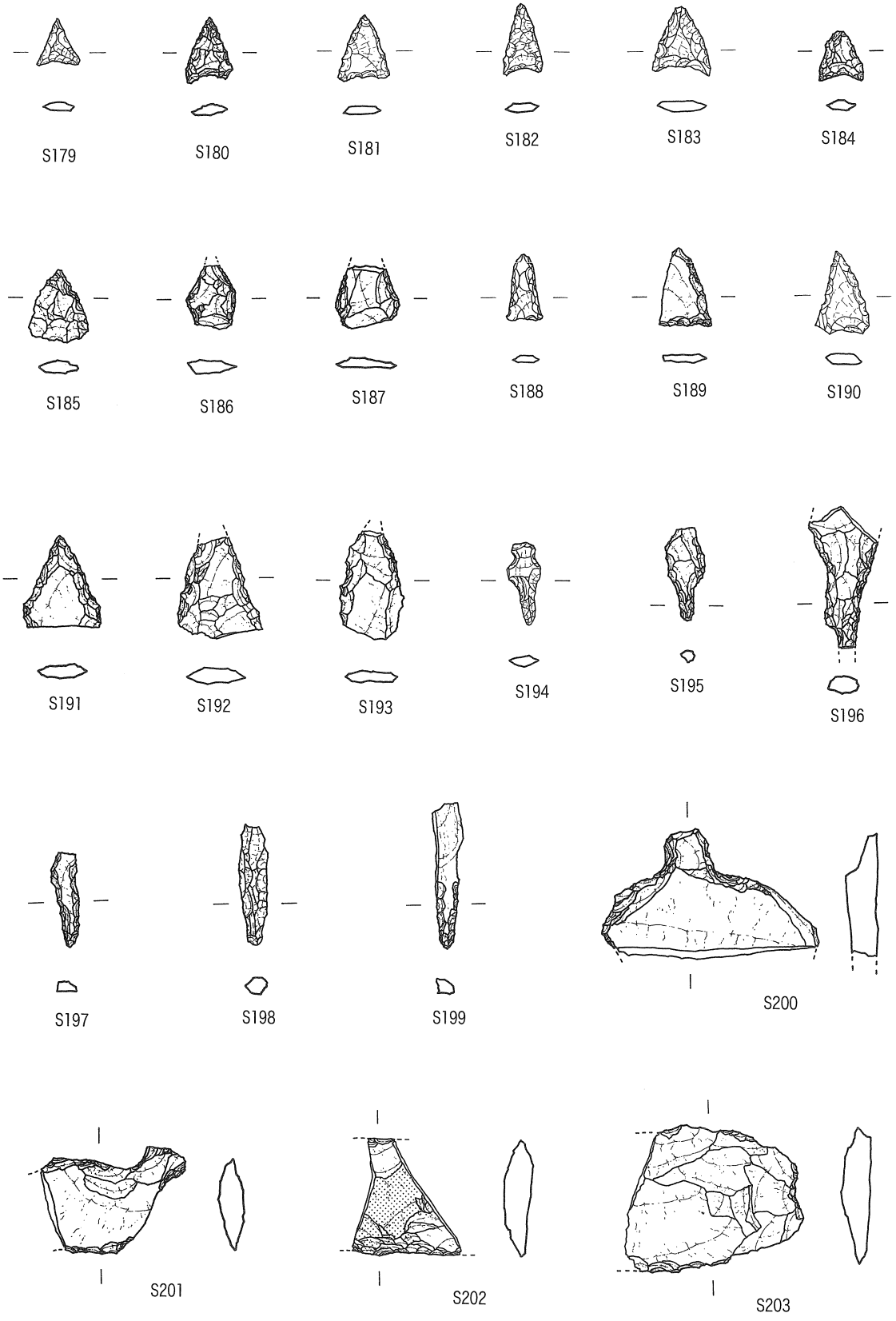
第81図　Ｎ３集石遺構出土石器（６）（縮尺１/２）

る。これらは石核から剥離した剥片を素材としているが、主要剥離面の痕跡を見る限りでは一時剥離の打撃の方向や角度は一定ではない。したがって石鏃の素材剥片の多くは石核から目的とする剥片を規格的に剥離するのではなく、石鏃の規格に見合うような法量の剥片を作出するために、さまざまな剥離を行ったと考えられる。また他の石器の製作途中で生じた剥離のなかで、石鏃の法量に足るような剥片があれば、それを素材とすることも十分に考えられる。S104～106・108・109・111に見られるように、石鏃の細部調整はまず一側縁から行われているものが多い。S122～124・133・136は打製石包丁である。S122・123・133には抉りがある。S136は打製石包丁としては長さが短いが、両側面に抉りが見られ、右側面の抉りは欠損後の調整であることから再利用したものと思われる。S126・134・145・165は対応する２辺に平行するように細部調整が行われている。石槍の可能性があるが、断言はできない。S127～131・135・137・139・141・142・146・156・158～160・168はスクレイパーである。S131・141・154は周縁に細部調整を施しており、丁寧な作りである。S156は縁辺に細部調整が施されており、刃部は鋭利である。両側面は摩耗が著しい。また裏面も同様の調整が行われている。他のスクレイパーは１辺もしくは２辺に細部調整を行い、刃部を作っており、形状はさまざまである。S157は刃部は形成されていないが、細部調整を集中的に行うことで抉りのようなものを作出している。S166は残核であり、左側面に剥片が剥ぎ採られた痕跡がある。S172はサヌカイト製の敲石で、半分を欠くが、おそらく楕円に近い球体を呈していたと思われる。敲打痕は中央部分を除いて、ほぼ前面に見られる。S173は頁岩製の磨製石包丁で、両面ともに丁寧に研磨が施されている。穿孔は両面から行われており、内孔部には紐擦れ痕がある。S174は黒色頁岩製の磨製石包丁である。石包丁としては幅が狭く、体部の研磨以後に刃部・背面の調整剥離が行われているため、もともとの製品を再利用しようとしたものと思われる。なお穿孔は両面から行われている。S175は緑色片岩製の磨製石斧である。大部分を欠いているが、右側面に研磨痕がある。S176は磨製の柱状片刃石斧と思われるが、断言はできない。前面ともに平坦であるが、これが研磨によるものかは不明である。S177は磨製の太型蛤刃石斧で、刃部は欠損しているが、丁寧に研磨が施されている。S178は打製である。基部・両側面は平坦であるが、研磨は行われていない。下端面は調整剥離が行われており、刃部の可能性がある。

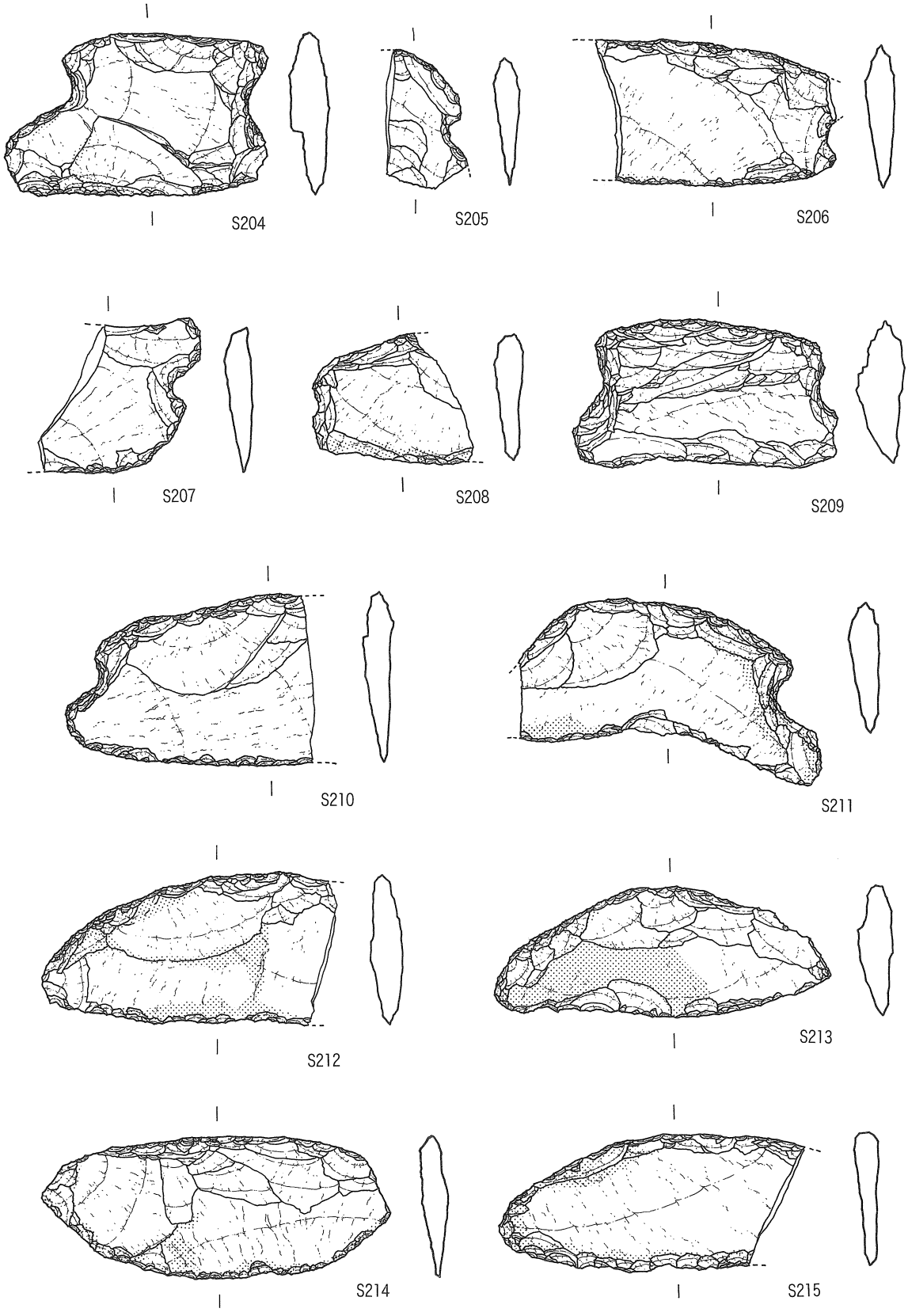
Ｎ３区　ＳＤ－１出土石器（第82図～89図）

この溝からは夥しい土器とともに石鏃・石錐・楔形石器・石匙・スクレイパー・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・砥石などの石器や膨大な量のサヌカイト片が出土した。S179～226はサヌカイト製である。S179は平基式の小型の石鏃で、西部調整が丁寧に施されている。S181は平基式の石鏃で、周縁のみ細部調整が行われている。S180・182・183・184は凹基式の石鏃であり、S184は小形である。S185は石鏃であるが、細部調整は粗雑である。基部は円基式であろうか。S188は平基式の石鏃であるが、基端部が外へ突き出ており、幅に対する長さが長い。S186・187・189～193は石鏃の未成品である。S189は右側縁と基部の細部調整は行われているが、左側縁は行われていない。S190・191・192は両側縁の細部調整は行われているが、基部には施されていない。S194・195は石錐で、錐部と頭部の区別がある。S194は頭部の上端には把手のようなものが作出されている。S

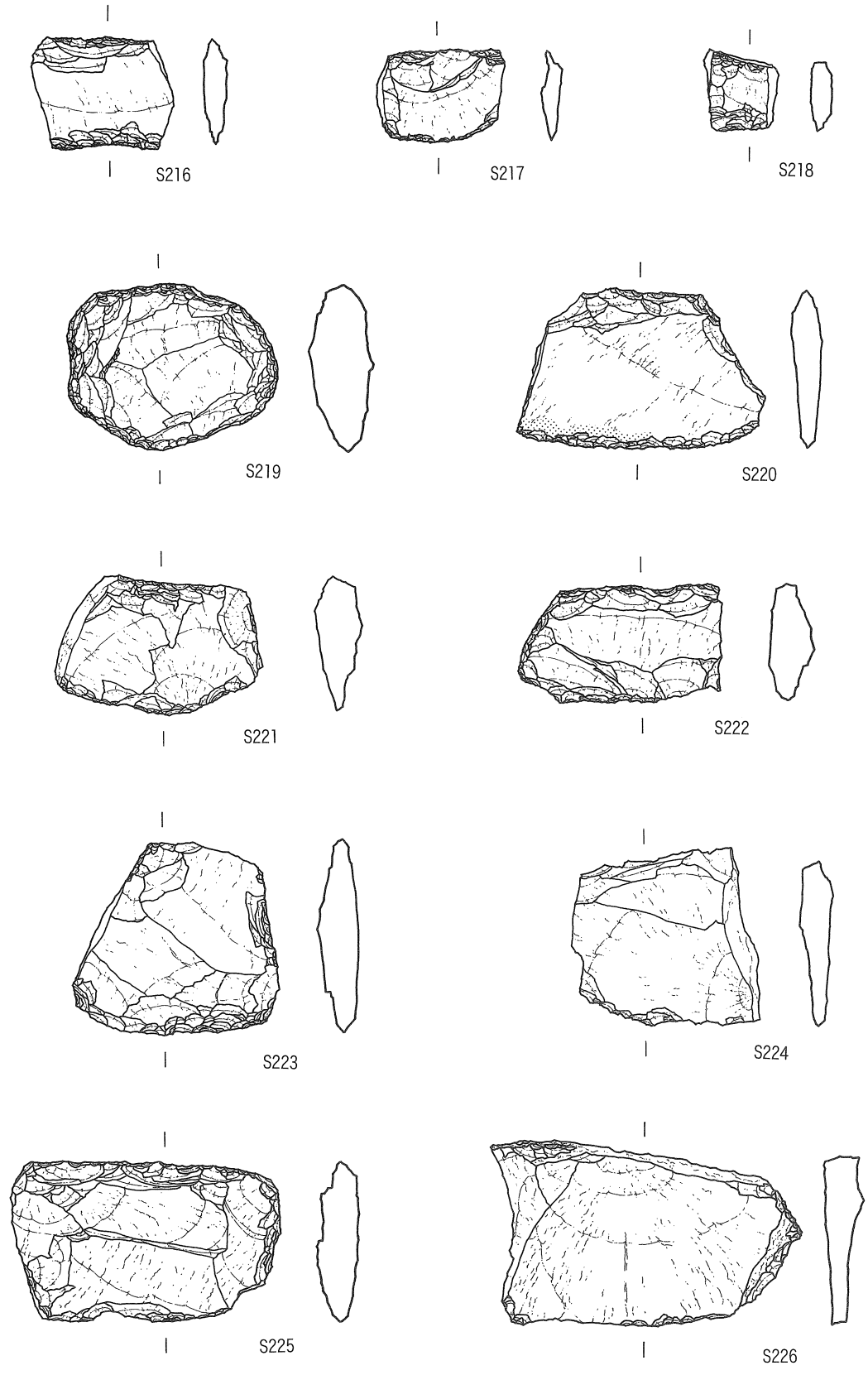
196は石錐としては大型品であり、錐部と頭部の区別がつけられている。S197～199は棒状の石錐である。S197・198は丁寧に細部調整が行われているが、S199は錐部の先端しか細部調整は行われていない。S200は石匙であり、つまみが上に付く。刃部は欠損しており、つまみの両側は集中的に細部調整が行われているが、裏面は細部調整がほとんど行われていない。S201は石匙であり、つまみが横に付く。つまみの両側から丁寧に細部調整を行っている。また刃部は縁辺のみ調整を行っている。S202は楔形石器かもしれないが、もともとは打製石包丁であったと思われる。なお体部の一部には光沢痕が見られる。S203～215は打製石包丁である。S203～211には抉りがあるが、S212～215には抉りは入らない。平面形では長方形のものは見受けられず、ほとんどが背部が湾曲している。特にS211は背部とともに刃部も湾曲している。またS204・206・208・210～215には光沢痕が認められる。S216～218は楔形石器であり、平行するように対応する2辺に細部調整が施されている。S219はスクレイパーとしたが、周縁に細部調整を丁寧に施しており、一部に敲打痕のような痕跡が認められる。S220～223・225はスクレイパーであり、S220の刃部には光沢痕が見られる。またS223～225の裏面は主要剥離面である。S226はわずかに細部調整が行われているが、素材剥片の形状を保っており、裏面には主要剥離面が残る。打製石包丁もしくはスクレイパーの素材剥片であろうか。S227～229は磨製石包丁であり、全体に研磨痕が見られる。いずれも石材は泥岩であろうか。なおS227・228は両面穿孔である。S230は頁岩と思われるが、剥落が著しく、磨製石包丁であるとは断言できない。もしかしたら未成品の可能性もある。S231は黒色頁岩製の磨製石包丁である。平面形は長方形で、研磨によって体部と刃部との境に稜線が付く。刃部の断面は鋭利ではなく、使用のためか丸みを帯びている。また両面穿孔であるが、内孔部は紐擦れ痕が認められる。S232は緑色片岩製の磨製石包丁であり、平面形は長方形を呈す。穿孔は両面から行われているが、左側の外孔部付近に小さな凹みが見られる。穿孔に失敗した痕跡であろうか。S233は緑色片岩製の磨製石包丁で、背面はやや湾曲している。穿孔は両面から行われており、外孔部の周辺は摩滅が著しい。また刃部の断面は丸みを帯びている。S234・235は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。全面ともに丁寧に研磨されている。S236は泥質片岩製の磨製石斧であろうか。S237は泥岩製の柱状石斧であったと思われる。基部の両側の角は抉られており、横方向の条痕が見られる。おそらく敲石として転用したものであると考えられる。S238は泥岩製の柱状石斧であり、研磨痕が粗く残っているが、丁寧に研磨されている。S239は緑色片岩製の扁平片刃石斧であり、丁寧に研磨が施されている。S240は頁岩製の柱状片刃石斧で、抉りが施されており、左側面と基端面は丁寧に研磨されている。S241は緑色片岩製の柱状片刃石斧で、抉りがある。なお両側面は丁寧に研磨が行われている。S242は緑色片岩製の柱状石斧の基端部付近であると思われ、両側面は丁寧に研磨されている。S243は細粒砂岩製の太型蛤刃石斧であり、刃部の一部は摩滅している。S244は緑色片岩製の磨製石斧であると思われる。S246は黒色頁岩製の太型蛤刃石斧で、粗い研磨痕が残っているが、丁寧に研磨されている。S246は緑色片岩製の太型蛤刃石斧で、丁寧に研磨されている。S247は太型蛤刃石斧である。石材は緑色片岩であろうか。基端は平基である。側縁は丁寧に研磨されているが、一部に装着痕と思われる摩滅が認められる。S248は緑色片岩製の太型蛤刃石斧と思われ



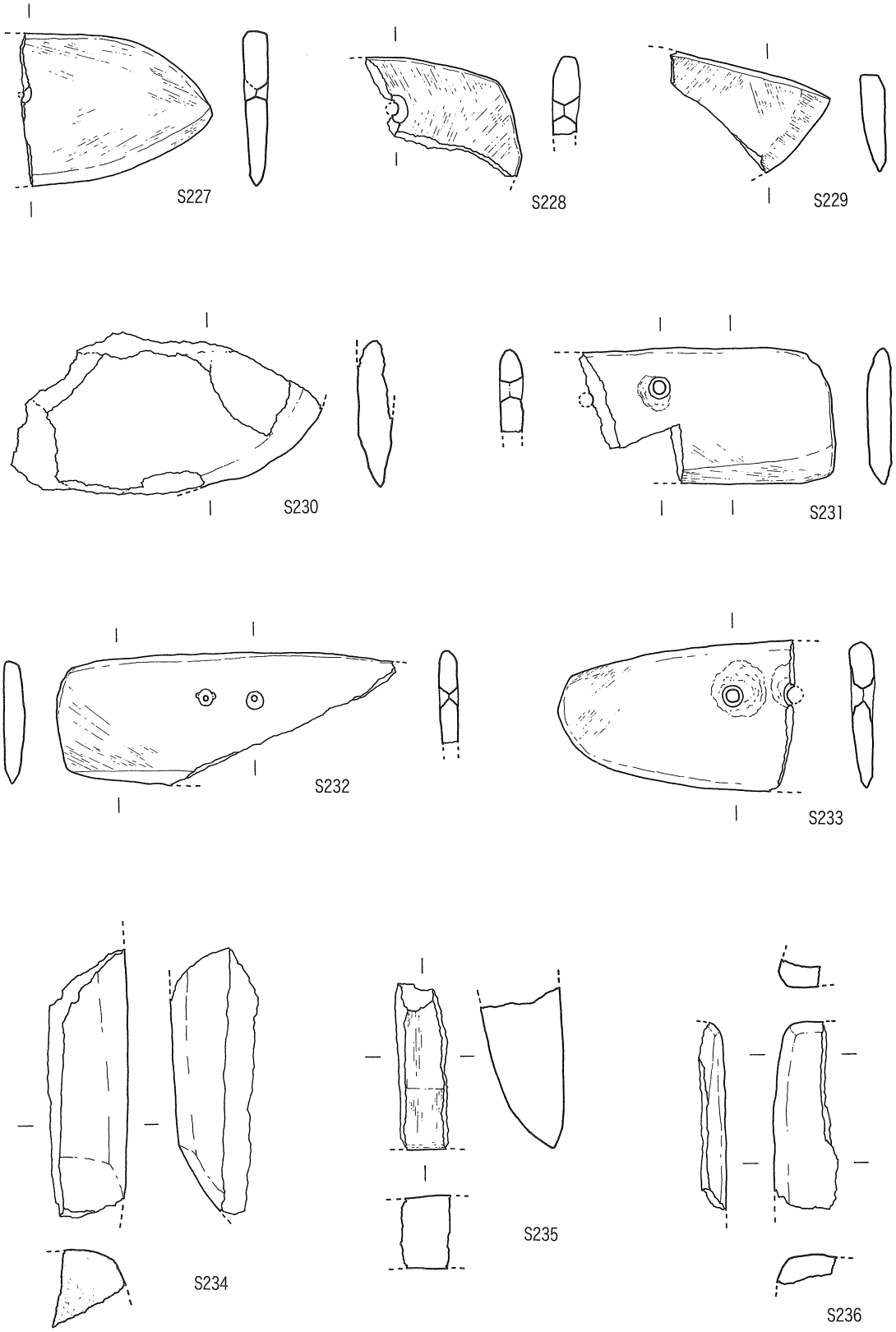
第82図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（１）（縮尺１/２）



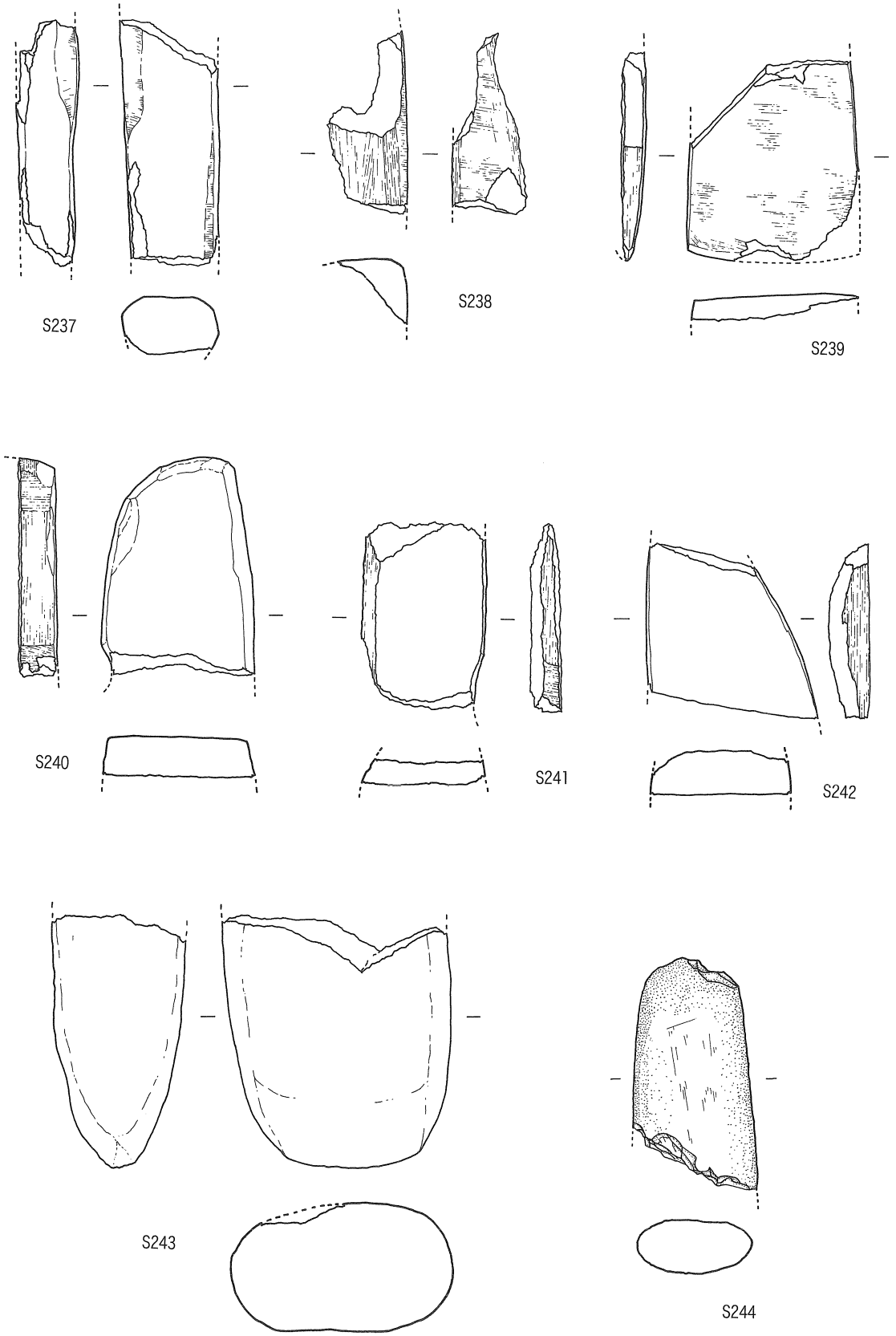
第83図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（２）（縮尺１/２）



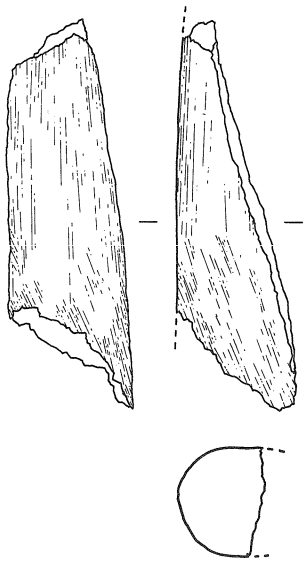
第84図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（３）（縮尺１/２）

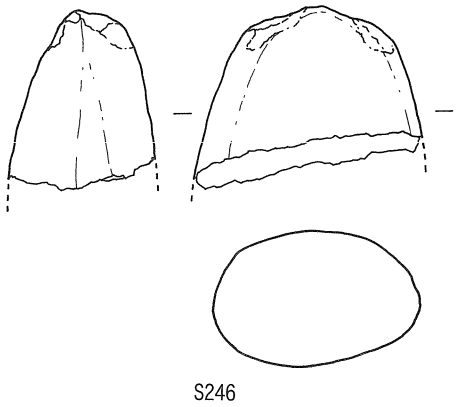


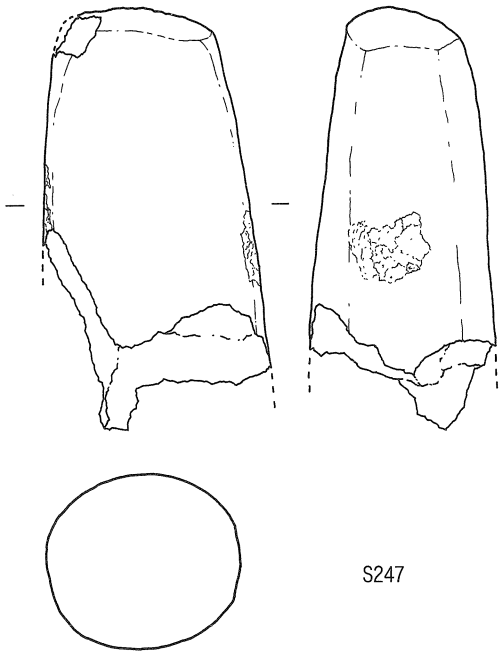
第85図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（４）（縮尺１/２）

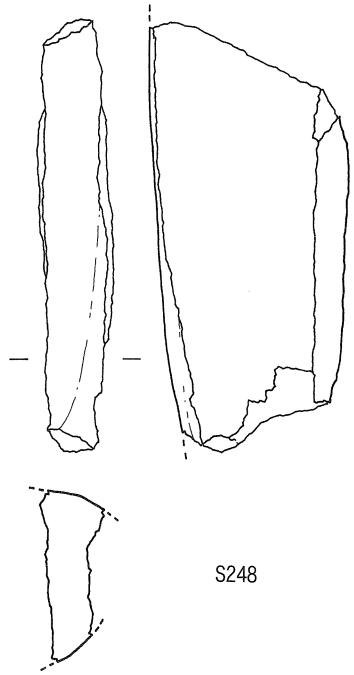


第86図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（５）（縮尺１/２）

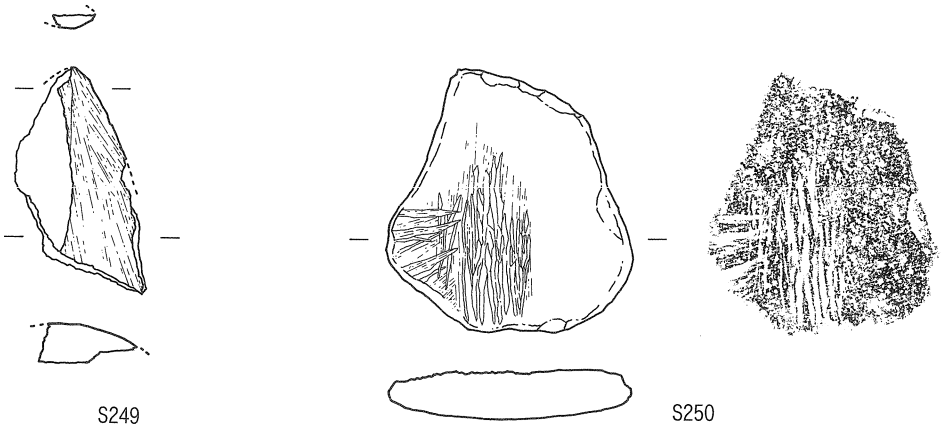


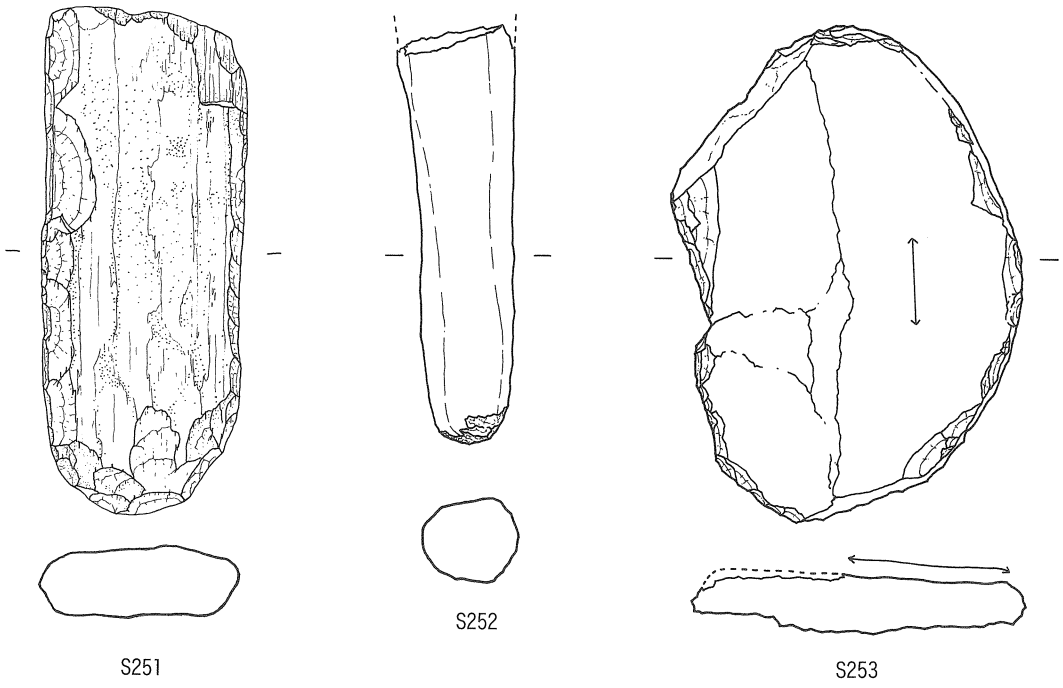




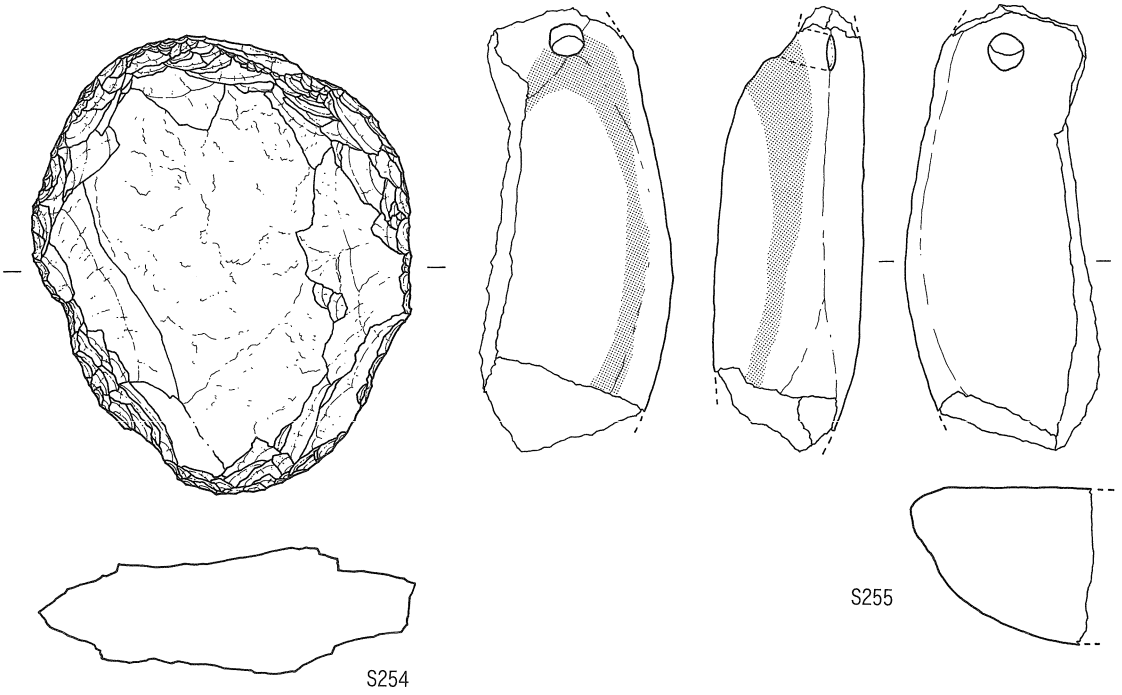


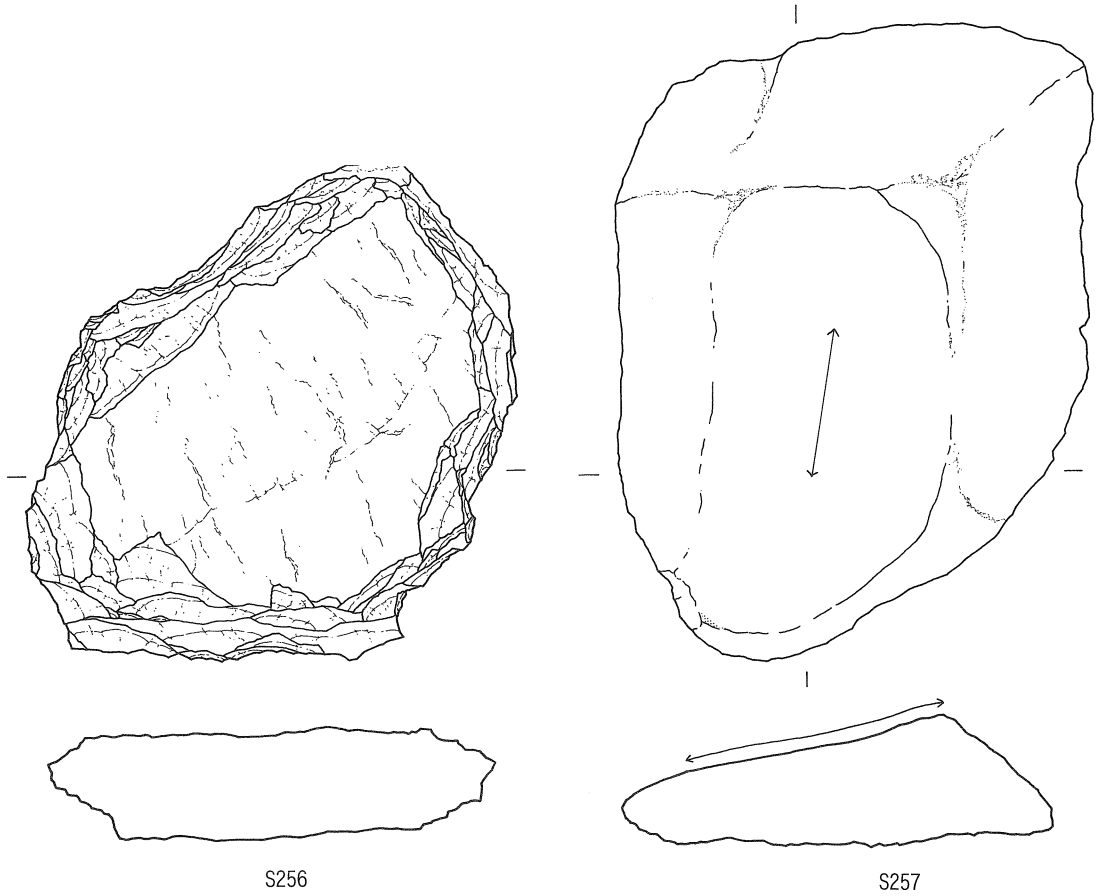
第87図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（６）（縮尺１/２）





第88図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（７）（縮尺１/２）



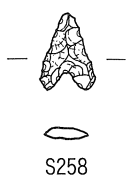


第89図　Ｎ３ＳＤ－１出土石器（８）（縮尺１/２）

る。欠損が著しいが、生きている面は研磨が施されている。S249は泥岩製と思われ、石剣の可能性がある。S250は泥岩製の砥石であり、筋状の擦痕がほぼ同一方向に見られ、先端の尖ったものを磨いたという印象を受ける。可能性としては鉄製品を磨いたことが示唆される。S251は片岩製の磨製石斧と思われる。S252は結晶片岩製の敲石であり、下端に敲打痕が見られる。断面はほぼ円形を呈しており、整形していることから、何らかの製品を転用したものと思われる。S253は頁岩製の砥石であり、周縁を調整剥離によって整形していると思われる。S254は安山岩製の石核石器で、周縁のみ調整を行っており、中央部には自然面を残す。下方の刃部には敲打痕のような痕跡が認められる。S255は砂岩製で円孔が穿たれている。一面のみ平坦であるが、他の面は丸みを帯びている。また網目部分はススが付着したように黒色に変色している。具体的な機能・用途が思い浮かばないが、円孔に紐を通し、錘のように用いたのではないだろうか。S256は粘板岩の石核と思われるが、片理が著しいため、素材剥片などを剥ぎ採った面は確認できない。S257は細粒砂岩製の砥石である。研磨面はよく使用されており、わずかに内湾している。

N４区　P１出土石器（第64図）

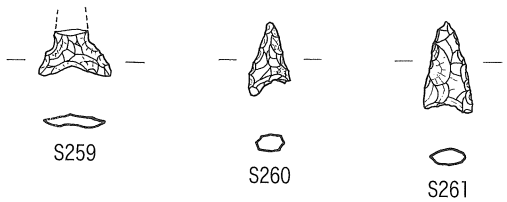
S258はサヌカイト製の石鏃で基部は凹基式である。全体的に丁寧な細部調整が行われている。



第64図　P１出土石器実測図（縮尺１/２）

N４区　P96出土石器（第65図）

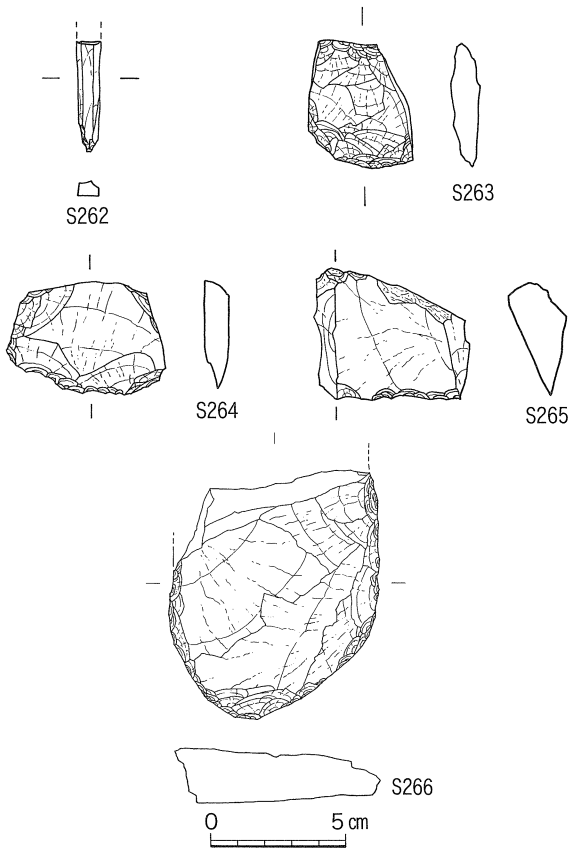
S259はサヌカイト製の石鏃で、基部は凹基式であり、基端が外側へ大きく張り出している。S260はサヌカイト製の石鏃で凹基式である。右基端部は欠損していない。なお裏面は周縁のみ細部調整を行い、中央に主要剥離面の一部を残す。S261はサヌカイト製の石鏃であり、基端部の細部調整は行われていない。



第65図　P96出土石器実測図（縮尺１/２）

N４区　SD－１出土石器（第66図）

S262～S265はサヌカイト製である。S262は石錐であり、現状では頭部がない。細部調整は先端のみ行われており、両側面には縦

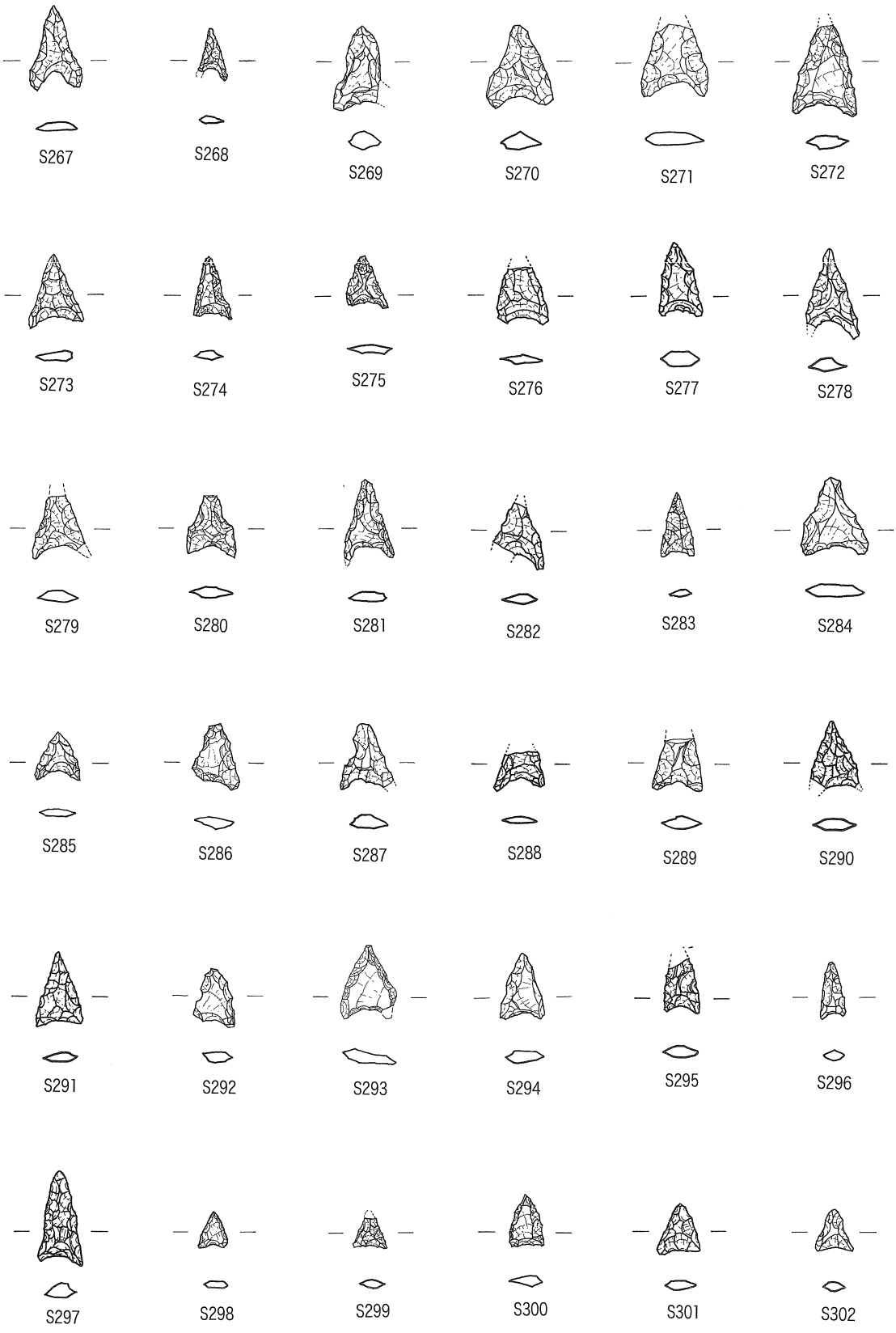


第66図　N４区SD－１出土石器実測図（縮尺１/２）

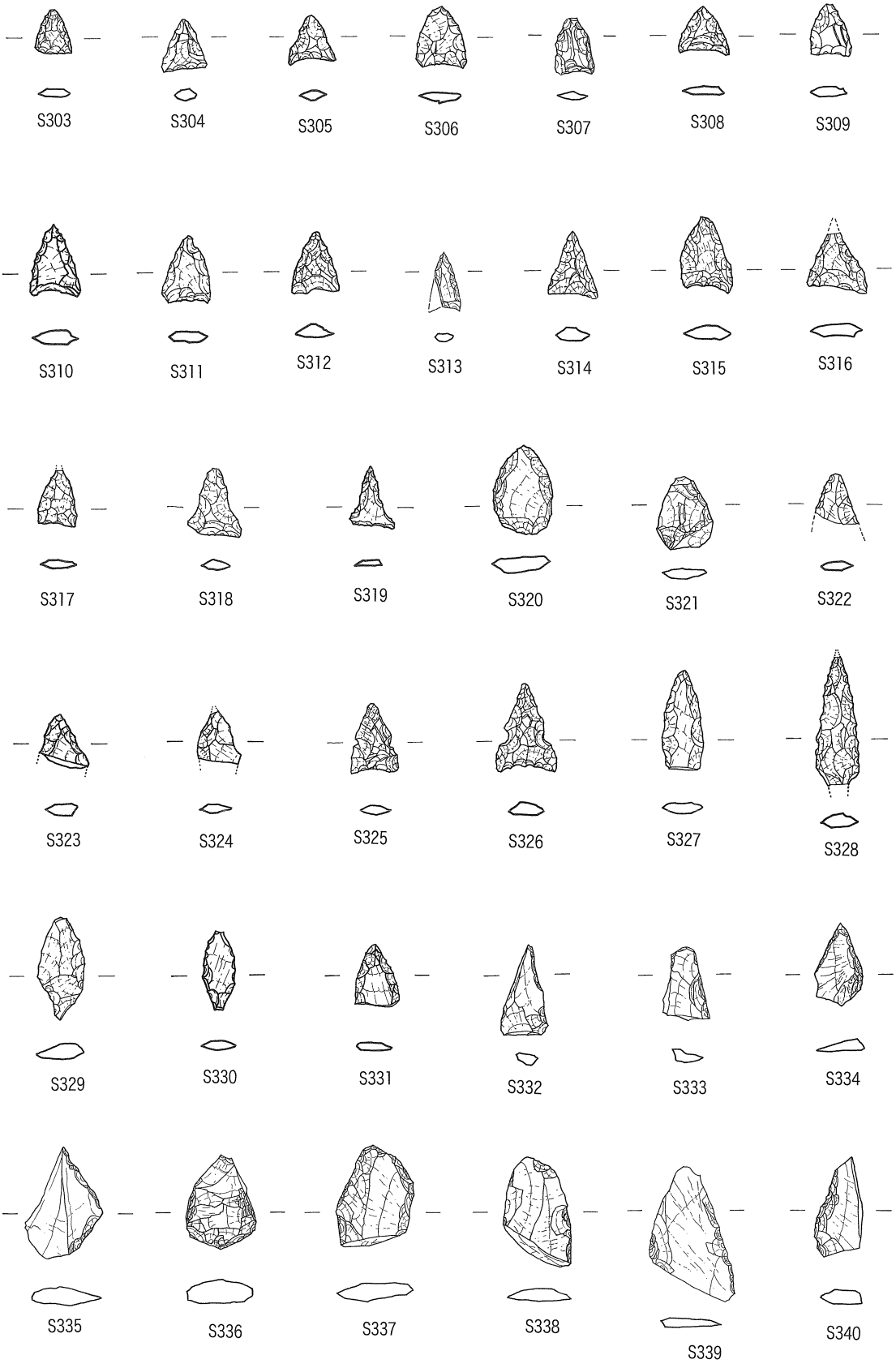
長の剥離面が見られる。S263は楔形石器であり、上下端面は平行するように細部調整が行われている。S264・265は加工痕のある剥片であり、いずれも刃部を作ろうとしている。

第一調査区　遺構に伴わない遺物
（第90図～96図）

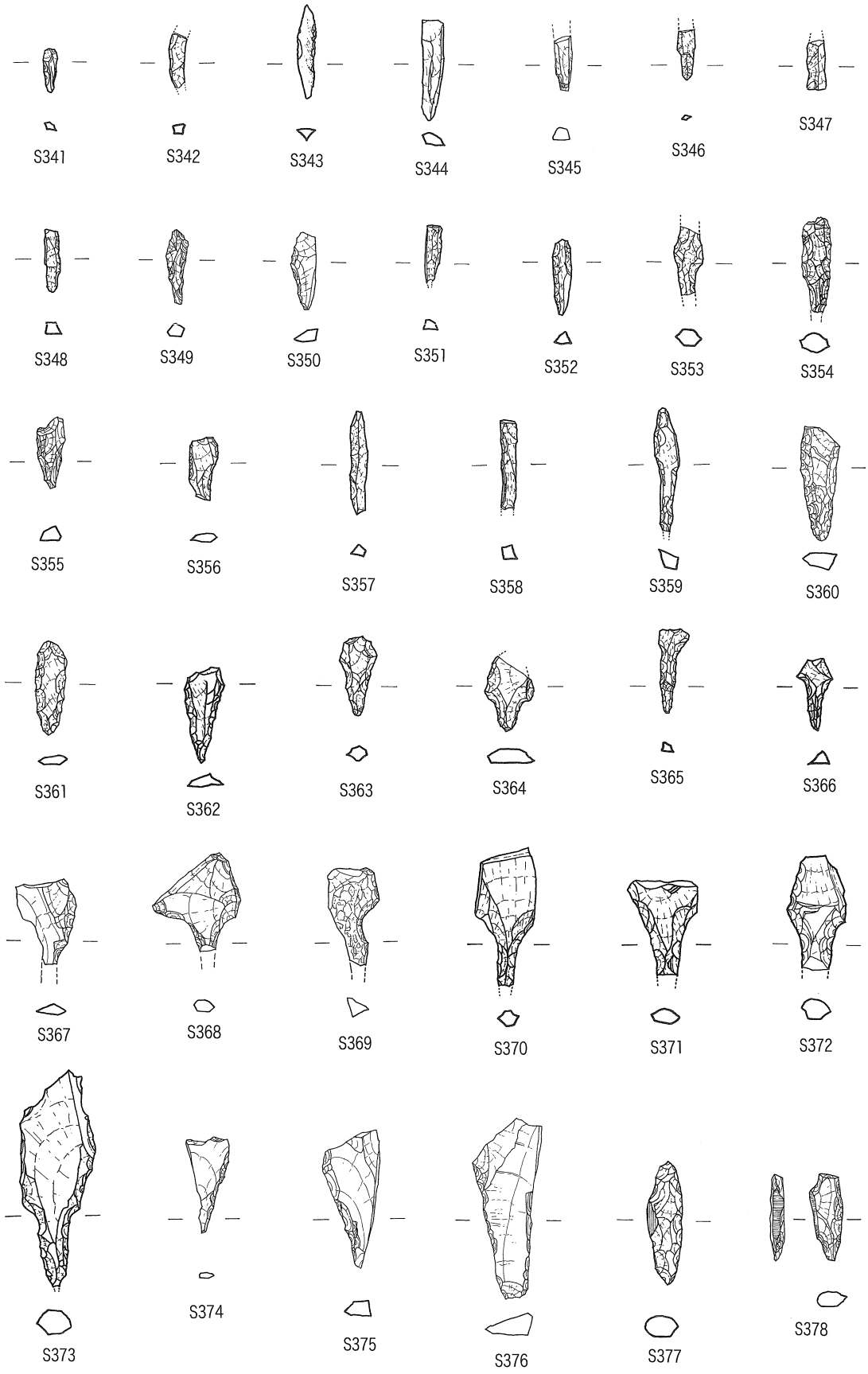
今回掲載した石器の多くは遺構確認面上部の包含層から出土したものである。出土量が多かったのはＮ４区であり、Ｎ３区のＳＤ－１の東側にあたる。S267～410はサヌカイト製である。S267～272・275・278～290・292～298は凹基式の石鏃である。凹基式でもいくつかの形態が見られる。S267・268・278・282のように抉りが深く、凸状を呈すもの、S279・280のように抉りが直線的であるもの、S270・272・283・285・294・295～297のように抉りが浅く、内湾するものなどに分けられる。S276・277・291・299～312・314・316～319・325・326は平基式の石鏃である。S320は円基式の石鏃である。S325・326は両側縁部の中央に抉りが施されている。S328～330は有基式の石鏃である。S328の側縁はやや鋸歯状を呈す。S329・330は基部の細部調整が不十分であり、未成品であろうか。S231～340は石鏃の未成品であると思われる。基部から細部調整を開始している剥片は見られず、すべてが側縁部から細部調整を行っている。S341～353・357～359は棒状の細長い石鏃であり、頭部と錐部との区別はない。S341のように短いものから、S359のように長いものまである。S354～356・360～364は断面が厚く、錐部が短い石錐であり、細部調整が丁寧に行われている。S365～373は頭部と錐部との区別が明瞭であり、細長い錐部がつく石錐である。S374～376は三角形に近い素材剥片の側縁に細部調整を施しており、石錐の未成品と思われる。S377・378は断面が厚く、錐部が短い石錐であるが、一側縁に研磨が行われている。S379～382は打製石包丁であり、抉りが施されている。S379の平面形は長方形に近い。S380は背部が湾曲している。S383・384・397は打製石包丁と考えられるが、S383は石槍の可能性も示唆される。S385は楔形石器である。S389・392～396・398～401・403～405・408は加工痕のある剥片であるが、S392は楔形石器、S395・401・402はスクレイパーの可能性もある。S406はスクレイパーであり、連続的な細部調整によって刃部を作出している。S407は加工痕がわずかにあるが、素材剥片の形状をよく残しており、裏面は主要剥離面である。S409・410は残核であると思われる。S411は磨製石包丁で、石材は頁岩であろうか。穿孔は片面から行われているかもしれない。S412は安山岩製の磨製石器である。欠損しているため、機種は不明であるが、小型方注状石斧であろうか。S413・414は細粒砂岩製の砥石である。S415は砂岩製の凹石であろうか。S416は結晶片岩製で、断面が菱形に近づくように整形していると思われる。欠損が著しいため、機種は不明である。また研磨痕などは確認できない。S417は砂岩製の擦石で、擦痕が認められる。S418は砂岩製の砥石と思われ、各側面に擦痕が見られる。S419は砂岩製の砥石で、周縁を調整していると思われる。



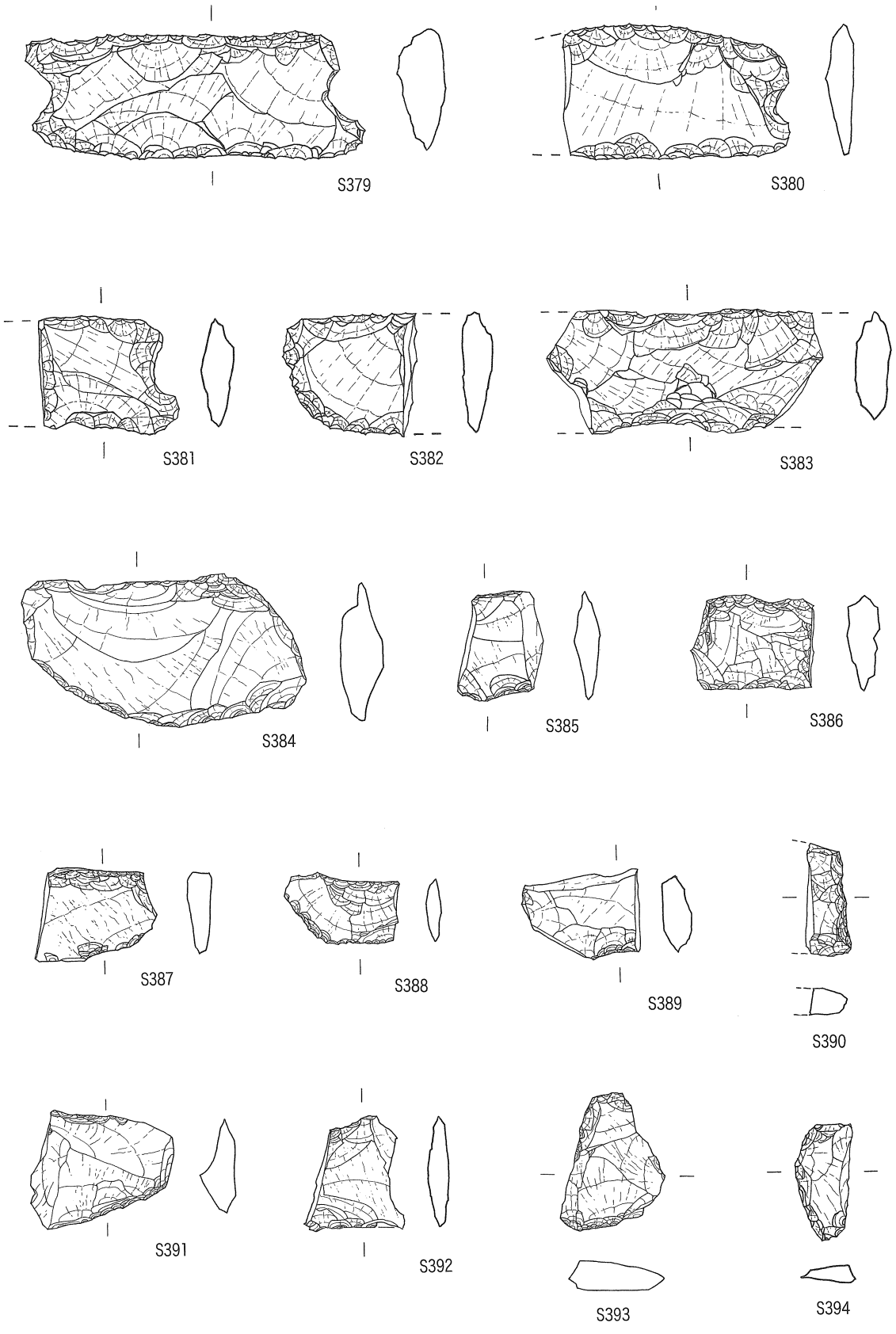
第90図　遺構に伴わない遺物（１）（縮尺１/２）



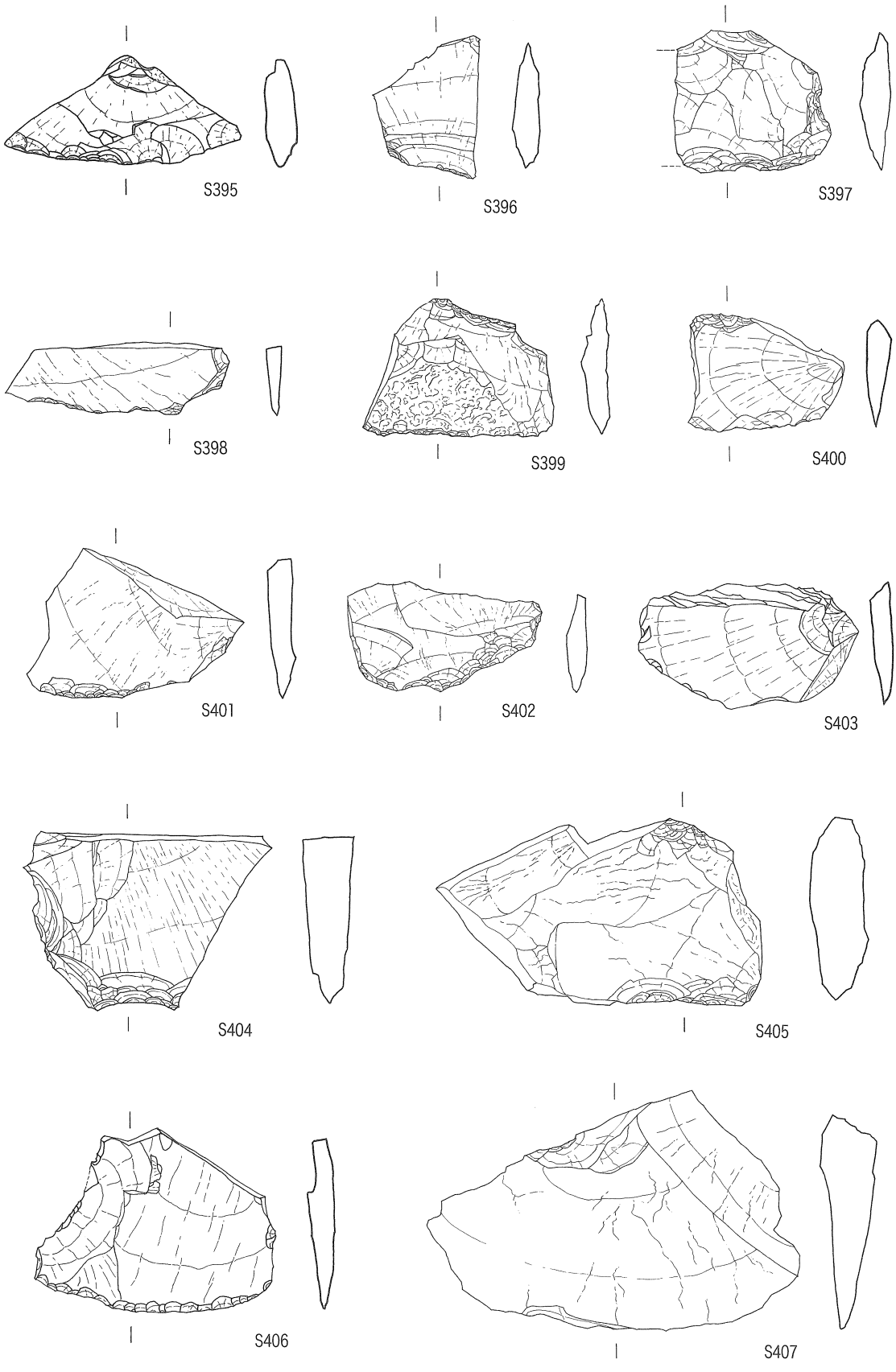
第91図　遺構に伴わない遺物（２）（縮尺１/２）



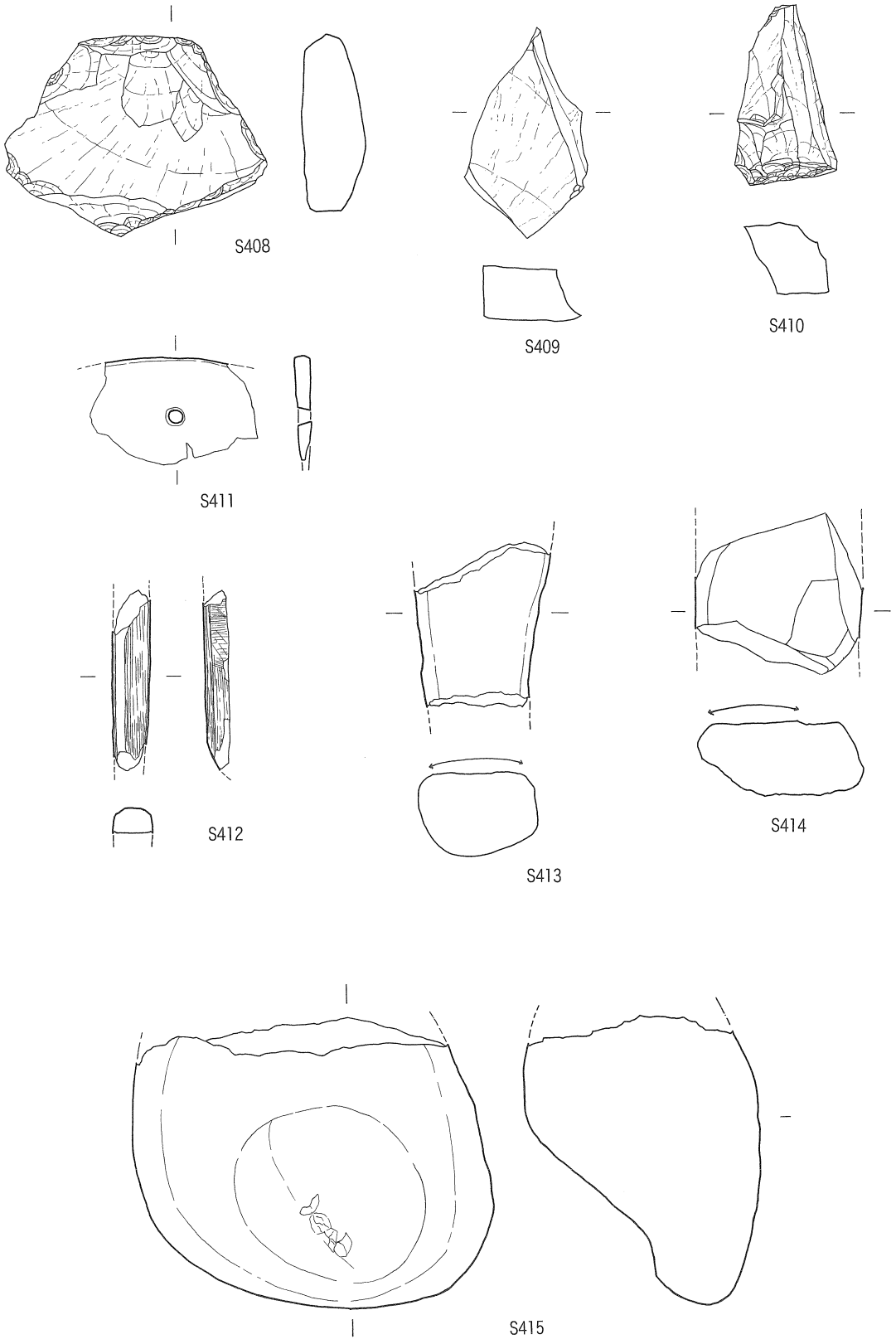
第92図　遺構に伴わない遺物（３）（縮尺１/２）



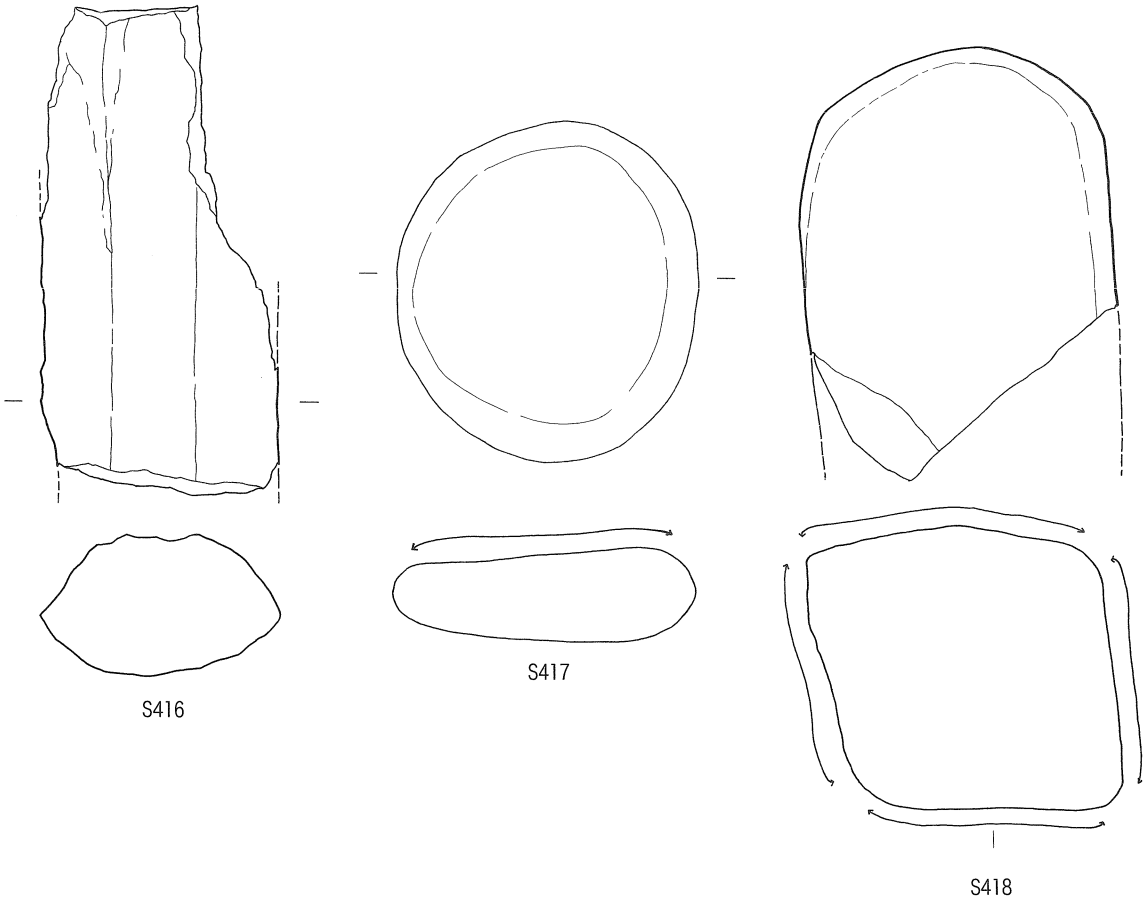
第93図　遺構に伴わない遺物（４）（縮尺１/２）



第94図　遺構に伴わない遺物（５）（縮尺１/２）



第95図　遺構に伴わない遺物（６）（縮尺１/２）

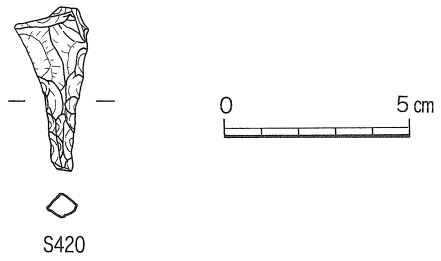


第96図　遺構に伴わない遺物（７）（縮尺１/２）

第２節　第二調査区

Ｎ５区　Ｐ45出土石器（第67図）

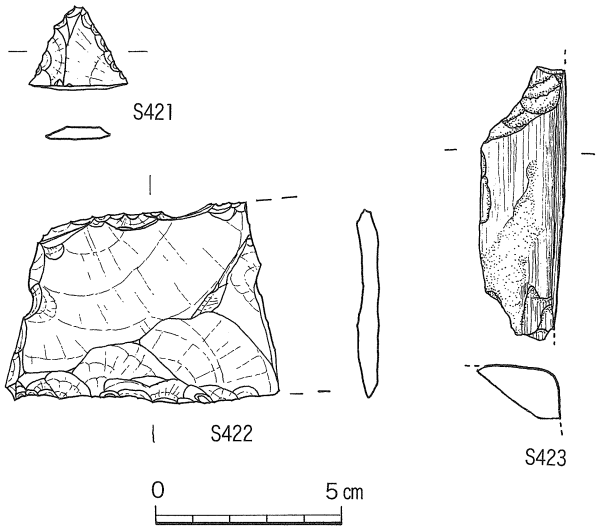
Ｓ420はサヌカイト製の石錐で、頭部と錐部が明瞭に区別されている。



第67図　第二調査区Ｐ45石器実測図（縮尺１/２）

Ｎ５区　ＳＤ－１出土石器（第68図）

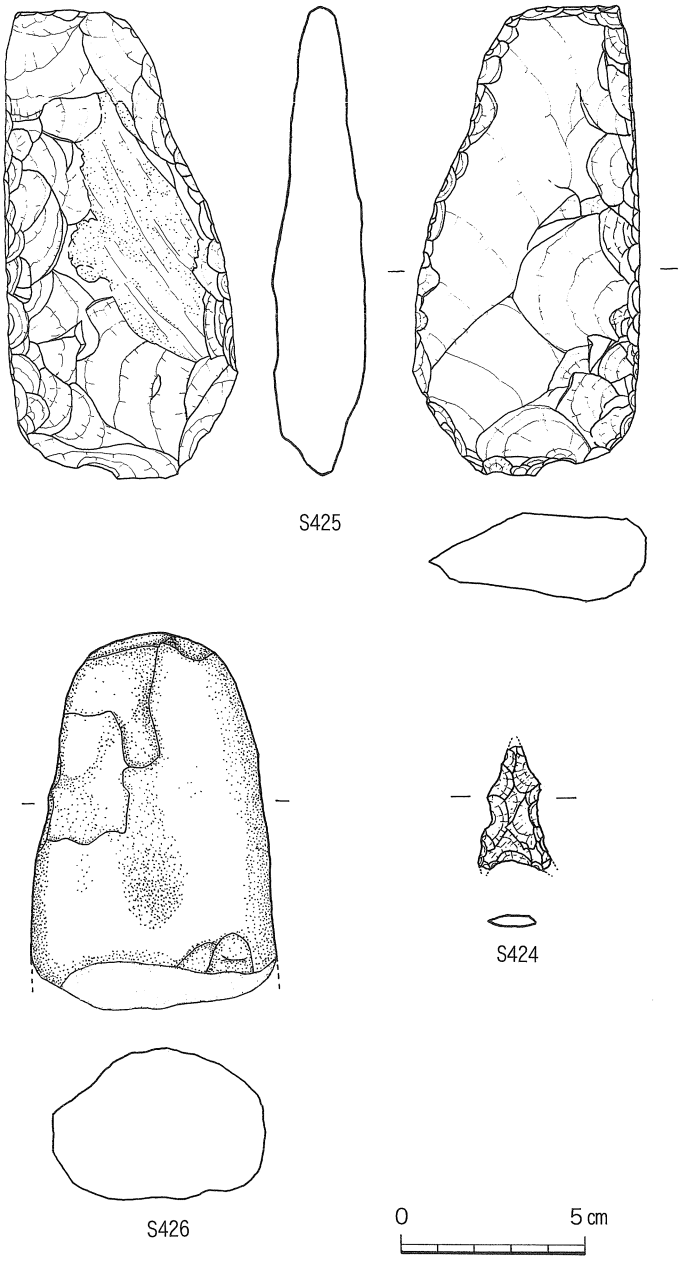
この溝はおそらくＮ４区ＳＤ－１に続くものである。Ｓ421はサヌカイト製の石鏃未成品である。両側の側縁部は細部調整が行われているが、基部は行われていない。Ｓ422はサヌカイト製の打製石包丁である。平面形は長方形に近い。Ｓ423は片岩製の柱状石斧であり、一部に研磨痕が確認できる。



第68図　第二調査区ＳＤ－１石器実測図（縮尺１/２）

Ｎ５区　遺構に伴わない遺物（第69図）

Ｓ424はサヌカイト製の石鏃である。基部は凹基式で、両側縁部に突起のようなものを作出している。Ｓ426はサヌカイト製の石鏃であろうか。Ｓ436は緑色片岩製の太型蛤刃石斧であり、刃部を欠損している。



第69図　Ｎ５石器実測図（縮尺１/２）

第３節　中ノ池遺跡出土の弥生時代前期の石器について

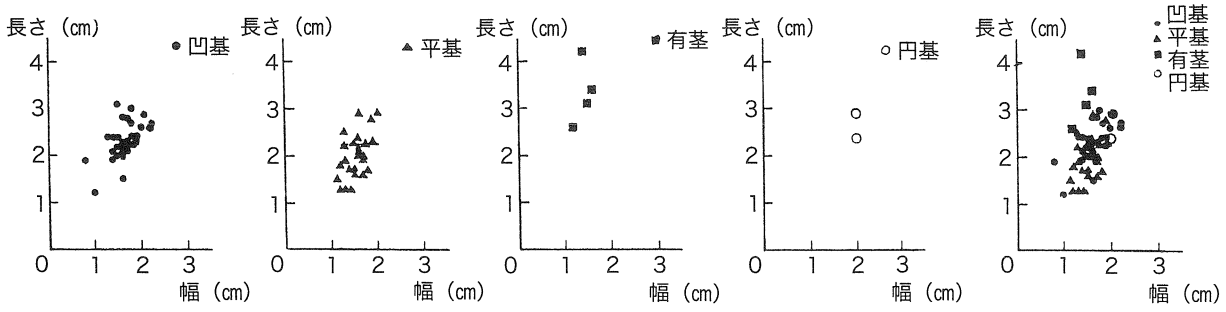
１　はじめに

中ノ池遺跡における今回の調査では8700点を越える石器および剥離片が出土した。特に第一調査区の複数の溝からは多くの石器が出土しており、時期は弥生時代前期後半から終末までの範疇に収まる。またＮ４区からは遺構に結びつけることが出来なかったが、石器がある程度のまとまりを持ちながら出土している。これらの分析次第では、弥生時代前期後半ごろの丸亀平野における石器の組成や形態などの一端を垣間見ることができるかもしれない。そこで今回は第一調査区から出土した石器・剥片を対象とし、主要な器種について若干の検討を加えたい。なお分類基準は平井勝氏の設定(1)を参考にしたが、明確に分類しきれなかったものについては筆者の主観による部分があることを予め断っておく。第一調査区の各遺構からは夥しい数の石器や剥片が出土しており、全てを報告するのは不可能であった。しかし明確に器種が判断できたものについては可能な限り実測図を掲載するように努めた。またサヌカイト剥片のなかで器種が判断できなかったものについては、加工痕のある剥片（今回は調整剥片とした）、素材剥片、石核（残核を含む）、剥片・チップに分類したが、整理作業に時間的な余裕がなかったため、全体的な数量分析を行うことができなかった。

２　石器の組成と出土数

第一調査区から出土した石器・剥片のうち、製品として認識できたものは270点程度である。これらを機能・器種ごとに分類したのが第17表である。機能別では加工具が最も多く、44.4％である。次いで、狩猟具・武器が30.7％、収穫具が15.6％、伐採・加工具が7.4％、土掘具が0.7％という比率になっている。以下、各器種ごとに説明・検討を行う。

石鏃　第一調査区において石鏃は80点出土しており、製品全体の29.6％を占める。石材はいずれもサヌカイトである。このうち凹基式のものは43点出土しており、石鏃全体の53.7％である。平基式は32点出土しており、40.0％を占める。円基式は３点で3.8％、有基式は２点で2.5％である。第97図は石鏃の長さ・幅の関係を基部の形状ごとに示したものである。凹基式は長さ1.9～3.1cm、幅1.3～2.2cmに集中する。また平基式は長さ1.3～2.5cm、幅1.1～2.0cmに集中する。有茎式は２点（欠損を含む）と未成品の可能性がある２点を対象とし、長さ2.6～4.2、幅1.2～1.6cmに収まる。円基式は２点のみだが、長さ2.4～2.9cm、幅２cmに収まっている。凹基式と平基式



第97図　石鏃長幅比

表17　中ノ池遺跡（第一調査区）出土石器の一覧表

機能	器種＼遺構		N2SD-2	N2SD-3	N2SD-4	N3SD-1	N3集石	N4SD-1	その他	総数		
狩猟具	石鏃	凹基	2	3		4	5		29	43	80 (29.6%)	83 (30.7%)
		平基		2		3	1		26	32		
		円基				1			2	3		
		有茎					1		1	2		
武器	石剣									0		
	石槍						3？			3？		
	その他									0		
土掘具	石鍬		1					1？		2？		2 (0.7%)
	その他									0		
収穫具	打製石包丁	有抉	3	2		9	4		4	22	30	42 (15.6%)
		無抉	1			4	1		2	8		
	磨製石包丁		2	1		6	2		1	12		
	その他									0		
伐採・加工具	太型蛤刃石斧					6	1			7		20 (7.4%)
	扁平片刃石斧			1		1				2		
	柱状片刃石斧	有抉				2				2	10	
		無抉	1？			6？	1？			8?		
	小型方柱状片刃石斧								1	1		
	その他									0		
加工具	石錐	Ⅰ		1	1	3			9	14	49 (18.1%)	120 (44.4%)
		Ⅱ		1	2	3		1	17	24		
		Ⅲ	1	2					6	9		
		Ⅳ							2	2		
	石匙					2				2		
	スクレイパー		14	8		6	17		3	48		
	楔形石器		3	1		3		1	4	12		
	その他									0		
	砥石					2			4	6		
	敲石					2	1			3		
	その他									0		
調理具	凹石					1？				1？ (0.4%)		
漁労具										0		
紡績具										0		
祭祀具	石剣					1				1 (0.4%)		
用途不明	石錐？					1				1 (0.4%)		
総数			28	22	3	66	37	3	111	270		

を比べると、平基式の方がやや短く、幅が若干狭い。逆を言うと、凹基式は平基式よりも長く、幅がやや広いと言える。有茎式は幅が比較的狭く、長さが一番長い。円基式は幅が最も広い部類に属する。石鏃未成品は14点掲載したが、未成品の認識が困難であったため、本来はもっと多く存在すると思われる。石鏃の素材には法量よりも大きく、厚さが0.3～0.5cm程度の剥片を使用している。このような素材剥片は石核から剥ぎ採られたものであろ

うが、主要剥離面を観察すると打点が剥片の端部よりも離れているように見受けられるものがある。これは素材剥片から細部調整がかなり進んだものと言えるかもしれないが、本来は石鏃を目的としなかった剥片のなかから、石鏃の法量に近い剥片を素材として使用したとも考えられる。また石鏃は縦長剥片と横長剥片を素材としているが、全体的な印象として横長剥片の方が多いように思える。細部調整は側辺部から開始しているものが多い。S98・191・192・331を見る限りでは、基端部の調整は両側縁部が終了してから行うものと考えられる。完成品には丁寧に細部調整が全面にわたって行われているものと、周縁部のみ細部調整を行うだけで主要剥離面の一部を残すものがある。この細部調整の違いは地域や時期の差によって生じているのかもしれないが、素材剥片が石鏃の規格に近い形状であれば、細部調整の簡略化は十分考えられることではなかろうか。

石槍　石槍として可能性のあるものは３点であり、石材はサヌカイトである。側辺が平行するように細部調整が行われており、ある程度の長さを保っているものをいずれも石槍の基部として判断した。ただ尖頭部が出土しておらず、基部と思われる断面が菱形を呈していないことから、やや実証性に欠ける。

石鍬　石鍬としたものは２点出土している。平面形はいずれも短冊形に近い。

石包丁　石包丁は42点出土しており、製品全体の15.6％を占める。石包丁は打製のものと磨製のものがあり、その比率は打製石包丁は30点(71.4％)、磨製石包丁は12点(28.6％)である。鴨部・川田遺跡では流紋岩を用いて磨製石包丁を製作しており、サヌカイト製打製石包丁との比率は３：２と磨製石包丁の方が多いが、中ノ池遺跡の場合は磨製よりも打製の方が多く、明らかに様相が異なる。おそらく中ノ池遺跡はサヌカイトの産出地に地理的に近いことから、弥生前期後半の比較的早い時期から磨製石包丁に替わって打製石包丁が主流となっているように思われる。打製石包丁は全てサヌカイト製であり、30点出土している。打製石包丁のうち抉りをもつもの（A）は22点、抉りをもたないもの（B）は８点であり、それぞれの比率は73.3％と26.7％である。打製石包丁は両側縁に抉りをもつものが主流であるが、抉りをもたないものも少なからず存在している。抉りをもたないもの（S212～215）は使用による光沢痕が認められるため、明らかに製品として扱われている。浴・長池遺跡においても同様の打製石包丁が出土しており、その原因として「制作者の個性がでた結果」による可能性が示唆されている(2)。ただ、中ノ池遺跡においても抉りのない打製石包丁が出土しているため、これが制作者個人の個性によって生み出されたものであるという可能性は低いと思われる。また窪木遺跡（岡山県総社市）においても３点出土しており(3)、香川県の小地域に限ったことではないのかもしれない。おそらく抉りのない打製石包丁は抉りを簡素化・省略したものであると思われるため、抉りのないものは抉りのあるものに後出するものであろう。しかしいつ頃から出現し、地理的分布がどこまで広がるのかは明らかにされておらず、今後の課題となろう。打製石包丁の形態はⅠ類：背部が湾曲し、背部が直線的なもの(A：S42・207)（B：S382)、Ⅱ類：刃部が直線的で、背部が湾曲するもの（A：S43・122・206・208・210・380)（B：S212・213・215)、Ⅲ類:刃部と背部がともに外湾するもの（B：S124・133・214)．Ⅳ類：刃部と刃部が平行

するように湾曲するもの（S211)、V類：長さが短く、断面が厚く、台形に近い形を呈し、刃部と背部が直線的なもの（S201・209）に分類できる。形態ではⅡA類・ⅡB類・ⅢB類が多く見られる。対象とした資料が少ないため、一概には言えないが、中ノ池遺跡の打製石包丁は抉りのあるものはⅡ類が主流であり、抉りのないものはⅡ類とⅢ類を規格としていたのかもしれない。また打製石包丁の使用痕は片面に顕著に認められるものが多い。使用痕が認められる部位は、抉りの周辺（S204・211)、刃部の中央部（S42・43・214)、刃部の一側縁に偏るもの(S206･208･211)、抉りのないものは一側縁の刃部から体部・背部にかけて認められる（S212・213・215)。

磨製石包丁は12点出土している。使用石材は緑色片岩・頁岩・黒色頁岩・泥岩などである。紐部が残るものを見る限りでは10点のうち９点が両面穿孔であり、S411は片面穿孔の可能性がある。平面形は長方形を呈するものと、刃部と背部が外湾する杏仁形に近いものがある。刃部はいずれも両刃である。またS86・174は幅が狭く、研磨の後に細部調整を行っていることから、欠損品を再加工しているものと思われる。S232は左側の外孔の縁辺に小さな窪みが２箇所認められる。これは穿孔を開始する際に敲打によって窪みを作った後に穿孔を行っていたと思われる。今回の調査では磨製石包丁の使用石材の石核・素材剥片・剥片・チップなどが出土していないため、磨製石包丁は搬入品の可能性もある。ただし石錐や砥石が比較的多く出土しているため、サヌカイト石器のみならず磨製石器の製作も行っていたことも十分に考えられる。

石斧　大陸系磨製石器と呼ばれているもののうち太型蛤刃石斧が７点、扁平片刃石斧が２点、柱状片刃石斧が10点（うち２点は有抉)、小型方柱状片刃石斧の可能性もあるものが１点出土しており、製品全体の7.4%を占める。太型蛤刃石斧の石材は緑色片岩のものが多く、そのほかに砂岩や黒色頁岩のものが見られる。いずれも欠損しており、本来の形態を完全に止めているものはないが、基端はやや丸みを帯びた平基で、平面形は基部から刃部に向かうにつれて広くなる長台形を呈す。なお断面は円に近い楕円形のものがほとんどであり、扁平なものはない。扁平片刃石斧は可能性あるものを含めて２点出土している。石材はいずれも緑色片岩である。S239は基部は不明であるが、平面形・断面ともに長方形を呈する。研磨は全面にわたって丁寧に施されている。幅は5.7㎝あるため、大形品と言える。刃部は途中で欠損しているが、片刃であると思われる。柱状片刃石斧は10点出土している。そのうち基部に抉りがつくものは２点あるが、全体的に欠損が著しく、基部の出土数が刃部より少なかったため、抉りの付くものは本来はもう少し存在していただろうと思われる。石材は緑色片岩・結晶片岩・泥岩である。基部につく抉りは浅く、弓状を呈す。抉りは比較的浅く、研磨痕が基部の研磨方向とは異なるため、抉りの作出は砥石の隅の部分や扁平で薄い砥石の側面を用いて、研磨によって形成されていることが想定される。また刃部は鏨が辛うじて残っており、側面が曲線的ではないことから、比較的古い形式を保っていると言える(4)。小型方柱状片刃石斧として可能性のあるものはS412のみである。下部にやや内斜している部分が認められることから刃部の付近になると思われる。

石錐　石錐は49点出土しており、全体の18.1%を占める。今回、第一調査区において出土したものは４つに分類できる。Ⅰ類は頭部と錐部が明瞭に区別されており、錐部が細

長いものとした。Ⅰ類は14点出土しており、石錐の28.6%を占める。Ⅱ類は断面が厚く、錐部が短いものであり、24点出土しており、49%を占める。Ⅲ類は錐部と頭部の区別がなく、棒状で細長いものである。Ⅲ類は９点出土しており、石錐の18.3%を占めている。Ⅳ類は断面が比較的厚く、錐部が短く、一側縁の局部に研磨が施されているものとし、２点出土しており、石錐の4.1%を占める。これらの石錐はサヌカイト製のものがほとんどであるが、Ⅲ類のなかに１点だけ緑色片岩製のものが見られる。比率はⅡ類が約半分を占め、Ⅰ類も比較的多く、錐部が短いⅡ類やⅣ類は比率が低いことから、錐部が細長いものが主流であったと言える。孔を穿つ際に錐部が細長いものは、錐部が短いものよりも欠損する可能性が高いと思われる。事実、Ⅰ類は錐先が欠損しているものが多い。よって欠損率を考慮すると、錐部の細長いⅠ類・Ⅲ類の比率が高いのは妥当なことではなかろうか。

石錐未成品は４点ほど認識したが、石鏃未成品との区別がつきにくく、石錐未成品としての認定が困難であった。今回は錐先となる部分が細長くなるように細部調整が行われているものを対象としたが、結果としてⅠ類のみの未成品の認定となった。Ⅰ類の素材剥片は幅に対して長さが長く、二等辺三角形に近い形状を呈すると思われる。細部調整はやはり錐部に集中している。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ塁は丁寧に細部調整されており、錐部の断面は菱形のものが多いが、Ⅰ類のなかには三角形を呈するものもある。Ⅲ類の断面は三角形もしくは方形を呈す。Ⅲ類で断面が三角形のものは細部調整が丁寧に行われているものが多いが、断面が方形のものは細部調整がほとんど行われていない。もしかしたら断面が方形で棒状のものを素材としていることも考えられる。またその作出は打撃というよりは切断によっているように見受けられる。

中ノ池遺跡の石器のなかで穿孔されているものは磨製石包丁のみであるが、磨製石包丁の出土数は12点であるため、それに比べると石錐の比率は高い。よって、磨製石包丁のほかにも穿孔の対象物があったかもしれない。中ノ池遺跡では紡錘車は土製であるが、穿孔は焼成前のものであったため、紡錘車は石錐の穿孔対象物である可能性は低い。石錐で穿孔した可能性があるものとして木製品が考えられる。Ｎ３区のＳＤ－１の最下層からは木製品の広鍬未成品が出土しており、一側縁に小孔が穿たれている。反対側は欠損しているが、本来は両側縁に孔があったと思われる。よって中ノ池遺跡では孔をもつ広鍬木製品が製作されていたので、その穿孔の際に石錐が使用されたことは十分に考えられる。

石匙　石匙は明らかにつまみが作出されているものとし、２点出土している。つまみは剥片の上に作られているものと横の方に作られているものがある。鴨部・川田遺跡[5]ではつまみが横に付く石匙は見られず、つまみが上に付くものや縦形石匙しか出土していないが、南溝手・窪木遺跡[6]（岡山県総社市）ではつまみが横に付くものが主流である。中ノ池遺跡では出土数が少ないため、石匙の形態がどのような傾向を示しているのかは現時点では判断しかねる。

スクレイパー　今回スクレイパーとして判断したものは、不定形な素材剥片の縁辺に細部調整を施して刃部を作出しているものを対象とした。出土数は48点で、製品全体の17.8%を占めるが、筆者の認識不足により、調整剥片として扱ったもののなかにはスクレイパーとして分類すべきものが多く含まれていることを指摘しておく。よってスクレイ

パーの出土数は本来はもっと多く、比率ももっと高くなると思われる。素材剥片の形状はさまざまであるが、そのほとんどは横長剥片に近いものである。細部調整は一縁辺のみに行われているものが多い。また細部調整が外周するように施されているものもあるが、その数は少ない。S82・141・223は台形に近い形状を呈し、幅広の縁辺に外湾する刃部が施されている。また主要剥離面を明瞭に残していることから、素材剥片を剥離する段階からスクレイパーを目的とし、定形化したものの1つであると考えられる。

楔形石器　対応する2辺に平行するように細部調整が行われているものを楔形石器とした。出土数は12点であり、全体の4.4%を占めるが、筆者の認識不足により、楔形石器として認定しきれなかったものが多くあることを断っておく。楔形石器の多くには側面の縦長の剥離による截断面が認められる。

砥石　砥石は6点出土している。石材は砂岩製のものがほとんどで、大形で据え置くものが多い。なおS250[7]は筋状の擦痕が同一方向に認められ、鉄器の刃先を研いだ可能性が示唆される。

敲石　敲石は3点出土している。礫状のものはサヌカイト製で、ほぼ全面に敲打痕が認められる。また棒状のものは結晶片岩製で、端部のみに敲打痕が認められる。また柱状片刃石斧の欠損品を転用して、敲石として用いているものもある。

3　おわりに

以上、中ノ池遺跡（第一調査区）から出土した石器の概略を述べた。具体的な数値として表せなかったのが残念であるが、石材はサヌカイトが大多数を占め、緑色片岩・結晶片岩・砂岩などが1～2割程度である。このうちサヌカイトは加工痕のある剥片や素材剥片が多く出土しており、石核（残核）もある程度出土している。また未成品も少なからず出土していることから、集落内でサヌカイト製石器の製作が行われていたことは明らかである。サヌカイト産出地から集落への原材料の搬入は、原石を加工して運び込まれたと考えられる。中ノ池遺跡に南接する平池西遺跡[8]では板状に加工されたサヌカイトの原材料が重ねられた状態で出土している。平池西遺跡は中ノ池遺跡の時期に近く、同一の集落を形成していた可能性があるため、中ノ池遺跡においても平池西遺跡と同様にサヌカイトを板状に加工して搬入されたことが想定される。また中ノ池遺跡では加工痕のある剥片や素材剥片が多く出土しており、素材剥片の剥離や細部調整の進度によって、製作技術の復元が可能であるように思われたが、時間・能力的に分析することが困難であった。磨製石包丁や石斧の石材は緑色片岩や頁岩などであるが、このようなサヌカイト以外の石材は石核・素材剥片・剥片・チップなどは特に出土していない。したがって、これらの石器については集落内で一貫した製作は行われず、製品に近い形で搬入されたと考えられる[9]。また磨製石包丁のなかには欠損品を再利用しているものが見られることから、石材を大事に使用していることが伺える。逆に、産出地が近いために入手しやすかったサヌカイトは製品の数に比べて素材剥片や加工痕のある剥片の比率が高く、サヌカイトを贅沢に使用している傾向がある。

中ノ池遺跡では過去数回の発掘調査が行われており、石器の組成なども過去の成果をふまえながら考察すべきであったが、今回は第一調査区から出土した石器のみを対象とした

ため、この分析が中ノ池遺跡全体の石器の内容を示すものではないことを断っておく。また周辺の弥生時代前期の遺跡との比較を十分に行うことが出来なかったため、視野の狭いものになった。筆者の石器に対する知識が未熟であったため、反省すべき点が多い分析となったが、中部瀬戸内における弥生時代前期の石器の様相の一端を垣間見ることが出来れば幸いである。

註１　平井勝 『考古学ライブラリー64弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社　1991年

註２　高松市教育委員会 「浴・長池遺跡」『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第１冊1993年

註３　岡山県教育委員会 「窪木遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124』 1998年

註４　森下英治「瀬戸内の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』391号　ニュー・サイエンス社1995年

註５　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 「鴨部・川田遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第７冊　1997年

註６　註３文献に同じ。

註７　平井勝氏のご教示による。

註８　中ノ池遺跡の南西に隣接し、平池の西側に位置する。1996年に丸亀市教育委員会が発掘調査を行った。

註９　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 「龍川五条遺跡Ⅰ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第23冊1996年

表18　石器一覧表

挿図番号	器　　種	石　　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S1	石鏃	サヌカイト	2.3	1.6	0.3	0.8	N2　SD－2	凹基式
S2	石鏃	サヌカイト	2.6	2.0	0.5	1.5	N2　SD－2	凹基式
S3	石鏃	サヌカイト	3.3	1.4	0.5	1.7	N2　SD－2	
S4	楔形石器？	サヌカイト	3.9	(2.0)	1.1	5.3	N2　SD－2	
S5	調整剥片	サヌカイト	1.8	3.9	0.7	3.6	N2　SD－2	
S6	楔形石器	サヌカイト	2.1	(4.4)	0.8	6.3	N2　SD－2	
S7	調整剥片	サヌカイト	3.2	4.0	0.7	6.8	N2　SD－2	
S8	スクレイパー	サヌカイト	3.3	4.6	0.9	10.5	N2　SD－2	
S9	楔形石器？	サヌカイト	3.9	5.3	1.3	18.0	N2　SD－2	
S10	調整剥片	サヌカイト	3.7	(4.5)	1.0	12.0	N2　SD－2	
S11	素材剥片	サヌカイト	5.7	1.8	0.7	4.5	N2　SD－2	
S12	スクレイパー	サヌカイト	5.4	6.8	1.7	48.9	N2　SD－2	
S13	スクレイパー	サヌカイト	4.0	6.9	1.0	19.3	N2　SD－2	
S14	スクレイパー	サヌカイト	4.7	5.4	0.6	14.9	N2　SD－2	
S15	スクレイパー	サヌカイト	4.9	6.4	1.6	12.8	N2　SD－2	
S16	調整剥片	サヌカイト	8.3	2.0	1.1	36.5	N2　SD－2	自然面あり。
S17	スクレイパー	サヌカイト	4.8	6.5	1.3	28.7	N2　SD－2	自然面あり。
S18	調整剥片	サヌカイト	4.7	5.9	0.9	17.4	N2　SD－2	
S19	調整剥片	サヌカイト	6.2	(6.8)	1.7	54.1	N2　SD－2	
S20	スクレイパー	サヌカイト	5.7	(6.3)	0.9	21.1	N2　SD－2	
S21	調整剥片	サヌカイト	5.6	6.0	1.7	34.8	N2　SD－2	
S22	スクレイパー	サヌカイト	5.3	5.3	1.1	27.2	N2　SD－2	自然面あり。
S23	スクレイパー	サヌカイト	5.8	5.8	1.2	24.0	N2　SD－2	
S24	調整剥片	サヌカイト	5.7	6.2	1.3	32.6	N2　SD－2	自然面あり。
S25	調整剥片	サヌカイト	5.7	5.9	0.8	18.0	N2　SD－2	
S26	スクレイパー	サヌカイト	3.7	7.6	1.0	17.1	N2　SD－2	
S27	スクレイパー	サヌカイト	3.9	6.3	1.2	22.1	N2　SD－2	
S28	調整剥片	サヌカイト	5.8	(3.8)	1.1	15.5	N2　SD－2	
S29	調整剥片	サヌカイト	3.8	8.9	0.8	16.6	N2　SD－2	
S30	調整剥片	サヌカイト	6.4	4.5	1.1	14.4	N2　SD－2	自然面あり。
S31	調整剥片	サヌカイト	4.2	7.7	0.9	20.3	N2　SD－2	自然面あり。
S32	楔形石器？	サヌカイト	4.9	(4.8)	1.1	25.2	N2　SD－2	
S33	スクレイパー？	サヌカイト	4.7	(6.3)	0.9	21.7	N2　SD－2	使用痕あり。
S34	素材剥片	サヌカイト	3.4	5.6	1.0	14.0	N2　SD－2	
S35	素材剥片	サヌカイト	5.6	4.2	1.4	24.0	N2　SD－2	
S36	素材剥片	サヌカイト	4.0	6.0	0.9	16.8	N2　SD－2	
S37	打製石包丁？	サヌカイト	(4.3)	4.4	1.3	17.0	N2　SD－2	
S38	スクレイパー？	サヌカイト	(4.6)	(3.8)	0.8	9.6	N2　SD－2	
S39	スクレイパー	サヌカイト	4.3	7.0	1.2	31.7	N2　SD－2	
S40	打製石包丁？	サヌカイト	(6.1)	5.8	1.0	22.4	N2　SD－2	抉入。
S41	石鏃？	サヌカイト	10.0	6.5	2.1	129.3	N2　SD－2	
S42	打製石包丁？	サヌカイト	13.1	5.7	1.2	64.0	N2　SD－2	使用痕あり。抉入。
S43	打製石包丁？	サヌカイト	12.8	4.5	1.0	48.3	N2　SD－2	使用痕あり。抉入。
S44	素材剥片	サヌカイト	5.2	(12.7)	1.0	35.3	N2　SD－2	自然面あり。
S45	磨製石包丁	泥岩？	(7.1)	3.7	0.7	18.5	N2　SD－2	
S46	磨製石包丁	頁岩	13.0	4.4	0.9	44.1	N2　SD－2	
S47	柱状片刃石斧	緑色片岩	(7.2)	(2.0)	2.1	30.6	N2　SD－2	
S48	調整剥片	サヌカイト	11.2	9.5	1.7	144.1	N2　SD－2	自然面あり。

挿図番号	器　　種	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S49	石鏃	サヌカイト	1.5	1.1	0.3	0.2	N2　SD－3	平基式
S50	石鏃	サヌカイト	2.4	1.7	0.3	0.7	N2　SD－3	凹基式
S51	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.4	1.1	N2　SD－3	凹基式
S52	石鏃	サヌカイト	2.4	1.5	0.5	1.1	N2　SD－3	凹基式
S53	石鏃	サヌカイト	2.9	1.6	0.5	1.9	N2　SD－3	平基式
S54	石鏃未成品？	サヌカイト	3.5	1.5	0.5	2.6	N2　SD－3	
S55	石鏃	サヌカイト	(2.8)	1.5	0.6	1.9	N2　SD－3	
S56	石鏃	サヌカイト	3.8	1.2	0.3	1.4	N2　SD－3	
S57	石鏃	サヌカイト	4.3	1.6	0.9	5.3	N2　SD－3	
S58	石鏃	サヌカイト	4.3	3.9	1.1	13.9	N2　SD－3	
S59	調整剥片	サヌカイト	3.5	1.8	0.6	2.8	N2　SD－3	
S60	打製石包丁	サヌカイト	(2.2)	3.3	0.5	2.0	N2　SD－3	抉入
S61	打製石包丁	サヌカイト	(3.6)	4.1	0.8	8.2	N2　SD－3	抉入
S62	楔形石器	サヌカイト	4.2	2.8	0.6	4.3	N2　SD－3	
S63	調整剥片	サヌカイト	3.4	2.0	0.5	2.7	N2　SD－3	
S64	調整剥片	サヌカイト	4.9	2.8	0.6	4.3	N2　SD－3	
S65	調整剥片	サヌカイト	5.7	2.9	0.7	7.6	N2　SD－3	自然面あり。
S66	スクレイパー	サヌカイト	4.6	6.2	1.2	25.2	N2　SD－3	
S67	スクレイパー	サヌカイト	4.5	6.8	1.1	24.0	N2　SD－3	
S68	スクレイパー	サヌカイト	(3.9)	(5.1)	0.6	8.0	N2　SD－3	
S69	スクレイパー	サヌカイト	4.5	5.1	0.8	14.4	N2　SD－3	
S70	調整剥片	サヌカイト	3.7	5.6	1.3	17.1	N2　SD－3	自然面あり。
S71	スクレイパー	サヌカイト	3.9	(4.5)	1.2	15.0	N2　SD－3	
S72	スクレイパー？	サヌカイト	4.2	5.0	1.1	18.4	N2　SD－3	抉入？
S73	調整剥片	サヌカイト	4.6	6.6	0.9	23.9	N2　SD－3	
S74	スクレイパー	サヌカイト	4.0	6.7	0.8	16.7	N2　SD－3	
S75	調整剥片	サヌカイト	4.3	3.4	1.1	14.9	N2　SD－3	
S76	調整剥片	サヌカイト	4.4	8.6	1.1	20.9	N2　SD－3	
S77	調整剥片	サヌカイト	4.2	8.3	0.8	17.2	N2　SD－3	
S78	素材剥片	サヌカイト	2.8	5.4	0.4	4.7	N2　SD－3	
S79	調整剥片	サヌカイト	3.5	5.8	0.8	12.5	N2　SD－3	
S80	調整剥片	サヌカイト	3.2	4.8	0.8	7.9	N2　SD－3	
S81	調整剥片	サヌカイト	3.5	4.2	0.7	7.9	N2　SD－3	
S82	スクレイパー	サヌカイト	7.2	6.2	0.7	25.0	N2　SD－3	
S83	調整剥片	サヌカイト	6.7	6.0	1.5	45.7	N2　SD－3	
S84	調整剥片	サヌカイト	9.5	6.4	3.3	92.8	N2　SD－3	自然面あり。
S85	調整剥片	サヌカイト	5.5	3.3	1.6	17.5	N2　SD－3	
S86	磨製石包丁	頁岩	(4.5)	3.4	0.9	14.5	N2　SD－3	
S87	扁平片刃石斧？	緑色片岩	(6.4)	4.4	1.4	45.4	N2　SD－3	
S88	石錐	サヌカイト	4.4	2.4	0.6	4.1	N2　SD－4	
S89	石錐	サヌカイト	3.1	0.9	0.5	0.1	N2　SD－4	
S90	石錐？	緑色片岩	4.1	0.5	0.3	0.9	N2　P12	
S91	石錐	サヌカイト	2.2	1.7	0.4	不明	N2　P12	凹基式
S92	石錐	サヌカイト	3.6	1.4	0.7	3.5	N3　集石	使用痕あり。
S93	石錐	サヌカイト	(1.8)	1.3	0.3	0.4	N3　集石	凹基式？
S94	石錐	サヌカイト	(1.7)	1.5	0.4	0.6	N3　集石	凹基式
S95	石錐	サヌカイト	2.2	1.8	0.3	1.0	N3　集石	凹基式
S96	石錐	サヌカイト	1.4	(1.2)	0.4	0.4	N3　集石	平基式？
S97	石錐	サヌカイト	(1.1)	(1.2)	0.3	0.2	N3　集石	

挿図番号	器　　種	石　　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S98	石鏃未成品	サヌカイト	2.5	2.2	0.3	1.4	N3　集石	
S99	石鏃	サヌカイト	2.7	1.8	0.4	1.5	N3　集石	凹基式
S100	石鏃	サヌカイト	2.9	2.1	0.4	1.4	N3　集石	凹基式
S101	石鏃	サヌカイト	3.1	1.5	0.5	2.1	N3　集石	有茎式
S102	石鏃未成品	サヌカイト	3.5	2.2	0.7	4.3	N3　集石	
S103	石鏃未成品	サヌカイト	4.0	2.5	0.4	4.2	N3　集石	
S104	石鏃未成品	サヌカイト	3.9	2.4	1.1	14.5	N3　集石	
S105	石鏃未成品	サヌカイト	3.9	2.1	0.7	4.3	N3　集石	
S106	石鏃未成品？	サヌカイト	3.7	2.8	0.7	5.2	N3　集石	自然面あり。
S107	石鏃未成品？	サヌカイト	3.5	2.8	0.8	6.7	N3　集石	
S108	素材剥片	サヌカイト	4.2	2.7	0.5	4.0	N3　集石	自然面あり。
S109	石鏃未成品？	サヌカイト	4.2	2.6	1.2	10.7	N3　集石	
S110	調整剥片	サヌカイト	4.2	2.8	0.9	5.6	N3　集石	
S111	石鏃未成品	サヌカイト	4.4	2.5	0.8	9.1	N3　集石	
S112	調整剥片	サヌカイト	4.9	2.9	0.8	6.6	N3　集石	自然面あり。
S113	調整剥片	サヌカイト	3.5	2.2	0.5	3.1	N3　集石	
S114	調整剥片	サヌカイト	3.4	2.6	0.5	3.5	N3　集石	
S115	調整剥片	サヌカイト	4.5	3.0	1.1	11.0	N3　集石	
S116	調整剥片	サヌカイト	3.6	4.0	0.8	4.8	N3　集石	
S117	調整剥片	サヌカイト	3.0	2.9	0.6	4.2	N3　集石	
S118	調整剥片	サヌカイト	3.8	3.5	1.1	9.7	N3　集石	
S119	調整剥片	サヌカイト	4.5	3.3	0.9	8.5	N3　集石	
S120	調整剥片	サヌカイト	4.7	3.9	0.7	9.8	N3　集石	
S121	調整剥片	サヌカイト	(3.9)	(3.2)	1.1	7.4	N3　集石	
S122	打製石包丁	サヌカイト	(6.3)	5.8	0.9	25.2	N3　集石	抉入
S123	打製石包丁	サヌカイト	(6.2)	4.4	0.9	19.0	N3　集石	抉入
S124	打製石包丁？	サヌカイト	(6.6)	(6.1)	1.9	56.9	N3　集石	
S125	調整剥片	サヌカイト	4.2	(3.2)	1.6	15.9	N3　集石	
S126	調整剥片	サヌカイト	2.8	(5.6)	1.2	13.0	N3　集石	石槍か？
S127	スクレイパー？	サヌカイト	4.6	(4.7)	0.7	17.4	N3　集石	自然面あり。
S128	スクレイパー	サヌカイト	3.8	7.4	0.8	13.3	N3　集石	自然面あり。
S129	スクレイパー	サヌカイト	3.4	7.7	0.7	14.8	N3　集石	自然面あり。
S130	スクレイパー	サヌカイト	4.8	7.6	0.9	20.1	N3　集石	
S131	スクレイパー	サヌカイト	4.1	7.2	0.8	20.8	N3　集石	自然面あり。
S132	調整剥片	サヌカイト	5.8	2.6	1.0	11.0	N3　集石	
S133	打製石包丁	サヌカイト	(7.0)	5.8	1.3	35.1	N3　集石	使用痕あり。
S134	調整剥片？	サヌカイト	4.0	7.8	1.1	29.4	N3　集石	石槍か？
S135	スクレイパー	サヌカイト	4.8	6.9	1.0	20.0	N3　集石	
S136	打製石包丁？	サヌカイト	6.2	4.5	1.1	23.1	N3　集石	抉入
S137	スクレイパー	サヌカイト	(5.1)	(5.1)	1.4	24.0	N3　集石	
S138	調整剥片	サヌカイト	5.2	6.5	1.8	40.1	N3　集石	自然面あり。
S139	スクレイパー	サヌカイト	4.6	7.1	1.1	23.7	N3　集石	
S140	調整剥片	サヌカイト	1.6	4.9	0.6	3.1	N3　集石	
S141	スクレイパー	サヌカイト	6.6	8.9	1.4	50.2	N3　集石	
S142	スクレイパー	サヌカイト	7.6	7.2	1.8	61.0	N3　集石	
S143	調整剥片	サヌカイト	6.5	7.7	1.8	62.6	N3　集石	
S144	スクレイパー	サヌカイト	6.8	(5.5)	1.5	39.8	N3　集石	
S145	スクレイパー	サヌカイト	4.0	(6.8)	1.8	41.2	N3　集石	石槍か？
S146	スクレイパー	サヌカイト	3.9	(6.7)	1.8	29.5	N3　集石	自然面あり。

挿図番号	器　　種	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S147	調整剥片	サヌカイト	7.9	5.7	1.7	60.1	N3　集石	
S148	調整剥片	サヌカイト	8.4	4.3	1.6	34.3	N3　集石	
S149	調整剥片	サヌカイト	5.4	3.5	1.7	20.0	N3　集石	自然面あり。
S150	調整剥片	サヌカイト	6.4	7.1	1.3	36.9	N3　集石	
S151	調整剥片	サヌカイト	5.8	5.3	1.3	27.4	N3　集石	自然面あり。
S152	素材剥片	サヌカイト	4.7	5.6	1.5	24.6	N3　集石	自然面あり。
S153	調整剥片	サヌカイト	5.8	8.1	1.4	44.5	N3　集石	自然面あり。
S154	スクレイパー	サヌカイト	6.2	10.4	1.2	62.9	N3　集石	
S155	調整剥片	サヌカイト	10.3	8.55	2.5	97.0	N3　集石	自然面あり。
S156	スクレイパー？	サヌカイト	7.7	9.5	2.1	133.0	N3　集石	使用痕あり。
S157	調整剥片	サヌカイト	6.3	7.2	2.3	58.7	N3　集石	自然面あり。
S158	スクレイパー？	サヌカイト	5.2	6.1	1.8	44.6	N3　集石	
S159	スクレイパー	サヌカイト	4.9	8.3	1.8	52.4	N3　集石	自然面あり。
S160	スクレイパー	サヌカイト	5.4	7.4	1.8	50.5	N3　集石	
S161	素材剥片？	サヌカイト	4.1	9.6	2.0	54.7	N3　集石	
S162	素材剥片	サヌカイト	5.1	7.5	1.5	30.5	N3　集石	
S163	調整剥片	サヌカイト	6.4	3.4	2.6	35.8	N3　集石	自然面あり。
S164	残核？	サヌカイト	6.6	3.4	2.6	48.2	N3　集石	自然面あり。
S165	石槍？	サヌカイト	(6.5)	4.1	1.4	38.5	N3　集石	
S166	残核	サヌカイト	7.5	5.6	3.2	100.2	N3　集石	
S167	調整剥片	サヌカイト	7.2	5.0	2.2	61.7	N3　集石	
S168	スクレイパー	サヌカイト	3.5	6.3	1.2	20.8	N3　集石	
S169	残核	サヌカイト	5.6	5.0	3.5	68.5	N3　集石	
S170	残核	サヌカイト	5.1	3.3	2.9	34.3	N3　集石	
S171	素材剥片	サヌカイト	7.8	4.2	2.7	67.8	N3　集石	自然面あり。
S172	敲石	サヌカイト	5.4	6.5	(2.2)	60.5	N3　集石	使用痕あり。
S173	磨製石包丁		(5.8)	(3.9)	0.8	11.8	N3　集石	丁寧な研磨。
S174	磨製石包丁	黒色頁岩	(4.5)	2.6	0.75	8.2	N3　集石	再利用か？
S175	扁平片刃石斧？	緑色片岩	(4.8)	(5.9)	(0.7)	18.5	N3　集石	
S176	柱状片刃石斧		12.3	3.7	2.2	87.5	N3　集石	
S177	太型蛤刃石斧		8.0	(6.0)	3.6	153.9	N3　集石	
S178	柱状片刃石斧？		16.2	5.3	2.7	223.3	N3　集石	未成品？
S179	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.3	0.2	N3　SD－1	平基式
S180	石鏃	サヌカイト	2.2	1.6	0.35	0.9	N3　SD－1	凹基式
S181	石鏃	サヌカイト	2.2	1.8	0.3	1.0	N3　SD－1	平基式
S182	石鏃	サヌカイト	2.4	1.3	0.3	0.8	N3　SD－1	凹基式
S183	石鏃	サヌカイト	2.3	1.9	0.4	1.3	N3　SD－1	凹基式
S184	石鏃	サヌカイト	1.7	1.5	0.4	0.6	N3　SD－1	凹基式
S185	石鏃	サヌカイト	2.4	2.0	0.4	1.9	N3　SD－1	円基式？
S186	石鏃	サヌカイト	(2.2)	1.7	0.5	1.8	N3　SD－1	
S187	石鏃	サヌカイト	(2.1)	2.2	0.4	2.3	N3　SD－1	
S188	石鏃	サヌカイト	2.3	1.2	0.3	0.7	N3　SD－1	平基式？
S189	石鏃未成品	サヌカイト	2.6	1.8	0.3	1.6	N3　SD－1	
S190	石鏃	サヌカイト	2.9	1.9	0.4	1.7	N3　SD－1	平基式
S191	石鏃未成品	サヌカイト	3.1	2.6	0.4	3.0	N3　SD－1	
S192	石鏃未成品	サヌカイト	(3.4)	2.9	0.5	5.0	N3　SD－1	
S193	石鏃未成品	サヌカイト	(3.7)	2.1	0.4	3.5	N3　SD－1	
S194	石錐	サヌカイト	2.8	1.1	0.4	1.0	N3　SD－1	
S195	石錐	サヌカイト	3.1	1.4	0.6	2.4	N3　SD－1	

挿図番号	器　　種	石　　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S196	石錐	サヌカイト	(4.7)	(4.7)	0.6	5.8	N3　SD－1	
S197	石錐	サヌカイト	3.1	0.9	0.4	1.3	N3　SD－1	
S198	石錐	サヌカイト	4.1	1.0	0.6	2.6	N3　SD－1	
S199	石錐	サヌカイト	4.9	1.0	0.6	2.9	N3　SD－1	
S200	石匙	サヌカイト	(4.3)	(7.4)	1.1	21.9	N3　SD－1	
S201	石匙	サヌカイト	(3.0)	(5.0)	0.9	9.7	N3　SD－1	
S202	打製石包丁？	サヌカイト	(3.7)	(3.9)	1.0	10.4	N3　SD－1	使用痕あり。
S203	打製石包丁	サヌカイト	(6.1)	4.9	1.2	21.4	N3　SD－1	抉入。
S204	打製石包丁	サヌカイト	8.9	5.5	1.3	46.9	N3　SD－1	使用痕あり。抉入。
S205	打製石包丁	サヌカイト	(2.8)	4.7	0.9	6.9	N3　SD－1	抉入。
S206	打製石包丁	サヌカイト	(8.2)	5.0	1.1	35.3	N3　SD－1	使用痕あり。抉入。
S207	打製石包丁	サヌカイト	(5.6)	5.1	0.9	17.7	N3　SD－1	抉入。
S208	打製石包丁	サヌカイト	(5.4)	(5.4)	1.0	16.4	N3　SD－1	使用痕あり。抉入。
S209	打製石包丁	サヌカイト	9.1	5.0	1.7	56.8	N3　SD－1	抉入。
S210	打製石包丁	サヌカイト	(8.5)	5.7	1.1	37.8	N3　SD－1	使用痕あり。抉入。
S211	打製石包丁	サヌカイト	(10.2)	(6.4)	1.0	37.4	N3　SD－1	使用痕あり。抉入。
S212	打製石包丁	サヌカイト	(10.1)	5.1	1.2	27.5	N3　SD－1	使用痕あり。
S213	打製石包丁	サヌカイト	11.4	4.4	1.2	38.1	N3　SD－1	使用痕あり。
S214	打製石包丁	サヌカイト	11.8	4.8	0.9	35.9	N3　SD－1	使用痕あり。
S215	打製石包丁	サヌカイト	(10.4)	4.7	0.8	46.5	N3　SD－1	使用痕あり。
S216	楔形石器	サヌカイト	3.6	4.6	0.8	11.2	N3　SD－1	
S217	楔形石器	サヌカイト	4.2	2.9	0.7	7.0	N3　SD－1	
S218	楔形石器	サヌカイト	2.6	2.5	0.7	4.1	N3　SD－1	
S219	スクレイパー	サヌカイト	5.4	6.8	2.0	59.9	N3　SD－1	使用痕あり。
S220	スクレイパー	サヌカイト	8.1	5.2	1.0	30.7	N3　SD－1	使用痕あり。
S221	スクレイパー	サヌカイト	4.5	6.8	1.5	31.2	N3　SD－1	自然面あり。
S222	スクレイパー	サヌカイト	3.8	6.6	1.4	32.0	N3　SD－1	使用痕あり。
S223	スクレイパー	サヌカイト	6.2	6.7	1.3	45.3	N3　SD－1	
S224	調整剥片	サヌカイト	5.7	6.2	1.1	35.3	N3　SD－1	自然面あり。
S225	スクレイパー	サヌカイト	5.2	8.7	1.5	53.6	N3　SD－1	自然面あり。
S226	素材剥片	サヌカイト	6.0	10.1	1.3	58.0	N3　SD－1	自然面あり。
S227	磨製石包丁	泥岩？	(6.3)	5.0	0.8	23.1	N3　SD－1	
S228	磨製石包丁	泥岩？	(5.1)	(3.9)	0.9	12.8	N3　SD－1	
S229	磨製石包丁	泥岩？	(5.2)	(4.0)	0.8	10.2	N3　SD－1	
S230	磨製石包丁？	頁岩？	(10.2)	(5.3)	1.1	32.4	N3　SD－1	欠損が著しい。
S231	磨製石包丁	黒色頁岩	(8.4)	4.5	0.8	31.5	N3　SD－1	使用痕あり。
S232	磨製石包丁	緑色片岩	(11.1)	(4.3)	0.6	29.7	N3　SD－1	
S233	磨製石包丁	緑色片岩	(7.8)	(4.9)	0.8	32.2	N3　SD－1	使用痕あり。
S234	柱状片刃石斧	緑色片岩	(8.7)	(2.9)	(2.6)	48.7	N3　SD－1	
S235	柱状片刃石斧	緑色片岩	(5.4)	(1.7)	(2.7)	23.7	N3　SD－1	
S236	磨製石斧？	結晶片岩	(6.1)	(2.1)	(1.0)	10.7	N3　SD－1	
S237	柱状片刃石斧→敲	泥岩？	(8.2)	(3.3)	(1.9)	62.2	N3　SD－1	使用痕あり。
S238	柱状片刃石斧？	泥岩？	(6.1)	(2.7)	(2.5)	12.1	N3　SD－1	
S239	扁平片刃石斧	緑色片岩	(6.7)	(5.7)	(0.8)	26.4	N3　SD－1	
S240	柱状片刃石斧	頁岩	(7.2)	(5.2)	(1.3)	61.1	N3　SD－1	抉入。
S241	柱状片刃石斧	緑色片岩	(6.2)	(4.2)	(0.8)	24.0	N3　SD－1	抉入。
S242	柱状片刃石斧	緑色片岩	(6.8)	(5.7)	(1.5)	42.4	N3　SD－1	
S243	太型蛤刃石斧	細粒砂岩	(8.4)	(4.6)	(4.3)	255.8	N3　SD－1	使用痕あり。
S244	磨製石斧	緑色片岩	(7.7)	(4.1)	(1.8)	52.3	N3　SD－1	

挿図番号	器　　種	石　　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S245	太型蛤刃石斧	黒色頁岩	(10.4)	(3.2)	(2.9)	54.2	N3　SD－1	
S246	太型蛤刃石斧	緑色片岩	(4.3)	(6.1)	(3.9)	86.8	N3　SD－1	
S247	太型蛤刃石斧	緑色片岩？	(11.2)	(5.0)	(4.9)	435.0	N3　SD－1	使用痕？
S248	太型蛤刃石斧	緑色片岩？	(11.5)	(5.4)	(4.5)	110.8	N3　SD－1	
S249	石剣？	泥岩？	(6.1)	(3.5)	(1.1)	10.6	N3　SD－1	
S250	砥石	泥岩？	7.1	6.6	1.3	47.5	N3　SD－1	筋状の擦痕あり。
S251	磨製石斧？	片岩？	13.6	5.5	2.0	169.6	N3　SD－1	
S252	敲石	結晶片岩	(11.1)	3.4	2.5	86.7	N3　SD－1	使用痕あり。
S253	砥石		13.2	9.4	1.5	179.0	N3　SD－1	擦痕あり。
S254	石核石器	安山岩	12.3	10.2	3.4	510.0	N3　SD－1	使用痕あり。
S255	石錘？	砂岩	(11.8)	(5.3)	(4.1)	330.0	N3　SD－1	穿孔あり。
S256	石核	粘板岩	13.5	13.2	3.1	700.0	N3　SD－1	
S257	砥石	細粒砂岩	16.9	13.0	3.9	960.0	N3　SD－1	擦痕あり。
S258	石鏃	サヌカイト	2.0	1.5	0.3	0.6	N4　P1	凹基式
S259	石鏃	サヌカイト	(1.2)	1.9	0.4	0.5	N4　P96	凹基式
S260	石鏃	サヌカイト	2.0	(1.1)	0.5	0.6	N4　P96	凹基式
S261	石鏃	サヌカイト	2.5	1.3	0.4	1.1	N4　P96	平基式
S262	石錐	サヌカイト	(2.9)	0.6	0.4	1.2	N4　SD－1	
S263	楔形石器	サヌカイト	3.4	2.8	0.8	5.5	N4　SD－1	
S264	調整剥片	サヌカイト	3.0	4.3	0.7	7.6	N4　SD－1	
S265	調整剥片	サヌカイト	3.5	4.2	1.4	14.9	N4　SD－1	
S266	石鍬？	粘板岩	(9.1)	9.8	2.0	128.8	N4　SD－1	
S267	石鏃	サヌカイト	2.7	1.8	0.3	0.8	N2　2P－1	凹基式
S268	石鏃	サヌカイト	1.7	(1.0)	0.3	0.3	N4　2P－1	凹基式
S269	石鏃	サヌカイト	2.8	1.6	0.5	1.7	N2　2P－1	凹基式
S270	石鏃	サヌカイト	2.7	2.2	0.6	2.1	N2　2P－1	凹基式
S271	石鏃	サヌカイト	(2.4)	2.2	0.4	2.0	N3　2P－1	凹基式
S272	石鏃	サヌカイト	(3.0)	2.1	0.5	2.6	N3　3P－1	凹基式
S273	石鏃	サヌカイト	2.3	1.9	0.3	0.8	N3　2P－1	平基式？
S274	石鏃	サヌカイト	2.2	1.3	0.4	0.6	N3　2P－1	平基式？
S275	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.3	0.6	N3　2P－1	凹基式
S276	石鏃	サヌカイト	1.9	1.7	0.5	1.0	N3　2P－1	平基式
S277	石鏃	サヌカイト	2.3	1.5	0.3	1.5	2P－1	平基式
S278	石鏃	サヌカイト	3.0	1.8	0.4	1.4	N3　2P－1	凹基式
S279	石鏃	サヌカイト	(2.1)	(1.7)	0.4	1.0	2P－1	凹基式
S280	石鏃	サヌカイト	2.0	1.6	0.3	0.8	2P－1	凹基式
S281	石鏃	サヌカイト	(2.6)	(1.7)	0.4	0.9	N4　2P－1	凹基式
S282	石鏃	サヌカイト	(1.5)	(1.6)	0.4	1.0	N4　2P－1	凹基式
S283	石鏃	サヌカイト	2.1	1.2	0.3	0.4	N4　2P－1	凹基式
S284	石鏃	サヌカイト	2.6	2.2	0.5	1.9	2P－1	凹基式？
S285	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.2	0.4	N2　2P－1	凹基式
S286	石鏃	サヌカイト	2.2	1.6	0.4	0.8	N4　2P－1	凹基式
S287	石鏃	サヌカイト	2.2	1.8	0.5	0.8	N4　2P－1	凹基式
S288	石鏃	サヌカイト	(1.2)	1.6	0.3	0.7	N4　2P－1	凹基式
S289	石鏃	サヌカイト	2.8	1.7	0.4	0.9	N4　2P－1	凹基式
S290	石鏃	サヌカイト	(2.1)	1.7	0.4	0.9	N3　2P－1	凹基式
S291	石鏃	サヌカイト	2.4	1.6	0.4	1.0	N4　2P－1	平基式
S292	石鏃	サヌカイト	1.9	1.4	0.4	0.9	N4	凹基式
S293	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.4	1.6	N4　2P－1	凹基式

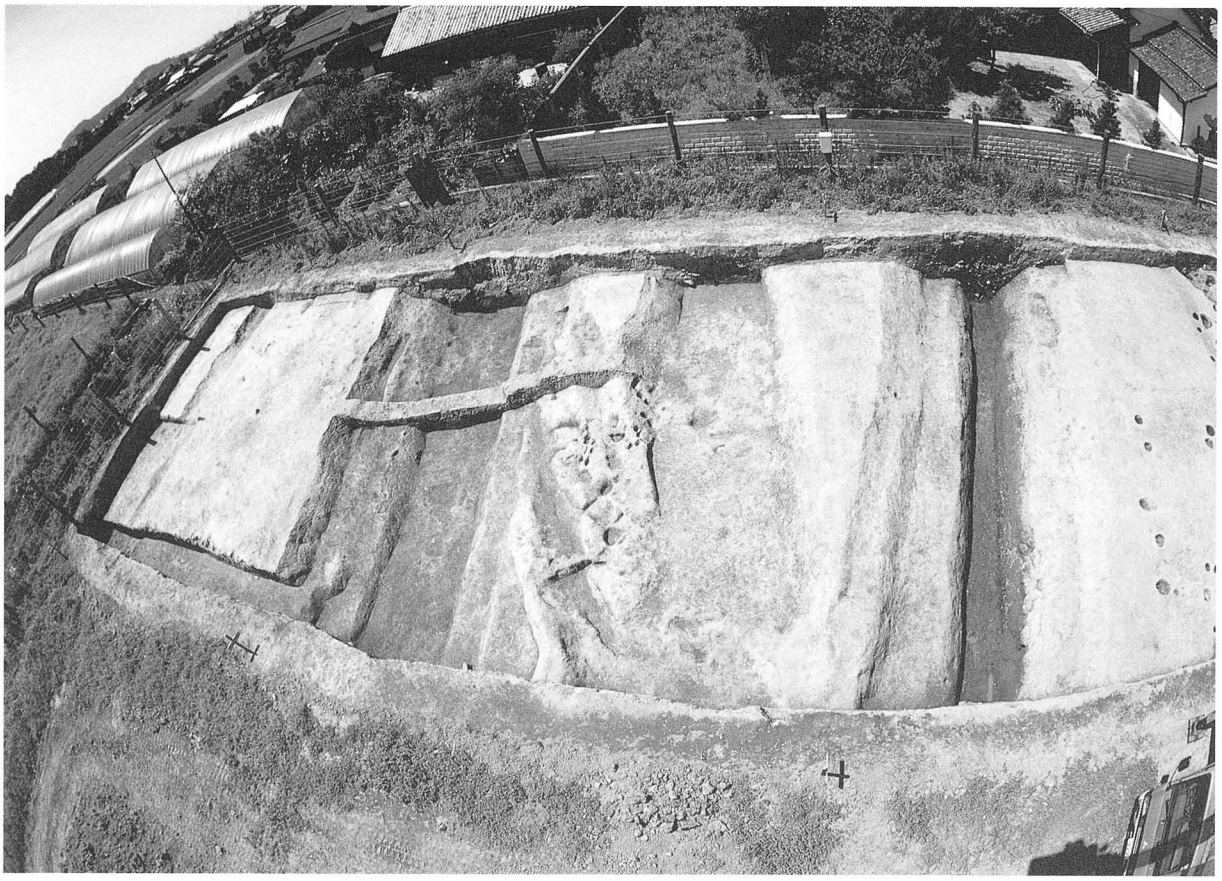
挿図番号	器　　種	石　　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S294	石鏃	サヌカイト	2.1	1.4	0.4	1.0	N1　2P－1	凹基式
S295	石鏃	サヌカイト	(2.8)	1.2	0.4	0.7	N4　2P－1	凹基式
S296	石鏃	サヌカイト	1.9	0.8	0.4	0.4	N4　2P－1	凹基式
S297	石鏃	サヌカイト	3.1	1.5	0.7	1.7	N4　2P－1	凹基式
S298	石鏃	サヌカイト	1.2	1.0	0.2	0.1	2P－1	凹基式
S299	石鏃	サヌカイト	(1.0)	1.1	0.3	0.2	N4　2P－1	平基式
S300	石鏃	サヌカイト	1.8	1.2	0.3	0.5	N3　2P－1	平基式
S301	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.3	0.5	N4　2P－1	平基式
S302	石鏃	サヌカイト	1.4	1.3	0.3	0.3	N4　2P－1	平基式
S303	石鏃	サヌカイト	1.4	1.2	0.3	0.5	2P－1	平基式
S304	石鏃	サヌカイト	1.7	1.5	0.4	0.7	2P－1	平基式
S305	石鏃	サヌカイト	1.6	1.5	0.3	0.4	N1　2P－1	平基式
S306	石鏃	サヌカイト	2.0	1.7	0.4	1.0	N4　2P－1	平基式
S307	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	0.7	N4　表土	平基式
S308	石鏃	サヌカイト	1.6	1.7	0.3	0.8	N1　2P－1	平基式
S309	石鏃	サヌカイト	1.7	1.4	0.4	0.7	2P－1	平基式
S310	石鏃	サヌカイト	2.3	1.8	0.5	1.7	N3　2P－1	平基式
S311	石鏃	サヌカイト	2.2	1.6	0.4	1.2	N4　2P－1	平基式
S312	石鏃	サヌカイト	2.0	1.6	0.4	0.9	2P－1	平基式
S313	石鏃	サヌカイト	1.9	(0.8)	0.3	0.5	N4　2P－1	凹基式？
S314	石鏃	サヌカイト	2.2	1.6	0.5	1.0	N1　2P－1	平基式
S315	石鏃	サヌカイト	2.5	1.8	0.5	1.8	N4　2P－1	凹基式？
S316	石鏃	サヌカイト	(2.0)	2.0	0.4	1.2	N4	平基式
S317	石鏃	サヌカイト	(1.9)	1.3	0.3	0.7	N4　2P－1	平基式
S318	石鏃	サヌカイト	2.3	1.8	0.4	1.0	N4　2P－1	平基式
S319	石鏃	サヌカイト	2.1	1.6	0.3	0.5	N3　2P－1	平基式
S320	石鏃	サヌカイト	2.9	2.0	0.5	2.9	N4　2P－1	円基式
S321	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.7	2.6	N4　2P－1	未成品？
S322	石鏃	サヌカイト	(1.6)	(1.4)	0.3	0.5	N4　2P－1	
S323	石鏃	サヌカイト	(1.8)	(1.7)	0.4	0.8	N4　2P－1	
S324	石鏃	サヌカイト	(1.7)	(1.4)	0.3	0.7	N4　2P－1	
S325	石鏃	サヌカイト	2.3	1.5	0.3	0.8	N1　2P－1	平基式。抉入。
S326	石鏃	サヌカイト	2.9	2.0	0.4	1.3	N4	平基式。抉入。
S327	石鏃	サヌカイト	3.3	1.4	0.4	1.6	N4　表土	未成品？
S328	石鏃	サヌカイト	(4.2)	1.4	0.5	2.4	2P－1	有茎式
S329	石鏃	サヌカイト	3.4	1.6	0.5	1.9	N4　2P－1	有茎式？未成品？
S330	石鏃	サヌカイト	2.6	1.2	0.3	0.8	2P－1	有茎式？未成品？
S331	石鏃未成品	サヌカイト	2.1	1.4	0.3	0.8	N3　2P－1	
S332	石鏃未成品？	サヌカイト	3.0	1.6	0.5	1.9	N4　2P－1	石錐も可。
S333	石鏃未成品	サヌカイト	2.4	1.5	0.7	2.2	N4　2P－1	
S334	石鏃未成品	サヌカイト	2.7	1.6	0.4	1.4	N4　2P－1	
S335	石鏃未成品	サヌカイト	3.7	2.6	0.6	4.4	N4　2P－1	
S336	石鏃未成品	サヌカイト	3.1	2.3	0.8	6.2	N4　2P－1	凹基式？
S337	石鏃未成品	サヌカイト	3.3	2.6	0.6	5.9	N4　2P－1	
S338	石鏃未成品	サヌカイト	3.6	2.2	0.6	4.3	N4　2P－1	
S339	石鏃未成品？	サヌカイト	4.4	2.8	0.5	5.3	N4　2P－1	
S340	石鏃未成品？	サヌカイト	3.3	1.6	0.5	3.2	N4　2P－1	石錐も可。
S341	石錐	サヌカイト	1.4	0.5	0.3	0.2	N3　2P－1	
S342	石錐	サヌカイト	(1.9)	0.6	0.4	0.5	N3　2P－1	

挿図番号	器　　種	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S343	石錐	サヌカイト	3.1	0.6	0.4	0.6	N2　2P－1	
S344	石錐？	サヌカイト	3.4	0.7	0.4	1.4	N3　2P－1	
S345	石錐	サヌカイト	(1.9)	0.6	0.4	0.6	N4　2P－1	
S346	石錐	サヌカイト	(1.7)	0.6	0.2	0.2	N4　2P－1	
S347	石錐	サヌカイト	(1.7)	0.7	0.4	0.6	N4　2P－1	
S348	石錐	サヌカイト	2.1	0.5	0.4	0.6	N4　2P－1	
S349	石錐	サヌカイト	2.5	0.8	0.5	0.7	N4　2P－1	
S350	石錐	サヌカイト	2.6	0.9	0.4	0.9	N4　2P－1	
S351	石錐	サヌカイト	(1.9)	0.6	0.3	0.4	N4　2P－1	
S352	石錐	サヌカイト	2.5	0.6	0.4	0.7	N1　2P－1	
S353	石錐	サヌカイト	(2.3)	1.0	0.6	1.4	N1　2P－1	
S354	石錐	サヌカイト	(3.2)	1.0	0.6	2.1	N3　2P－1	
S355	石錐	サヌカイト	2.4	1.0	0.5	1.1	N4　2P－1	
S356	石錐	サヌカイト	2.1	1.0	0.3	0.6	N4　2P－1	
S357	石錐	サヌカイト	3.5	0.6	0.4	0.6	N4　2P－1	
S358	石錐	サヌカイト	(3.0)	0.6	0.5	1.1	N4　2P－1	
S359	石錐	サヌカイト	(4.2)	0.9	0.6	2.2	N4　2P－1	
S360	石錐	サヌカイト	3.8	1.3	0.6	3.0	N4　表土	
S361	石錐	サヌカイト	3.1	1.1	0.4	1.3	N1　2P－1	
S362	石錐	サヌカイト	3.3	1.2	0.4	1.6	N4　2P－1	
S363	石錐	サヌカイト	2.6	1.3	0.5	1.3	2P－1	
S364	石錐	サヌカイト	(2.5)	1.7	0.5	1.9	N4　2P－1	
S365	石錐	サヌカイト	2.8	1.0	0.3	0.6	N3　2P－1	
S366	石錐	サヌカイト	2.4	1.2	0.5	1.0	N2　2P－1	
S367	石錐	サヌカイト	(2.9)	2.1	0.6	2.7	N4　2P－1	
S368	石錐	サヌカイト	(3.3)	2.9	0.8	5.6	N4　2P－1	
S369	石錐	サヌカイト	(3.3)	1.7	0.7	3.9	N4　表土	自然面あり。
S370	石錐	サヌカイト	(4.7)	2.1	0.6	6.8	2P－1	
S371	石錐	サヌカイト	(3.1)	2.4	0.6	3.7	N4　2P－1	
S372	石錐	サヌカイト	(3.9)	2.0	0.8	4.8	N4　2P－1	
S373	石錐	サヌカイト	(7.2)	2.6	0.9	17.4	N2　2P－1	
S374	石錐未成品	サヌカイト	3.3	1.4	0.4	1.6	N4　2P－1	
S375	石錐未成品	サヌカイト	4.7	1.9	0.7	5.4	N4　2P－1	
S376	石錐未成品？	サヌカイト	6.0	2.4	0.7	8.8	N4　2P－1	
S377	石錐	サヌカイト	4.1	1.2	0.7	3.8	N4　2P－1	一部研磨あり
S378	石錐	サヌカイト	2.9	1.1	0.5	1.8	N4　2P－1	一部研磨あり。
S379	打製石包丁	サヌカイト	11.2	4.2	1.7	53.6	N4　2P－1	抉入。
S380	打製石包丁	サヌカイト	(7.7)	4.5	0.9	30.2	N3	抉入。
S381	打製石包丁	サヌカイト	(4.7)	4.1	1.1	12.9	N3　2P－1	抉入。
S382	打製石包丁	サヌカイト	(4.4)	4.1	0.9	14.5	N3　2P－1	
S383	打製石包丁？	サヌカイト	(9.4)	4.2	1.2	39.5	N3　2P－1	石槍？
S384	打製石包丁？	サヌカイト	9.8	5.2	1.6	56.5	N4　2P－1	
S385	楔形石器	サヌカイト	3.7	.3.0	0.9	6.8	N4　2P－1	
S386	楔形石器？	サヌカイト	3.2	4.2	1.2	12.6	N4　2P－1	
S387	楔形石器？	サヌカイト	3.1	4.3	1.2	12.5	N4　2P－1	
S388	楔形石器？	サヌカイト	2.4	3.9	0.5	3.1	N4　2P－1	自然面あり。
S389	調整剥片	サヌカイト	3.0	4.0	1.1	9.9	N4　2P－1	
S390	調整剥片	サヌカイト	(3.7)	(1.6)	0.9	3.7	N4　2P－1	
S391	スクレイパー？	サヌカイト	4.0	4.9	1.3	13.4	N4　2P－1	

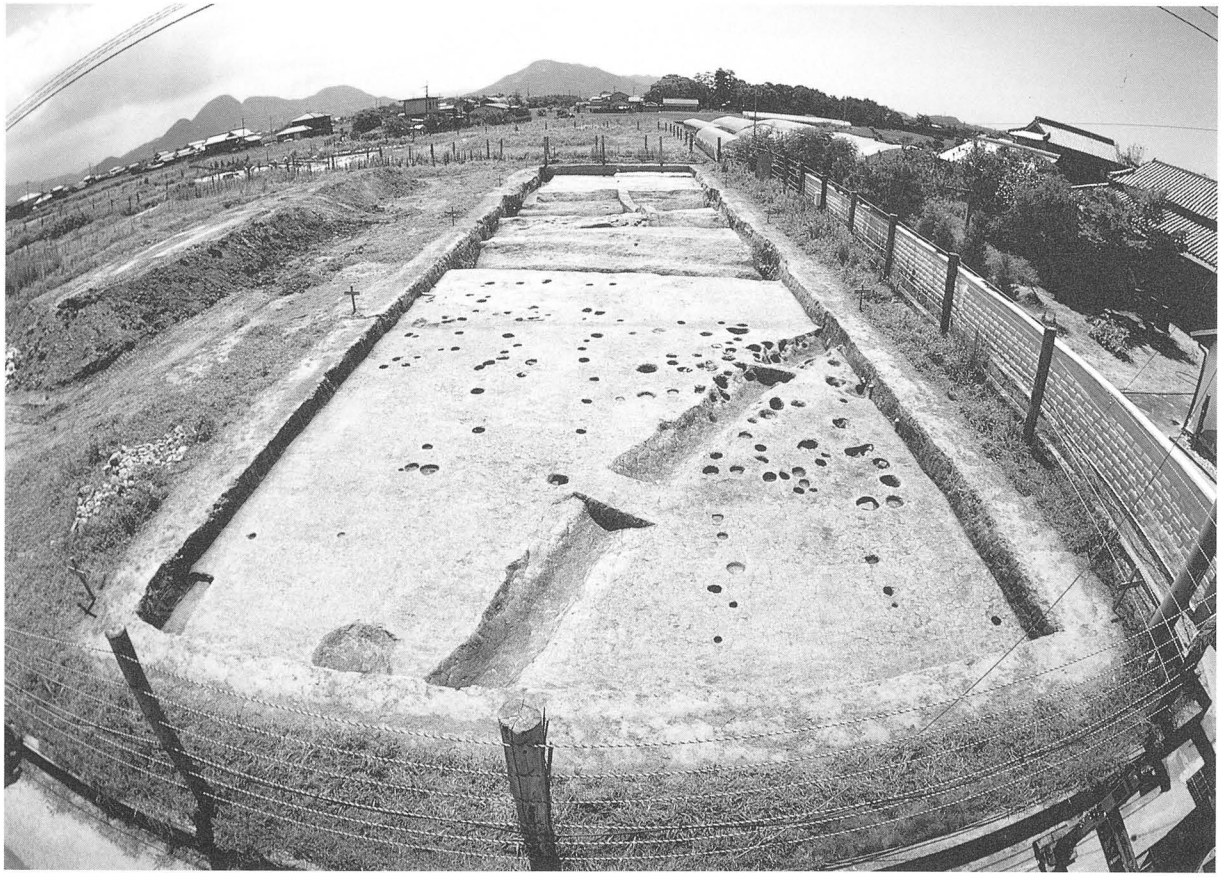
挿図番号	器　　種	石　　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	備　　考
S392	調整剥片	サヌカイト	3.9	(3.4)	0.7	6.6	N4　2P－1	楔形石器？
S393	調整剥片	サヌカイト	4.7	3.5	1.0	9.5	N4　2P－1	
S394	調整剥片	サヌカイト	3.9	2.0	0.6	2.9	N3　2P－1	
S395	調整剥片	サヌカイト	3.6	7.9	1.1	16.8	N3	スクレイパー？
S396	調整剥片	サヌカイト	4.8	(3.7)	1.0	10.6	N4　2P－1	
S397	打製石包丁？	サヌカイト	(5.3)	4.8	1.1	21.2	N4　2P－1	抉入。
S398	調整剥片	サヌカイト	2.4	7.5	0.7	8.6	N4　2P－1	
S399	調整剥片	サヌカイト	4.6	6.4	0.9	16.8	N4　表土	自然面あり。
S400	調整剥片	サヌカイト	5.1	3.9	0.7	12.9	N4　2P－1	自然面あり。
S401	調整剥片	サヌカイト	5.0	7.2	1.2	23.7	N4　2P－1	スクレイパー？
S402	スクレイパー	サヌカイト	3.6	6.5	0.7	9.3	N4　2P－1	スクレイパー？
S403	調整剥片	サヌカイト	4.2	7.4	0.7	18.3	N3　2P－1	
S40	調整剥片	サヌカイト	5.8	8.3	1.7	62.4	N4　2P－1	
S405	調整剥片	サヌカイト	6.2	10.8	1.9	100.3	N4　2P－1	自然面あり。
S406	スクレイパー	サヌカイト	6.1	8.1	0.9	25.1	N3　2P－1	
S407	素材剥片	サヌカイト	7.9	12.5	1.9	91.7	N4　2P－1	自然面あり。
S408	調整剥片	サヌカイト	6.5	8.5	2.1	71.5	N4　2P－1	
S409	残核	サヌカイト	6.8	4.0	1.9	33.3	N4　2P－1	
S410	残核？	サヌカイト	5.8	3.4	2.4	31.6	N4　2P－1	
S411	磨製石包丁	頁岩？	(5.4)	(3.5)	0.6	不明	N4　2P－1	
S412	磨製石器	安山岩	(5.8)	1.3	0.8	6.8	N4　2P－1	
S413	砥石	細粒砂岩	(5.3)	(4.4)	3.1	50.3	N4　2P－1	擦痕あり。
S414	砥石	細粒砂岩	(5.1)	5.5	2.3	61.4	N4　2P－1	擦痕あり。
S415	凹石？	砂岩	(9.3)	11.7	7.9	1070.0	N4　2P－1	
S416	石斧？	結晶片岩	(15.0)	6.4	3.8	415.0	N4　2P－1	
S417	磨石？	砂岩	9.2	8.1	2.6	184.1	N4　2P－1	擦痕あり。
S418	砥石？	砂岩	(11.5)	8.5	8.7	770.0	N4　2P－1	擦痕あり。
S419	砥石？	砂岩	(16.0)	(11.5)	4.5	不明	N4　2P－1	擦痕あり。
S420	石錐	サヌカイト	4.4	2.0	0.6	4.2	N5　P45	
S421	石鏃未成品	サヌカイト	2.2	1.7	0.3	1.9	N5　SD－1	
S422	打製石包丁	サヌカイト	(7.4)	5.3	0.8	17.1	N5　SD－1	抉入。
S423	柱状石斧？	片岩	(7.3)	(2.3)	(1.4)	不明	N5　SD－1	
S424	石鏃？	サヌカイト	(3.4)	(2.0)	(0.4)	2.0	N5	凹基式
S425	石鏃？	サヌカイト	12.5	6.1	2.5	142.5	N5　2P－1	
S426	太型蛤刃石斧	緑色片岩	(10.0)	(6.6)	4.0	430.0	N5　2P－1	

図　　版

（遺構及び出土遺物）



図版１　第一調査区溝全景



図版２　第一調査区Ｎ４区

図版３　Ｎ３ＳＤ－１

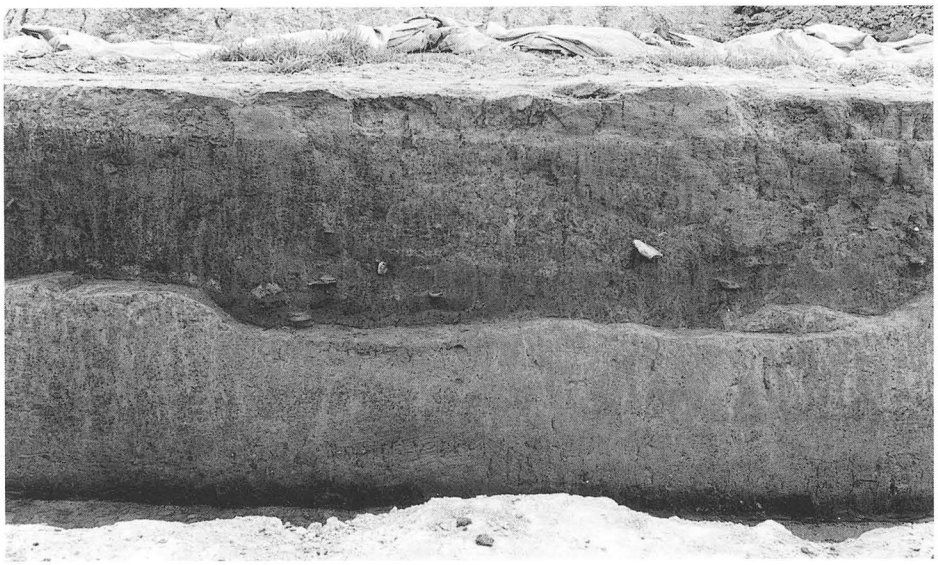
図版４　Ｎ２ＳＤ－１

図版５　Ｎ２ＳＤ－１

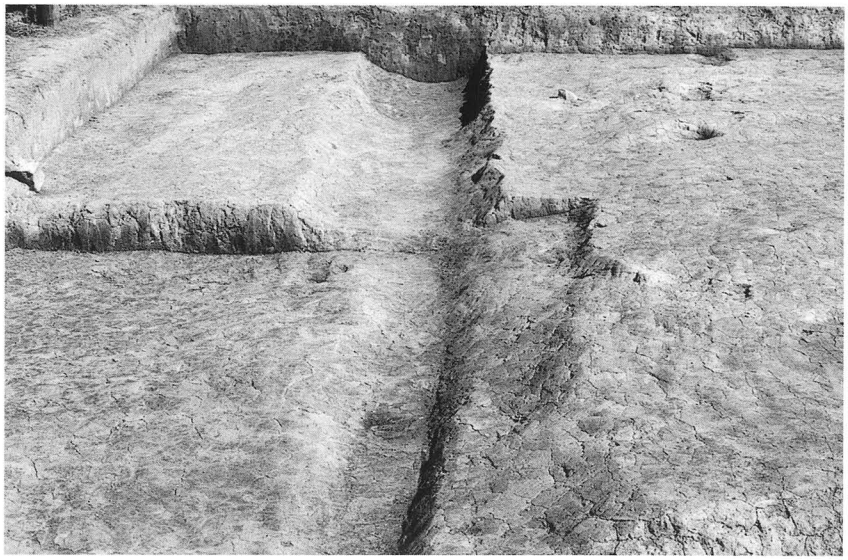
図版６　第一調査区南壁断面

図版７　Ｎ３ＳＤ－１南壁断面

図版８　Ｎ２ＳＤ－１南壁断面



図版９　Ｎ２ＳＤ－２南壁断面



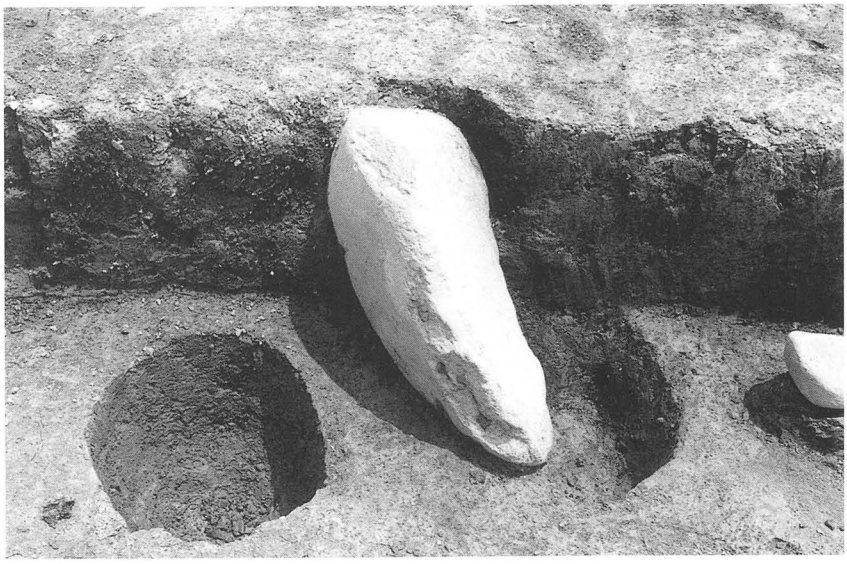
図版10　N1SD－1・2

図版11　N2SD－3

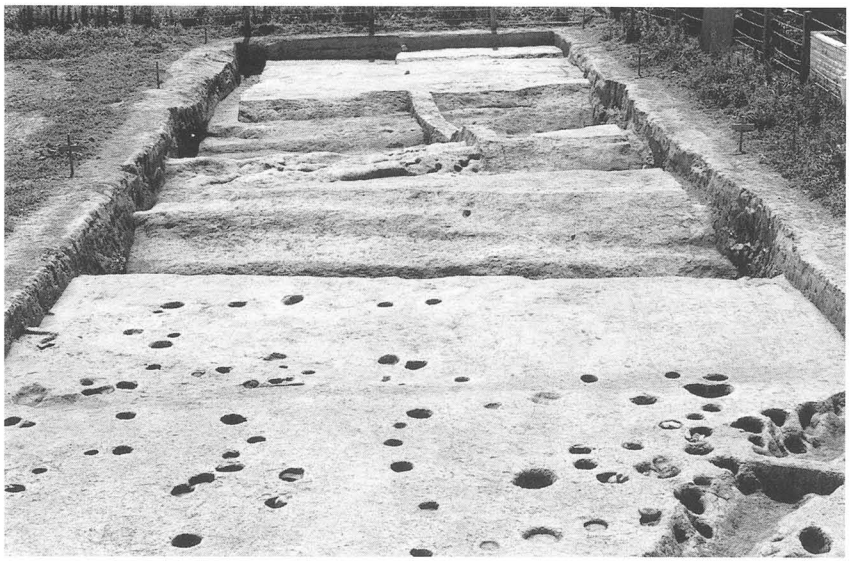
図版12　N2SD－4

図版13　N４調査区第２層

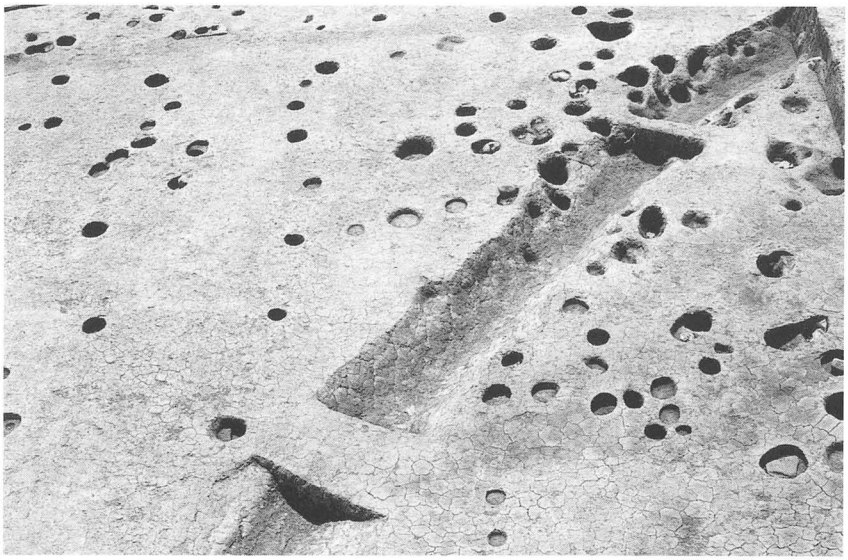
図版14　N４調査区第２層



図版15　N４調査区出土磨石



図版16　N４調査区第３層



図版17　N４調査区・N４ＳＤ－１

図版18　N４調査区・N４ＳＤ－１

図版19　N３区集石

図版20　N３区集石

図版21　第二調査区全景

図版22　第二調査区南断面

図版23　第三調査区北から

図版24　第三調査区北から

図版25　第三調査区W５ＳＤ－１